

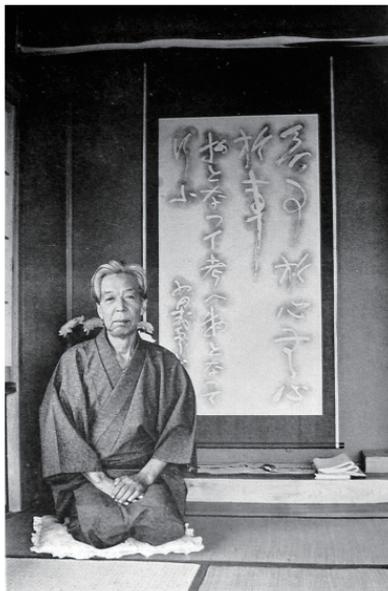
自宅書齋にて（昭和46年10月）
（『唐木順三全集第18巻』口絵／筑摩書房提供）



筑摩書房全社旅行にて
 左から、高藤武馬、臼井吉見、古田晁、唐木順三、中村光夫（昭和37年11月）
 （塩尻市立古田晁記念館ガイドブックより）



八ヶ岳山麓での唐木夫妻
 （昭和42年8月）（筑摩書房提供）



西田幾多郎の拓本の傍らで
 （昭和42年8月）（筑摩書房提供）



スペイン文化使節・コ
ラール教授の歓迎レセ
プションで
左5人の中央が唐木。
於ホテルニューオータニ
(昭和43年6月)(唐木家蔵)



自宅書齋で
(昭和43年9月)(唐木家蔵)



酔眼朦朧の順三(左)
箱根にて
(唐木家蔵)

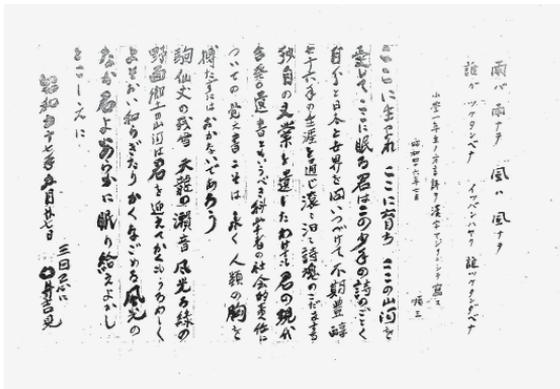
山と語り流に思ひ
 風に閒き雲と遊ぶ
 うるはしき心のしらべ
 あめつちとともに

昭和五十二年夏 順三

〈あめつちとともに〉
 (不期山房で筆記。昭和
 56年10月30日、宮田中
 学校で詩碑となる)



順三夫妻の墓所
 背後は駒ヶ岳
 (平成28年5月) (筆者写す)



墓所傍らの記念碑
 (拓本)

はじめに

唐木順三（からきじゅんせう）と京都大学哲学科同門の下村寅太郎（しもむらとら）は、唐木について、〈重厚であるが鈍重でなく、正統であつて奇矯でなく、からだでものをいふが「なま」でなく、骨太だが粗野でない〉とその肖像を描いている。修養の人であり野の人だった唐木は、己の資質に順うことで昭和の知的世界に独自の位置を築いた。一般に唐木順三とは、創立期から成長期にかけての筑摩書房を支えた出版人として知られ、また、中世の心をつかみ東洋的な形而上学へ沈潜した型破りな文人として知られている。しかしそれらは多像のうちであり、彼は昭和初期に登場して文芸評論の一つの類型を打ち立てた文学者だったし、三木清との交流などから一時社会主義に傾斜し信州教育の若き担い手たちに影響力を与えた社会思想家でもあった。戦後は時代批判の旗幟を鮮明にした論壇人となり、その後、いち早く日本回帰へと向かう先覚者となる。明治大学教授を務める一方で、小中学校の現場教師との学びを晩年まで重視した。これらを考え併せると、彼は多彩な活動を背景に、旗手となり指導者になり、やがて権威になつてもいいはずの表現者に見える。しかし唐木順三はそうした道を歩まなかつた。

論壇の寵児になりかけたとき、彼はいつも身を翻した。あるときは田舎教師になつて東京から離れ、

またあるときは同時代から反転して古き日本へひとり向かった。部数や評判を重視する出版人の相貌を宿していたにもかかわらず、書き手に回ると自己表出に控えめだった。論争を好まなかったし、きらびやかなものから身を離れた。時代の問題を深く考えながらも、彼はたえず時流から身を引く位置をとったのである。そして、時勢が奈辺にあらうと変わらぬ人間像を凝視した。社会の病弊を見抜くその視点は先鋭的ながら、語りと問いかけは穏当だった。人世に対する姿勢は厳しいところを宿したが、ふるまいは謙虚を通した。こうした落差が唐木順三の不思議なところであり、また魅力でもある。これらを踏まえつつ、変遷し混迷する相のなかで反時代の姿勢を貫き、文化や伝統の意味を問い直した思索する人の内実を追う試みとして、本書は綴られる。唐木自身の回想など基本文献はもとより、非売品を含む一次資料を比較的多く用い、関係者への談話取材も含めて構成している。書簡や証言を多く引用紹介することを念頭に置き、また、世代も志向も近い小林秀雄との比較などテーマ性のある項もいくつか織り込んだ。

唐木順三は書き手として正字、正仮名遣いを用いている。引用に際しては、本来こちらを使用すべきではあるが、本書では新字体のある漢字は固有名を除きそれに改めることにした（固有名はそれぞれ一般的表記に従っている）。ただし書名や論文名、エッセイ表題では出来る限り正字を用いている。一方、仮名遣いはそのままとした。唐木の意図の尊重と現代の読者に向き合う前提とのバランスを、ひとまずそういった形でとることにしたのである。引用元を示す表記では、唐木順三の著作は作品名

を記すのみとし、他の著作は、白井「蛙のうた」、というように、著者名「作品」の表記としている。ただし前後の文脈から明らかなものはこの限りではない。直接引用は〈 〉を用い（前後一行空きでの引用を除く）、引用内の引用者註記は〔 〕で示した。なお本書では直接お話を伺った地元教師や親族の方々を除き、敬称は略させていただいている。

唐木順三は近代批判者の骨法を一貫させた表現者である。非常時・戦時を生きるなかでも、戦後社会にあっても、彼は文明の行く手に深甚な危機意識を抱き続けた。それが脱俗的な「隠者風」を揺曳させることにもなった。とはいえ、彼の書くものに気むずかしさは少しもない。その視野は広く、論理とともに人情に通じ、まさに唐木でしかない独自の表現世界を築いた。それが出来たのも、彼が「思索する人^{デンカ}」という在りようを大切にし、貴重なものとし、己の本源としたからであろう。本書が辿るのは、まさにそういった唐木順三の生きた姿なのである。

唐木順三——あめつちとともに
目次

はじめに

第一章 信州伊那・宮田村…………… I

1 風土と資質…………… I

高原のひと 旅順港の戦果 街道沿いの宿場 小林勇と唐木順三

2 牧歌的生活から「近代」へ…………… 14

生家の浮沈 小学生時代 校の音 鉄道の開通 高等科時代

第二章 松本、青春のとき…………… 27

1 旧制松本中学校…………… 27

明治九年発足の名門 松中自治 小林有也の影響 幾何学と柔道

ミート会

2 旧制松本高等学校…………… 43

大正期増設校の一つ 小所帯の学校 齋藤信策

3 煩悶青年…………… 52

雑誌『深志』の刊行 アナキズムと老荘思想 酒と芸者 関東大震災

第三章 師・西田幾多郎——京都時代……………65

1 憂鬱な上洛大学人……………65

ドイツ語での訓示 吉田山翠松園 デモーニッシュな人

猛烈なる赫怒

2 教育者西田……………77

悲運のなかで 〈ほんたう〉の意味 〈稲妻のはためくやうな趣〉

黒板の「円」

3 英語臨時講師……………88

再び松本へ ワーズワースとテニス 幸福な一年

4 卒論「ベルゲソンに於ける時間と永遠」……………95

〈洛東の一観音堂〉 マルキシズムの席捲 深田康算 田辺元の批判

第四章 信州教育との出会い——上諏訪時代……………109

1 教場に立つ……………109

〈小学校の方がおもしろい〉 根を求めて 藤森省吾 高島学校の教育

現場教師の苦悩

2	自由教育運動と哲学会……………	127
	矢島麟太郎 清貧の生 西田幾多郎の手紙 諏訪哲学会	
3	物書きの初発……………	140
	八百清顯 三木清と会う 「芥川龍之介論」	
第五章 「赤化」をめぐるつて——満洲、そして失業時代……………		
1	二つの論文……………	149
	唯物史観という〈便利な包丁〉 先行作「観相的態度の克服」	
	唐木赤化せり	
2	〈未完成〉で〈活潑〉……………	157
	奉天へ ヘーゲルの肖像 ペテロフ一家 亡命者と流離人	
3	満洲教育専門学校……………	167
	風変わりな教師たち 「打倒日本帝国主義」 学校存続問題	
	信州に帰る	
4	失意の日々……………	180
	八百の死 市ヶ谷時代 〈悪気流〉やまず 帰農を志す	
5	転身……………	191

処女出版 平野謙の書評 二・四事件 結婚と再上京

第六章 「友人共同体」の出発……………203

1 文筆家から女学校教師に……………203

田端時代 成田高女 第二評論集

2 筑摩書房創業……………215

運命相互体 銀座西六丁目 法政二中 和辻『ニイチエ研究』

名訳『政治の彼方に』

3 〈節々熱心〉な編集者……………230

鎌倉・西田のもとに 岩波書店への転職? 『鷗外の精神』

危機のなかでの探求

4 戦争と出版……………243

白井吉見の上京 「田舎者」に還る 西田幾多郎の死

「爆風一回、強制疎開一回、火災二回」 教職を全て失う

第七章 飛躍する論壇人……………261

1 四つの顔……………261

	『展望』創刊 書き手の再登場 教育者として立つ	
2	戦後文化のなかで	273
	田辺論文検閲事件 『現代史への試み』 太宰治の面影 『展望』休刊	
3	『詩とデカダンス』の時代	292
	ドストエフスキーと宮澤賢治 「日本」を見出す 〈右切言〉	
4	模索の果ての充実	305
	豊潤な人文書 「わび」について 〈先生〉の死 『無用者の系譜』	
第八章 <small>デンカ</small> 思索者の円熟		
1	大患	319
	発病と衰弱 〈あとでスープに浮べて見るよ〉 田辺元の死 不期山房	
2	一代の傑作	329
	『無常』 堂奥への旅 小林秀雄と唐木順三 小林秀雄と唐木順三、続 遅延反応	
3	不期山房の会	345
	出世間の心境 道元を読む 明治大学を退く	
4	悟達と飄然	355

異色作 『日本人の心の歴史』	
古田晁の死 Denkerの志	
5 最後の日々	370
『あづまみちのく』 未完の遺稿	
終焉のとき	
あめつちととも	
参考文献	383
おわりに	391
唐木順三年譜	395
事項索引	
人名索引	

図版写真一覧

自宅にて（昭和三五年三月）（唐木家蔵）	カバー写真
自宅書齋にて（昭和四六年一〇月）〔唐木順三全集第一八巻〕口絵／筑摩書房提供	口絵 1頁
筑摩書房全社旅行にて（昭和三七年十一月）〔塩尻市立古田晁記念館ガイドブックより〕	口絵 2頁
西田幾多郎の拓本の傍らで（昭和四二年八月）（筑摩書房提供）	口絵 2頁
八ヶ岳山麓での唐木夫妻（昭和四二年八月）（筑摩書房提供）	口絵 2頁
スペイン文化使節・コラール教授の歓迎レセプションで（昭和四三年六月）（唐木家蔵）	口絵 3頁
自宅書齋で（昭和四三年九月）（唐木家蔵）	口絵 3頁
酔眼朦朧の順三（箱根にて）（唐木家蔵）	口絵 3頁
〈あめつちととも〉	口絵 4頁
順三夫妻の墓所（筆者写す）	口絵 4頁
墓所傍らの記念碑（拓本）	口絵 4頁
古田晁（昭和四〇年一月）（塩尻市立古田晁記念館ガイドブックより）	2
唐木辰太郎親子（唐木家蔵）	6
日露戦争の凱旋（仲町通りにて）〔『宮田村誌』より、新井家蔵〕	9
宮田郵便局（大正初期）〔『宮田村誌』より〕	15
大正三年の伊那街道〔『宮田村誌』より〕	20

相馬愛蔵と木下尚江（『信州教育史再考』より）	29
松本中学校校舎（明治三二年）（松本中学校・松本深志高等学校『九十年史』より）	30
小林有也（『九十年史』より）	31
三村令二郎と順三（松本高校時代）（唐木家蔵）	40
須山宗吾と順三（大正一三年八月、上野駅にて）（唐木家蔵）	41
松本中学校と松本高等学校の同居時代（大正八年）（『九十年史』より）	44
松本高校入学早々の順三（大正一〇年）（唐木家蔵）	46
大正九年七月に落成した松本高校新校舎玄関口（『われらの青春ここにありき』より）	47
鈴澤壽（『春寂寥』より）	48
「野の人」齋藤信策（『哲人何處にありや』より）	49
松本高校二年生時の順三（唐木家蔵）	56
当時の松本高校生が入り出した本屋（『われらの青春ここにありき』より）	59
松本高校時代の臼井吉見（高校の玄関にて）（『春寂寥』より）	62
松本高校卒業の頃の順三（大正一三年）（唐木家蔵）	64
西田幾多郎（昭和三年）（上田閑照『西田幾多郎とは誰か』より）	71
京都南禅寺瓢亭にて（昭和一六年）（『物語「京都学派」』より）	83
西田幾多郎門下の人々（昭和二〇年六月）（『高坂正顕著作集第八巻』口絵より）	85
松本女子師範学校の生徒とともに燕岳を登山した順三（大正一四年七月）（唐木家蔵）	93
松本郊外の塩倉にて（大正一五年）（唐木家蔵）	93

比叡山上にて（大正一五年）（唐木家蔵）	98
田辺元（昭和三三年、北軽井沢にて）（『物語「京都学派」』より）	105
上諏訪時代の順三（昭和二年五月）（唐木家蔵）	111
藤森省吾（『藤森省吾先生と泉野教育』より）	114
矢島麟太郎（『矢島麟太郎遺稿集』より）	128
手塚縫藏（『手塚縫藏遺稿集』より）	131
上諏訪での教師時代の順三（昭和三年）（唐木家蔵）	136
上諏訪時代の順三（昭和四年）（唐木家蔵）	141
八百清顯たちと（大正一〇年二月）（唐木家蔵）	142
三木清（『三木清全集第一巻』より）	156
信州を去る順三の送別会（昭和五年三月、諏訪・永明村にて）（唐木家蔵）	158
満洲教育専門学校教授時代（昭和五年）（唐木家蔵）	167
満洲教育専門学校校庭にて（昭和五年四月）（唐木家蔵）	168
旅順に遊ぶるとき（昭和五年二月三一日）（唐木家蔵）	172
奉天にて（昭和五く六年、教育専門学校時代）（唐木家蔵）	177
成田高女教師時代、庭球部部长として（昭和一二年頃）（唐木家蔵）	209
高藤武馬（昭和一五年）（『筑摩書房の三十年』より）	210
成田高等女学校教師時代（昭和一一年前後）（唐木家蔵）	212
成田高女教師時代の順三（唐木家蔵）	214

東京帝大時代の白井吉見と古田晁（昭和三年）（塩尻市立古田晁記念館ガイドブックより）	216
白井吉見（昭和十五年）（塩尻市立古田晁記念館ガイドブックより）	221
中村光夫（昭和十三年）（『筑摩書房の三十年』より）	223
古田晁（昭和十六年）（『筑摩書房の三十年』より）	229
昭和十六年の順三（『筑摩書房の三十年』より）	238
順三と家族（昭和十八年四月二三日、南林間の自宅にて）（唐木家蔵）	247
西田幾多郎と三木清（昭和十一年一〇月、鎌倉の西田の家にて）	251
明治大学の卒業生とともに（昭和十九年三月）（唐木家蔵）	270
深瀬基寛（昭和三四年八月）（『深瀬基寛・唐木順三往復書簡』より）	280
京都、西谷啓治の家にて（昭和三十三年）（唐木家蔵）	293
自宅にて（昭和三十五年三月）（唐木家蔵）	308
『無用者の系譜』刊行の頃（昭和三十五年三月）（『唐木順三全集第五巻』口絵より）	313
不期山房にて（昭和四十二年八月）（『筑摩書房提供』）	328
南林間の自宅にて（昭和四十二年六月六日）（『筑摩書房提供』）	338
不期山房の近くで（昭和四〇年八月）（唐木家蔵）	349
明治大学文学部の送別会（昭和四二年七月、新橋の鰻屋にて）（唐木家蔵）	352
第二七回日本芸術院賞授賞式で（昭和四六年四月）（唐木家蔵）	360
高川新名人祝賀の会（昭和四三年一〇月、九段あやにて）（唐木家蔵）	374
宮田中学校（あめつちとともに）の碑（筆者写す）	380

第一章 信州伊那・宮田村

1 風土と資質

高原のひと

八ヶ岳南麓の清里はその年、七月に入つて一〇日間、雨と曇りばかりが続いた。季節は夏とはいえ梅雨明け前である。高地清里は寒冷で暖房を求める日も多い。唐木順三も夏衣装ではありえず、丹前に羽織という厚着だった。彼は当地にある明治大学の寮にいた。夏休みに至らぬ閑散期で、広い寮のなかに客は彼以外おらず、〈寮の管理人の老夫婦は、今の世には珍しい好人物で、仙境にふさはしい〉趣きにあった。周辺の原生林では、〈ニシキウツギ、ヤマオダマキ、アヤメ、ギボシなどが高原特有の涼しい色で咲いて〉いた〔無事といふこと〕。昭和三七年（一九六二）のことである。

唐木は前年一〇月一七日、勤務先の明治大学研究室の洗面所で突然吐血した。無理を押しして帰宅す



古田 晃（昭和40年11月）
（塩尻市立古田晃記念館
ガイドブックより）

に触れて、次のように書いている。

そのときのことは『思ひだすことなど』に誌されてゐるが、日記の方に返つて切実に書かれてゐる。たつた一字、natureと、さう誌されてゐる日もある。平常は忘れてゐた、また深く思ひいたらなかつた自然の色や音、山川草木、また鳥や蛙の鳴声が、死からよみがへつた漱石に、どんなに新鮮なよろこび、味はひを与へたことだらう。

〔存命のよろこび〕

唐木が捉えた漱石の姿は、同病で大吐血を経験した自画像でもあつたはずである。死の淵から甦つたとき、それまで意味あるものとして励んできた（事業なり、研究なり、また愛欲なりが、卒然としてその色を失ふ）ことがある。そうして（ただいま、なすべきことを、あらためて考へるにいたる）（同）。これが当時の唐木であつた。

るが移動中再び血を吐く。急を聞いた筑摩書房社長・古田晃の尽力で東大附属病院小石川分院に入院したのは同三日だった。胃潰瘍である。一月一日に手術を受け、一二月六日まで掛かりようやく退院することができる。満五七歳の大患であつた。唐木は昭和四一年七月発表の文章で、自身と同じ胃潰瘍で生死の境を彷徨つた後の夏目漱石

病後を湯河原温泉で過ごした唐木は、翌年二月に講演をこなすまでに復調したが、明治大学寮で過ごす時分に至っても本復には程遠い。七月三〇日付の古田晁宛葉書で唐木は〈体はいよいよ好調〉と告げているが、まもなく彼と会った臼井吉見は九月一日消印の古田晁宛葉書で、〈一昨晩は久しぶりで唐木君と同宿、よもやま話をした。どうも酒はのまないし、からだは痩せて小さくなってしまったし、ひどくさみしかった〉と様子を書き送っている〔古田晁記念館資料集〕。酒好きの唐木が飲酒をまだ止めている。予後は長引いていたのだ。

老境を前に大病をした者は、来し方を振り返り無常の理を悟って物思いに耽るというのが、唐木順三もその一人だった。夏になって唐木は、人影もまばらな原生林に建つ学寮で、話すこと少ない日々を送っていた。〈ここには新聞もこない。テレビもない。郵便物があると局から電話で知らせてくる。一里の道を歩いて、こちらからそれを受け取りに行くのである。トランジスターだけはあつたが雑音がはひつて聞きぐるしく、これもあまり利用する気にならなかつた〉というから、まさに〈仙境〉であつた〔無事といふこと〕。唐木は知識人・編集者として騒がしい「下界」でずっと過ごしてきた。友人知人、あるいは著者との交流は賑やかしかつた。いつもニュースに飢え、また敏感になつていた。そうした俗事から離去して〈仙境〉に過ごす。缶詰ばかりの食事と、おびただしい蛾には閉口したが、唐木は病後生活の平穩を思いつつ、世間の多音と蠱惑を断つようにして大自然の只中に孤身を置いていた。

己の大患だけでなく、この年四月に田辺元を喪つたことが唐木の心骨に応えた。気持ちの整理を

つけるために書いた「田邊元先生」（同年七月三〇日筆）で、〈先生が私にとつて偉いと思はれる点は、むしろ最後まで私に統一像を描きださせなかつたといふことにあるといつてもいい〉と唐木は書く。〈統一像をもち、先生はこれこれ、しかしかの人であつたといつて、かたづけうるならば、私の肩は軽くなる。私は長い間、さうしたいと思ひながら果たせなかつた〉とも。思いを果たせないまま唐木は田邊最期の病床に通い、臨終を見届け、野辺の送りをしたのだつた。

京都帝大学生時代の師であり、筑摩書房の編集者になると著者として付き合ひ、私生活の用件もこなした。それにしては喪つて日を措かぬ時期の田邊像に懐かしさはなく、幾分重苦しい。相手は「田邊哲学」という言葉さえある碩学である。そこへの複雑でやや屈曲した感情が唐木の心理を占めていた。後述するが、唐木は京都帝大生時代、田邊に強く叱責された経験があり、後々までこれを語っている。また、「田邊元先生」では自らを田邊の〈侍従の一人〉と称して、〈侍従には英雄の心事は解らない〉とのヘーゲルの言葉を紹介している。その田邊は最晩年に「死の哲学」を考察していた。にもかかわらず、〈侍従〉だつた唐木には、臨終を見届けたとき、〈先生の「死の哲学」と、現実にいきをひきとる死とが、どこで、どうつながるのだらうか〉との問いが生じるばかりだつた（同）。

唐木は田邊の告別式で葬儀委員を務めた。委員長は西谷啓治である。追悼の辞を固辞した唐木は、田邊の「メモント・モリ」の一節を朗読することでそれに代えた。もちろん、自身の病後ということもある。手術後に黄疸が出てしまい、まだ疲労が甚だしかつたのだ。ただ固辞にはそれより大きな理由があつた。〈告別式の席上では遠慮すべきことを述べてしまふやうな危険を、私は内心に感じてゐ

た)からである(同)。

これらの心理を引きずりつつ、離俗の身となっていたのが清里の唐木であった。学寮での孤独な彼は、大患ののち、過去に対して明るく透徹した心境に辿りついていたわけではない。ウグイスやカッコウ、ときにホトトギスなどもやってきて、軒端でさかんに鳴く。しかし、私は聖フランシスではない、と唐木は断じる。小鳥と語らう心など生じはしなかった。根気もなく気力もない、と唐木は書き、胸中には何やら白々しいものが垂れこめている。彼はむしろ万事に対して突き放した感慨すら抱いていたのである。その彼は〈仙境〉にあつて、記憶のままに回想記「私の履歴書」を書き出した。意識した嘘は一切書くまい、という態度で高原の唐木は連日筆を執る。七月末に二六三枚へと達したが、生涯ついで発表されることなく初稿のまま残った(のち全集に収録)。

旅順港の戦果

生誕する子は両親の子、家の子であるとともに、時代の子だともいえる。「私の履歴書」は語り始めの段で、自らの名前についてこう書いている。

私の生れた頃、旅順口でロシアの軍艦三隻を撃沈したといふ因縁で順三といふ名をつけられた。

唐木順三は明治三十七年(一九〇四)二月二三日、長野県上伊那郡宮田村に生まれた。時代は日露戦争の劈頭である。日本政府が国交断絶をロシアに通告したのは二月六日。同じ日に連合艦隊は佐世保港を出港し、九日午前〇時過ぎに旅順口を奇襲攻撃した。実際の戦闘がここから始まったのである。



唐木辰太郎親子（唐木家蔵）
右の乳児が順三。

東郷平八郎を司令長官とする連合艦隊は魚雷攻撃を仕掛け、確かに三隻のロシア艦船（戦艦二隻、巡洋艦一隻）に相当な被害を与えたが、〈撃沈〉ではない。航行不能に陥らせたのが戦果であった。とはいえ〈撃沈〉は威勢がよく、緒戦の勝利に沸く国民にはこちらのほうが通る。

伊那谷の唐木家も国家の快事を素直に喜ぶ人々のうちにあり、〈撃沈〉を誇らしげに受けとめた。

江戸時代の町割名主から続く地域の旧家唐木家にとっては、このとき男児を得たので二重の喜びである。名付けはまさに「順三」がふさわしかったのだ。ちなみに唐木順三の兄は、日清戦争に勝った年に生まれたという理由で勝造とされている。

勇ましい因縁があるにせよ、順三自身はこの名に〈まづもつて満足〉している。字面がよいからだ。そして、〈軍艦八隻たつたら父は躊躇なく順八とつけたに違ひない。三隻でよかつた〉とユーモラスに「私の履歴書」に書く。戦果がほどほどで幸いだとする可笑^{おか}しな感想は、一生使う名前ゆえに、本人には割合切実なものだったのであろう。

なお、日露戦争のとき宮田村からは一〇〇名が出征している。その半数は歩兵第一五連隊員で、乃木希典^{まれば}の指揮下、旅順口の背面攻撃作戦に参加した。作戦中、とりわけ二〇三高地奪取戦は熾烈な戦

闘となり、多くの犠牲者を出したことで知られる。宮田の戦没者は一名（すべて陸軍）だが、明治三七年八月と一二月に集中しているのはそのせいである（『宮田村誌』）。

ところで、唐木順三は兵事や軍事について、どう捉えていたのか。日本の近代戦争について唐木順三はくどくどしくは語っていない。これは昭和の軍国日本下に生き、その滅びを経、「戦争」を遠ざけた戦後日本社会で活動する知識人におおむね共通する態度で、批判と無言に大別すると、唐木は後者である。

彼が兵事を語るとしたら、古典の読解においてであった。例示として晩年の名作『無常』（昭和三九年）を見ていきたい。『今昔物語』巻二九の第二五話は平貞盛（清盛から七代遡った祖）を扱ったものだが、唐木は何よりその文体の簡潔さに着目して、こう書いている。

ここには心理のたゆたひなど微塵もない。情趣だの繊細だの上品だの教養だのとは一切無縁の、ただ行爲と、行爲を要約する言葉だけがある。京都に近い丹波の国でも、兵の世界はかういふものであつた。ひどくドライに割り切つた世界だが、これを今風にエゴイズムとか支配者の横暴とかいふには及ぶまい。

^{つわもの}兵の世界。そこには、唐木が日本古典を読解していくなかで考察してきた「はかなさ」や「あれ」など、木っ端にされる非情がある。『無常』が端的に示す、「はかなし」から「墓ナシ」へ、であ

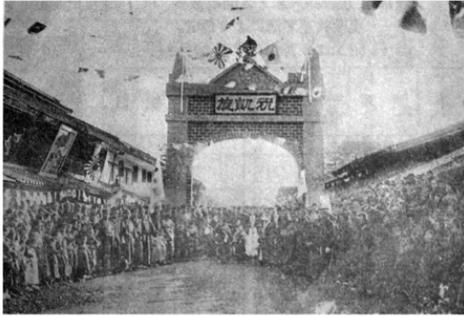
る。神経症的なめめしさから突き放した乾性へと、時代を生きる人間の事情が変化するさまに、唐木は撰関政治の秩序の崩壊を見た。そして、生死常なき戦いに在る者が迎える、限界状況の実相を凝視したのである。

こうした把握と対比させて、唐木の戦争観をもう一つ見ていきたい。敗戦直後の昭和二〇年八月二八日、満四一歳の唐木は日記にこう書いている。

戦争行為そのものが Kindlich なものであらう。戦争といふ歴史的事実は勿論生死をかけての真剣なものには違ひない。然し個々の戦争行為といふものは、道徳や経済の社会通念から解放せられた Kindlich なものであらう。

敗戦まもない時期の感想である。Kindisch（子供じみた、幼稚な）ではなく、Kindlich（子供らしい、無邪気な、あどけない）のだが、ここに知識人のとりすました「客観性」を感じないわけにはいくまい。が、この唐木の認定に、殺伐とした非情の「墓ナシ」が揺曳していると見ることもできるのではないか。複雑な大人の情緒である「はかなさ」や「あはれ」をいともあっさり破り、端的な生命原理を上書きしていく。そのとき非情と無邪気は手を取り合う。こうした地平に唐木の戦争観、兵事観があると捉えるのは可能だろう。

いずれにせよ、誕生まもない唐木は日露戦争の進展のなかで乳児期を過ごした。よく知られている



日露戦争の凱旋（仲町通りにて）
〔「宮田村誌」より、新井家蔵〕

通り、戦端が開かれてからしばらく、日本軍は戦捷せんしやうに継ぐ戦捷でまさに破竹の勢いであった。旅順口でロシア艦隊を攻撃し、ウラジオストクのロシア艦隊も撃沈させる。唐木が六か月児となった頃（明治三十七年八月）、海軍は制海権を獲得する。八〜九月には遼陽会戦があり、陸軍がロシアを撃退した。

一方でその頃日本は、乃木による旅順要塞攻撃を執行する。たたかいは厳しく、凄惨なものであった。それでも一二月には二〇三高地を奪取。これを機に日本軍はロシア太平洋艦隊の撃滅を成し遂げる。日本国内は喜びに沸き、奉賀が続いた。翌年に奉天会戦と日本海海戦という重大な局面を迎え、日本軍はロシアに壊滅的打撃を与えた。かくして講和への道が敷かれ、ポーツマス条約に向かうのである。唐木順三はこうした国家の上昇気運のなか、別の見方をすれば、近代国家の完成という歴史的過程と歩調を合わせて、代々続く地方の名家で乳児期を送ったことになる。

明治三十八年九月五日、講和条約が調印され、日露戦争は日本の「かろうじての」勝利に終わる。生まれたとき一貫目以上あった健康な男児、唐木家の末子順三は当時、すでに満一歳半を過ぎていた。

街道沿いの宿場

唐木家は宮田村の旧家であり、系譜は元禄時代から辿れる。それ以前の事情が文献的に遡れないのは、元禄四年（一六九二）、宮田村を領する高遠藩主が内藤氏に変わったとき、領内の古記録類を処分した事情が背景にある。旧藩主の影響を一掃する目的と、古い文書をたてに領民が本家争い等の争論を起こすのを防ぐためであったと、『宮田村誌』は推測している。ゆえに宮田村では、諸家みな元禄に初代が始まっていた。唐木家も初代平六は元禄年間の人である。

それでも元禄以前の話は家伝としてあったようで、唐木順三は「私の履歴書」で伊那の唐木の始めについて、曾我兄弟に討たれた工藤祐経すけつねの家臣が、祐経遺児・犬房丸の流謫に従い土着したという伝えを記す。実際、地域には犬房丸の墓もある。そこは唐ノ木という集落で、トウノキと読む。唐木の姓も元はトウノキという読みで、順三も小学校時代まではそう読んでいた。中学に入る頃から、いつしかカラキになったという。工藤祐経との縁はあながち根柢なきことではないようだ。

諏訪湖に始まる天竜川は中部日本の基幹河川の一つだが、南下を続けて三十数キロメートルの地点で、中央アルプス駒ヶ岳を西方に擁する一帯が宮田村である。東に天竜川が流れ、南端には太田切川があつて、扇状地がもたらすならかな平野と、大部分が木曾山脈に属する山域で構成される。八〇%が山地である。

上伊那宮田のあたりは縄文章創期から集落が出来て、住民の暮らしが成立していたことは竪穴式住居遺跡や土器群の出土でも判る。豊かな河川ぞいの扇状地ゆえに、古くから生活圏が形成されていた。

宮田宿は古く延長五年（九二七）に集大成された『延喜式』で「信濃国馭馬」のなかに宮田一〇疋としてその名が登場し、承平年間（九三二～九三八）に成立したといわれる『倭名類聚抄』には東山道の駅（うまやといひ、馭馬を置き、宿に供する館があった）として宮田の名が見える（『宮田村誌』）。古代の幹線道路だった東山道の道筋には諸説あるが、その「駅」があったところとして古くより交通の要所であった。

近世になっても土地の性格は変わらず、宮田は天竜川沿いに走る伊那街道（三州街道）の宿場町として知られた。宮田宿は街道沿いにおよそ三〇〇メートル続き、その道幅は平均一〇メートルだったという。唐木家は街道に面しており、大名や旗本クラスを泊める宿「本陣」から五〇メートル北に位置した。

近世の伊那街道について『宮田村誌』は、〈脇街道であったから、格別の大通行は少なかったが、大河や関所のある東海道・中山道を避けて庶民層の旅は安直な伊那街道が利用され、そのため宿駅の伝馬継立、旅人の記帳、宿泊はかなり忙しかった〉と記している。庶民の道の宿場として宮田宿は賑わいが絶えなかった。竹屋文書（唐木家の屋号が竹屋である）には伊能忠敬を迎えた記録も見える。文化八年（一八一二）四月、関西、中国、九州を長路一巡した伊能の一行は、江戸に戻る途上、宮田宿で昼食をとっている。

小林勇と唐木順三

順三の生まれた明治期に至ってもこうした宮田宿の在りようは続く。街道沿いで宿駅を持つ地としての立場は、宮田という土地を素朴な農村に留めなかった。

物流があり人々が行き交うなかで、古くより、活動的な町衆の暮らし方や生き方もそこには入り込んでいたのである。

こうした土地に唐木順三は出生した。

明治から大正へと時代が変わる時分、幼い頃の記憶として唐木は、(街道には、トテトテとラツパをならして走る馬車も通つてゐた。(中略)馬車の両側にひらひらする裾短かな垂幕は、子らの詩情とロマンを誘つた。中には赤い風呂敷を抱へた若い娘も乗つてゐる)と述べている(「をさなき日」)。律儀な地方農村人の相貌とともに、唐木のなかに、いくぶん垢抜けた原質が宿されているのは、宿場町の、街道に面した旧家に生まれたことと無関係ではない。

もちろん宮田は自然も豊かな土地であつた。唐木は『文藝文化』昭和一四年九月号に、生地についてこう書いている。

私の生れたところは信州の伊那です。西は駒ヶ岳の連峰をへだてて木曾に対し、東は天龍川をへだてて仙丈、東駒に対してゐる谷間で、西の山裾からひらけて天龍川にいたる一里位のゆるい傾斜地に、南北に長い村があるのです。そして、山の麓から幾条とない流れが東へ下り、途中でだんだん大きくなつたり、分れたりして、田を灌漑して天龍へ流れこむのです。かうして書いてゐても、そのせせらぎが耳に聞こえて来ます。

(「山と川」)

これに似た回想を唐木はしばしば語っており、雄大な山脈に囲まれ水の豊かな宮田宿は、彼にとつて懐かしい場所であり続け、たえず音や光風が甦ってくる故地であった。

宮田には歴史がつくりあげた風土性があり、近隣他所と異なるそれは、唐木の精神性と深く関わっているようで興味ぶかい。天竜川は伊那谷を南下して浜松に至るが、自身の生まれ育った上伊那と南方の下伊那とでは文化的な違いが明らかだと、彼は「伊那谷隨筆」で述べている。南方の〈下伊那は気候が暖かく、地味も肥え、また上方の文化が川をさかのぼつて早くから入りこんで、人情も文化も柔かくひらいてゐる〉。一方、上伊那の北方にある諏訪は風の強い寒冷地で、人々は〈実に気性が激しく、強気〉である。上伊那はちょうど〈諏訪と下伊那の間〉だと唐木は説明する。

彼はまた「伊那谷隨筆」で、上伊那が関東で、下伊那が関西だと端的に示している。岩波茂雄の女婿にして岩波書店会長などを歴任した小林勇は、現在の駒ヶ根市にあった農家の産であり、太田切川を挟んで北側が唐木の生まれた村、南側が小林の出生地という位置どりが、ちょうど村の境が下伊那風・上伊那風の境にもなっていると唐木は書く。〈小林さんの町までが、なも、なむしで、川一つへだてた私の村は、ずら、である。「中略」たとへば小林さんの町ではお手玉のことをオタマといふ。私の村ではオテンコといふ。蟹は小林さんの方ではカニ、私の方ではガニ〉というように。関西と関東が〈顔を合してゐる〉地域の「関東」側で生まれ、育ったというわけで、唐木順三は風土を語ることで自身の資質を巧みに説明しているかのようだ。

2 牧歌的生活から「近代」へ

生家の浮沈

唐木家の祖は既述のごとく元禄年間の平六だが、その後の代は五郎右衛門、民右衛門の名を交互に名乗った。四代の五郎右衛門は名主を務め、諏訪湖からの天竜川筋調査に従い、また駒ヶ岳山頂に銅仏七体を祀るなどして、郷土史に名を留めている。五代民右衛門も名主であり、藩主の御用達を務めた。剣術をよくし、小野派一刀流の免許を得ていた。

幕末維新时期を経て明治まで生きた六代五郎右衛門も、名主に加え、(土地も相当にもつてゐた上に街道筋の間屋もし)、はじめかなり羽振りがよかったという(私の履歴書)。小野一刀流の免許皆伝の巻物を貰い、高遠藩士とともに長州征伐に参加したのを自慢にしていた。家塾をひらいて読み書きを教えており、朱入りの四書が孫の順三の手もとに残されている。

この祖父は体が頑丈だったらしく、賑やかな酒飲みにして釣りを好んだ。前者の癖は孫の順三に伝わっている(酒に関する唐木順三のエピソードは、本書のちに、いくたびか触れていく)。磊落らいらくだった祖父はまた俳句をたしなみ、放浪の俳人・井上井月せいげつと交わりを持った。井月の俳句の座に連なり、句をひねった。順三が父から聞いて覚えているのは(蝶々のとまりさうなり水の泡)である。井月のことは順三の母かまよも記憶していた。彼女は子供の頃に、(この井月を乞食井月とよび、ほろよひきげんの風狂人の尻について村ざかひまで仲間とはやしながらついで廻つた)という(同)。



宮田郵便局（大正初期）
〔「宮田村誌」より〕

この六代五郎右衛門はたいへんな趣味人で享樂的な人物であつたようだが、それもあつて産を傾けてしまい、唐木家は急速に没落した。ついに文庫蔵一つと小さい住居のほかは人手に渡り、その蔵さえも羽目板をはずして薪の代わりにしたほどになつた。なお順三は、六代目をよく知る地元の嫗おんなから、この祖父と自身の体つきがよく似ていると聞かされている。ただし彼は祖父のことを直接は知らない。

六代目を継いだのが順三の父辰太郎たつたろうだつた。当然ながら貧乏ぐらしの少年期で、高遠の商店に小僧に出されたこともある。帰つてきた家には何もなく、結婚の頃までは貧乏から抜け出せなかつたが、製糸の仕事にたずさわりいくぶん家を持ち直した。そして、順三をはじめとした子供たちが生まれてくる。

唐木順三は兄一人、姉三人で、五人きょうだいの末子である。父辰太郎は当時、明治新時代のなにか村の郵便局長をしていた。地方の名士が任せられることの多かつた役職ゆえ、へ代々名主で苗字帯刀御免であつた。唐木家の七代目辰太郎がその地位に就くのは自然な成り行きであつた。局舎は唐木生家のすぐ隣だったが、父親がそこにいた記憶は順三にない。局長といつても、郵便の仕事は

〈万事まかせきりのやうであつた〉(同)。「宮田村誌」下巻を繙くと、宮田郵便局の歩みは、明治七年一月に前身の宮田郵便取扱所が開設されたのを初発とする。明治三四年に通常小包、為替、貯金引受事務が、明治三六年には電信発着事務が開始される。続く明治四四年に電話交換業務も始まるが、当時、利用者は少なく閑散としていた。辰太郎が〈万事まかせきり〉だったのは、仕事さほどなく閑であったことも理由の一つとなろう。

辰太郎は別に商売をしていた。「私の履歴書」によれば、〈呉服、太物と白く染めぬいた紺の短いれんが掛つてゐた。「中略」番頭とも小僧ともつかぬものが多いときで三人ほどゐた〉というから、着物商店であつた。しかしここでも、〈父が帳場に座つてゐたことは稀にしかない〉(同)。辰太郎は局長に向かず、店主にも向かなかつたのである。辰太郎はほかに材木業や繭倉庫業も営んだが、それでは何に専心したかというと、蚕カイコであつた。次男の順三は「私の履歴書」で、〈蚕には父は熱心で、かたはだぬぎの襦袢姿で、よく働いてゐた〉と、ようやく「働く父親」について肯定的に描いている。母かまよは、もともと親戚だった平澤家から嫁いできた。実家は宮田村にあり、製糸工場をかなり手広く展開していた。かまよはその三女である。この母は〈生涯こまめに働きつづけたが、ユーモリストでもあつた〉と唐木は回想している(同)。幼い順三は、母親からお伽噺を聞くことが楽しみであつた。母はいつも抑揚をつけながら話してくれた。元の話を通り話すのではなく、しばしば創作を交えていたという。この母が木枕をあてて休んでいるとき、講談本か何かを読んでいたのを順三は覚えているから、そうした読書歴のなかで彼女は題材を得たのだらう。

幼い日に母親からお伽噺を聞いていたことは、順三の情操やものの見方に影響を与えたはずだが、もつとも、こうした幼少期の在りようは唐木家に限らない。当時の日本人の家ではあちこちで見られたものだった。たとえば、池島信平との対談で語られた作家新田次郎の回想を見てみよう。新田は明治四五年（一九二二）、信州上諏訪の産であり、唐木順三とは地域も時代も近い。

新田 信州に生まれましてね。当時は幼稚園なんかありませんから、小学校にあがるまではおばあさんが先生でしたよ。字を教えてくれたり、おとぎ噺をしてくれたり……。お話や音読が子供に与える効果は、大きいものですな。

池島 ぼくも、印象に残っているな。

新田〔前略〕以前、『山犬物語』という小説を書きましたが、これみんな、おばあさんが話してくれたことなんです。〔文学よもやま話〕

日本の戦後社会においては、テレビがあつという間に普及し、のちにはインターネットも加わる。これらは、家庭内で母や祖母たちを（先生）として幼少期を過ごす有りようをすっかり喪失させてしまったが、明治生まれにはむしろそちらが常態で（池島は明治四二年生）、独自の教育的効果を果たしていた。幼少の順三が母かまよから受けた影響は、思索者唐木の基底を成す大事な要素となっていたはずである。

さて、父親の仕事と母かまよの実家の生業を見ても、生家のあつた地の人たちは事業欲が旺盛だったことが察せられる。実際、唐木順三は伊那の土地柄について、〈進歩的で、ぬけめなく新しい事業をやり始めるところである。名のある実業家に乏しいが、小事業家は随所随所にあつた〉と書いている（私の履歴書）。母の実家は〈小事業家〉のいくぶん成功した一員だし、辰太郎を戸主とする唐木家にしても〈小事業家〉を目指している手を出していたようだ。いうまでもなく事業には浮沈がある。不況となると暗澹たる状況に追い込まれる一家も珍しくない。唐木家ものに破産し、ちょうど自身も仕事を失い生家に戻って来た順三は深刻な事態を目の当たりにするが、それはのちの記述に譲ることしよう。

唐木順三は明治四三年（一九一〇）、地元の宮田尋常高等小学校へ入学する。（着物に小学生時代

藁草履といふいでたち）で通つた（わが心の風土）。クラスは六〇人くらいだった。

一年生のときの受持は酒井という老教師で、和服に袴姿の先生である。まだ幼い唐木少年はこの先生から羽織の右袖をつかまれ、青洩あおはたをここでふく癖だけはやめよといわれた。そちらの記憶は残っているが、〈私の袖がいつから光らなくなつたかの記憶はない〉まだまだ（記憶の中の先生）。幼い唐木は田舎の子供らしく、無邪気そのものである。近所に生えている竹は、上級生に教わつて工作するとたちまち凧や水鉄砲に変じた。兵隊ごつこのとき、桑の枝の皮をうまくはいでサーベルつがの柄にした。弓や矢はもちろん、野球のボールやバットも手製で、藁草履や草鞋わらじを作る器用な仲間もある。（なにかならなまでに手作りで、買ったものといへば、模型飛行機と野球のミットぐらゐしか思ひつかない）ほ

どだった（「わが心の風土」）。

三年生のときに明治天皇が崩御し、このときは（かなりはつきり頭に残つてゐる）と唐木は記す（私の履歴書）。二重橋前に集まつた快癒を祈願する民衆の写真（新聞に載つたもの）は彼の印象に深く、明治天皇の（風姿は子供心にも巨大なもの、偉大なものとしてうつつた）。崩御した明治四年の九月、乃木希典夫妻が殉死する。この出来事も深く記憶に刻まれており、当時の唱歌（小砲の響とどろきて、宵闇やぶる一刹那、乃木大將は御後^{おんあと}を慕ひまつりて逝きにけり）は、遠く還曆を前にした唐木の口の端にまで残つていく。かのとき、幼い少年が得たのは（何かが終つた）という感じであつた。（何かが始まつた）という感じではなかつた（同）。

未来ひろがる幼少年期の出来事であるのに、次代のことには考えは及ばず、終焉の感慨のほうが心を占めた。この事情は、やがて『現代史への試み』（昭和二四年）を世に問う唐木順三の精神性をも示唆する。この初期の代表作で彼は、日本の知識人層が明治にあつた「型」を喪失したことを鋭く指摘し、日本社会の変動に本質的批判を加える。明治の終焉をきっかけに自由主義や個人主義の横溢が始まり、「自己」への過信と傲慢が世にはびこる。それは日本と日本人から大切なものを決定的に奪つていった。「古い形式」を否定して「近代」の本格的導入に道をひらいたものこそ、大正の教養主義である。唐木はそこに大いなる疑問を呈する。明治の喪失におののいた幼少年期の唐木は、どこか、『現代史への試み』を書いた壮年の唐木と相通じるものがあるのではないか。実際、小学三年生の自分にとつて明治天皇の崩御は、（諒闇はまさに諒闇）と受けとめるしかない体験だつたと彼は書いている（「私



大正3年の伊那街道（『宮田村誌』より）

の履歴書」。

さて、小学生時代の唐木は、後年、旧制中学で学年首席となった頭脳をまだ示していない。成績は比較的良好いもののトップというわけではなかった。当時の小学生は学習塾に通う戦後の小学生ではない。遊びや友だち付き合いは熱心でも、勉強への関心は薄い。順三もそうした少年たちの一人で、むしろスポーツに親しんだ。

伊那では早く野球が入ってきて、郡の大会もあった。なかでも宮田の小学校は強かった。はじめはキャッチャー以外グローブがなく皮のボールを素手で受けた、という古老の証言が小学校百年史から転載されて『宮田村誌』に見える。順三少年はピッチャーになりたくて練習に励んだが、ものにならず二軍に廻された。スポーツでむしろ彼が得意としたのは長距離走だった。学校から太田切川の橋まで往復一里のマラソンでは大抵三着以内に入った。また鞍馬^{あま}で一番高いのを真^まっ先に飛んだこともある。身長が上から五番目で体も大きかったゆえ相撲には自信があった。

一方、活字好きは小学生のときに早くもあらわれており、編集者唐木との遙かな繋^{つな}がり^がりを思わせる。順三少年は『日本少年』『少年』といった雑誌を読んで有本芳水^{ほうすい}や松山思水^{しすい}の名を知った。高学年に

なると、『時事新報』連載の「荒木又右衛門」や「柳生十兵衛」を愛読している。また、四年生のとき、伊藤という若い代用教員が昼休みに『西遊記』を読んでくれたことは忘れられない。(私たちはせがんで、何十回にわたつてそれをつづけて貰つた) (記憶の中の先生)。こんなに面白いものはなく、順三少年は(孫悟空になりたくてしやうがなかつた)ほどになる(同)。

梭の音

親しんだものはほかにも多々ある。「敵は幾萬ありとても」といった勇壮な唱歌を愛唱し、日曜学校で賛美歌「主、我を愛す、主は強ければ」を教わりよく歌った。また、村落の少年団に加わつて、幻燈会をやつたり、お祭りの日には満艦飾まんかんしよくを街道沿いの家の屋根から屋根へ斜交はすかいに張り巡らしたりした。

自宅では母の製糸を手伝い、そこから機織はたおりまでの過程に馴染んだ。唐木はその記憶をずっと大切に抱いている。

シャン・シャン、トン・トンといふ梭はの音、ギイツと巻く音、すべてがなつかしいものである。

母は私が結婚したとき、この手織で蒲団一組をつくつてくれた。(私の履歴書)

伊那郡の繭は質が良いとされ、すでに明治七年、宮田村にイタリア式の器械製糸所が建設されていた。動力は水力(水車利用)、経営者は地元の製糸家平澤長造ちやうぞうだった。順三の母かまよの父親である。明治八年五月、米国絹糸会社による日本生糸の鑑定結果がサンフランシスコの日本副領事に伝えられ、

〈信州糸は紡糸の点で良好だと讃えているが、中でも長造のものは華美で衣服に用うれば最上のオルガンザインになるだろう〉と報告されている(『宮田村誌』)。製糸業は発展し、宮田村の主要産業となつていくのだった。

そうしたなか、唐木家は上繭を売りつつ、中等繭などは手工業的な座繰にて製糸していた。作業過程のうちにウツギの葉を用いて糸目を探る段階があり、新しいものでないといけないウツギ葉をとりいくのは順三少年の役目であった。

これらを通じて見出されるのは、地域社会と家庭の常民的な安定のなかで、健やかに育った幼き肖像である。背後に牧歌的な暮らしが見出せる。当時、どこにでもあった日本の田舎町で、ざらに見られた無邪気で活発な少年の一人、それが順三だった。

鉄道の開通

一方、少年の小学生時代、地域の暮らしを一新させる出来事が起こった。「近代」の電車が通ふやうになつた(『私の履歴書』)。それによって、〈軒につるされたブリキの街燈に火をともして歩く点燈師が無用になつた。トテ・トテとラツパを吹く乗合馬車が消えた。駅の付近に新しい町ができた。電車の開通は村の生活を変えた。手工業から機械工業へ、牧歌的なものから資本主義へ、その過程が急速に進んだ。〉(同)

このうち鉄道事情を『宮田村誌』で確認していくと、次のようになる。伊那谷を南下する鉄道の設置運動は明治の半ば頃から盛んになり、ついに明治四一年、中央線辰野駅南方からの鐵路工事が着工

された。明治四四年に資金不足に陥って建設が中止の危機となったが、郡長の指示で地域の町村から寄付が集められて、危機は乗りこえられた。鉄路が宮田に達したのは大正二年一二月で、順三の四年生時にあたる。開通祝いで花電車が通り、祝典は盛会だった。その後、大正一二年に飯田まで通じ、中央線辰野駅への乗り入れも成立する。当初は小型木製の一車両での運行だった。

鉄道の開通は唐木家に変化をもたらした。乾燥繭の出荷が容易になったことを受けて、父辰太郎は家の裏に三階建ての白壁の倉庫を建てている。妻かまよの実家から繭を預かるためであった。宮田の駅は唐木家からほど近い。また父は木材会社を合資で設立した。(西駒ヶ岳の前山の木をきりだし、これを製板して、貨車につんで売りだす)ためであった(「私の履歴書」)。この会社はのちに破綻して唐木家が再び没落する原因をつくるのだが、事情は後述としたい。

近代的な工業化の波は日本各地に達していたのである。その勢いは、日露戦争の勝利が日本を、近代国際社会の優等生の地位へと押し上げて行った経緯と重なる。日本が世界五大国の一つといわれるのは第一次世界大戦後のヴェルサイユ体制下だが、明治末大正初期といえば、そのときも近い。江戸幕府が結んだ不平等条約の解消も成して、日本人には自信が根をおろしてくるのだった。時代の大きな地殻変動の一端は伊那谷まで押し寄せる。牧歌的な村に電燈が光り、鉄道が登場する。小学生の順三少年を驚かせたのは時代のうねりそのものであったろう。

ただし、この時期は気づく人が少なかったものの、近代国家として欧米と肩を並べることで、日本と日本人は大事なものを失いつつあった。唐木はのちに『現代史への試み』を書き、大正以降の日本

近代へ批判の烽火（つひ）を上げることになるが、「喪失」が始まる時代に小学生期を送っていた順三少年には、まだその観点を得る由（よ）はないのである。

高等科時代

やがて六年生に達した唐木順三に、中学校へ進学するかどうかの問題が生じた。当時の学制は尋常小学校卒業ののち複線化する。小学校高等科や実業補習学校等へ進む道があり、一方で上級学校として中学校があった。中学校へ進むと、高等学校（大学予科に相当する）から帝国大学へと進む進路も開かれる。もともと、これらは男子の進路であって、女子の上級学校は高等女学校だった。

順三少年は中学校へ進むかどうかの岐路に立たされていた。宮田尋常高等小学校では当時、付近にあった農学校へ進む男子はいたが、中学校への道を選ぶのはごく稀であった。その頃、中学校は松本から諏訪、あるいは飯田にしかなく、親元を離れた寄宿生活になる。しかも難関の入学試験があった。〈私は自発的にどうするといふ才覚も意志もなかつた。姉の一人が嫁いだ先の弟が松本中学へいつてゐた。そんな関係で松本を受験することになつた〉と唐木は書く（「私の履歴書」）。いかにも暢気（のんき）である。同級生に母方の親戚の子がおり、唐木は一緒に受験し、共に失敗した。〈漫然と受けて漫然と落第した〉のである。このとき同級の女子が松本の女学校を受験して受かり、〈紫紺の袴の裾に白いテープをつけた〉その姿を見て、順三少年はショックを受ける（同）。

義務教育は当時、小学校までで、同級生は卒業とともに男子が半分以上、女子は三分の二が学業を終えている。中学受験に失敗した順三だが、そちらの道を歩まず、宮田尋常高等小学校の高等科へ進

むことになった。

高等科時代はわずか一年で、中学校の受験準備で日々を過ごしていたせいもあり、エピソードはほとんどない。ただ一つ、「私の履歴書」で比較的筆を費やしている出来事に唐木は見舞われた。少年の彼は自転車乗りがうまく、両手離し運転も得意であった。ある日、受持の先生から葉書を買ってきとくれと頼まれ、それを無事届けた帰り道、彼の自転車は前輪を支える軸が急に折れた。前輪は車体から抜けて前にとびさった。その衝撃で順三少年は前のハンドルに口を打ちつけた。自転車から落ち、気を失ったのである。自転車事故にしては大事おそろである。現場が母の生家近くだったのは幸いだった。担ぎ込まれて看護を受けた。

この事故で彼は前歯三本がとれ、頬から耳にかけて傷を負った。学校も数日休むことになった。大怪我は少年の心にも傷を負わせたようで、唐木はそれから四六年も経って起稿した「私の履歴書」で、当時の記憶をこう記している。〈私が歯のない顔で学校へ通ひだしても、この受持の先生から、何の見舞の言葉を受けなかつた。私はこの先生を疎おろんじた。憎むとまではいかなかつたが、心にしこりをもつた〉と。

少年は伊那町（当時）の歯医者へ行き、〈大きくはないがゴムのアゴのついた、金のツルでつた入れ歯〉をして貰った。これが厭で厭でたまらない。〈小学校の子供のアゴ付の金歯を想像してみたまへ〉と書いており、屈辱の体験だったに違いない。我慢できなくなった少年は、父に頼んで、今度アゴのない上等の義歯を入れることになった。〈これは贅沢であった。私は父にすまないと思つた〉

と唐木は回想している（同）。

一年後、大正六年に長野県立松本中学校を再受験した唐木順三は、今度は合格を得た。不合格となった前年の同校入試試験競争率は三・二倍で、大正年間を通じて長野県下最高の倍率であった。翌六年は入学者数を増やしたこともあり二・四倍だったが、同年、長野県立の全中学校の競争率は平均一・九倍で、松本中学が狭き門であることに変わりはなく、それを無事に乗りこえたのだ。もともと、算術は満点を取ったが習字は五点満点の一点。一科目でも零点なら総計が合格点に達しても不合格となるのだから危なかった。

なお前年一緒に涙を呑んだ母方親戚の同級生も、このとき無事合格となる。一族でほっとしたことだろう。結局、六〇人の小学校同級生のうち、中学校へ進学したのは唐木を含め三人だけであった。

生活が大きく変わる。松本の地で中学生生活を送るため、故郷の宮田を出立するときが来た。唐木順三、満一三歳の春である。

第二章 松本、青春のとき

1 旧制松本中学校

明治九年発足の名門

大正六年（一九一七）四月、松本中学校一年生となった唐木順三は、義兄の弟・日戸博にっとうひろしがいた下宿に住むことになる。日戸はすでに松本中学を卒業しており、一高への入学を目指して受験準備中だった。当時、高等学校の入学試験は七月である。

日戸は無事に一高生となって松本を去り、これに合わせて、唐木は二年生時から松本市内土居尻にあった眞島ましまという下宿へ移る。中澤臨川りんせん（本名重雄）宅のすぐ近くであった。中澤は松本中学の卒業生（明治三〇年卒）で唐木の先輩にあたり、第二高等学校、東京帝国大学工科大学（のちの工学部）へと進んだ。「自然主義汎論」などの著作があり、『中央公論』の文芸時評欄を長く担当した。明治大正期の代表的文芸評論家の一人といえよう。唐木の宮田村と同じ上伊那郡の産で、中澤のほうは南向村みなかた

大草おおくさに生まれている。生家は地元の旧家で養命酒醸造元でもあった。

眞島には西田實という薩摩人の先生が下宿していた。『長野県松本中学校・長野県松本深志高等学校九十年史』（以下『九十年史』）を繙けば、西田の名は大正五年度着任の教員のなかにある。鹿兒島土族出身で東京高等師範本科を卒業した。受持学科は国語と漢文。五年度とはいえ年度末の大正六年三月に就任しており、唐木入学とほぼ同時期に松本に来た前任校なき新任教師である。大正一〇年三月に離任して鹿兒島県川内せんない中学に移っているから、同年卒業の唐木とは松本中学時代がびったり重なる。唐木はこの西田實から、徳富蘆花、国木田独歩、さらに売り出したばかりの武者小路実篤の話聞き、本も借りていた。

なお下宿眞島には過去に、（後の大下宇陀兒こと本姓木下といふ先輩がゐたことがあるさうだ）と、唐木は「私の履歴書」で書いている。大下宇陀兒おわしたうだる（明治二九〜昭和四一年）はわが国初期の代表的な探偵小説家。戦前は『蛭川博士』、戦後は『虚像』ほかが代表作である。江戸川乱歩と同時期に活動し、読者の人気を二分した。本名は木下龍夫。松本中学を卒業して第一高等学校、九州帝大工学部と進んでいる。松本中学卒年は大正三年だから唐木が眞島に入る四年前であった（『深志人物誌』）。唐木は〈下宿のばあさんから木下秀才の話をよく聞いた〉という（『記憶の中の先生』）。

すでに卒業生に二人の傑物を数えたが、旧制松本中学（前身を含む）、のちの松本深志高等学校は明治より数々の名士を輩出し続けた名門校として知られている。明治だけ見ても、横田秀雄（大審院長）、木下尚江きのしたなおえ（後述）、相馬愛蔵あいぞう（新宿中村屋創始者）、加藤正治まさはる（中央大学総長）、窪田空穂うつほ（歌人、本名



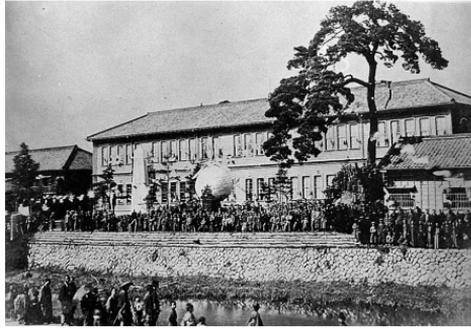
相馬愛蔵（前列左）と木下尚江（同右）
〔『信州教育史再考』より〕

通治つうじ）、熊谷岱蔵くまがいたいぞう（東北大学総長）、五島慶太（東急社長）、塩沢幸一（海軍大将）、唐沢俊樹（法務大臣）などの名が挙がる。

さてこれからしばらく、主として『九十年史』と『深志人物誌』、および中村一雄『信州近代の教師群像』、伴野敬一『信州教育史再考』に基づき、草創期から唐木順三在学期までの松本中学の姿を見ていくことにしよう。

明治九年（一八七六）七月、筑摩県下に第十七番中学変則学校が発足した。筑摩県はまもなく長野県に合併されるが、この学校こそ旧制松本中学の始まりである。「十七番」というのは当時の学区で、塩尻・宗賀・筑摩地を除く東筑摩郡、および南北安曇郡の各村がそこに属し、松本が本部にあたる地だった。その松本に同校は設置される。「変則」とは正則学校に対する呼称で、学業の正しい順序を踏まないで洋語や医術を教える学校という意味であった。

明治時代前期は地方行政制度も学制もめまぐるしく変わり、第十七番中学変則学校は紆余曲折を経て、明治一七年九月、長野県立中学校に転じる。本校は長野に置かれ、上田・松本・飯田に支校が配せられた。校長には小林有也うなり（後述）が任せら



松本中学校校舎（明治32年）（『九十年史』より）

れる。続く明治一九年九月、公布された中学校令に基づいて、同校は長野県尋常中学校と改称、支校を廃止して本校を松本の地（東筑摩郡松本北深志町）へと移転する。この間は二年に過ぎないが、長野本校の教諭には、のちの著作『日本風景論』で名高い志賀重昂しげあきが在籍し、卒業生のほうでは松本支校に木下尚江がいた。木下は卒業後、東京専門学校（現・早稲田大学）へ進んでジャーナリスト、社会活動家となる。明治三四年、安部磯雄、片山潜、幸徳秋水らと社会民主党を結成したことでも知られている。

松本の県尋常中学へ一本化されたのち（校長は引続き小林有也）、県下各地域の要請から松本校を本校として再び支校が各地につくられていくが、明治三二年一月、このうち長野支校が独立するのを受けて、松本の本校は長野県松本尋常中学校と改称された。これより学校は、（旧制）松本中学校という名にて歩み続けるのである。唐木入学時には全国有数の古い学校で、その歴史を見ても名門として位置づけられる資格は充分だといえよう。

松中自治

唐木順三は入学した松本中学について、〈生徒の自治活動が徹底してゐて自由な学校であつた。最良の中学だつたといまでも思つてゐる〉と「私の履歴書」で書いている。



小林有也
〔九十年史〕より

「松中自治」といわれる校風をつくりあげたものとして、生徒の主体性を重んじた小林有也校長の存在は大きい。

小林は安政二年（一八五五）和泉国伯太藩^{はかた}の重臣の家に長男として生まれた。いまの大阪府の一部を成していた譜代の小藩である。江戸渋谷の伯太藩下屋敷で少年時代をすごし、維新で江戸開城になると故地伯太へ戻る。明治三年（一八七〇）、一六歳で東京へ出て大学南校（東京大学前身の一つ）に入学、物理学・論理学・数学を考究した。卒業は明治一三年で、わが国初となる物理学専攻の理学士一人中の一人であった。翌年に農商務省入り。工務局に所属し、調査課、統計課、勸工課などを経た。とき明治国家の殖産興業時代であり、近代工業の草創期において小林は、官営工場の管理ほかに当たった。また農商務省入りした同年、東京物理学講習所（のち東京物理学校。東京理科大学の前身）の設立発起人一人の中に名を連ね、その教官も務めている。

世に「松方デフレ」といわれる不況が起こるなか、小林は明治一七年七月、工務局を辞職、同時に物理学校も辞めて長野県の中学校教則取調委員へと転じる。そして同年九月、長野県立中学校が誕生すると学校長を兼ねた教諭となった。続く明治一九年九月の長野県尋常中学校設置に伴って、今度は松本へ赴任して同校の校長となる。以降、松本中学への改称を経て大正三年六月九日、同校在職中に六〇歳で逝去するまで、信州教育界の指導者として生涯を通した。長野時代を含めると在任は三〇年に及ぶ。小柄で、どち

らかといえば風采のあがらない地味な身なりだったが、それはむしろ名利を追わない超然とした人物像を示しており、第一級の教育者として各方面から深い敬意を集めた。その影響力は大きく、唐木のいう「最良の中学」は小林校長なくしては成立しえなかつたといわれる。

多くの生徒を松本中学に送り込み、また小林の手柄に直接触れていた松本小学校長・三村寿八郎は、小林有也の姿勢について次のように述べている。

先生が其生徒を撫育する一大特徴と見るべきは、宛然一大塾的であるのである。自治訓練に重きを置き、生徒各自が幾多の自炊寮若くは自治の会合を組織し、或は尚志舎と云ひ、良有会と云ひ、被雲会と云ひ、皆理想的に自治が出来て居る。社会に立つて成す所あらんとするものが、人の干渉に由て、人の指導に依て、言を易へて云へば他力に依て自分自身を治めると云ふ様な事では到底駄目であると云ふのが先生の主張である。

〔「校友」掲載。『九十年史』収録〕

格の高い士族の長子として生を享けた小林は、儒教と武士道に基づく生活規範と良質な倫理観念を宿した。理学を目指したのは合理的な思考を当初から持っていたゆえであろう。大学教育はフランス語で物理学を学び、明治初年の進取の気風に触れるなかで青年期を過ごす。これらは後年、松本中学にて「自治」——生徒一人ひとりの人格完成のため、自ら修養する気風を育む方向といふべきか——へと学校を導いていく背景となった。

三村のいう〈一大塾的〉は、小林校長の教育者としての特色をうまく表している。生徒を紳士として遇し、その自治を認め、むしろ促進させた。しかも小林は指導者的にふるまうことで「自治」実現させたのではなく、〈無言のうちにその行動を通じて生徒に感化を与える〉ことで自然と成していく方法を採用したことは重要である（『九十年史』）。小林校長は、生徒が挨拶をすると、そのお辞儀以上に腰をさげて丁寧な挨拶を返したという。またその訓話はいつも平凡かつ具体的で、「おなかをこわすな」「夜更かしをするな」といった内容であった。思想的な指導というものはしなかったという。

その小林校長が重鎮として在ったなかで、生徒の間ですくすく成長していったのが「松中自治」である。校内の生徒活動に幅広く自治が認められ、例示すれば、運動会の日取り・運動種目の決定と日の運営、遠足や旅行の内容と行き先の決定、雑誌『校友』の発行、他校試合の内容の決定などは一切の権限が生徒に与えられていた。もちろん授業に支障がない限りにおいてであり、生徒の全体会議（相談会といっていた）の決議を経なくてはならなかったし、生徒間の風紀取締機関である矯風会の指示を受けねばならなかったが、明治時代のこととて画期的であったのは間違いない（矯風会にしても生徒の自治機関である）。

とはいえ、小林有也にしても、明治期の教育指導者の一人として明治体制に忠誠を尽くす国家主義者であった。対外戦争に際しては主戦論者で、「明治天皇」というあだ名を持った生徒を呼びつけ「不敬に当たると説教したエピソードも残っている。また、日露戦争後に個人主義・社会主義的傾向が若い世代に浸透しだし、文学にも自然主義が登場してきた状況に対しては、旧幕時代に生まれた

明治人としてきわめて批判的・警戒的であった。彼の遺言のなかに、〈決して現代の悪風潮に染み墮落するが如き事あるべからず〉との表現があることから、新時代の風潮を精神的墮落と捉えていたことが判る（『九十年史』）。

いふなれば小林は正統的な明治の人間であった。大正期はじめに逝去したことは、明治的価値が本格的に崩れていくのを見ないまま冥界に旅立ったという意味で、あるいは小林にとって幸福だったのかもしれない。いずれにせよこの名校長の人格的影響と自治の伝統は、唐木を迎え入れる松本中学に自由闊達な校風を確立させていた。

小林有也の影響

唐木順三入学時（大正六年四月）は小林有也逝去（大正三年六月）後である。実はこの三年間に松本中学では騒動が勃発していた。小林を継ぐ本荘ほんじょう太一郎校長の排斥事件である。本荘の管理主義的方针が「松中自治」とぶつかり、相談会長・小岩井こいわし浄の退学（本荘校長との意見衝突のゆえであった）や入学者不正疑惑（本荘校長が推薦枠を設定して入学試験とは別に入学させた生徒のなかに、校長自身の長男がいた問題）などもあって、排斥運動が澎湃ほうはいとして起きたのである。生徒によるストライキの様相が松本中学に醸成され、マスコミも騒ぎ出して新聞報道が過熱するなか、ついに本荘校長は退職に追い込まれた。

その結果、三代目校長として高橋清一が京都府立第二女学校校長から転じて赴任してくる。ちょうど唐木の入学時であった。波瀾はあったが、唐木が松本中学の門をくぐったのは「松中自治」の伝統がむしろ再確認された時であり、〈最良の中学〉という唐木の評価が生じたのもこうしたエポックで

あることが背景となっている。

なお、本荘校長と対立して退学した小岩井は、唐木実家のある宮田村の小学校でしばらく代用教員をやっていた。当時は唐木家の近くに下宿していて、〈背は高く気骨稜々の姿で歩いてみた〉という（記憶の中の先生）。のち検定を通り一高、東大へと進み、新人会で活躍した。卒業後は労農弁護士として活動し、共産党大阪支部長を経て労農党へ加わるが、昭和一二年に検挙されたとき転向する。東亜同文書院大学教授を務め、戦後は愛知大学の設立に尽力、第三代学長となった。

さて、小林校長の影響力が色濃く残っていた松本中学で青春の一角を過ごし、そこを〈最良の中学〉と懐かしく回顧する唐木順三には、小林の人格的影響のようなものが精神の深いところに刻まれたのだと思う。小林有也に象徴される古き教育者の教えが、誠めや諭しになって、いわば「地声」のようなものとなり、長らく精神の基底で反響し続けたのだとみられる。中学校の校門に入ったところに故人となった小林の胸像が立ち、生徒たちは像の前を通るときは礼をせねばならぬ、と唐木は回想している。象徴的にいえば、小林校長への「礼」の意識は、思想家としての唐木に頑丈な背骨をつくった。そのことが察せられる一例として『現代史への試み』を見てみよう。主著の一つといわれるこの本で、唐木は、大正期に勃興した教養主義が旧古の「型」を崩していった点を問題にし、それによる喪失が日本社会に頹廃をもたらしたと論じている。それでは「型」に拠って立つ者とは誰か。明治期の「素読世代」がこれにあたり、彼らについて『現代史への試み』は、大正期の教養派と対比させて次のように素描する。

その世代はどこかに四書五經的な骨格をもつてゐた。儒教的、武士的な、凡そ卑屈を嫌ふ高潔なものをもつてゐた。たとへそれが四書五經とは全く反対な表現をとつてゐたにしても。さうしてその上に西洋を存分に吸収した。和魂洋才から汚い連想を洗ひさつていへば、和魂洋才的な、いな、東洋西洋的なものがあつた。

修身齊家治國平天下的な、さうしてまた、十有五にして学に志し、七十にして欲するところにしたがつて矩をこえずの、經世済民と修業への意志が根本にあつた。その上で西洋を学んだ。その上でといふのは、自分で儒教的なものを意識し、そのイデオロギイを奉じ、或はそれを培養しようとして、その上で西洋を色眼鏡で見、かつ西洋から選択したといふのではさらさらない。寧ろ逆に西洋に没頭しながら、自分でも意識しないやうな根本に、或は骨格に、さういふものがあつたといふのである。

ここでいう「さういふもの」こそ「型」であり、それを形成せしめる規範の絶対性を背景に持つ者こそ、明治の「素読世代」なのである。彼らには後進日本と先進西洋との矛盾に直面し、そこで生じた苦悩を眞の苦悩たらしめつつも、相克を創造に転じさせるエネルギーがあつた。こうしたエネルギーの基礎を成したものがこそ「型」であり、あるいは「人格」であつたと唐木は論じる。〈鷗外のあきらめ、漱石の神経衰弱、二葉亭の文学か政治かの悩み、露伴の小説抛棄、鑑三の退官、西田哲学の悪

戦苦闘、荷風の絶望等」は、「素読世代」が内面に刻んだ「型」を考慮しないと理解できないと判じた。

こうした唐木の「型」への視座に、若き日々、精神が柔軟なときに会った松本中学の文化伝統と、小林有也の人格的影響を見出すのはさほど困難なことではない。小林校長こそ、唐木が懐かしく肯定し続けた「型」の人であり、その理念を体現した代表者であった。思想とか、技術をいう前に、小林には人格の力があり、ひとの魅力があったのだ。それこそ唐木が社会と人間にとって最も重要なものだと、終生、着目し続けた対象だった。

唐木順三は方法や技術の問題を論じる際、なによりひとが重要であることを、いくたびか指摘している。たとえば、こうしたくだりがある。

科学や技術の世界は公共的なものである。師資相承といふ秘教的、個人的な伝授はここにはない。だれがやつても二二が四、九九・八十一であり、だれがスイッチを入れてもモーターは公平に動く。科学や技術はひとを抽出する。それはもちろんさうなくてはならぬはずのものである。それによつて文明は進歩してきたのである。しかし、科学や技術のよろしき運用は、やはり、ひとのいかによることでもないまれない。よろしき運用といふ道德問題になると、やはり人間の人格の問題がでてくる。

〔私をみてゐる目〕、傍点原文

そして次のようにも述べている。

民主主義教育といつても、ただ個人の当座の利害打算の上にたつ多数決決定では事足るまい。利害打算を越えた規制原理、道理に対しては相済まないといふ自己反省の契機をどこに見いだすべきか。これは単に教育方法の問題ではなく、教育者のひとりの問題であらう。(同)

こうした見方が生まれるのも、古き良き「型」を精神の骨法に宿しつつ謙虚にまた物静かにふるまつた名校長のもと、自治の大輪をひらかせていった松本中学で若き日をすごし、その校風を身につけてきた唐木ならでの在りようであろう。教育、あるいは社会生活の理想を語るとき、〈最良の中学〉時代の記憶が確乎たる通奏低音となつて唐木のなかを流れている。そう捉えることはごく自然であるように思われてならない。

唐木順三が入学する頃、松本中学は「全国有数に古い」存在ゆえ、松本城址にあつた校舎は古びきつていた。床の赤煉瓦は真ん中がすり減つていたという。先輩たち

がふみあらしてきた結果であつた。この床をふみあらず一人として若き唐木は学校に通つた。

松本中学時代、唐木が学科のなかでとりわけ興味を持ったのは幾何学だつた。〈点とは位置があつて大きさのないもの、線とは長さがあつて幅のないものといふ定義の中で、私は初めて抽象といふことを知つた。一種異様な清潔な世界であつた。幾何学の証明方法、いはば純粹な推論形式も面白かつ

た」と当時を回想している（「私の履歴書」）。物理学にも多少の興味を抱いたという。のちに哲学・文学を志向する唐木が、若き時代、〈清潔〉で〈純粹〉な理科の学問に惹かれたというのは、美的なものに凭れず論理によって立とうとした思想家唐木のことを考えると、むしろ腑に落ちる逸話となる。中学時代の唐木が学科に関してもう一つ、強く記憶に留めているのは、体操教師の野口源三郎のことである。野口は陸上競技の有力選手だった。唐木入学の大正六年、五月に芝浦で開かれた第三回極東オリンピックに出場し、十種競技で優勝者になっている。満二六歳の青年教師として松本中学に赴任、松本女子師範学校の教諭も兼ねた。海外の体育理論を原書で学びながら採り入れ、生徒の体格検査をもとに指導方針を立てて実践するなど、その教育法は科学的であった。松中在職は三年にすぎないが、松本の地に近代的陸上競技の基をつくった名物教師として名高い。

たとえば野口は、唐木たち生徒にマラソンの二呼吸法を教えたという。〈走りながらスウ・スウと吸って、フウ・フウと吐く〉方法である。これを用いて唐木は友人たちと、夜、シャツ一枚になり松本郊外を走り廻った。小学生時代の唐木は長距離走が得意だったことは前述したが、それでも中学生となると全校マラソンで五〇位内に入れなかった。〈野口先生の影響もあつて私の中学の陸上は、けた外れに強かった〉のである（同）。長野県競技大会で松中生が当時の日本新記録をつくったと噂された。米澤という三段跳びの選手であった。

スポーツで唐木が積極的に取り組んだのは柔道である。彼は柔道部の一員となり、摂政宮（のちの昭和天皇）来校時には天覧の乱取りをおこなっている。それで近くに見えただけであらう。摂政の表情



三村令二郎（左）と順三
（松本高校時代）（唐木家蔵）

を見た唐木は、〈年頃は私たちとさほど違はないのに、ヒゲの剃跡が青黒かつたことだけを覚えてゐる〉と回想のなかで書く（同）。なお、摂政来校を前にして、校舎の壁に貼られあちこちにきたならしく残っていた各運動部や自治会の「檄」は、徹底的に掃除させられた。これに生徒たちは一、二週間も費やしたというから、かなりの作業であつた。

ミート会

唐木の中学の同級生には、青柳優^{ゆたか}（詩人・評論家）、松原重美（判事）、三村令二郎（通信官僚）、林重憲（京都大電気工学教授）、藤森速水^{はやみ}（大阪市立大医学部教授）、赤羽善治（九州電力社長）、岡田甫^{はじめ}（松本深志高校校長）、須山宗吾（陸軍大佐）などがいた。

このうち岡田は、二年間病気休学して、唐木が三年生のとき同じクラスのしかも隣の席になつた。彼について唐木は、回想のなかで、〈岡田君は老成してゐた。中学時代の二年上といふのは精神的には非常なへだたりがある。なんだか兄貴分にみえた〉と書いている（「岡田甫君に期待するもの」）。当時、漱石は生徒に広く読まれていたが、『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』のファンが多かつたなかで、岡田は『心』に注目し、登場する「先生」の性格を批評したという。彼は長じて東大助手時代には朝日新聞記者を兼ね、また後年、深志高校退職後は広島、出雲や天理などに居を移しながら『正法眼蔵』の研究に取り組み晩年を送つた。



須山宗吾（左）と順三
（大正13年8月、京都帝大1
年生で20歳時、上野駅にて）
（唐木家蔵）

他の人名中、須山宗吾は陸軍士官学校へ進んだ。唐木はのちの満洲奉天時代、彼と現地で小さな縁を持つている（一六九頁）。須山は戦争末期に山下奉文麾下の高級参謀を務め、フィリピンにて歿した。唐木の上級生には白井二尚（京都大文学部教授、上條憲太郎（長野県教育長、百瀬結（日本ビクター社長）、和合恒男（瑞穂精舎創設者）らが、一年下の下級生にのち一緒に筑摩書房を立ち上げる白井吉見と古田晃、さらに松本克平（新劇俳優）らがおり、二年下には八百清顯がいた。八百は東京府立二中から転校してきて唐木と同じ下宿に入る。唐木にとって忘れえぬ友であり、その死に至るまで深い交際をするが、八百のことはのちに詳しく述べる。

さらに、入学は唐木の一年先ながら七年在籍して退学した異色の人物に、高橋玄一郎（本名小岩井源二）がいた。高橋は詩を書きながら代用教員などをしたのち本郷村（現・松本市）の助役となるが、このとき治安維持法違反容疑で検挙され、終戦まで逼塞する。戦後は長野県詩人協会会長などを務め

た。筑摩書房の『展望』に詩が載ったこともあり、唐木たち松本中学OBの配慮であろう。高橋について唐木は、〈彼の詩はむづかしい。自分の思ひを言葉に盛りがたくて苦勞してゐる。非常な勉強家で、しかもはつきりした価値判断をもつてゐる。田舎の独学者にありがちな臭味はない。昔は信州にかういふタイプの人が相当にいた〉と書く

〔私の履歴書〕。そして、今では稀になった、とも書き添えている。その点でも唐木にとって印象深い人物であった。

ときに唐木の松中時代は、ちょうど、世にインフレが猛威をふるっていた。生活費はまたたくまに上がる。大正六年の入学当時、下宿代は月に六円五〇銭で一〇円余にてひと月暮らせた。しかしこの下宿代は一〇円、一五円と値上げが続き、四年生時には一八円ほどになる。米一升が五〇銭から一円へと高騰する時代であって、大正七年には米騒動も起きていた。労働争議も頻発する。

こうした時勢のなか、下宿代上昇と調子を合わせるかのように、食事のほうは貧困になっていくのだった。下宿が出す弁当の主菜は決まってキリイカかチクワで、たまりかねた唐木たち「眞島」止宿人は、ふた月に一度、「ミート会」を挙行することにしたのである。安い豚肉と葱、こんにゃくを鍋にどっさり入れてみんなで食べた。教師の西田實と唐木、八百などの下宿生、ときには外来の生徒も迎えて、「ミート会」は盛り上がった。会で飯を何杯食うか競争をして、唐木は一一、二杯の記録をつくったこともある。他愛もない話だが、食事の記憶、とりわけ貧しかったときの記憶は存外後年まで残っていくものだ。腹一杯になって満足した記憶もまた。

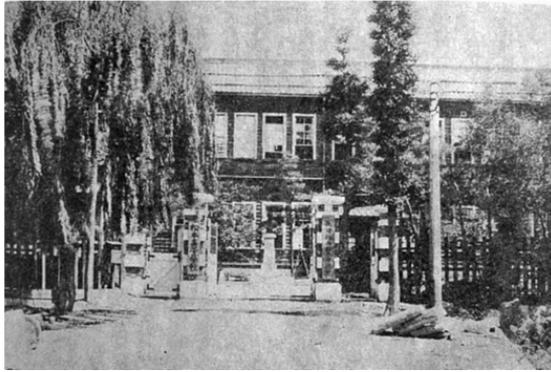
さて、松本中学の唐木は勉強家というわけではなかったが、成績は上位グループにおり、四年生のときついに首席を得た。当時の旧制中学は五年制だったが、四年修了で旧制高校を受験することができ、優秀な学生は四年で中学生を終えることになる。唐木順三がその一人であった。

2 旧制松本高等学校

大正期増設校の一つ

明治維新以来、近代的国制の導入が進められてきたが、教育制度の整備はその重要な柱となる。新時代が求める人材の供給こそ近代化の要^{かぎ}だったからだ。敗戦前の近代国家において、(旧制)高等学校は帝国大学の予科たる性格を帯びていた。すなわち高等学校入学こそ学制における最大の高壁であって、その門をくぐった青年は大学入学の特権を持ったエリートとして自他共に認められる。地域としても、高等学校が設置されているのは、教育の地として特別な存在だということを意味した。教育県を自任し矜持もある長野県にとって、高等学校の誘致は悲願だった。

明治三二年、当時六校あった高等学校(第一から第五と山口高校)をさらに二校増設させる動きが政府に生じると、長野県出身の有志は第七高等学校期成会を組織し、臨時県会は設立費の内金と敷地を献ずることを全会一致で可決している。知事が上京して文部省に請願し、設置運動は全県的に盛り上がった。しかし、いわゆる薩長土肥勢力から外れた長野県勢は政府中枢に要人を持たず、決定的な政治力に乏しかったために、結局、この設置運動は挫折の憂き目に遭った。第六高校は前文部大臣犬養毅の出身地岡山に、第七高校は現文部大臣(いずれも当時)樺山資紀の出身地鹿児島に新設が決まったのであった。この後、明治四三年にも、新設高校設置の議が起きたのに合わせて、長野県は猛烈な



松本中学校と松本高等学校の同居時代

(大正8年) (『九十年史』より)

右の門標に「松本中学校」、左の門標に「松本高等学校」とある。

運動を展開。内定までこぎ着けたが、ときの桂内閣が倒れたことにより無期延期、すなわち白紙とされてしまった。

大正時代に入ると、政府による高等学校増設の動きが再燃する。大正四年、大隈内閣は四校増設案を閣議決定し議会の承認も得たが、第一次世界大戦で実施延期となる。計画は持ち越され、大正六年の寺内正毅内閣にて再開された。このときも長野県は積極的に名乗りを上げている。悲願が達成されたのは、大正七年、寺内内閣が米騒動で倒れたあとに登場した原敬政友会政権のときである。文部大臣は中橋徳五郎だった。原内閣が前内閣の決定を引き継いで増設に積極的な姿勢をとったのは、第一次大戦を経て

日本が名実共に大国になった自信と、国内における大正デモクラシーの高揚が背景にあったのではない。
までもない。

増設校のなかで、松本高等学校をめぐる動きはきわめて早い。大正八年度の開校が決定されると、前七年一二月にはすでに地鎮祭が催されている。唐木順三の松本中学在学中、事態は一気に進んでい

ったのだ。開校は中学三年生のときである。当時は校舎がまだ出来上がらず、発足したばかりの松本高校は松本中学に「間借り」していた。右頁の写真は高校同居時代の松本中学で、門の左右に中学と高校の門標が並んでいる。

唐木は「私の履歴書」で、松本高校を進学先に選んだ事情について、ごくあっさりとした次のように書いている。

私はどういふ理由か、多分「くれなゐ燃ゆる丘の花」といふ寮歌のロマンチズムに誘はれたのかもしれないが、京都の三高へ憧れた。私の家は第一次戦後の経済恐慌のあふりをくつて多分に傾いてゐたので、どうしても四年から入らねばならぬと、私は思った。三高へ入る能力には自信がなかつた。友人達はみな松本高校へ行くことになつてゐたので私もさうした。

四年修了時に高校を受験できる制度は、唐木が中学在学中に出来た。優秀な学生のための飛び級のようなものだが、四年生時に首席になつた唐木は対象として文句のない存在であつた。また、家の経済事情を考えれば、五年かかる中学時代を四年で終えて少しでも学費を減らせるのは有りがたい。それならと唐木は、自身の希望を抑え、より確実に入学できるほうを選んだわけだ。いずれにせよ当時、高等学校は学制の高壁である。合格は至難であつた。気を引き締めて、彼は受験準備に取り掛かつた。



松本高校入学早々の順三
(大正10年) (唐木家蔵)

四年生の十二月から、私は猛烈に勉強した。ふだんあまり勉強する方ではなく、勉強といふ字面じぶらもその音も嫌ひであつたが、このときばかりは勉強また勉強であつた。生涯のうちこれほど勉強これつとめたことは外にない。(同)

小所帯の学校

そして大正一〇年(一九二二)四月、

唐木は晴れて松本高等学校文科甲類

へ入学する。「甲類」とは英語を第一外国語とするクラスだった。当時は文科理科に分かれ、それぞれ甲乙あつて一学年は四組となる。なお、乙はドイツ語が第一外国語のクラスである。学校によっては他にフランス語を第一外国語とする丙類を設けたところもあつたが、出来たばかりの高等学校ゆえそうもいかない。一クラスは四〇名で、始まつた頃の松本高校は小所帯だった。

大正一五年に松本高校に赴任してきた数学教師・蛭川幸茂ひるかわゆきしげは、(高等学校生の年齢は随分広い範囲に互つていた)と回想している(「落伍教師」)。みんなが小学校六年プラス中学校五年を終え、受験して入ってくるわけではない。入学試験選考が厳しく何年も浪人する者が多かつたうえに、小学校を出たあとしばらく高等科に籍を置く者が地方では珍しくなく、逆に中学校を四年で修了する者もいて、入学してくる年齢がバラバラだった。しかも落第が多々出る。ゆえに(同一学年で九年や十年の年齢



1年間の松本中學校分校舎時代を経て、大正9年7月に落成した松本高校新校舎玄関口

(『われらの青春ここにありき』より)

唐木はここに通った。松高は駅伝で有名となったが、写真は、大正12年5月開催の第1回駅伝競走のスタート風景でもある。唐木在学中のことだった。

差は珍しくなかった)のである。こうした連中が寮生活を共にし、勉強や運動で互いに切磋琢磨し、また一緒に羽目を外したりなどもやる。そこから特別の友情が生まれ、高等学校精神が成された。蜷川は往時を伝える。なお、学校では何年浪人したかは問題にされなかったが、中学を四年修了で入学した若者だけは、(「あいつは四修^{よんしゅう}だ」と呼ばれ特別視された(同)。秀才だという意味で、唐木順三はそうした視線にさらされた一人であった。

新設急造の松本高校は伝統ある松本中学とは正反対で、教員は寄せ集めで有能な人材とはいえない。学生にしても、頭脳こそみな優秀ながら、異色ある人物を生む気風はまだ醸成されていなかった。(「私も異色のない存在の一人であつた」と唐木は述懐している(「私の履歴書」)。

それでも教師のなかで、わずかに東京帝大出身の修身科担当教授・鈴澤壽が彼の印象に残った。青年唐木が(「犠牲と意識する犠牲は犠牲ではないのか」との幼稚な質問をしても、鈴澤は熱心に応じてくれたという(同)。唐木に遅れて松本高校



鈴木壽（『春寂寥』より）

イツ語などを教える一方で、生徒課長、弓道部長、講演部長、講演部長なども務めて生徒を教導した。講演部は弁論部のような存在で、鈴木はその部長職に一二年間座り弁論活動でも名を売った（『アルペン風——松本高校史』）。昭和一九年にシンガポール昭南医科大学へと転任。このときは（お釈迦様の生地に近い所へ行くのは本望）と言っていたという（荻上悦子『春寂寥』）。終戦後にマライ半島の捕虜収容所で病歿している。

高校時代、唐木の同級には福林正之（日本読書新聞主宰）、濱口勉太（ヤマサ醤油社長）、三村令二郎（前述）、石川秀雄（東京都庁）、大野有翼（オトマル・シユパン『歴史哲学』の翻訳者）、福田美亮（在米難民救済会副会長）らがあり、一年下に中島健蔵（フランス文学者）、金井融（国民教育新聞）らがあった。白井吉見は二年下である。古田晃も後輩だが、松本中学卒業後に一年間代用教員をしていた古田は、入学時点で三学年の差があるので在校期間は重ならない。

に進学した古田晃はのち東大文学部の倫理科を選ぶが、それは（高校での鈴木壽教授の影響によるであらう）と唐木は書いている（「古田晃のこと」）。この教授は道号「万年」を持つ禅の居士でもあった。東筑摩郡錦部村（現・松本市）に生まれ、金沢の四高から東大へ進み、松本高校へ赴任してきたのは大正一〇年、唐木入学の年である。松高在任は二二年半に及び、修身のほか英語やド



「野の人」齋藤信策
（「哲人何處にありや」
より）

魅力に乏しい高校生活のなかで、学業はうやむやのうちにすませてきた唐木だが、この時期特筆しないといけないのは、むしろ内面的成長のほうである。思想開眼の契機がやめて来たのだ。文人精神の目覚めである。後年の評論家唐木、編集者唐木への胎動は、（しきりに読みまた書いた）高校時代に始まったといつてよい（私の履歴書）。表層から深奥へ。学問の本源を求める動機に目覚めた青年は、思想と文学の豊饒な作品群に触れ、絶えず思索し、考えを文章にするのを常態化させることで、あたかも乾いた海綿が急速に水を引き入れるように多くを吸収していく。

唐木順三の本格的な読書遍歴が始まる。彼にとつて（全身をゆすぶられた最初の本）は高校入学早々に巡り会い繙いた『哲人何處にありや』であった（私の読書遍歴）。この本は齋藤信策の遺稿集にあたる。編者は姉崎正治と小山鼎浦。中学生の頃からよく出入りしていた松本の古本屋・大和屋で高校入学早々、偶然見つけ、唐木はその表題に惹かれて買い求めた。（私はもちろん著者が高山樗牛の実弟であることなどは知らなかつた。樗牛は生涯好きになれない男であつた。しかしその実弟にはほとほと感じ入つた）と「私の履歴書」で書いている。

樗牛は高山家へ養子に行き、齋藤信策自ら「亡兄高山樗牛」
（「哲人何處にありや」収録）で記すように、（予は十歳頃までは、
樗牛が兄であることも知らず、又顔を見たことも無かつた。其後
も始終離れて居つたので、兄弟ではありながら極めて縁遠い風で
あつた）という関係だつた。自分と兄が（実は甚だ似ない）と指

摘してもいる。兄弟はともに詩人肌で情感豊かな人間であったが、根柢に資性の違いがあった。唐木が一方を（生涯好きになれない）ものの、一方には（ほとほと感じ入った）というのは、文章の背後にある両者の「違い」を鋭敏に把握していたからであろう。

齋藤信策（筆名・野の人）は明治一一年四月、山形鶴岡に生まれる。明治三〇年九月、仙台の第二高等学校に入り、二高尚志会の懸賞に文を寄せて選二等となるなど、在学中から文才をあらわした。東京帝大文学部へ進み、卒業前後から『帝國文學』『時代思潮』などに筆を執る。ギリシア哲学をはじめ古今の思想・文学を組上に、文芸評論から文明論、人間論まで横断的に論じ時評類にも筆が及んだ。自由奔放でスケールの大きな表現者だといえよう。ツルゲーネフ「ルケルヤ」、ドストエフスキ「クリスマス之夜」等の翻訳をこなし、新体詩や短歌にも及ぶ多面的な文筆活動をおこなうが、病身を抱え生涯独身のうちに三一歳で生涯は閉じられる。

姉崎正治は『哲人何處にありや』の序言において、その人物について、〈外面は何処までも木訥あつぱ或は魯鈍なやうで、而かもその裡うちに一条の靈火を蓄へて居た。口は黙し、顔面は静かで、不得要領とも見えるが、この靈火一たび動くや、眼には炯々の光あり、筆端たちまちに縦横の論議を生じて尽くる所を知らざるもの如く〉と記している。彼は〈感激性の触覚〉が鋭く、絶えずそれを四方に張った。姉崎曰く、〈學者でなく、批評家でなく、半詩人半宗教家たる熱情男子〉だったのだ。まさに「野の人」である。

こうした人物に青年唐木は惹かれた。「哲人何處にありや」は齋藤信策の生前発表作を集成し、未

発表の文章も併せた九〇〇頁を超える「全集」的な一冊である。社会を広角の歴史的視点で捉え、人間の本質と文明の行く末について問い続けた純真な魂の全容だった。この本について、唐木は「私の読書遍歴」で、〈雑多な内容だが、私のうたれたのは、それを貫いてゐる抒情性、詩人の純粋性であった〉と述べ、「私の履歴書」では自身の〈思想開眼〉の書だといっている。

『哲人何處にありや』収録作品を一つ採りあげ、その一部を引いてみよう。

ヘーゲルは自己を以て、一切の哲学を完成した第一の人と自称したが、彼れの後にはシヨペンハウエルも出た、ニーチェも現はれた。日は如何に照らせばとて、夜の間は少しも短くならぬ。理性は如何に明かになつても、人間の心は太陽に照らさるる地球の如くに、必ず半面の何処かは暗くなつて居る。この夜があればこそ、暗闇があればこそ、月見草も咲くのである。幽霊も出るのである。ロマンチックも生れるのである。つまり理性と現実の中にのみ生きて居る人は、丁度夜になると眠つて働くことを知らぬ者の様であらう。……何処かで馬が嘶いたので、ふつと自分の心に立ち帰ると、日は最早頭の上である。もう正午であるのかと思ふと、自分は俄かに現実の人になつた。現実の人になると真昼の日の光は、俄かに堪へ難いほど暑く感ぜらるる。さても理性の光は苦しいものである。

〔故郷の夢の記〕、初出は『開拓者』明治四〇年八月号

才気ある切れ味のいい文章で、理性と〈ロマンチック〉の葛藤を描いて若者の精神を射とめる魅力に

充ちている。青年唐木はこの夭折した在野的文章人の書くものに心を奪われた。それはまた、「野の人」の精神性が、青年唐木自身の資性と相通じるところがあったからだともいえる。へしばらくは野の人の影につきまとはれ、その言葉を舌の上で転がしてゐた」と唐木は述懐している（「私の読書遍歴」）。

齋藤の文は、人間や哲学を説くときも、實際の埃をかぶった厳密な書きようではなく、むしろそうしたアプローチを軽蔑するかのごとくして、自在なイメージの飛翔に精神を託し、思うままに筆を運ばせる。勢い、哲学や思想を説くときも、文章には文学者的修辭が溢れ流れる。それは後年の唐木の文体を幾分か思わせる。（「思想開眼」の書とまでいわしめたのは資質の深いところでの交感作用があったからで、とりわけ、心の柔らかな青春時代におこなわれた交感作用は、書き手として系譜的な類似性を生じさせる場合がありうる。その意味で、「野の人」の精神と文章が唐木順三へ継承された面は認めてよいだろう。

3 煩悶青年

雑誌「深志」の刊行

齋藤信策の文業との出会いは、唐木にとって記念すべき一事の導き手にもなった。書いたものの活字化である。

野の人は野の人ではあつたが、その文章は絢爛たるものがあり、実学や社会有用学に対してまさに純粹芸術の讚美者であつた。北村透谷のロマンチズムからこの人へ線をひけるかもしれぬ。私はこの人の影響をうけて『純粹感激の讚美』といふ一文を草し、中学時代の仲間と一緒にたつた一号だけだした『深志』といふグループ誌に載せた。これが私の最初に活字になつた文章である。高校一年であつた。

〔私の履歴書〕

『深志』は大正二二年七月（高校三年時）の刊行である。（最初に活字になつた）とあるが、この年の一月から七月に『美穂』への連続寄稿があるから（後述）、唐木の記憶違い、あるいは脱稿から公表までの時間差が前後感覚を違へたのである。『深志』掲載作「純粹感激の讚美 序説」は表題が示す通り、〈人生これ感激を以て最高善とすべきである〉ことを論じたもので、ソクラテス、プラトン、エピクロスといったギリシア哲学者、孔子、韓非子など諸子百家の面々から、ダンテ、ゲーテ、シヨーペンハウエル、ニーチェに至る思想家の論点を次々と踏破しつつ、スピード感をもって自説を展開していく。筆法は確かに「野の人」文の影響が濃い（齋藤書自体からの引用もある）。論中、比較的多く筆が及んでいるのはニーチェで、書き出しもニーチェの警句（世に真理なるものなし、只許認せらるるのみ）である。（ツアラツストラ）を高く評価し、大枠でいえばニーチェ論といつてもよいもので、当時の唐木の関心ぐあいが見られる。結論付近の一文を引く。

神との交り、真理との瞬間的接觸、生活肯定の喜悅、生の歎喜これ純粹感激の一結果に過ぎない。すべての現代の行詰りは只この純粹感激のみによつて解し得らるのみ。

そして、この活字化のエピソードは、唐木が出版活動を成した最初の体験としても特筆すべきであろう。後年の筑摩書房創業、雑誌『展望』の編集といった出版人キャリアを考えると、高校三年時の小さな試みこそ遙かな初発とみることが出来る。『深志』掲載の別文章で青年唐木は、雑誌刊行を果たす喜びをこう書いている。

やつと生れた、俺はかぎりなく嬉しい。やつぱり小さいながらも俺達の手で造り出したからだ。それが嬉しいのだ、原稿も可成集つた、全く予想外だつた、唐澤元二等卒や藤森其の他二三と相談した時の予想より全く多く集つた、嬉しい。

ことに俺達は先河合印刷所の厚意に対して感謝せなければならぬ、実はさる印刷所と前に交渉して百頁百部で四十円で造る事になつてゐたのだつたが、愈よとなると其の三倍位かかると平氣で言ふんだ、大口論をしたが致方ないので諸所の印刷所を訪ねてみたが皆其位かかるとの事故、実は全く辟易して中絶の姿となつてゐたのだつた。所へ西田先生から金一封也を送つて下さるし、丁度河合印刷所で奉仕的に後記の如く引受けて下さる事になつたので、ここにこの小さな雑誌が生れ出たのである。(並びに穂苅優君の父君よりの御援助をあはせて感謝いたします)

〔「深志」校正後に〕

雑誌を出すまでの紆余曲折と努力、すなわち資金の問題、仲間の意志疎通、原稿の集約、印刷所との交渉などを経てようやく刊行に漕ぎ着けたわけで、厳しい山行を続けてついに見晴らしのよい山頂に達したかのような、素直な歓喜が青年唐木を包んでいる。このときの唐木は、まさか後年、出版事業に挺身してさまざまな骨折をくり返し、喜びもまた得る未来の我が身のことは想像だにしていなかったらう。

なお、「『深志』校正後に」は、末尾がこうした文で閉じている。

嗚呼俺は駄目だ、理屈は一人前だ然しおれには何等の実行性がともなはないのだ、諸君の文を読んで全く一人一人が古い友達によせる温い情を思ひうかべてふがひなく朽ち行く自身が呪はしい。伸びて行く皆が、只形式に死骸にとちこめられ、目に見えない鉄棒の牢獄に呻いてゐるのがこのおれなのだ、然し破るぞ、そして広い天地に凡てに、融合するぞ、この元氣は瞬間的に強烈にわいてくるのだ、それがおれの取り所だ、〔中略〕凡ての死骸と、虚偽とを破つて力強い挑戦を社会に為してやらうではないか、超然は余りに利己的だ、鬭争、鬭争真理と建設との為めの鬭争、おお兄弟よ、手と手を取りあつてこの酷き社会と戦はうではないか、兄弟よたのむぞ彼岸よりの挑戦……何とおもしろい事だらう。



松本高校2年生時の順三
(唐木家蔵)

ここに見出せるのは、社会の矛盾を感じとり、旧弊を打ち壊そうとする革新派の相貌だといえる。

「煩悶青年」という言葉が当時流行ったが、「『深志』校正後に」の唐木には明らかにその側面が見られる。若さというだけでは済まない、何か烈日たるものが高校三年の唐木のなかに燃えさかっている様子さえある。第五章で述べるように、二〇歳代の唐木順三はマルクス主義に深く傾斜していく。

「赤い」唐木という一季が彼には訪れるのである。当時の「煩悶青年」は成長に合わせていくつかの道を歩むのだが、その正路こそ社会変革への志向者であり、マルクス主義の洗礼を受ける行路であった。こうした変革者の萌芽が「『深志』校正後に」末尾には見られる。のち「煩悶青年」の正しい道、を無骨な足取りで歩むことになる唐木の姿がここに予見されよう。

アナキズム
と老荘思想

活字化については、ほかに高校時代、「美穂」への寄稿がある。豊島という医者の子が伊那高遠で出していた窪田空穂系の短歌誌だった。「美穂」と縁を持ったきつ

われわれの知る唐木順三とは、近代にあらわれた現象を鋭く批判するモラリストである。また正字正仮名を用いる進歩への懐疑者である。そして既述したように、主著の一つ『現代史への試み』は、明治日本には残っていた旧古からの健全な「型」を、大正の教養主義（近代化積極主義というべきか）が壊していったことを告発する一種の反近代主義の書であった。しかし若き唐木はどうか。

けは思い出せない」と唐木はいうが、へとにかくよい紙をつかつた贅沢な雑誌」だったことは覚えてい
る（『私の履歴書』）。唐木はそこに大正一二年一月から七月まで評論を発表しており、一月「萬葉二歌
聖に就て」は人麿と赤人を対比的に論じ、三月「歌詠む心」は芸術としての歌が「物足りない心」の
産物であることを指摘する。五月から七月までは「古歌人の研究」が三回連載された。第一回はキプ
リングの詩を掲げてむしろ東洋日本の固有の趣きへと論じていく。第二回は良寛、第三回は啄木を組
上に載せている。どれも短文である。

このうち良寛論は、歌と人間性への親しみを込めてこの即興詩人を綴っている。良寛は唐木にとつ
て終生「好きな作者」であり続けた。満一九歳のときの『美穂』収録文で好意をもって採りあげ、満
五八歳のとき書いた「私の履歴書」でも、〈良寛は一生好きである。いよいよ好きである。良寛は典
型的な日本人だと思つたこともある〉と記している。なお、唐木は『美穂』に短歌も発表した。（私
の歌はたうとうものにならなかつた。説明的な歌になつてしまつてゐて、そこから抜けだせなかつ
た）と自ら評している（同）。

高校時代の読書傾向と思想的側面をさらに見ていくと、青年唐木を捉えた書として、『哲人何處に
ありや』に続くものとして和辻哲郎の『ニーチェ研究』がある。唐木は和辻を通じてニーチェに入り、
金子筑水ちくすい訳『悲劇の出生』に至つた。この経緯によって、後代まで思考に残る刻印的影響を受けたの
は、〈十字架の人に対するディオニソス〉からいまでも自由ではないと「私の読書遍歴」満四八歳
時発表に書いていることから判る。なお、『ニーチェ研究』については、高校生時に出会つてか

ら三〇年後、筑摩書房でこの本の改版を出す計画に唐木は関わるが、その内容は第六章にて述べる(二二六頁)。

青年唐木は、さらにニーチェから遡ってシヨールペンハウエルへ進んだ。マックス・シュティルナー『唯一者とその所有』(和書名『自我経』、辻潤訳)にも心を捉えられ、この書を通してアナキズムへと傾斜していく。

クロポトキンの『相互扶助論』は愉快であった。翻訳はたしか大杉栄であつたらうか。ダーウィンの進化論、生存競争と適者生存といふ自由主義、資本主義の生物学的原則が徹底的、実証的に否定されてゐるのが痛快であつた。この一冊で世の俗論、立身出世主義を反駁するに十分であつた。私は次第にブルードンとかゴッドウィンといふ名を覚え、後者を原書によつて読まうとして大分探したが手に入らなかつた。

(「私の履歴書」)

高校生の唐木が興味を示した思想として、アナキズムのほかに老荘思想が挙げられる。諸子百家を教科書に使う漢文の授業があり、教師は岩垂といい(頭の禿げた好々爺)だつた(記憶の中の先生)。そのとき接した中国古代の思想家のうち、唐木は韓非子にも関心を抱いたが、なかでも荘子にひどく惹かれた。



当時の松本高校生が出入りした本屋
（『われらの青春ここにありき』より）

『逍遙遊』と『齊物論』であつたと思ふが、その徹底した相対主義が面白く、また周、胡蝶を夢む、のころなど暗誦した。莊子をさかのぼつて老子を読んだ。森大狂訳注で読み、これも実に面白かつた。老荘は私の生涯の糧となつた。

（私の履歴書）

哲学宗教関係の本では西田幾多郎きたろうの名著『善の研究』を手に取つた。内容は理解しかねたと唐木は回想しており、難物だつたようだ。ただし『善の研究』が説く「純粹経験」という提言は、（理論としてではなく、私流の理解と経験では解りうるものであつた）と述べている。西田哲学ではむしろ小品集『思索と体験』を身近なものに感じた。（殊にその一章「愚禿親鸞」にははかりがたい暗示をうけた）と唐木は書いており、この影響で『真宗聖典』を古本屋から求めたくらいだつた（同）。後年、唐木は西田幾多郎と深い縁を持つが、その始まりはこうした接点であつた。

一方、小説はまずドストエフスキーを読みふけた。『貧しき人々』『虐げられし人々』『罪と罰』『死の家の記録』などである。『カラマーゾフの兄弟』

までにはいかなかったという。ロシア文学は当時、学生たちの間で流行っており、唐木はドストエフスキー作品について友人としきりに論じ合った。また、アンドレーエフやアルツイバーシエフにも共鳴した。とはいえ、ツルゲーネフは少し読んだが好みとはならず、トルストイは読んだ記憶がないようだ（同）。

日本の作家では、創刊したばかりの『文藝春秋』で芥川龍之介の作品を読み、そのペシミステイックかつ軽妙なアフォリズムに心をそそられている（ただし小説自体は好きではなかったという）。また、有島武郎に関心を持ち、その個人雑誌『泉』を購読していた。『惜しみなく愛は奪ふ』には共感を得たが、在学中に有島情死事件が起きて、青年唐木は不快だったと反応している。

酒と芸者 高校生になった唐木順三はまさに疾シユトルム・ウント・ドラシク風怒濤の季節を迎えていた。自立心が旺盛

となり、つまらない講義を軽蔑して出なかった。自ら共鳴できる思想を求め、本を読みあさった。友人たちと議論し、そして自ら考え、考えを筆にした。一方で彼は煩悶青年となった。社会の矛盾と己の存在に対しては、終わりなき自問自答をくり返した。それがさらなる読書へと彼を誘ったのである。

そして、ロシア革命により実践面で重大な契機が訪れた左派系思想の影響を受ける。左派への共感
は当時、若者共通の現象だったが、唐木の場合はアナキズムへの傾斜というのが興味深い。党派的・
管理的なおいを嫌い、人間が自在にふるまう境地を大事にする文人性が唐木の根柢にどっしり腰を
おろしていたのは理由の一つであろう。

疾風怒濤時代の若者として、高校生の唐木は酒と出会い、次第に深入りしだしてもいた。酒を覚えたのは高校二年の終わり頃だったという。入門は支那蕎麦屋での安い葡萄酒で、遠からず日本酒に転じている。それからしきりに飲むようになった。唐木の酒豪ぶりは有名で、後年、さまざまエピソードがあつてそれは追々紹介していくが、すでに高校生のとき、大人びた飲み方をしていたことが判っている。

彼は芸者をあげて飲むようになった。市中を流れる女鳥羽川に面した蕎麦屋が根城で、そこに芸者呼んだ。格別の遊び人風ではなかったが、硬派というわけでもない。馴染んだ芸者のなかに小照という小柄な女性がおり、彼女は唐木の飲み仲間に小さい乳房をさわらせながら、「白鳥はかなしからずや」と若山牧水の歌をうたつたという。小照は別の松高生をめぐつて先輩芸者と鞆たもと当あてて騒さわぎを起こしたうえ、さらにもうひとりの松高生と懇ろになつて、その男が卒業後東京帝大へ進むと後を追つて東京神楽坂に住み替えた。と、この話は、唐木と同年の入江七平（理乙）が『われらの青春ここにありき』へ寄稿した一文に拠る。

当時、松高生の間で芸者あそびは風潮としてあり、幾組かのカップルが生まれ、事件や愁嘆場も珍しくなかったようだ。学生たちは芸者や妓をドイツ語でジンゲルと呼んだ。学校当局はときに処分を下すもの、おおむねは見て見ぬふりをしていた。警察沙汰にでもならない限り、手の打ちようがなかったのだ。

さて唐木だが、嗜たしなみの酒に留まらず彼は深酒をよくした。一度は泥酔してよろけ、三味線の上に



松本高校時代の白井吉見（左端）
（高校の玄関にて）〔春寂寥〕より

尻餅をついて、ために棹が折れてしまった。前後不覚で下宿に帰ったら、たいへんな額を請求されていたことを翌日知る。次の日、一緒に遊んだ友人が、「これだけかかった」と指を二本立てたという。「なあんだ、二円か」と思ったら、二〇円だった。一か月の下宿代に相当する額である。前夜は友人たちが分担して払っておいてくれたという。唐木はさぞかし頭を抱えたであろう。

関東大震災

高校時代でもう一つ、特筆すべきは関東大震災である。巨大地震発生は唐木高校三年時（大正二二年）の九月一日だった。関東から遠く離れた松本でも揺れは大きい。このとき唐木は瀧澤という弁護士の家の下宿していた。〈頑丈なつくりの家であつたが、大ゆれにゆれた〉という〔私の履歴書〕。

白井吉見は当時松本高校一年生であった。松本中学のときは唐木の一年下だったが、唐木は四修で高校へ入学したので二学年の差がついていた。震災の日のことを白井は次のように書いている。

ぐらぐらっと来たとき、僕は松本から一〇キロあまり離れた農村の生家の座敷に寝ころがって

た。家族はみんな庭へとび出したらしく、脅えた声で母が僕を呼んでいたが、起き上ろうともしなかった。壁の額がころげ落ちたらとび出そうと思っていたのだが、それなりで終わった。わが家にとつて、大震災もその程度でしかなかったが、クラスのうちには、家を焼かれ、肉親を失ったものは、少なくともなかった。二学期がはじまるので、遠方の者は、おおかた、寄宿舎へ帰って来ているので、本人でいのちをなくした者はなかった。

〔関東大震災のころ〕、『われらの青春ここにありき』収録

記されるように、松本当地の状況はひどいものではなかった。とはいえ震源近い東京、横浜の状態は悲惨であり、全滅したとの噂が松本まで伝わってくる。町の人々は恐れおののいた。汽車も電信も不通となっている。徒歩やさまざまな交通機関を使って逃れてきた被災者が松本駅に辿り着くと、町の人々は彼らを掴まえて様子を聞いた。みんな不安であった。

その頃、唐木順三の姉の一人（三女とよ）が嫁いで品川に暮らしていた。一家の安否が気遣われた。情報が得られないなか、順三は（若干の食糧をリュックにつめこんで何日目に上京）する（私の履歴書）。姉の一家は無事だったが、東京は大部分が焼けていた。焼け跡を見た唐木は、（この関東大震災は日本の生活史にとつて一大事件であった。たのみにしてゐた大地さへあてにならないといふこと、それを身をもつて何千万といふ人間が体験したといふことは一大事件である）と記している（同）。



松本高校卒業の頃の順三
(大正13年) (唐木家蔵)

大震災の衝撃が醒めず、首都圏の復興もままならなかった時期、唐木は高校卒業を前にしていた。進む先は京都帝国大学の文学部とだけは決めた。文科クラスの大多数は法科か経済への進学を志望している。これらの学部には入学試験があつたが、文学部にはなかった。受験勉強の殺伐とした空気のなか、入試のない唐木は、好みの本を乱読し、原稿用紙に向かってしきりと書いた。(私は孤独であつた。一応の友だちはあつたが精神は孤立してゐた)と、高校を終える頃の己について唐木は回想している。書いたものを出版して貰おうと聚英閣という版元に企画を持ち込んだこともあつた。はじめ好意的な返事を受け、唐木はこれまでに書いた原稿の整理をはじめたが、やがて断りの連絡が来た。(もちろん憤慨もし、失望もしたが、おかげで恥をまぬがれたといふものである)と述懐するのは、若書きの作が世に出てしまつたら、赤面汗顔となつたはずだとの認識からだ(同)。

文学部のなかで哲学科へ進むことが次第に固まつてきた。ただし哲学のうち何を専攻するのかはまだ明瞭ではない。ともかくも唐木順三は、進学を機に精神をさらに成長させていかんとしていた。思ひ出多き、また悩みも多かつた松本時代を終えて、彼は京都へと発つのである。

第三章 師・西田幾多郎——京都時代

1 憂鬱な上洛大学人

ドイツ語での訓示

大正一三年（一九二四）四月、唐木順三は京都帝国大学文学部哲学科へ入学する。前記の通り（四五頁）彼にはかつて三高への憧れがあり、京都で学ぶことは前向きだったはずだ。しかしこの新人生は意気あがらない学生である。最高学府の地に立つ気負いはないが、それ以上に、彼はどこか白々としたものに包まれていた。松本時代にあった青春の明朗が失われていた。第一、哲学科を選んだことに積極的な理由がない。（法科も経済も、英文も国文も嫌ひだったから）、消去法で少なくとも（嫌ひ）ではなかった学問を選んだだけである（「私にとって大
學とは」）。

私は何を目的に京都へゆき哲学科に入つたのか。哲学がどういふものであるかは解つてもゐなかつた。まして哲学を渡世の具にしうなどとはつゆ思はなかつた。〔私の履歴書〕

大学での専門といえば、単なる学問研究への興味だけに留まらないはずだ。将来にわたる生業、具体的には就職についてのイメージもある程度抱いての選択になる。唐木にはそういった志向自体が稀薄だった。もちろん哲学という浮世離れた学問を選ぶ者は、生業意識に囚われない青年であるほうがむしろ通常だ。文系学生でそちらを考えるのなら自然と法科か経済を選ぶに決まっている。

唐木の師となる西田幾多郎は息子・外彦が京大理学部^{せいとひこ}の物理化学から哲学に転籍しようとしていたとき、哲学は寸時面白そうに思えようが、本気でやれば〈茫漠として捉へ難く誰も迷はぬものはない〉し、自分にしても〈今日まで幾度哲学をやめ様と思つたか知れぬ〉等、諄々と手紙で説き（大正一一年八月二五日付書簡）、弟子の務台理作^{むたいりさく}（かつて外彦の家庭教師をした）にも止めるよう説得してくれと頼んでいる。生業を築く点で待ち受ける困難も当然前提にあつた。務台宛書簡には、外彦説得の要点として〈極めて質素な生活にて生涯を通す決心を要する〉、あるいは〈衣食の資に窮することもなきを保せず〉という文言も見える（同年九月二九日付）。父親として当然の考えであつたらう（息子は結局、説得を受け入れた）。

西田は自身の経験から「哲学者」の厳しい現実を痛いほど判つていた。西田門下の下村寅太郎は修業時代^{しゅうぎょうじだい}が長くてかなわんと嘆いていたし、ほかに、西田の有力弟子で大学を出て職なしが長かつ

た者は大勢いた（竹田篤司『物語「京都学派」』。哲学というのは当時（も今も）、大方にとつては、生活を整えるうえで選んではいけない道のはずだった。

才能の問題もある。当の西田自身、師の北條時敬ときゆきから、哲学は論理的能力のみならず詩人的想像力が必要であつて、君にその能力があるか否かは判らない、と忠告されている。それでも選ぶというのは、決意の堅さか、あるいは逆に、内面の空虚感から当て処あてないままその道を選んでしまふのか、どちらかであろう。若き西田幾多郎は前者の一人であり、若き唐木順三は後者の一人であつた。

そしてまた、唐木が京都へ向かつたというのは、関東大震災で焼け野原になつた東京を避けたというのもある。しかし、これにしても消極的な一理由に過ぎない。

かくなる精神状態では、上洛大学人としての新鮮な感情はもちろん、学問へと向かう覚悟や気構えなど生まれようがなかつた。唐木順三は消沈した若き学徒だつた。漂うような所在なさで、彼は京都の町で暮らした。確乎としたものをどこにも見出せない。むしろ（生きてゐることが憂鬱であつた）（私にとつて大學とは）。

それでも大学の入学式には驚いた。文学部の式はバラック建ての建物で挙行され、荒木寅三郎京大総長は訓示の一部をドイツ語で語つたという。フンボルト曰く、云々と。唐木は（どこへらい所へ来てしまつたと思つた）（同）。入学式では総長訓示のあと学生の宣誓が続き、そのうち、新入生全員が一人一人総長の前に立つ。大きな帳面に筆で署名するためであつた。戦後の新制大学と比して格式はいぶ高かつたのだ。

吉田山翠松園

「意気上がらない新人帝大生は京都へ行って早々、体調を崩している。水が変わったせいもあるのか、唐木はたびたび下痢をした。その都度、大学の便所へ飛び込むことになる。〈便所の中には、戯画、秘画が所せまきまでに書きこまれ、ラヴ・イズ・ベストなどいふ当時流行の厨川白村の名文句が誌されてゐた〉（私にとつて大學とは）」。新人の唐木はこれと頻繁な邂逅をすることになる。

京都というと寺社名園や美術品だが、京大生時代の唐木はふらり歩けば行き当たるこれらに興味を寄せなかつた。それどころか、学生時代の一事と思われるが、龍安寺の庭を最初に見たとき、癩にさわつたくらいだったと述懐している。〈こちらががんばつて、肩をいからしてゐなければ、馬鹿にされ、ケイベツされそうで、いやな抵抗を感じた〉のだ（「京の思ひ出」）。人間を計るかのごとき尊大な印象を唐木はそこから受けていた。京文化にするものぞ、との信州人の矜持といえはいいのか。二〇歳代に入った憂鬱青年唐木に、反抗の精神だけは赫々と燃えさかっていたのである。

とはいえ、女性の美しさだけには目を見張つた。

初めて京都へいつて、京の女はだれもかれも美しいなと思つた。信州で生れ、信州で育ち、だんご鼻の女ばかりみてゐた私には、京の女はみな美しくみえた。

（同）

女性への関心だけは憂鬱とは別だった。ここには健康な若い男児がいる。鬱状の幔幕の背後で生の

躍動が活発に熱を発していたのだ。唐木は高校時代、すでに芸者遊びを経験している（六〇頁）。うぶであるはずはないが、むしろそうした経験の延長上に京女への吸い込まれるような憧れが生じていたようだ。

女性への関心は何より、下宿を決める際の導因となった。

経済学部に入った友人と一緒に下宿を探したのだが、吉田山に翠松園といふのがあった。できた女主人がばかに美しくて愛嬌があつたので、二人ですぐ一決した。幾棟かある大きな下宿だつた。

（同）

ここでいう〈友人〉とは前章で名前だけ登場した石川秀雄である。唐木は石川と上洛し、一緒に汽車で京都に降りた。このときは和服に袴で、烏打帽をかぶっていた。その姿で京都駅に立ったのだ。まずは貸間探しである。

二人が決した翠松園は神楽ヶ岡の頭にあつた。ただし部屋を借りただけで、食事は随所の食堂へ行く。三度三度そうしており、これは当時の下宿人の通常だつた。賄いがないので、くだんの女主人と顔を合わせる機会もほとんどない。月に一度、部屋代を渡すときが唯一の機縁だつた。唐木は心底がっかりした。あてが外れたこの経験は京女への評価を変えるきっかけになつたとさえいうが、翠松園は環境がよかつたので、彼は一年ほど下宿を続けたのである。

錢湯は神楽ヶ岡を下った窪地にあるのを利用した。行き帰りの道筋に「峠の茶屋」なる小さな喫茶店を見つけた唐木は、風呂の帰りにふらり立ち寄ることもあった。未亡人らしき女性が一人で切り盛りしていた。〈これがまた美しいひとであつた。手がまた美しかつた。顔と手とをちらりちらりとみながらミルクを飲むばかりで、ろくに口もきけない時代であつた〉と彼は回顧している(同)。こちらも初々しき大学一年生時の挿話であらう。

京都時代の入口にあつて、唐木が学問への意志をなくし、漠たる不安と人生の無意味観を宿した青年だったことは間違いない。当時、若者の有りように懐疑青年とか煩悶青年といった言葉が流行っており、唐木順三も時代の申し子だった。そうではあれ、入学の頃の青年唐木に精神の逸脱のようなものを感じられない。心性に病的なところは見出せない。また彼の身体は多少の異変こそあつても基本は〈至極健康〉であつた。周囲に対する違和感は、自ら述べているように、〈田舎出身の気のきかない青年〉ゆえに生じていた面は強かつたようだ(「私の履歴書」)。

〈気のきかない青年〉に転機が訪れるのはまもなくである。

デモニーシユな人

京都帝大の哲学科にはいくつかの専攻があり、それぞれ正教授が一人ずついた。唐木はアナキズム系統の思想に惹かれていたこともあり、当初は社会学をやってみようかと思つていた。高校時代に高田保馬の厚い『社会学原理』を繙いてもいる。ただしこの志向も曖昧なものに過ぎなかつた。憂鬱の沼に沈んでいた青年は、実のところやりたいことがないままだった。

その唐木に専攻を決する機会が訪れる。一人の哲学者との出会いであつた。「私の履歴書」にはこ



西田幾多郎（昭和3年）
（上田閑照『西田幾多郎とは誰か』より）

の経緯を記す箇所があり、作中とりわけ印象的な場面の一つとなっている。

私はただ遠くから拝顔したにすぎない。講義が解つたとも思はない。きもの姿で背を少しまげ、手をうしろにくんで教壇を横にいつたりきたりする。ときどき勢ひよく黒板に大きな円を書く。話してゐて急に黙つてしまふこともある。私はほどよい所に席をとつてぼんやりと、しかも緊張して先生の姿をみてゐる。ノートを取らうとしてもなかなか取れない。私にはそれで十分であつた。ここに人がゐる、ここにほんたうの人がゐると実感をもつてひしひしと感じた。先生の姿から、なにかが発射してくる思ひであつた。かういふ人が眼前にゐて、しかも私たちに話しかけてくれるといふことだけで十分であつた。

哲学・哲学史第一講座（「純哲」と称された）の主任教授・西田幾多郎である。唐木は西田の講義を聞き、即座に社会学を捨てて哲学を選ぶことにする。かの哲学者に見えたことは、（私の生涯の決定的要素になつた）のだ（同）。唐木は西田について行こうと思つた。このとき彼の人生行路が決した。教師、評論家、編集者としての独自の行路が

拓かれたといつても過言ではない。

引用を続けよう。

先生はゲエテの使つてゐる意味でデモーニッシュな人であつた。胸の底に光のとどかない深く黒い深淵があつて、その闇に光をあてようとして骨を削つてゐるやうな人であつた。世俗の論理や倫理をこの闇はよせつけない。ここを照すには宇宙の力が要る。ここを解明する作業が即ち形而上学であり同時に宇宙の、コスモスの解明であつた。先生にとつては学問は単に頭脳の働きではなかつた。底にあつて動くものの論理化が学問といふものであつたと私は思ふ。

(同)

唐木順三が高校時代に西田の著書を繕っていたことはすでに触れた。主著『善の研究』は理解しかねたと述懐している。『思索と体験』も読み、こちらは身近だつたと回想するが、この本はもとより小品集である。然すれば、書物からの決定的感銘や理解が先ずあつて西田に惹かれたわけではない。だとしたら講義に納得したのか。そうでもないのだ。講義内容は解らなかつた、西田哲学は理解できなかつたと唐木は幾度となく書いている。

師事するきっかけを作つたもの、それはひと、そのものへの関心だつた。へただその風貌に接し、ここに人あり、と心の底で思つた。そして、それが孤独の中で、生きる勇気を与えてくれたのである(「私にとって大學とは」)。

この出来事は唐木伝中とびきり重要なドキュメントだといえる。学説を把握し、主張を諒解してその学問へ進むというのではない。解つたとか腑に落ちたとか、そんな賢^{さか}しらは大切でない」と唐木は説いているかのようだ。学問内容を理解できなくともよい。大事なのは「ここにほんたうの人がゐる」という実感のほうだ。「ほんたう」に出会う事態こそ、知に生きる者にとつて真の宝ではないか。唐木はその幸福な瞬間に立つことができた。「西田幾多郎先生を見たことは、私の生涯の仕合せである」と書き、後年まで当時の感激を忘れていない（同）。

そしてまた、西田の人格的魅力——唐木を惹きつけたもの——は、「デモーニッシュ」にその秘密があるという見方も、のちの唐木の人間観を考えると、重要な述懐となる。西田には「深淵」があった。それを抱きつつも、自身の「深淵」に光をあてようとして彫骨努力をくり返してきた。その果てにある種の成熟に向かった。その様相は何より西田のひとにあらわれていた。唐木はそれを感得し、自身の歩む道を定めたのである。

西田幾多郎との出会いに関するこうした事情は何も唐木順三ばかりではない。たとえば、西田が形成した知の山脈「京都学派」の重要な峰となる西谷啓治（大正一〇年入学）は、「哲学的な思想の場合には、その形成の本源力である哲学者の「人」は、その思想自身の内面に、その「精神」として或いは「生命」として、籠つてゐるとも言へる」と書き、西田について、「先生の哲学思想に出合ふといふ以前に、先生といふ「人」に出合つて、己の道が開かれたと述懐している（西田幾多郎）「まへがき」。それは、〈そもそも自分が生きてゐるといふ事に何の意味があるのかといふ、さういふ問題

について、自分の首肯できる道）なのであった（同）。

西田の金沢時代からの親友・鈴木大拙だいせつは西田幾多郎という哲学者について、へただ書いたものの上でのみ彼を見てはいけない。実際その人に会って話さないと、思索を裏付けてゐる人間がわからない。西田の人間を知らないでは彼の思想も十分には看取出来ぬであらう」と指摘している（『思想』西田博士追悼号収録）。もとよりこうした点は表現者共通の傾向だといえるが、西田は人物の魅力がただならぬ次元にあり、会った者に残す印象の強さや学問を志す者への吸引力に関して特段の力量があったのである。それは西田幾多郎のひとについて、唐木や西谷の回顧に類する感動的な面晤めんごの記録が幾つも見出されることから知れよう。知識や情報ではなく、全人格的なものによって伝達される思想こそ本物の思想だとしたら、西田と西田門下生との関係は、日本の学問史上、特筆すべき高域に達していたのだ。

猛烈なる赫怒

なお、唐木のいう（デモーニッシュユ）だが、西谷も同じ言葉を使って西田の一面を記している。長くなるが引いてみよう。

その次に先生の所に行つた晩には、凄じい場面に出会つた。先客に、法科か経済をその年に卒業したらしい人が来てゐた。初めて訪問した人らしかつた。私が行く前から既に先生はその人に対して怒りを爆発させられたらしい。物凄じい不穩の顔付きで黙つてゐられた。そしてその人が何か言ふと、一々敲きつけるやうにやつつけられた。その人の言ふことがピントをはづれてゐたので、それ

が先生の癪さくに触ふつたらしい。併しかしその人は懲こりもせず、しまひには「先生は私がどういふ方面に適してゐると思はれますか」といふやうなことを言ひ出す。先生は興奮して、「そんなことわかるか」と怒鳴られる。「併し先生はよく直覚といふことを言はれますから、直覚の力がおありと思ひますが」。到頭また先生の怒りは爆發して、先生は烈火の如く、躍り上らんに怒り出された。「わしのいふ直覚はそんなことぢやない。そんなことなら易者にでも聞くがいい。東京には高島何んとかいふ男が居る」。そして私の方を向いて「なあ君、そんなのが居たなあ」、といふ調子である。私は返答しやうもなくて黙つてゐた。

〔わが師西田幾多郎先生を語る〕

西谷はこのときの異様な西田について、〈ほかの誰かがそれほど猛烈に赫怒したのにも出会つたことがない。全くデモニーシユといふ感じであつた〉と述べている（同）。

門下生への怒りで西谷の記憶するのは三木清で、〈何かのことで先生に呼びつけられ、叱られて、青くなつて友人の家へ飛び込んで来たことがあつたらしい〉（同）。三木はその頃から西田の悪口を言い始め、マルクス主義に近づいて、やがて京都を去り東京へ向かうことになつた。もつとも京大で教える西田は、おおむね弟子たちには寛容に接して、叱るということはあまりなかつたようだ。大抵のことは大目に見られていた。となれば、三木清のエピソードは例外ということになる。

関連していうと、唐木順三は兄弟子たる三木について、後年、好意ある筆で一書『三木清』を著すが、その付録「續三木清といふひと」で、戦争末期に新橋近くのおでん屋で呑んでいたときのエピソード

ードを紹介している。その店で三木清について問われるままに喋ったら、居合わせた今日出海こんにひでみがいきなり殴りかかってきたというのだ。兄弟子に対する唐木の評価を聞いて、実像を知っている今はカチンときたらしい。三木は行状の面で問題のある矛盾人間だったようで、頭脳は良かったものの人間性はスキャンダラスなところがあつた。当の今日出海が『新潮』発表の「三木清における人間の研究」でそれらを暴き、ひと頃話題になつている。倫理を求めながら自身は反倫理としかいいようのない醜面も抱いていた三木は、克己を重んじ不誠実を嫌う西田にとつて、がまんのない言動に至つたのかも知れない。

三木もまた、西田とはだいぶ違つた意味で「デモニーニッシュ」だったようで、本人も自分は性格異常者だと言っている。三木は当初、西田と「魂と魂との出会」（三木自身の言葉）をして結びついた。教場だけではなく、西田の自宅でも膝つき合わせて教えを受け、また対話した。しかし、この師弟には志向の違いが決定的にあつた。それは二人を隔てる要因となり、結局、三木は師と対峙する道を選ぶ。三木は昭和の大戦争が終わつた翌月に豊多摩拘置所内で獄死するが、死の瞬間まで考へていたのは西田哲学批判であつた。こうした二人ながら、師弟の交流は晩年まであり、師のほうは三木への深情を失っていない。その事情は鎌倉の西田についての唐木のスケッチからも判り、のちの第六章にて詳述する。

2 教育者西田

悲運のなかで

西田幾多郎、この深い泉のような哲学者についてはすでに多くの語りが堆積している。親族、学友、弟子が筆にした回想記たぐいの類は数多あまたあり、業績や生涯を描いた本格的書籍として、初期には高坂正顕『西田幾多郎先生の生涯と思想』、西谷啓治『西田幾多郎——その人と思想』が、後年には上田閑照しずてる『西田幾多郎とは誰か』、竹田篤司『西田幾多郎』ほかの労作に恵まれている（以下、伝記的事実は主としてこれらに基づく）。生前に大きな仕事を成すのはいうまでもないが、歿後にすぐれた評伝・評言が生まれることこそむしろ表現者の幸福だ、という考えに則れば、西田幾多郎が幸福な哲学者であることは疑いえない。ただし「幸福」は真率な語り手を得たという点からであり、西田自身の生涯は決して平坦ではないし、幸多いというわけでもなかった。むしろ彼の歩んだ人生は斜面にあえぐ山行であり、険しい行路というしかないものだった。彼は幾度となく「人生の悲哀」に行き当たり、その都度杳然と立ち尽くした。

唐木順三が己の生涯を決するほどの引力を感得したのは、すでに述べたようにひとりの力であった。この人は真実を語っている、語るに足る「真実」を宿している、そう受け取れるものを西田は発信していた。惹きつけられた一人に本書の主人公・唐木順三もいたのである。だとすれば、そうした人格をつくりあげた過程に言及しておくことは、唐木伝たる本書にとって意味なきことではあるまい。そ

ここで以下しばらくの間、哲学者西田の登場史を辿ってみよう。

西田幾多郎は明治三年（一八七〇）五月（旧暦四月）、石川県河北郡宇ノ気村（けけむら）で「十村」（とぢむら）（大庄屋で地方行政官を代行する役目）を務める家に長男として生まれた。西田が此の世に生を享けたのは、幕藩体制が急速に崩壊し、日本全体が近代国家へと脱皮を強いられる時代だった。旧体制に繋がる西田家は本来的に没落していく運命の影を引きずっている。ゆえに長男幾多郎を含めた家族は時勢の移りゆきに翻弄されることになるが、それでも金沢に出て少青年期を過ごした一季は、彼にとって愉快で明るいものだった。北條時敬（数学者、のち東北帝国大学総長）というすぐれた師に出会い、鈴木貞太郎（大拙）、金田（のち山本）良吉（武蔵高等学校校長）、藤岡作太郎（国文学者）といった友人たちと交わったことは西田生涯の糧になる。

その後、青年客気にまかせて落第をしたあげく第四高等中学校を中途退校した頃から、西田の境涯は暗転する。退学当初こそ自由を満喫したが、生半可な独立独行劇に世の中は甘くない。ついに行き詰まった青年西田は東京へ出て、「人生の落伍者」と感じるほどの惨めな帝大選科学生の時期を経た。選科は落ちこぼれが行くところとされ、正規の学生ではなく卒業もない（学士にもなれない）。ゆえに大学では何かと差別を受けたのである。のち故郷に帰っても、学問の正道を外れた青年に満足できる就職の口などなかった。ようやく尋常中学校七尾分校の教諭職を得るが、職員わずか七名の学校である。

逆境はそれに留まらない。還り着き、安らぐ場としての「家」が故郷から失われていた。すでに帝

大選科生時代に、〈西田君の事 実に気の毒千万なり、人間は色々の不幸に出遭はねばならぬものと見えたり、君は金なきに苦み、西田氏は家なきに苦む〉と、友人が伝える状況に陥ったのである（鈴木貞太郎から金田良吉宛書簡より。明治二十六年七月二〇日）。実家が没落し土地屋敷・財産を全て失ったのだ。新時代のなかでの父の行状は一家を加速度的に破産へと導いた。相場で失敗した父の感情はささくれ立ち、もともとあった家族の確執が決定的な亀裂を生む。

青年幾多郎には破産とともに家族崩壊の陰惨が待っていた。父親との不和義絶という厄災が襲いかかってくる。その異常な様相は父の遺言状に見られる。自分の葬儀には「不孝の長男幾多郎」ほか子供たちと妻が参拝焼香することを禁じるというすさまじいもので、〈死後きつとそれぞれ靈魂を以て相崇り候一念に候間〉とまで書かれている（上田久『祖父西田幾多郎』）。

若き西田に暗い運命が重なり続く。父逝去の前年には、中学校分校教諭から転じて折角得た第四高等学校講師の職を一年に満たず失い（免職された）、ほぼ同時期に婚姻二年の妻と離別となった。この妻とは遠からず復縁するが、長じて身内の死に次々と見舞われる。軍人となった愛弟は日露戦争の旅順攻略戦で犠牲となり、兄幾多郎は〈人生はいかに悲惨なるものに候わずや〉と心境を友人に書き送っている（『西田幾多郎とは誰か』）。我が子の死に見舞われ、自身も病がちとなる。そのなかで、財も後ろ盾もない家長として、幾多郎は妻子や老母ばかりでなく亡弟の遺児をも背負うことになったのだ。

〈ほんたう〉の意味

西田幾多郎は「近代」というきらびやかな時代の幕が高々とあがる時代に、古都を抱く北国で、家族が崩壊した没落旧家出身者として、若きときから人生の

悲哀を嘗め尽くした。暗く沈んだ空気が漂うなか、気の滅入るような時間が彼の日常に幾重にも垂れこめていた。彼は冷酷な人世に孤影を置くしかなかった。安らぎの根柢を奪われ、漂泊するかのごとき生を強いられ、焦燥と悲哀の渦中に幾度となく投げ込まれたのである。

この経緯が西田幾多郎を錬磨した。彼は参禅をくり返すことで精神を鍛え、「吾行く道を吾は行くなり」の不屈を宿し、厳しさと犀利さいりの人間になってゆく。幼い頃より書物を好んだことは決定的な救いとなった。学生時代は書庫のなかで一人書物漁りに没頭していたと回想しているし（西田「四高の思出」、道を歩くときも本を開き脇目もふらずに読んでいたとのエピソードがある。まさに万巻の書が西田の師匠であり、友であり、孤独を癒す親しき仲間なのであった。その読書法は自身で「雑読」というがごとく乱読に近いかたちだったが、これがかえって西田の知を総合的なものとするのに役立つた。

唐木順三は哲学の難しさについて、〈学と人とが、別々のものではないといふところにある〉と指摘し、さらに、〈自己自身の深く暗い底にメスを入れる心が、普遍的な論理を以て語られなければならぬ〉ことにあるとする（「西田幾多郎——大丈夫の哲学」）。次の記述はそれをふまえている。

西田幾多郎先生の哲学精神の中核は、哲学といふものの本来のむづかしさを、御自身においてまつたうに引受けられ、引受けることにおいて悪戦苦闘し、その苦闘が創造となつて現はれたといふ、さういふところにあると思つてゐる。

(同)

ゆえに西田は、外に真理を求め内に真実を求めて論理を厳しく追究するという〈苦闘〉をくり返した。それは畏るべき創造の泉を湧きあがらせたのであった。

論理を断然究めていく一方で、西田幾多郎は、孫の上田久も指摘するように（祖父西田幾多郎）、生来情が深い人間であった。（先生は理知の人であるよりも情意の人であつたと思ふ）と西谷啓治も述懐している（「わが師西田幾多郎先生を語る」）。ゆえになおさら、身内の不和や重なる不幸は骨身に沁えたはずだ。だからといって、情にとられ身動きできぬままでは済まされない。甘い有りようは一切通じない世界にぼつんと立つ身があるだけの彼は、逆境に堪え、何としても生を構築しないといけなかった。

彼には精進しか道はない。不運に採まれた西田は、情の深さは深いままで、情に溺れないよう自分を鍛えに鍛えたのだ。こうした人間から生じるやさしさや柔和こそ本物である。信に足るものである。西谷啓治は〈先生は何よりも虚偽や不誠実を憎まれた〉といい、同時に、〈併しまた、他人の人間的な弱さや過ちに対しては、人一倍に寛容であり、情をもつて見られた〉と述べている。情の深い人間が苦しみ抜いて到達した地点にいたがゆえに、弱さへの寛容もまた信実となる。（先生の厳しい鋭さの奥に、表面に現はれぬ優しい人間性が潜んでゐた）のであり、それらも統合されて西田幾多郎という陰翳深い「人格」が形づくられたのだ（同）。これこそが唐木順三をして、〈先生の風貌をこの目でみることによつて、生死の苦悶がやはらいだ〉といわせるほどの精神のドラマを生んだ（「ほんたうの教育者」と問われて）。憂鬱と苦悶で学問への興味すら失っていた新入生唐木は、ここに生の魅りのよ

うなものを得たのである。

〔稲妻のはた 教育者西田の魅力を語るとき、哲学者としての学識や思想の深さ、そして総合的なめくやうな趣 人格の力だけをいうばかりではいけない。一方で、講義自体の「面白さ」も重要な

つたと思われる。西田幾多郎の講義はいつも人気であり、教室に入りきれないほどの聴講生を集めることもあった。聴講生には哲学科以外の学生も珍しくない。

のちの日本浪曼派詩人・伊東静雄は、大正一五年（一九二六）四月に京都帝大文学部国文学科に入學している（唐木の二年後輩）。京大生時代の伊東日記には大学や授業に関する記述自体が滅多に見出せないし、ときにあつたとしても、〈我京大文学部の空気のいたく沈滞せるを思ふ、教授すでに老いて二十世紀の青年を指導する力なく、ノートは年々に古色を帯びるのみに、我等青年に国文学の本質を教えて明なるはなし〉（同年六月一五日）との違和感が表明されるばかりだが、例外は西田幾多郎だった。倦怠と不機嫌と自己嫌悪に包まれていた孤独な青年がようやく肯定の対象に出会えた事情は、〈西田博士の講義のうまいのには感心してしまつた〉（昭和二年五月七日）との一文から見出すことができる（『伊東静雄日記詩へのかどで』）。退官前年の西田を聴講したのだ。頼原退蔵えはらたいざうに注目され、のち卒論「子規の俳論」を首席通過させる若き俊才伊東が、ものみなくだらぬと批判的であつたなかで、専攻外の西田の講義だけは〈感心してしまつた〉と記すのだから、やはり授業自体の魅力が相当なものだつたと思われる。

それでは、門下の哲学科学生は西田の講義についてどう記しているのか。高坂正顕（大正九年入學）



京都南禅寺瓢亭にて（昭和16年）

（『物語「京都学派」』より）

手前に西谷啓治，後列左から高坂正顕，木村素衛，波多野精一，朝永三十郎，田辺元，天野貞祐，高山岩男。

と西谷啓治（同一〇年）の回想から様相を眺めていきたい。

先生の講義は、土曜の午後の二時間と月曜の午後の四時間に集中されてあった。恐らく前日に夜遅くまで仕事をされたのであらう。学生が余りにしどろもどろの訳なぞする時には、先生は遠慮なしに大きな欠伸をされた。

（高坂「西田幾多郎先生の生涯と思想」）

先生は教室でも何時も和服姿で、しかも我々の入学した頃には、それに短靴（編上でない）をはいてをられ、さういふ姿をかつて見たことがない我々には異様な感じであつた。（併し後にはそれが草履に変つた）

（西谷「わが師西田幾多郎先生を語る」）

〔卒業生や他学部の間人も聴講する講義において〕先生は大抵三十分くらゐおかれてはいつて来られる。講壇に立つと暫くは口籠つたやうな低い声で訥々と話され、それか

ら壇上を歩き初められる。話に熱がはいつて来ると、歩いたり手を動かしたりする先生の動作も、顔の表情も、どこか我を忘れたやうなものになつてくる。言葉は荷電されたやうになり、話は時として稲妻のはためくやうな趣を呈してくる。

(同)

西田の講義風景について、それでは次に唐木自身が描いたものを見てみよう。引用は「西田門下の人々」からである。

午後の講義に臨むため、西田が少々前ごみ姿勢でバラツクの階段教室へ向かう。(四五歩距て田辺元、和辻哲郎、天野貞祐といふ助教授たちがついてゆく。)助教授たちは聴講のために従っているのだつた。西田が渡り廊下の向こうに現れると、(芝生に腰を下して談笑してゐた一群が、いそいで腰をあげて、教室へいそぐ。学校を出て早々、三高や大谷大学、龍谷大学などの講師になつたりしている者、また大学院に席をおいてゐる新進たちである。木村素衛、高坂正顕、西谷啓治、戸坂潤の姿はまづ毎週見えないことはない)ほどであつた。(教室には経済学部の上原さんの姿も見える。その学部の若い助教授、講師らしいのもきてゐる。)もちろん学生も学生席に多数陣取つている。(下村寅太郎、田中美知太郎、土井虎賀壽などがゐる。これは三回生である。相原信作、樺俊雄、唐木順三、淡野安太郎、高田三郎などがゐる。これは二回生である。小島威彦、高山岩男、服部英次郎、速水敬二などもゐる。これは一回生組である。)一年生から三年生まで全学年の学生が集まり、哲学専攻ではない学生も加わつている(唐木自身の名前もあるのが面白い)。洋行帰りの三木清の顔もあつた。



西田幾多郎門下の人々（昭和20年6月）

〔高坂正顕著作集第8巻〕口絵より）

前列：中央に鈴木大拙（左）と西田外彦（右）。2列目：外彦の後ろに木村素衛，左から2人目岩波茂雄。3列目：右端に林達夫。4列目：右から下村寅太郎，高坂正顕，和辻哲郎，谷川徹三。谷川の後ろ右三宅剛一，その左務台理作。

哲学科の研究者・学生の名前が次々と挙がるところは壯観だといってよい。そして年齢不詳の老学生がおり、三高や他校の生徒も隠れてまぎれこんでいる。多士濟々だった。教室はぎっしりで、定年退職近い頃の西田のたいへんな人気ぶりを示している。しかも登場する人名には後年の錚々たる学者が目立つ。改めて指摘するまでもないが、彼らの幾人かは哲学者集団「京都学派」を形成し、このう

ち高坂正顕、西谷啓治、高山岩男こうやまいわおは、鈴木

成高しげたか（西洋史学科）とともに「京都学派四

天王」と呼ばれる存在になった。昭和一六

一七年の有名な「世界史的立場と日本」

座談会（『中央公論』掲載）に参加したこの

四人が戦後、戦争協力の責任を問われた一

事は昭和思想史上の特記事件である。

さて、西田幾多郎を柱にした京大哲学が

いかに多彩な人材を輩出したかを問うなら

ば、上記に名が出た面々に留まらず、先輩

筋にも眼を向ける必要がある。唐木が「西

田門下の人々」で列記する当時の哲学専攻

生名簿からの人名を見ると、陣容の途轍も

なさが合点できる。

古いところで天野貞祐、山内得立、久松眞一、土田杏村、務台理作、三宅剛一、次に三木清、谷川徹三、日高第四郎、といふ人たち、その次が木村素衛以下といふことになる。

彼らが醸成した豊潤な「伝統」のなかで、唐木順三は学問を修めていたのだ。

黒板の「円」

西田は説き方自体に独特なものがあって、多くを惹きつける理由となっていた。その様相を西谷啓治は次のように伝えている。

先生の講義は普通の意味で纏まつたものではなかつた。論理的な順を追うて話を積み上げて行き、全体として或る纏まつた考へを呑込ませる、といふやうな遣り方ではなかつた。内に色々な思想が^{ひじめ}葺き合つて一時に出口を求めてゐるかのやうに、一つの言葉が途中で切れたままで新しい言葉が初まるといふやうなことも屢々あつた。だから普通にノートするなどは到底出来ない。その代り、聞いてゐる者は我知らずインスパイヤーされた。

（「わが師西田幾多郎先生を語る」）

なお前記した唐木「私の履歴書」の引用で、実際の講義において西田がへときどき勢ひよく黒板に大きな円を書く」というくだりがあったが、この所作はよほど印象深かつたようで多くの者が記憶し

ている。そのうちで、西田哲学の概観も含めた説明として、やや長くなるが高坂正顕の文章を引いてみたい。

先生はまたよく黒板に円や直線を書かれた。場所の思想に入られた頃であるが、黒板に大きな円を書かれた。それが場所のつもりであったのであろう。「中略」場所には三つの段階があるのであるが、高次の場所に於いてあるものは、低次の場所を破って、より深い高次の場所に座を有つのである。それで先生は、今描いた円の中に小さな点のような、粒のような形を書き込んだ。最初の円の中に、言わば穴が無数にあいたのであり、そしてその穴とは実は高次の場所、結局は無の場所に於いてあるものに通ずるのであり、逆に言えば無の場所に於いてあるもの、即ち真の個物が低次の場に現われているが故に、低次の場に深い穴があいたのである。してみると次にかかる個物が真に於いてある場所としての絶対の無の場所が示されなければならない。それで先生は微笑しながら——そして「実際には絵に書けないのだが」と言われながら——更にその円をつつむ大きな円を点線で描かれた。それによって表わし難い無の場所をなお表わそうとされたのであったであらう。

〔西田幾多郎先生の生涯と思想〕

唐木順三もまた記憶に留めた黒板の「円」は、こうした意味合いを聴講者に伝えんとして描かれたわけであった。

西田との出会いは唐木順三の道を定めた。唐木は回想のなかで、〈心の底から、なんのためらひも、こだはりもなく、先生といへる、真の先生〉として、西田幾多郎と矢島麟太郎の名をあげている（「ほんたうの教育者はと問はれて」）。矢島は信州教育の受容を記した次の第四章で登場する。一方の西田については、実のところ、大学生のとき特別に親炙したことはない。学生の一人として授業等で接しただけであつた。唐木が西田と個人的な交流をはじめるのは卒業後である。上諏訪の教員時代から書簡の行き来があり、筑摩書房の編集者になつてからは仕事を通じて接触が深く、またさかんになる。それらの事情はのちの章にて詳しく述べていきたい。

3 英語臨時講師

再び松本へ
人生の無意味と自己存在の無意味に（あてどのない不安をもつてゐた）唐木順三は、

西田との邂逅によつて進むべき方向を得ると、たちまち生氣のようなものを取り戻した（「私の履歴書」）。身体は元来頑丈で根気もある。精神の彷徨さえある程度収まれば、学生の自分を肅々と歩む唐木の姿は充分想定できうる。都会的なデカダンへの傾斜にはガードが働く氣質であり、田舎出の几帳面なところを濃厚に宿していた彼は、直に努力家の学生へと転じたのである。

朝から四時頃まで連日登校するようになった唐木は、一三課目あつた普通講義をわずか一年で全て通過させた。朝永三十郎による西洋哲学史の講義は、〈実に明快であつた。よく整理されてゐて無駄

がなく、要点を的確に伝へた。西田先生とは全く性質の違ふものであつたが、私はこの講義によつて西洋哲学といふものの輪郭を知ることができた」と回顧している。さらにまた、「特色のあつたのは波多野精一教授の宗教学、狩野直喜教授の中国古代哲学、深田康算教授の美学の講義であつた。つまらなかつたのは野上教授の心理学、藤井教授の倫理学、高瀬教授の中国哲学等であつた」とも書いている(同)。

普通講義を終えれば、あとは専門たる「純哲」の講義だけを聞けばよい。二年生からの唐木はやや身軽になつた様子で、西田幾多郎の講義が欠講になつたことをふまえ(スビノザ『エチカ』)を読んでおけ、それについての試験を学年末に実施する、となつた、ひと時京都を離れて、松本で女子師範学校の臨時講師をする。

その頃、〈松本中学の出身者で文学部へ行つた者の間では学校を逃げだして教師をやるのが一種の流行にもなつてゐた〉と唐木は回想するが、松本行きはそれほど暢気な話ではない。第一次世界大戦後の恐慌のあおりを受け、父唐木辰太郎が加わつていた材木会社の経営が思わしくなくなつた。順三は家計が苦しくなつた実家から金を貰うことが、次第に苦痛となつてきた。それでも儉約をすれば何とかなつたはずだが、当時の唐木青年は〈あるだけの金は使つてしまふ〉有りさまである(同)。家から金が来ても計画的な使い方をしないせいで、月末には飯を食う金さえ乏しくなつた。唐木はしばらく、下宿の翠松園から坂を降りた真如堂前にある小さな食堂で一番安いきつね丼を食べてしのぎ、それも食えなくなると同宿の石川秀雄の食券に頼つた。しかしいつまでも石川の厄介にはなれない。

唐木は自ら稼ぐ必要に迫られた。西田幾多郎の講義がないことも背中を押して、ついに「学校を逃出す」ことに相成ったわけだ。

「もちろん実家が傾いたことだけが「京都辞去」の理由だとはいえない。〈現状から脱出したい欲望〉もまた唐木青年のなかに頭をもたげてきた（私の教師時代）。憂鬱の霧は西田との出会いでようやく出口を見つけたが、町暮らしに愉しめずの気持ちは残っていた。彼は京都で相変わらず孤独に沈んでいた。友人も少なかった。というより、友人を求めることが少なかったのである。それでは減入ってくるときもあり、彼は気分一新を図りたくなった。心理に転換をもたらすには、場所を変えるのも一案だろう。これらの動機が重なり、京都帝大二年生の唐木順三は懐かしい松本の地へと舞戻る。大正一四年（一九二五）のことであった。

ワーズワース 京都生活とうって変わり、松本にやって来た唐木は天窓を開け放ったような清々すがすがし
とテニスン い青年に転じている。

松本女子師範での一年は数へ年二十二歳の私にはたのしく明るい期間であつた。私の英語の力はあやふやなものであつたが、教へること自体はとにかく楽しかつた。 （「私の履歴書」）

中学と高校で計七年間暮らした地に還って心理が安定したというのはある。それとともに、仕事への適感覚が唐木の心を明るくしたものにした。教へることより教へることのほうがずっと〈楽しかつた〉。

これは唐木に宿った「教師体質」をあらわして興味ぶかい述懐である。後年、文芸評論家となる唐木だが、こうした資性は、年齢が近く同時代への視線に似通った点が多い。えに、同じく「無常」を扱った文芸評論家小林秀雄と比べると、唐木の特徴を浮かび上がらせる根柢になっている。小林が芸術家肌なら唐木は教育者肌であり、その違いは二人の作風や文章、さらには「思想」の色合いを違える決定的な要因になったと考えられよう。なおこの点への考察は第八章で詳しくおこなう（三三五、三四〇頁）。

長野県立松本女子師範学校は明治三八年（一九〇五）に開校した。明治四二年から一部二部制となり、第一部は小学校高等科を卒業した者が対象で四年課程、第二部は女学校卒業者を対象として二年課程であった。大正一三年ではそれぞれ定員は一六〇名である（『長野県教育史』）。唐木の担当は英語で身分は臨時講師、一週三日の出勤で月給は五〇円だった。この学校に唐木を世話したのは同校教頭の岩本義恭で、松本中学校時代に保証人を引き受けてくれた恩人である。直接教わる機会こそなかったが、青年唐木は岩本の家に呼ばれ御馳走になったこともあり、親しい間柄だった。

唐木は城山の麓にあった林檎園中の一軒家を下宿とした。遠望のきく二階が自室で、〈西にアルプスの連山、東に袴越、王ヶ鼻、美しが原、下に松本のこぢんまりした市街がみえた〉（『私の履歴書』）。唐木はそこから学校へ通う。学校は松本から浅間温泉へと通じる道の途中にあり、若き臨時教員は木綿の黒紋付の羽織とよれよれのセルの袴で教室に向かった。親譲りの服でやや大仰な格好だったが、彼にとって精一杯の気取りといえる。学校では上級生を相手にするとき、自身で教材を選べた。唐木

はワーズワースやテニスンを使うことにした。(紋付でワーズワースを読む身の仕合せを感謝した)のである(同)。

学校の向こう側には歩兵第五十連隊の兵営があった。明治四一年に転営設置された「長野の郷土部隊」で、銃剣を持った兵士が門衛に立っている。軍靴を鳴らして門を出入りする軍隊の姿はよく見られた。大正後半に高校時代を過ごした唐木には、軍事教練があった。松本高校にも軍隊から配属将校が派遣されていたが、何かと理由をつけて唐木は軍事演習をさぼった。彼は軍事組織という存在に違和の感情を持ち続けていた。(私は軍隊をおそれた。軍隊の四角四面の生活はどうしても私の性に合はず、そこへ入ることになつたらどういふことになつたかわからない)と述懐している。その唐木は前年大正一三年五月に徴兵検査を受け、第一乙種となる。甲種合格ではなく、軍隊優良児とは見なされなかった。彼は女子師範の行き帰りに(しやちほこばつた兵隊の姿をみるたびに第一乙種に感謝)した(同)。なお唐木順三には本格的な軍隊体験はない。一方、のち筑摩書房を一緒にはじめる臼井吉見は昭和一八年一〇月、この五十連隊に入隊している。

さて(たのしく明るい)女子師範のほうである。唐木は英語を教えるばかりではなく、
幸福な一年 学校行事にも参加した。一月一四日には赤穂浪士をしのぶ義士会が寄宿舎で催され、

よく菓子を食べる生徒たちに交じって唐木も加わった。松本女子師範は全寮制であった。このとき萩原という生徒が芥川の「或日の大石内蔵助」を朗読した。黒い鉄ぶちの眼鏡をかけた萩原のシニカルな表情を唐木はずっと覚えていた。彼女は結核で早くに亡くなったという。



松本女子師範学校の生徒とともに燕岳を登山した順三（大正14年7月）（唐木家蔵）



松本郊外の塩倉にて（大正15年）（唐木家蔵）
左から2人目が順三。

教員生活の合間に、学校から近い浅間温泉の裏手からよく山登りもした。美しが原や王ヶ鼻はもう近い。戦後は観光地となつて俗化されたが、まだこの頃は人の手が入らず、ありのままの自然が広がっており、そのぶんせいせいとした眺望であつた。（私は土曜日の午後、下駄ばきでよくここへ登つた。ここからみる安曇平^{あづみだひら}をへだててのアルプスはまさに絶景である。南は乗鞍、北は大天井、中に穂高、槍、燕^{つばき}、常念。私は殊に常念の姿を好んだ）（「私の履歴書」）。名山の名前が続く。信州松本ならではの光景で、まさに「山恋い」であろう。唐木のなかに清冽な感情が流れている。懐かしい故地

に還つた幸いが彼を包んでいる。そして夏山シーズンを迎えると、唐木は生徒とともに燕岳登山をし
た。そのときの写真が残っている（前頁上）。

（たのしく明るい）松本での一年間は、雄大なアルプス連山を望む信州の良さを唐木に再確認させ
た。彼は根つからの信州人であった。その意味で「田舎者」だった。都は似合わないのだ。自身の
「根」について思いを巡らすとき、原郷感覚のようなものが深まってくる。信州、とりわけ縁のあつ
た松本の地への愛着は、唐木順三の人格を解きほぐそうとするとき、重要な要素として見出される。
その松本に中学高校の七年と合わせて八年もの期間を暮らした。若いときの八年は長く、精神性への
影響も大きい。

八年住んだ松本を私は愛する。「中略」どんな小さい小路でも私は知つてゐる。どの町かどに何
の店があるかも知つてゐる。どこのせんべいがうまいか、どこの氷水がうまいかも知つてゐる。城
山の苺、山辺の葡萄、竹の屋（唐木が通つた支那蕎麦屋）のワントン、縄手の鯛焼。天神と裏町は色
の町、新橋は飴の町、東町は宿屋の町。女鳥羽川に梓川、高校と筑摩の森の間を流れてゐるあの川
は薄川だつたかな。郊外には浅間、山辺、入山辺の温泉。蟻ヶ崎にはマリヤ館と女学校。（同）

その女学校には川島芳子が馬で通つていた。かつての下宿の娘は銀座へ出てバアの女主人に収まつ
たことを知っている（三木清が通つてきた）。アセチレンガスの照明に照らされた本屋の記憶。そこは

何時間立ち読みしていても文句を言われなかった。この本屋でドストエフスキー全集を買った若き日の感激は後年まで忘れていない。地元の人間しか知らない些事さじが深部感覚を伴い記憶に在る。それが懐かしい松本の地なのだった。大学を抜け出した唐木はそこで幸福な一年を送ったのである。

4 卒論「ベルグソンに於ける時間と永遠」

〈洛東の一観音堂〉

一年が過ぎ、唐木順三は京都へ帰ってきた。西田幾多郎が課したスピノザの試験を無事通過させ、彼は最終学年である三年生へと進む。大正一五年（昭和元年、一九二〇）である。

京都では新たに〈洛東の一観音堂〉を下宿とした。真如堂（京都市左京区）は高さ約三〇メートルの三重塔が印象的な天台宗の古刹だが、塔の近くに尼寺があつて三年生の唐木はそこに部屋を借りる。〈法伝寺（真如堂の塔頭）といつた小さい御堂のわきに六帖四帖半つづきの部屋があつた。私はここが気に入つて思ひきつて二間借りた〉のである（私の履歴書）。かつて〈モルガンお雪の名でしられた洋妾のつひの住居であつた〉といわれ、〈尼らしくない七十歳の新発心が一人で住んでゐた〉。庵守をしていたこの尼は、〈前年までは朝鮮で悉皆屋をやつてゐたといふから、頭を剃つて間もないにはか尼であつた〉（同）。

俄比丘尼はどうやら俗塵が身につけており、無断で増築をしたり、美しいつじを根こそぎにした

りで、執事から咎を受けることもあったという。いささか気味の悪い比丘尼と一緒にではあったが、唐木は景色が気に入る住みつくことになった。水はつるべ井戸から汲む。これもまた不思議な下宿で、気に入りの一つとなる〔京の思ひ出〕。なお宿の裏は黒谷の墓地に続いていた。

尼寺に住むようになった京都の唐木は、かつてと同じ〔孤独といふ鎧をつけてゐた〕青年であった〔私の履歴書〕。再び憂愁に囚われたが、それは心の底からどうしようもなく生じる憂いというより、自らつくりだしているかのごとくだった。洛中の美術品や寺社風物に興味を示さないのは相変わらずで、そういうことに関心を傾注する学生への軽蔑すらあった唐木だが、竹林の多い嵯峨野だけはその道を好み、しばしば散策した。あるとき嵯峨野を歩き疲れて、空地の竹藪に腰をおろしたら、「去來」との二文字だけが刻まれている墓石を見つけた。もとより向井去來の墓所は考証的には詳らかではない。しかし唐木はひそかにそこを墓所と思い定めた。何か感じるものがあつたからだ。落柿舎のすぐ裏だと知るのは後年のことである。

さて、真如堂の下宿だが、唐木はそこをひそかに朴人庵と呼び、「朴人庵日記」をつけた。唐木全集収録の同日記は、〔ここは洛東の一観音堂〕と始まる。日記中、暮らしの実状が判る印象深い箇所を拾ってみよう。

九月某日　わが宿をおとづるものは　やぶ蚊、縞の蚊、やせた蚤　つつじの株からニョッコリ
出るのは赤がへる　夕とぼす燈火をこうて夜な夜なに　魂消さすのは夫婦の家守　石畳に甲羅をほ

すのが青とかげ 縞とかげ 叢をするく 出づる珍客顔の赤い蛇 夜ふけの室に、シャリく〜と音たてながら出て来るのが三寸むかで 秋の虫々キリギリス かまきり殿に虚無僧殿 初対面なる大虫小虫 声ばかりなるはふくろどん

墓に近いので家守、とかげ、むかでの類が部屋に闖入することは珍しくない。唐木は別の日の記載で、〈蚤、しらみは良寛、芭蕉と共に可愛がる日は無きにしもあらねど、三寸もあるむかでのシャリく〜と音をたてて歩く、毛の立つを覚ゆるものなり〉と書いており、苦手だったようだ。もう一文、引いておきたい。

十月某日 雨ふる。八時頃より電灯消えてなかくつかず。ろうそくの光かすかに芭蕉のものを見る。『行脚掟』『閉關の説』『嵯峨日記』等、何度読んでも常に新しき何物かを示唆せらるる。独り居る程面白きはなし、と取りすましたると思へば、人をこひ、人の来らぬをわびて、一人居て酒をたしなむあたりも、うなづかるること多し。

孤独な朴人庵の唐木は、孤独なんぞを（取りすましたる）ものと自己批評する唐木でもあった。そして彼は酒に向かう。一人でも呑んだし、友人の石川秀雄を誘って痛飲した。酒肴はイワシの乾物、かわきもの たらこ、あるいは味噌。糸こんにゃく、葱、肉を買ってきたときもあつたようで、すき焼き風の煮物



比叡山上にて

(大学最後の年。大正15年) (唐木家蔵)

右：順三、左：松原。

た友人(唐木家蔵の写真裏書では「松原」と比叡山に登ったという記述がある。へ山上をうづむる美女銅臭の徒輩、若し、漱石をして今日『虞美人草』を書かしめば、恐らく、甲野、宗近を叡山に登らせざるべし。叡山に甲野を容るる余地なく、宗近を引く力なし。往昔の聖地、化して遊覧地となる、また時勢のやむを得ざる力か」と日記は批判的に書いている。このときの記念写真と思われるものが残っている(右掲)。

反対に、京都の光景で珍しく唐木が好意をもって描いたのは、野焼きの様子であった。朴人庵日記

を拵こしらえたのだろうか。呑むと論じ、やがて歌い出す。当時、真如堂の門前には「葦酒禁入山門」と刻まれた大きな石があり、唐木はこの大石の前でも石川と呑んだという。バンカラが頭をもたげたのだろう。とはいえ「葦酒」を山門に入れたことに罪の意識はあって、庵守の尼のご機嫌伺いもあって、そのたびに賽銭を投げた。老尼は「この観音堂ほど、おまいのないところはありやしまへん」とよくこぼしていたが、唐木ら俗人のふるまいに一半の責任があつたかもしれず、罪障消滅のつもりであつた。

なお、朴人庵日記の九月二六日の項には、東京から来

の続編日記「白面酔語」のなかに、「某日」としてこうした記述がある。

私は吉田山の上から麦を焼く火をみた時の記憶を忘れることが出来ない。浮城のやうな両本願寺が暗に沈み、碁盤形の町々に暗い電灯がつき、鞍馬の山がかすかに見える頃、一乗寺、田中、花園の村々から、一面に麦を焼く火が上る。私はこの時程「旧都」といふ感じを深く味はつたことはない。私はこの原始的な野火に、ゆくりなく大宮人時代の京都をありくと見たやうな気がしたのである。

名園や寺院には興味を抱かなかつた唐木順三が、〈原始的な野火〉に古き世の姿を幻視し、その感動を筆にしているのは、時代を経たにしても所詮人工的な構築物より、広々とした野に展開される原始的な営みのほうに感興を覚える信州人の感受性に拠るものかもしれない。それを思えば、〈旧都〉という言葉に唐木の万感をうかがうこともできよう。

マルキシズムの席捲

京都帝大生時代はこうして過ぎて行つたが、当時、急速に浸透してきたマルキシズムについて触れておかねばならない。在学中の唐木に左派運動に関する特記は見出せないが、学生時代にマルキシズムの台頭を同時代の潮流として経験したことは、何かの信号のように、のちの唐木のなかに明滅したと思われるからである。

唐木には左派へ傾斜した一季があり、それは京都帝大卒業後となる。詳しい事情はのちの章で述べ

るが、先行的に若干触れておくと、たとえば大学を出たばかりの唐木は田辺元への書簡で、(社会問題に対して戦い、勝つためには、現在の日本の社会を正確に、敏感に掴むことが絶対に必要だと思はれて来ました)(傍点原文)と書いている。昭和三年一月、満二四歳のときであった。翌昭和四年一月、西田幾多郎は岩波茂雄宛書簡で、唐木について、(田辺君は此頃少しマルクスかぶれしてゐると云つてみました)と伝えてもいる。そして、唐木順三の第一評論集『現代日本文學序説』(昭和七年、唐木満二八歳)は、平野謙も指摘するように(全体としてなかなか左翼的)である(平野「鮮烈な問題史的展開」)。

彼の「左傾の一期」については時代に背を押された面があり、前提の一つとなったかもしれない唐木在学中の京都帝大の状況に、本章で触れておくことは一定の意味がありえよう。ちょうど大正一四(一五年、唐木が二年生から三年生の時期に、有名な京都学連事件が起きているからだ。初めて治安維持法が適用された事件として昭和史に記憶されるが、『京都大学七十年史』と『京都大学百年史総説編』を参照しつつ概観してみたい。

大正一二年(一九三三)一〇月、経済学部よしみちの学生岩田義道、逸見重雄へんみらは「伍民会」なる研究会をつくつた。これが「社会科学研究会」(社研)へと発展する。京大社研は全国的組織である学生連合会(学連)に加盟するとともに、大正一三年九月、東京帝大にて開催された第一回全国大会へ参加した。大阪市電のストライキに関与したり、ロシア労働組合代表レプセへのゲリラ的なメッセージ手交事件(レプセ事件)を起こしたりもする。学内では導入が目論まれていた軍事教練の反対運動を展開

した。学連は大正一四年七月、京都帝大で第二回大会を開催し、〈プロレタリア社会科学の研究並に普及〉を目標にすると決した。当時唐木順三は二年生で、松本へ「逃げ出して」いた時期である。

社研が日に日に運動を活発化させるのに対し、警察は取締の機を探る。そして大正一四年一二月、ついに京大と同志社大の社研メンバー三六名が検束されたのだ。この第一次検束では特高課長が「単なる出版法違反だ」と述べている。佐々木法学部長は警察の処置を不当として強硬に批判する。経済学部教授有志も研究の自由を求める意見書を発した。やがて京大総長は法学部長と文学部長を伴い、若槻礼次郎内相、岡田良平文相と面談、一段落がつくと思われた。

しかし大正一五年一月、京都で一四名の大学生が検挙される。うち一二名が京大生で社研幹部の石田英一郎、淡徳三郎らであった。京大教授・河上肇も家宅搜索を受けた。検挙者はさらに広がったが、警察の眼目は彼らを治安維持法違反に問うことだった。かくしてこの京都学連事件は最初の同法適用事件となる。検挙者は全員が治安維持法違反、八名が出版法違反、一名が不敬罪で、不敬罪はのちの文化人類学者・石田英一郎である。その日記に「御真影」「君が代」への批判があったからだ。

事件を受けて大学は懲戒委員会を召集し、同年九月、淡徳三郎ら一六名を無期停学処分とする。まもなく公判も開かれ、判決言い渡しは昭和二年（一九二七）五月三〇日であった。出版法違反と不敬罪は大赦令により免訴、治安維持法違反には該当するとされ、病欠者以外の全員に禁固刑が宣告されている（執行猶予一五名）。

京大の左傾事件はこれだけで終わらず、昭和三年の三・一五事件（共産党員の全国一斉検挙。京大で

も社研会員二二名が検束された)、河上肇辞職事件と難は続き、国家主義学生運動もあらわれて左右の運動が激化していく時代を迎えた。学問の自由と大学の自治は脅かされ、昭和八年には滝川事件も起こる。

こうした経緯は当時の社会状況が招いたものだが、唐木が京大生時代を送った時期こそ、始まりの京大学連事件が起き大学が騒擾のなかに投げ込まれていく季節であった。唐木順三が大学一年生のとき学連の第一回大会が東大で開催され、地元京大での第二回大会開催時は二年生だった。二年から三年生へ移る頃に治安維持法違反容疑の検挙があり、大学が学生を無期停学処分としたのは三年生時、判決は卒業後でもない頃となる。

唐木は当時の時代相について、出身地信州の状況を俎上に次のように書いている。

昭和初年には大正末からもちこされた不景気と失業とが一層際立つて来てゐた。失業救済で、田舎の隅々まで道路工事が起されたが、日給は五、六十銭であつた。物質はあり余り、物価は安かつたが、給与は一層悪く、失業者は日に増し、豊年飢饉といふ言葉さへ出来た。小学校の子供で午の弁当をもつてこない、いはゆる欠食児童もかなり多くなつて来た。それはいまの欠食とはわけが違ふものであつた。物資はありあまつてゐた。金のある者は贅沢の仕放題の時代であつた。

(「石川といふ男」)

格差が広がり社会不安の様相があったと唐木は当時を振り返る。これでは青年の左傾化は避けがた
い。京都学連事件はそうした時代状況抜きには語れないはずだ。官憲が弾圧しても弾圧しても人材は
常に供給された。青年層の左傾化は収まる理由が見当たらなかったからである。青年唐木は日本史の
苛酷な変動期を歩んでいた。その唐木自身の「赤化」問題は続く第四章と第五章で扱う。

深田康算

昭和二年を迎え、唐木には大学卒業が近づいてきた。学業の総仕上げとして提出した卒
業論文は「ベルグソンに於ける時間と永遠」である。フランス語が読めなかった唐木が
ベルグソンを選んだ理由は、「ドイツ流のゴツゴツした論理と違ふ直観と面白い比喩があつて、自
身の〈性に合つてゐた〉からである。原典は主として英独訳で読んだ。ベルグソンには「形而上学序
論」というパンフレットがあり、そこに見出した「純粹持続」に関わる暗示を採りあげ、これを中心
に論を組み立てた。〈純粹持続の極限の永遠、すなはち時間の極限の永遠と、「もはや時はあらざるべ
し」の永遠との相違を、アウグスティヌスの『告白』第十一章の例の時間論やスピノザや、西田哲学
を借りて述べたものであつた〉（私の履歴書）。

卒論を提出した唐木は、やれやれとなった。本当に通る水準なのか不安もあつたが、解放感のほう
が勝っていた。三月になると卒論の口頭試問がある。唐木は直前に耳下腺炎となり、医者から口頭試
問に出掛けてはいけないと言われた。試験を受けなければ卒業は延びる。実家の経済苦は深刻の度を
増しており、それでも親は苦勞して学費をつくり送ってくれる。もはや卒業を延ばすことなどできな
い。唐木は試問当日、水囊を頬からあごに当てて人力車で試問場へ向かう。審査の主査は「純哲」主

任の西田幾多郎教授で、副査は深田康算^{子字}教授と助教の田辺元である。病気への配慮もあったのか、唐木への試問は簡単に終わった。

ほどなくして結果が廊下に貼り出される。驚くことに成績は三番だった。哲学に対する己の能力を疑っており、そもそも「ベルグソンに於ける時間と永遠」がまともな論文なのかさえ自信がなかった唐木である。末席付近かとも想定し、とにかく落第さえしなければいいと思っていた唐木は、上位卒業という結果に自分で仰天した。

実は審査員のうち、深田が唐木の論文をとりわけ高く評価していた。深田康算は東大哲学の出身でフォン・ケーベルの弟子である。大学院生のときは神田駿河台にあったケーベルの家に住むことを許され、まさに秘蔵っ子だった。のちドイツとフランスへ留学を果たし、帰国すると京都帝国大学に迎えられて教授に任ぜられる。担当は美学美術史講座。洗練された都会人で、いかめしい装いは微塵もなく、その点では西田幾多郎とはタイプが異なっていたようである。学者としてはカント『判断力批判』の研究に没入するなどしたが、惜しくも奔馬性結核にて五〇歳であわただしく亡くなった。

深田と唐木の間^{じか}に直の師弟関係はなく、二人は親しいわけでもない。深田にしてみれば、卒論の口頭試問に立ち会っただけである。その深田が唐木の論文を高く買うのだから学問というのは面白い。

卒論の結果発表ほどなくして、唐木は一通の手紙を突然貰う。深田康算からであった。卒論を『哲学研究』に載せたいかどうか、という内容だった。『哲学研究』は京大哲学科の機関誌で西田や田辺もよく論文を載せていた。深田は当時この雑誌の編集責任者であった。『哲学研究』には卒論のうち



田辺元

(昭和33年、北軽井沢にて)
(『物語「京都学派」』より)

とりわけ優秀な作品を載せる例があったので、成績三番の唐木の論文を載せるのは不思議ではない。しかし、内容に自信もなかった唐木は狐につままれた気持ちだった。おそろおそろの深田の家を訪ねた唐木は、上等のワインを御馳走になって深田家から帰った。やがて「ベルグソンに於ける時間と永遠」は無事に『哲学研究』に掲載されたのである。

それから八、九年経って、唐木が成田で高等女学校の教師をしているとき、思いがけず深田の娘を訪ねて来た。父は臨終のときまで唐木のことを口にしていた、と彼女は言う。「あの優秀な学生はどうしているのか」であった。それで思い切って会いに来たというのだ。口頭試問で多少の縁を得ただけの教授にそこまで深く思い続けられるのだから、唐木順三は果報者だといってよい。

田辺元の批判

さて、論文審査に当たった教官のうち、西田幾多郎はやはり別格だった。へただ遠くから仰ぐだけで十分であり、咫尺しせきに近づいてお話する資格も必要もないものと思

つて)おり、若き唐木にとってそれだけ巨大な存在であった(私の履歴書)。京大卒業後に文通があり、筑摩書房の編集者となつてからは仕事の依頼もあつて踏み込んだ交流をするが、学生時代の唐木順三にとって西田は終生、景仰の対象であった。後年には冗談も言い合え、率直に意見交換もできる仲ともなったが、やはり始終、畏まって敬慕する対象として大事にしていた印象は強い。それに比べて身近だったのは助

教授の田辺元である。

田辺元は一高を出て東京帝大哲学科を卒業した。専門を決めるとき、理科出身の田辺は当初数学科を選んだがのち哲学科へ転じている。数学か哲学かの悩みは西田幾多郎と共通する。唐木にしても数学、なかでも幾何はよくできて好きでもあったから、ある意味、どこかで「数学か哲学か」に類した問いを経ていたのかもしれない。緻密な論理構成を重視する西田哲学の門下として、数学の徒だった田辺はやはり正系であり、唐木も正系に近いところにいる。

その田辺は東京帝大を出たあと母校府立四中や、父が校長をしていた開成中学で教えたのち、東北帝国大学から講師として招かれる。東北帝大は田辺にさまざまな配慮をしたが、任地仙台は研究環境としては恵まれない。田辺は辛抱の一時期を過ごしつつ、それでも学業では成果を生み評価を受けていた。その間、西田による田辺招聘の努力が続けられた。いくつかの迂路を経て、努力の実が結ばれたのは大正八年（一九一九）である。八月、ついに田辺は京都帝国大学へ来任することになった。

招いたほうの西田幾多郎は大正三年に京大文学部哲学科の「純哲」担当教授になっていたが、実はこの時点からずっと、（大正四年の仏教教理概論を除いて）普通講義・特殊講義・演習の全ては西田一人によってなされてきた。田辺が来てようやく「西田一人に頼る」状態が解消されたのだ（『京都大学七十年史』）。それもあって来洛後たちまちにして田辺元は、西田の後継者としての地位を築く。それは京大哲学科の陣容が整う時期と軌を一にしていた。

唐木にとって西田との関係がどこか「畏まった」ものだったのに対し、田辺との関係は親しみと細

やかさのほか、葛藤のようなものまで含んでいる。最初は学生と助教、唐木卒業後は悩みを相談する人生の教師、そして筑摩書房時代は信頼し合う編集者と著者の関係となり唐木は私生活の面倒も見た。田辺と唐木は実に長い、起伏に富んだ師弟関係を培ったのである。その始まりこそ京都帝大時代であった。

哲学専攻の演習は三年生時に受けたが、唐木が受講した西田の授業はアリストテレスだった。テキストは『形而上学』の英訳で、学生が翻訳していく。上手く訳せても訳せなくても西田は何の小言もいわない。対してドイツ留学帰りの田辺は厳格だった。フィヒテ『知識学の基礎』がテキストとして使われたが、ある日、唐木は自分の順番はまだだと高たかを括り、準備もせず授業へ出た。たまたま前の順番にあった学生が欠席して、急に唐木へと順番が回ったのである。もとよりドイツ語が上手くなかった唐木はしどろもどろである。田辺はしばらく我慢していたが、ついに堪忍袋の緒が切れた。

田辺先生は怒った。ひどく、したたかに叱った。田辺先生に叱られない者はまづないといつてもよいほどだったが、私への場合は尋常一様のものではなかった。ドイツの大学での演習の熱心な模様を話され、私の如きものなつてゐないことを論理的に、また感情的に、叱った。叱られる時間は長い。教室には大勢の先輩たちもつめかけてゐた。

〔私の履歴書〕

面責された唐木は哲学科をやめようとさえ思った。この強烈な記憶が田辺との関係の始まり付近に

ある。師弟関係の厳しさとともに、恐ろしさをも教えてくれた者こそ田辺元であった。

さて、唐木の論文審査のとき、副査田辺はどのように発言したか。その一部が後年の田辺宛唐木書簡中に登場する。(就中口頭試問の折、先生より突込まれましたる個所、即ち、私が、時間を直ちに非合理的なるものを合理化しゆく歩みであるとするは余りに歴史哲学的見方に偏しはしないか。ベルグソンは寧ろ、非合理性其物を時間の特質としたのではないか、と云ふ御言葉を機縁といたしまして)、である(昭和二年四月二二日付)。直接指導の学生ゆえにか、田辺は厳しく当たり本質的な批判を加えていたのだ。唐木にとって京都帝大時代、田辺元との関係はどこかぎくしゃくしたものであった。しかし、その田辺のほうとむしろ終生の深い繋がりを築いたというのだから、学問と人間の有りようにはどこか不可思議なものがある。

かくして唐木は無事に京都帝国大学を卒業した。憂悶と彷徨の京都時代だったが、へとにかくこれで卒業だ。もう一生試験といふものがない、その点で私は愉快であった」というのが偽らざる感慨といえた(「私の履歴書」)。

大学を出た唐木は「田舎教師」の道を歩み出す。向かう先は信州上諏訪である。

第四章 信州教育との出会い——上諏訪時代

1 教場に立つ

〈小学校の方が 昭和二年（一九二七）四月、満二三歳の唐木順三は教員となった。赴任先は上諏訪おもしろい〉 高島の実業補習学校で、高島尋常小学校に附設されており、高等小学校を卒業した

生徒をさらに二年間教育する学校である。〈生徒は近村の百姓の^{せがれ}倅や町家のむすこたち〉で、着物の着ながしで授業を受けにやってくる（「私の教師時代」）。

大学の文学部を出て教育者になるというのは当時（も現在も）多数派の選択であり、唐木はその道歩むことになる。卒業成績が良かった彼が高等教育を志向せず（京都にはいささかの未練もなかった）と「私の履歴書」に書くのは、京都時代への別れであると同時にアカデミズム界との訣別であったと思われる）、女子師範で教えた経験をふまえた中等教育も選ばず（松本の女学校から依頼もあったが、応じなかった）、

信州の小学校附設校を選びその教場に立ったのは、唐木伝中とりわけ注目すべき出来事だと考えられる。

経緯について唐木は、ごく端的にこう記している。

私の伊那の生家の斜め前に松澤平一といふ村の小学校長が寓居してゐた。この人はなかなかの人物で、文学部に在学中の私に信州の教員にならないか、信州では小学校の方が中学教師よりおもしろいかどうか、といった。私はこの人の世話で上諏訪の公式にいへば高島実業補習学校の教師になつた。

〔私の履歴書〕

信州という土地は近世から教育への関心が高いことで知られる。各地に寺子屋が出来、農民なら農民として、商工業者なら商工業者としての教育を地域ごとにおこなってきた。これが基盤となり、明治維新を経て近代に入ると「教育県長野」との位置づけが定着した。「信州教育」と呼ばれる自立的な教育活動が小学校教員を中心に活発化し、担い手の意識も高まる。唐木順三はその気風を受け、地域の教育活動に身を投じようとしたのだ。都会である京都に馴染めず、松本時代を懐かしんで信州人の矜持を失わなかつた唐木は、ここで自らの資性を振り返り、生地 of 風土が培う教育文化へ率直に回歸する人生行路を選んだ。



上諏訪時代の順三（右）
（昭和2年5月）（唐木家蔵）
左は高島学校の同僚・青木利平。

私は三年間ここで国語を教へた。ここにゐた三年も私にとって重要な時期である。私はここで信州教育また教育者の実態に触れた。 (同)

教師のダイゴ味は小学校、補習学校にあると思ふやうになつた。とにかく楽しかつた。

（私の教師時代）

「信州教育」の肝所^{かんどころ}を実地で叩き込まれ、実践に尽くした経験は、彼の人格に影響を及ぼし、その要となる部分に深い刻印を残した。地場に根づいた教員が、児童への指導や教材の学習だけに留まら

ず、己を研鑽するため高度な学問を自学自習する。哲学や文学、科学や芸術の一級テクストを日頃から読みあつて、討議し思索する。かくして人間性の向上を絶えず計っていく。これこそ「信州教育」の伝統であつた。

唐木はのち近代の都^{みやこ}東京で編集者、評論家、大学教授となり、知識人としての地歩を固めていくが、仕事の合間を見つけると信州へ行き、小中学校教員が会員の学習会（不期山房^{ふきさんぼう}の会）

を主導するとともに、教員相手の講話会を晩年まで数多くこなしている。また明治大学で教えていたとき、教え子で教師志望の者がいると、彼はいつも田舎へ行くことを勧めた。若い教師が山河や人間の美しい田舎へのりこんで、それらをさらに美しくすることを願ったのだ(同)。こうした態度の背景に、高島学校の三年間が彼に与えた影響の大きさが指摘できる。上諏訪時代に地場教員が培う「信州教育」を体験した唐木は、それを貴重なものとして、終生、揺るがせにできなかったのである。

根を求めて

いうまでもなく、教育というものは制度や施設の問題ばかりではない。〈教育の成否を左右する最大の要件は教師の質である〉(中村一雄『信州近代の教師群像』)。だからこその、〈教育を重視する地域社会では教員の社会的地位が高い〉のであって、それは「教育県」たる長野に当てはまった(同)。地位が高ければ求めるところ・求められるところも高くなる。質の向上を目指し教員自ら日々研鑽するのが当然との気風が生じ、研鑽を経た魅力的な教員群像が登場する環境が出来る。

大学出の唐木はそのなかで採まれ、「信州教育」の何たるかを学んでいった。それは机上の問題では断じてなく、頭脳技術の問題に留まらない。人間とは何か、社会とは何かへの問いを含みつつ現実の教場で展開される実践活動であり、哲学科の学問を思弁から現実へ着地させんとする試みでもあったのだと思われる。この志向は「信州教育」について書いた唐木後年の文章にも見つかる。長くなるが引いてみよう。

かういふ時代だからこそ私は逆の方向を考へてみた。教師を例とすれば例へば次のやうな方向である。普遍的世界的教育よりも日本の教育を、日本の教育より信州の教育を、信州の教育より諏訪の教育を、諏訪の教育より自分の学校の教育を、自分の学校の教育より自分の教場の教育を、教場のそれより自己自身の教育を、といふ方向である。「中略」この教師の前に、初めて教場の児童が出てくる。一が二になるのは此処である。教師と児童が面々相對するところ、初めて「他」がある。ひは「他己」が出てきて、そこにいままでにない世界が生れてくる。教場から学校へ、町村の教育から諏訪教育、やがて信州、やがて日本、やがて世界の教育といふ前とは逆の方向の可能性が此処から根をもつて出てくる。根をもつて、といふのは付和雷同ではないといふことである。単に時勢や流行に支配されてうろろしないといふことである。

〔教師が教師になること〕

若き哲学徒の言ではない。昭和四六年、満六七歳のときの文章だ。戦後社会に在って、真の人間回復を目指す筆さばきは健在ながら、隠者といわれる晩年の生を送っていた時期の言である。それにしては瑞々しさにあふれてゐるではないか。筆を執る唐木に、若き日に得た実践的体験がありありと甦つてきている。ゆえに「若さ」が宿つたのだ。なかでも、時勢や流行に付和雷同しない生き方に関して、〈根をもつて〉という言葉が出てくるところが唐木らしい。これは彼の思想と行動にとつて大事な考えだ。〈根〉を持つ者であれ、と彼はたえず意識し続けていた。

その唐木は右記引用文に続けて、こう書いている。



藤森省吾
（『藤森省吾先生と泉野教育』より）

「信州教育」を所与の、既製のものとして設定することの中には甘えがある。信州教育は己れの学校、己れの教場、己れ自身の中にあるといふ体得があつてこそ、信州教育は生きてゐる。生きて働いてゐる。私はあらためて藤森省吾先生を想ふ。先生においては泉野学校が信州の教育、日本の教育、世界の教育の現場であつた。教育は此処に在り、教師は此処に在りと、先生は思つてゐたであらう。これは容易ならぬことであるが、教育、教師の眞の在りどころは此処をおいて外にはない。

ここで藤森省吾の名前が出てくる。「信州教育」を語るとき必ず登場する伝説的教育者であるが、唐木が大学を出て高島実業補習学校に赴任したとき、その首席訓導（教頭にあたる）こそ藤森であつた。唐木順三は〈五尺そこそこながら精悍純粋な〉この名物教師の薫陶を受け、〈この先生に多くのものを教わ〉りながら教員生活を送つたのである（「私の教師時代」）。

明治一八年（一八八五）二月、藤森省吾は諏訪郡上諏訪町に生まれた。父は旧高島藩士藤森省吾

族で、兄に藤森良蔵がいる。良蔵は上京して「考へ方研究社」を興し、今でいう受験参考書のベストセラーを刊行したことで知られる数学教師だが、それ以前の信州時代は保科百助の私塾で教えていた。破天荒な教師で夏は上半身裸で教えたとか、授業中でも豆腐屋のラツパが聞こえると鍋を掴んで飛び出したとか、エピソードに事欠かない（須藤實『にぎりぎん式教育論』）。それでも数

学の教え方はうまく、わかりやすかったという。

なお、保科百助も「信州教育」を説くとき必ず語られる名物教師である。県知事でも師範学校校長でも気に喰わぬことがあると平気で罵倒する、天衣無縫の畸人きじんぶりは有名だ（井出孫六「保科五無齋」）。四民平等の考えから被差別部落を囲い込んだ分教場を廃止したり、長野県の生糸加工業興隆の基をつくったり、あるいは信濃図書館設立や博物館の提唱など、一教育者に留まらないスケールの大きな活動をした（中村一雄『信州近代の教師群像』）。突拍子のない言動や鉱物採集でも逸話が多いが、創見に飛んだ行動家であったことは間違いない。

さて、藤森省吾である。彼は明治三十七年に県立諏訪中学校を卒業して高島尋常小学校の代用教員となり、教師生活の第一歩を踏んだ。このとき同校の次席訓導は久保田俊彦——のちの歌人島木赤彦——であった。訓導とは正規教員の意で、現在の教諭に相当する。

藤森は当時の久保田を回想して次のように書いている。

自分が尋常五年の子供を受持つて居た時一日綴方をして居たが大へんまづい仕方であつた。先生は「おれが一つやつて見よう」と云はれて次の綴方の時間に学校の裏庭に子供を連れ出して「学校の裏庭から見た四方の景色」といふ題で一時間の授業を下さつた。其頃はまだ写生などいふことが余り云はれて居なかつた時であつたのに先生は率先して写生に立脚せる綴方図書等を唱導された。其の一時間の授業は今も尚自分の頭に明に浮ぶ程よいものであり、又自分としては大へんよ

い指導を受けたと思つて忘れ難いものである。

〔久保田先生の思ひ出〕

久保田は長野県で一八年の教職生活を経て、上京のち『アララギ』の主宰者になるが、上記のエピソードを見ても人間性の中に教師的素養を豊かに持ち、またリーダーとしての資質も高いものがあつたようだ。久保田が長野の教育界に多大なる影響を与えたと称されるのは、『信州近代の教師群像続』等)、現場教師時代の活動とともに、長じて雑誌『信濃教育』の編集主任を務めたことも理由の一つにある。なお付言ながら、〈私は「アララギ」、殊に赤彦の歌風には親しめなかつた〉と唐木順三は記しており、信州に根をおろした赤彦系の文学について、自身との膚合の違いを述べている〔私の履歴書〕。

藤森省吾に戻るが、彼は代用教員をしばらく務めたのち、明治四一年、長野県師範学校第二部に入学する。第一回生だつた。同校卒業後は長野県のいくつかの小学校で訓導を経、大正七年、泉野小学校訓導兼校長となる。藤森はここで「泉野教育」といわれる独自の実践活動をおこない有名になつた。それは小学校教育であるとともに、重農思想をもとにした農民修練法で、藤森の求道的な姿勢は卓越した指導力を生んだのである。諏訪郡泉野村（現・茅野市）は八ヶ岳山麓、標高一〇〇〇メートル以上の高地にある。赴任当時は食うや食わずの貧しい村で、わずか四五〇戸の純農村であつた。小さな村の小さな学校ゆえに校長は兼務とされたのだ。

藤森はここで一念発起し、小学校と実業補習学校を一貫させた農村教育を先導する。藤森が育成し

ようとした農村的人材とは、(外は素朴鈍重で内には高貴なる心情と鋭敏なる良心を有し且つ線の太い人間)であり、軽佻浮薄な都市文化に染まらぬ地方色豊かな田舎人であった(藤森「農村教育」)。

実は藤森の泉野学校校長時代は初任期(大正七年六月〜九年三月)と再任期(昭和三年四月〜一八年三月)があり、実践活動の中心は一五年に及んだ再任期である。両期の間で高島学校時代があつて、このとき唐木順三と出会つた。「泉野教育」の様子はのち証言を紹介するが、唐木が薫陶を受けた時期は藤森にとつて、のちに泉野で花開く教育理念と教育方法の助走期にあたる。

高島学校時代の藤森省吾が、新年度の始まりにおいて、教育に臨む基本方針について述べたものが残っている。当時同校校長だった田中一造が伝える文章中にあり、一部を紹介しておこう。新人教師唐木もこうした藤森の教師観のもとで教場に立つ身になつたわけで、唐木が接した(信州教育また教育者の実態)の内実が垣間見えて興味ぶかい。

一、一般の方針について

○万事に苦心を有ちたし

本気にやる、工夫を積む。

杜撰にせぬ——無定見の事はせぬ。

生々の気を以て児童の中に深く喰い入つて全力をここに集中したい。

総て何事も児童中心に考えて児童一人一人に打ち込んで親切に見てやりたい。

○自発的にきたし

積極的にやること、油の乗つた緊張した態度でやりたい、意見のある時は充分に吐露しその上で一旦決定した事は之に従うこと、決定事項の行われぬのは自発的でないからだと思う。

○有機的関係

各自が能く自任自重して責任を背負つて立つ事が必要である、部分の全体に及ぼす影響の大なるを思い有機的関係の樹立が大切である——（多数の統一）

学校系統の中に入ること。

その上で個人の卓越性發揮。

普遍性と特殊性——（理想と現実）

各自分担の事に、担任学級の事に、校務等にも、すべて全力を尽してやる——（鋭敏な良心によつて）
〔高島学校時代〕、「藤森省吾先生」収録

教育現場に溢れる生気が伝わり、当時の雰囲気が偲ばれる。藤森省吾は〈教員としての真摯の態度〉（同）を強調したのである。厳しくも堅実なその教えを、唐木は貴重なものとして受け取つた。

藤森の考えが貫かれたなかで過ごした社会人の日々は、青年の甘えを唐木の精神から洗い去らしめた。実社会へ出て受けた洗礼は、唐木順三を人間として強靱にしていくことに役立った。またこうした〈真摯の態度〉は、唐木の原質に宿っている教育者の資質に影響を及ぼし、一つの理念型のようなも

のを形づくつたに違いない。

唐木順三は「私の履歴書」のなかで、藤森の肖像を鮮やかに描いている。

藤森さんの方針で、生徒は日常服であつた。日常服はキモノで袴もつけない、帽子もない。庭へはハダシで出た。都会の消費文化、ブルジョワ的頹廢をこの先生は極端に嫌つた。農村にこそ眞の生活があり、みづから耕し、みづから食ひ、みづから思ふところに眞の教育がある。

自立的な田舎人を育てる実地に即した教育、これこそ藤森が全霊で目指したものであつた。そこにはよりよき生き方を希求する姿勢が確乎としてある。「信州教育」の眞髓が確かな光を発している。

高島学校の教育

藤森らを指導者とし、矢島麟太郎（後述）ほか志操高い教員が己の教場とした高島学校について、唐木は次のように回想する。

高島学校には女子のための専修学校といふのも附設されてゐて、教員の数は七、八十人にも及んだ。それが教室三つをぶちぬいた位の大部屋に机をならべてゐた。校長の机も代用教員の机も同じであつた。

〔私の履歴書〕

高島学校は（民主主義、非官僚主義の徹底した、活発な学校であつた）（同）。冬になると大きな火

鉢で暖をとる。教員たちは火鉢の回りに集まり、談論風発となる。やがて教頭格の藤森もやってくる。小さい握り飯を白いハンカチに包んで持ち込み、火鉢の上でこれを温めながら四方山話よもやまをはじめのだった（「私の教師時代」）。こうした学校の在りようは信州全体へと評判が伝わり、「高島留学」という言葉さえ生まれた。（全県から優秀な教師がここへ集り、ここから散つていつた）のである（「私の履歴書」）。唐木が赴任したのは、ちょうどそうした時期であった。

唐木の月給は一〇〇円で、授業は朝のうちに二時間だけ組まれた。それをこなせばあとは下宿へ帰っていいという。藤森の計らいであったし、田中校長の好意でもあった。（勉強の時間も充分につくつてくれました、他の同僚先生達に相済まぬと思ふ程の余裕があります）と、唐木は田辺元宛書簡で伝えている（昭和二年四月二六日付）。

さて、藤森省吾は教員たちに「三種の勉強」を求め、唐木順三の回想にも出てくる。一つは教材の勉強。これは授業に役立てるためで教員として当然やらねばならない。このあと二つの「勉強」が必ずやだと唱えたことが藤森らしさである。二つ目は「高い研究のための勉強」、そして三つ目は「自己を豊かにするための勉強」であった。教えるための教材だけでなく、教員としての自己を高める学びを日頃からおこなっておけというわけで、数学から文学まで対象は広がった。

アカデミシャンというわけではない在地の小学校教員にも質の高い学問研鑽を求めるのは、藤森の実践のなかでとりわけ目を惹く。「勉強」対象として、思想的な書には論語や道元があり、文学書では芭蕉があつたと唐木は記憶している。まさに「学習せよ、学習せよ」であろう。唐木はその求めに

応じて、社会人になっても自学自習を疎かにすることはなかった。これが思索者唐木を形成していくに大いに役立ったのはいうまでもない。唐木の教養の広さや人間観察の深さは、若き教員時代に「信州教育」の現場で叩き込まれた教えが背骨を成して出来上がった面は強い。その点を理解しているからこそ、唐木は後年まで、「信州教育」の薫陶を受けたことを人生の貴重な体験として語り続けたのである。

そして、いうまでもなく藤森は「先ず隗かより始めよ」の人物であった。〈教師は常に自己を責めめがかなければならぬ〉を、率先して実行した（「私の教師時代」）。絶えず学習し研鑽に努め、そこで得たものを眼前の教育現場に役立てた。高島実業補習学校には、〈町の働く青年たちのため早朝授業が特別にあつた。冬の朝の六時は信州は殊の外寒い。その中で藤森さんは論語の講義を情熱をもつてつづけて居た〉という（「私の履歴書」）。自ら実践する指導者の姿は唐木の記憶に刻み込まれていく。

唐木の授業担当は前述の通り国語である。教科書は信濃教育会編纂のものを使つたが、きわめて特色ある内容だった。抄録はせず全文を載せる方針を貫徹させたのがその第一で、たとえば『奥の細道』も全文が載っていた。また、副読本であつたが、杉田玄白『蘭学事始』がやはり全文掲載だった。高等小学校を出た者（実業補習学校の生徒）が、現場教師の指導でこうしたテキストに挑んでいた。教科書や副読本自体が骨太の知を目指す雄大な山脈だったのだ。判りやすさと効率性を優先させた戦後の初等中等教育の教材から見れば、志の高さは驚くべきレベルだといえよう。

唐木の使つた教科書ではまた、〈森鷗外と国木田独歩がばかに多かつた〉。鷗外なら「山椒大夫」や

「高瀬舟」といった代表作以外に、翻訳の「冬の王」も採用されている。独歩では「春の鳥」「非凡なる凡人」「空知川の岸辺」などが採られてあった。唐木は赴任した当初の四月、これらのなかで、まず「春の鳥」を採りあげた。ワーズワースの詩が引いてある作品で、季節も合っている。ワーズワースといえば、大学生の唐木が松本女子師範で教えたとき自ら教材に使った詩人だ（九二頁）。ゆえに親近感がある。新人教師唐木は生徒を前にして「春の鳥」を読みあげた。（生徒も実にいきいきとこれを聞いてゐたが、私もいきいきとこれを読むことができた」と、当時のことを唐木は懐かしく回想している（同）。

入学早々の授業は、〈教へるといふより、ただ読みに読むだけ〉であった（私の教師時代）。すなわち、〈二度三度、私が読み、また生徒に音読させる〉、これが中心だった。それでもこうした「読み」の授業で生徒たちは国語が好きになるし、〈教師の方も教壇へ立つことがおもしろくな〉ったという（同）。

現場教師の苦惱

他方、藤森時代の高島学校とはいえ、現場教師に苦悩がないわけではなかった。唐木は赴任した昭和二年の夏、京都の田辺元^二に書簡を送り、修身科教授法について意見を求めているが、そのなかで学校の実状について次のように述べている。

今、田舎の小学校は、現実的な問題に於て非常な過渡期に立つて、非常に苦しんでゐるのであります。この具体的な一つの現れといたしまして昨今二日間もかかつて討議いたしました^三が何等決す

るところなかつた服装の問題があります。都会の風潮が日に増して田舎に入つて来、洋服を着て来る女の生徒が日にふえて来ます。従来都会風潮の生徒たちの間にしみこむのおさへにおさへて来ましたのですが、流行の力が、ぐんぐんせまつて来て遂に、洋服を許すか、(勿論奨励はしませんが、内規として)、否かの問題につきあたつたわけであります。これに対し、洋服を着て歌舞伎を踊れないと同様、洋服を着て日本的、殊に田舎的の教育は出来ないと思ふ人々と、大勢に順応し、社会的な力を無視して教育は出来ないと思ふ人々とは、両極端として立つたわけであります。

(七月二二日付)

もとより「小なる問題」であろう。しかし教育現場はその累積の場でもある。大文字の哲学の論議より、日々多々押し寄せる「小なる問題」をどうするかが現場教師の焦眉の課題であり、真剣な論議の対象になった。新人教師唐木もさっそく「小なる問題」に囲まれていた事情が書簡から見とれる。藤森イズム下でも教育現場の現実には安泰には程遠かつたのだ。もちろん実践の場では、こうした状況はむしろ当然といわねばならないのだが。

さて、唐木が薫陶を受けた藤森省吾は昭和三年四月、高島学校を離任し次の任地へ向かう。唐木赴任の翌年であった。

この先生は上諏訪からやがて諏訪の山浦の泉野といふ僻地の小学校へみづからすすんで転じてい

つて、そこに理想の教育道場をつくらうとされた。当時の農村は極端な不況にあへいでゐた。荷車一杯のナスを市につんでいつてもタバコ一ケの代にしかならなかつたといふ時代である。さういふ不況の農村へ入りこんで、村人たちとともに生活し、村人たちの気づかない農村と農民だけにあるよろこびと人間的な豊かさに目覚めさせようとした。やがて泉野は信州教育の道場になつた。

〔私の履歴書〕

高島学校に続く泉野での実践は、藤森省吾のすぐれた現場活動として注目と敬意を集め、信州の教育界で長らく語り継がれていく。その具体像が判るエピソードを、当時の生徒による回想から見ていきたい。

当時は朝学で「論語」「聖賢の書」など程度の高いものを学んでいたが、昼間の疲れが出て、朝寝坊をしたり、夜遊びなどして朝学に遅れたりすると、「農村を支えるのは青年だ。それがなんだ。」とあの小さい体で床をドンドン踏みつけて叱つた。「中略」情熱のかたまりであり、本気になつて相談にのつてくれた先生であり、峻厳・高潔・こわい先生だつたと思います。

〔藤森省吾先生と泉野教育〕収録、座談会「今、泉野教育をふりかえつて」、三浦邦次発言

村が疲弊の時、先生は「村におれ、村をつくれ、逃げるのではなくて此処にいて最善を尽くせ、

尽くせるように人間教育する。」とよく言われたが、なかには現金収入のため村を離れた人もいたが、とにかく強い意志と希望を持って生きること教えられたので、村に残り今日になっています。

(同、朝倉重次発言)

藤森に影響を与えた久保田俊彦(島木赤彦)は、『信濃教育』大正九年一月号収録の「訓育問題(其二)」で、「最も直接なる関係を以つて児童を繞る個人々々の生活心が弛緩であつてはならない」とし、次のように述べている。

緊張せる教育者の心は個人的に目覚めて個人的に固まらない。彼の心は自然に通じ人類に通ずるの自由さを持つてゐる。この自由な心が児童の自由な心と交感して初めて訓育の事が行はれるのである。斯様な教師にして初めて児童の希求心と懐疑心を正当に理會し、真面目に取扱ふことが出来る。

生活心の緊張こそ良き教師にとつて重要である。それを宿した教師こそが児童を導く力を得るとの考えは、「情熱のかたまり」(本気になつて)「強い意志と希望」といった藤森像と重なる。藤森は良き教師を目指し、絶えず「緊張せる心」をもつて児童に接したのである。それが後年まで生徒たちに忘れ難い印象を残したのだ。

そして、唐木順三がこうした古き良き現場教師の有りようを肯定的に捉えていたことは、藤森や他の信州教育人について書いたさまざまな文章から明らかである。

なお、上記引用した座談会では次の証言も出てくる。

先生の名前は広く知られており、軍隊の上官であった白井吉見さんに「藤森省吾先生や松田吉辰先生（藤森先生の後任の校長）を知っていることは幸せだ。」と言われ改めて先生の交友の広さと存在の大きさに驚いたものです。藤森先生は村起こしと村人の精神や人柄造りの教育をしたのだと思います。

（有賀重弥発言）

白井の応召入隊は既述の通り昭和一八年一〇月であり、唐木と再会し、共に筑摩書房を立ち上げて（昭和一五年）以降となる。藤森のことは信州教育界では名高くなっていたが、出版社運営をめぐる日々顔を合わせていた時代、白井は唐木から藤森の魅力的な実像を聞いていたと思われる、上記の白井の言葉はそれも受けて発されたのだろう。

藤森省吾の逝去は昭和二〇年九月四日。昭和の大戦争が終わってまもない時期である。戦後の「民主的」教育体制の導入で「信州教育」の在りようも変質を強いられるが、その様相を見ないうちにこの世を去ったのは、古武士のようなタイプの藤森にとって、あるいは幸運なことだったのかもしれない。

2 自由教育運動と哲学会

矢島麟太郎

藤森省吾はまさしく「信州教育」を代表する教師の一人とされよう。とはいえ、「信州教育」とは限られた教育者が生み出し、その弟子たちによって発達してきた方法で

はない。「信州教育」に中心的存在はなく、個々の教師の現場活動が星雲状に堆積してきた歴史をいうとしてもよいだろう。本書第二章で触れた松本中学の小林有也も「信州教育」の群像の一人である。ほかにも民権論系、キリスト教系、白樺派系等があり、社会主義の影響も加わって百家争鳴であるといえた。然すれば、「信州教育」とは信州の各地での多様な実践活動を集約する言葉であって、個性的な教師たちが大海のように広がって形づくられたといえる。

もちろん信州という「場」が相通じるものをつくらせていたわけで、あえて「信州教育」の本筋はといえば、教師の人格主義の伝統だといえる。公共心と学術愛好を基本に厳しい自己鍛錬によってすぐれた風格を宿すようになった教師が、規律と親愛をもって教場に臨み生徒に大きな感化を与えている。彼らは画一的な権威主義に抵抗し、地場の実状をふまえた人道的精神を重視する。また合理性を重んじつつ、多くは都会の華美悪弊を遠ざける野人として質実剛健を旨とした。

これらを身につけた実践者群像が、明治期以降に「信州教育」の太い流れをつくり、近代のなかで伝統を形成していく。唐木順三はその優位性を存分に引き受けたのである。彼が教場に立った昭和初



矢島麟太郎
〔『矢島麟太郎遺稿集』より〕

期は「信州教育」が信州各地で豊かに展開され、むしろ成熟期を迎えていた。その時期に現場教師を務めた経験は、唐木の精神形成にとって決定的に意義深い。それは彼の間観や社会観の要に刻まれ、書いたものや編集者としての活動に影響を及ぼしている。さて前章でも触れたが、唐木順三は後年、自分の人生を振り返り、〈心の底から、なんのためらひも、こだはりもなく、先生といへる、真の先生〉として西田幾多郎と矢島麟太郎の名を挙げている（「ほんたうの教育者はと問はれて」昭和四四年、満六五歳時筆）。西田についてはすでに述べた。もう一人の矢島は「信州教育」を支える名高い現場教師で、たとえば『信州近代の教師群像続』では、藤森省吾などともに一章立てて論じられている。

その矢島について、唐木の書くところを見てみよう。

矢島麟太郎先生は、私にとつてまさに先生であつた。しかし私はこの先生から直接に学校で教わつてはゐない。私が先生にまみえたのは、すでに小学校長を退職して、郷里（信州辰野）に隠居してゐられた時である。私の郷里は伊那だから、そこへかへるには中央線を辰野で乗換へなければならぬ。乗換へをのびして私はたびたび先生を訪問した。また私が伊那のどこかの小、中学校で、その教師たちに講話などしてゐるとき、先生はタツツキ姿でよく出てこられた。矢島先生にはど

こか人をひきつける魅力があつた。一口にいへば人柄だが、その人柄は生来のものであると同時に、先生の一生を通じての経験と修養、あるひは祈りと愛情によつて精彩を加へてゐた。

(「ほんたうの教育者はと問はれて」)

ここで郷里隠棲中に見えた^まと出てくるが、矢島の唐木宛書簡(昭和二年九月二三日付)に、(昭和二年頃でしたか、始めて貴台を御願ひして伊那富の小学校で御講演を承りました)とあり、唐木が矢島麟太郎と知り合つたのは高島学校教員時代だつたことが判る(この食い違いについては後述する)。

矢島は当時、伊那富尋常高等小学校の首席訓導を務めており現役である。またこのとき唐木講演の内容は「悪について」であつた。(哲学の理論から「悪」を説かれやがてドストウエフスキーの「カラマゾフの兄弟」を分析されて人生に於ける悪と暗との深き根柢について私共の心奥に響く様な御話をき、ました)と、矢島は回顧している(同書簡)。なお二人の往復書簡(『矢島麟太郎遺稿集』収録)を通読すると、年齢的には一七歳年下の唐木に対し、矢島は少しも年長者的^にふるまわず、二人は互いに敬愛する関係だつたことが察せられる。

矢島麟太郎は明治二〇年(一八八七)五月、父久治郎、母志くの長男として上伊那郡伊那富村に生まれた。現在の辰野町である。父は村会議員を経て大正一一年に伊那富村長となつた政治家であつた。

矢島は松本中学校に学び唐木の先輩にあたる。当初は札幌農学校か盛岡高等農林学校を目指したが

果たせず、人生模索の時期を送った。のち唐木を感銘させた（人柄）を宿す矢鳥とはいえ、中学卒業まもない時代は、病気がちなこともあって癪が強く放浪癖の持ち主だった。製糸所の会計係を一か月で辞め、代用教員になる等を経て、明治四四年、長野県師範学校を卒業して本格的に教職の道を進み出す。訓導として在職九校、通算一七年一〇か月、さらに校長として二校、一二年間を教育界で送った。唐木順三も在職した高島小学校は訓導時代を過ごした学校の一つで、大正一〇年三月着任、一四年三月に離任して伊那富小学校へと移るので、昭和二年着任の唐木とは重なりこそないものの、時期はごく近い。田中一造校長、藤森省吾首席訓導というコンビ時代の在任、という点では唐木と同様である。

教育者としての矢鳥麟太郎を語るとき、信州白樺派の一人であったこと、およびクリスチャンだったことは特筆せねばならない。大正中期から信州では白樺派に影響を受けた教師グループの活動がさかんとなり、矢鳥もこれに参加していく。このグループからは子供の個性を重んじる教育主張がなされた。矢鳥は大正六年に柳宗悦やなぎむねよしの講演を聞いており、七年には長野に来た長与善郎ながよよしろうと面会、また武者小路実篤の「新しき村」講演を聞き有志晩餐会にも出席している。続く八年には軽井沢で有島武郎の講座を聴講したり、松本で武者小路と会ったりしたので、仲間と一緒に長野市後町小学校で泰西美術展覧会を開催した。信州白樺派の赤羽王郎が創刊した雑誌『地上』に小説を寄稿したこともある。

一方、矢鳥は大正七年、夫婦で受洗した。クリスチャンになったのは、後町尋常高等小学校の訓導時代に首席訓導として出会った手塚縫藏てづかぬいぞうの影響が大きい。矢鳥はクリスチャンだった手塚の人格に導



手塚縫蔵
〔手塚縫蔵遺稿集〕
より)

かれるとともに、その熱烈な信仰に共鳴していった。

清貧の生

手塚縫蔵もまた「信州教育」の巨星の一人である。明治末から大正期にかけて信州教育界で主張された「教育は人である」との提唱は手塚によって始まったとされ（中村一雄『信州近代の教師群像続』）、人格尊重を「信州教育」の伝統精神とする流れをつくった人物として知られる。

手塚は明治一二年、東筑摩郡広丘村（現・塩尻市）に生まれ、困窮生活のなかに育ったのち長野県師範学校を卒業、教育者の道を歩む。保科百助（前述）を社主として発行された週刊誌『信濃公論』に寄稿し、そのなかで、信州は教育国をもつて使命とし、その教育は「人格的であるべき」と説いた（同）。続いて手塚は、人格涵養の重要性を説く教師グループ「東西南北会」の首脳の一人となる。

この東西南北会は信州白樺派とともに大正期の信州自由教育の拠点となるが、大正末になると、県の行政当局によって両派は「気分教育」として非難され、露骨に排除された。この動きは凶らずも、官製教育に抵抗する現場運動として両派の存在の大きさを明示するであろう。手塚縫蔵と矢島麟太郎はそれぞれの潮流に深く関わっていた。

手塚―矢島と伝わった両派の自由教育運動の精神は、矢島を〈真の先生〉として終生敬愛した唐木順三にも影響を与えたはずである。明治人によって形成された日本のオールド・リベラリズムの伝統が唐木の人間観・社会観のなかに点灯している。それは

彼の戦後社会批判、正字正仮名遣いへのこだわり、人間主義的傾向を解説していくとき、見落とすことができない観点になるだろう。

手塚縫蔵は離職三回の苦境と家族を次々と病気で喪う悲運のなかで清貧の生を貫き、昭和二九年に歿する。葬送の式辞を読んだのは無教会派の矢内原忠雄（東大総長）で、そのなかに、（時の軍部も政府も私を排撃した。その時ただひとり、私のために応援し、祈ってくれたのは信州の手塚縫蔵である。このことはどうしても忘れることができない）との言葉がある（『信州近代の教師群像続』）。一方、手塚に兄事して信仰の道を進んだ矢島麟太郎は、受洗のち内面的には祈りと告白の日々であったもの（日記からそれが知れる）、ヘクリスチャンとわかるようなクリスチャンじゃだめだ」と考え、キリスト教徒であることは一切顕示しなかったという（同）。

さて矢島書簡（昭和二年九月二三日付）に戻るが、文中にある（昭和二年頃）の、伊那富小学校での唐木講演というのは、矢島らが招いて、京大哲学を卒業したばかりの新人教員唐木に、学生時代の知識をもとに講話をして貰ったことを指す。一方、上記唐木文では、矢島と見えたのは彼が教員生活を終えて郷里で隠居していた時分だという。講演時の出会いはあったとしても淡いもので、本格的な対面とはいえなかったのか。たしかに、『矢島麟太郎遺稿集』収録の矢島日記および矢島・唐木書簡を眺めると、両者の細やかな交流は矢島退職後で戦後となる。唐木順三は自著が上梓されるたびに矢島へ贈呈し、矢島もそれらをよく読み共感している様子がかがえる。とりわけ『詩とデカダンス』は「抱いて寝るほど」の親炙ぶりであった。さらに矢島は、唐木の書物で得たものを自らの講話のな

かではしばしば援用している。

戦後の矢鳥はまた、引用した文の通り、唐木がおこなった信州の小中学校での講演の際、よく足を運んで聞いていた。また、辰野駅で唐木と別れるとき、矢鳥は、蕎麦を包んだ新聞紙を電車の窓ごしに手渡し、周囲を感動させたというエピソードがある。

矢鳥の逝去は昭和三四年五月であった。唐木順三は葬儀に参じたあと「矢鳥麟太郎先生」を書き、故人を追悼している。

先生は「わが生涯」をもたれた人であった。ほんたうに一生を生きただけであった。私をふくめて、われわれの時代が、自分の足で歩き、自分の胸と頭で感じ、考へ、自分の口でものを言ひ、自分の手で作る、といふことがむづかしくなり、他によつて流され、その日その日を断片的に生きてゐるといふ状態であればこそ、痛切に先生の「わが生涯」に感じるのである。

先生は自分の一生を實にたいせつに生きた。一日一年をおろそかにしなかつた。花が咲けば花に感じ、雪が降れば雪に感じた。恋愛をすれば恋愛に生き、夫人を失へば、その失ひをたいせつに保たれた。

信州で生まれ、信州で育ち、信州で教へ、信州を愛し、信州で死んだこの先生のことを、後輩の

教育者たちはよく知つてほしい。

なお矢島と唐木の関わりは、戦後を扱った第七章で再び述べる（三〇二、三一〇頁）。

西田幾多郎の手紙

さてここで、唐木順三が（なんのためらひも、こだはりもなく、先生といへる、
真の先生）として挙げたもう一人、西田幾多郎について触れたいと思う。学生

時代は仰ぎ見るのみの存在だった西田と個人的交流が始まったのは上諏訪時代であった。（卒業した僕は郷里の小学校附設の補習科の教師になった。そして初めて先生のところへ御挨拶の手紙を書いた。思ひがけず先生から便箋二枚の御返事を戴いた）と、唐木は回想している（『西田幾多郎先生』）。

ここでいう西田からの書簡は昭和二年（一九二七）四月九日付で、本文全文は次の通り（『新版西田幾多郎全集』より）。

御手紙拝見いたしました 御病氣であつた由 どういふ御病氣ですか御大事に 小学校に御在勤の由 それは面白い どうかそういふ所から一日も向上の精神を失はず あましうる時間を読書と思索に用ゐ 不撓不屈 十年二十年の功を積まるる様祈ります 必ず何物かを得 何物かに達するでせう

唐木は高島学校に赴任して日を措かず、就職と近況の報告を西田にしたようだ。師への律儀である

うし、返信が早いのは西田のほうの律儀である。内容は温かいもので西田の包容力ある人格がしのばれる。

当時の西田幾多郎は、京都帝大退職をまじかにしていた。苦悩の半生を経て京大哲学の盤石の支柱へと成熟していったこの巨人哲学者は、すぐれた後継者・弟子に囲まれてまさに大円団といえる大学の最晩期を迎えていたのである。唐木と書簡を遣り取りした昭和二年といえば、二月に和辻哲郎のドイツ留学送別会に出て、三月には三木清が東京へ出立して去った。六月に帝国学士院会員となり、一〇月には哲学・哲学史第一講座（純哲）教授を田辺元に譲り、自らは新設の第五講座（西洋古代・中世哲学史）へと移る。十一月には田辺宛書簡で、ハイデガーを読み意見を改めたことを伝えている。新しい考え方への興味は退職近い老教授から失われてはいない。

翌昭和三年、二月に「哲学概論」を終え、〈これにて義務講義は終了か、心身の軽きを覚ゆ〉と日誌に記した。西田は責任の重みを解き、一人となる自在感に包まれている。ただし、四月から「哲学の究極的問題解決の一企図」を講じてはおり、六月にそれも終えるとともに京都大学での全講義が終わった。同年一二月から翌三月まで鎌倉に滞在したことが機縁で、昭和八年、この海辺の古都に家を持つ。鎌倉の西田家（極楽寺姥ヶ谷）はのち編集者唐木順三がさかんに通つて来、二人はこの地で親交を深めていく（第六章で詳述）。

西田の唐木宛書簡に戻るが、そこには〈御病氣であつた由〉とある。唐木は中学時代から引き続いて胃痙攣の持病を持っており、高島学校勤務の上諏訪時代にも猛烈な痛みに襲われたというから、こ



上諏訪での教師時代の順三
(昭和3年) (唐木家蔵)

の発作があったのかもしれない。胃痙攣はそれまで年一度くらい経験し、決まって暴飲暴食の夜の明け方に起った。〈文字通り七転八倒〉だったが、それでも〈三日か四日絶食してゐると治った〉(私の履歴書)。ただし、社会人入口の時期に経験したのは相当苛酷な病状であつたらしく、西田に報告した「病氣」とはこれを指すようだ。学生気分はもう許されない。そこでの緊張感が内臓

に、これまでにない負担を与えた可能性は大いにありうる。耐えきれず唐木は医者へ行く。すると病変は胃ではなく盲腸だと言われ、秋には手術と相成つたのである。手術といえは、盲腸だったとしても当時の田舎では大事件である。学生時代の友人・石川秀雄が立ち会ってくれた。五寸ほどの大きな傷跡が残ったが、手術ののち「胃痙攣」の症状はすっかり消えた。なお唐木の場合、このあと入院の経験は本書冒頭に挙げた(第八章でも触れる)胃潰瘍の手術までなく、変動する時代のなか教師・編集者・著者として多事多忙の人生を送った割には、おおむね大病は免れてきたことになる。

諏訪哲学会

『新版西田幾多郎全集』に収録された書簡のうち、上諏訪時代の唐木宛は昭和三年に
もう一便ある。全文を掲げる。

御手紙拝見いたしました。プラトンの方はどうも当地に適当な（人…原注）がない。ないではないが（波多野君の様な人があつても）講演にゆく人がない。東京の出隆君に御依頼になつてはいかん。小生の富士見行といふことも時に脳裡に浮ぶphantasma〔幻想…原注〕にすぎない。

御勉強と御健康とを祈る

五月六日

西田

唐木君

ややぶつきらぼうだが味のある手紙であり、意は尽くしている。唐木の上諏訪時代、小学校の教師が中心となつて「諏訪哲学会」を興す動きがあつた。発起人は清水利一であり、京大哲学出身の唐木は会創立の相談にあずかることになつた。へとにかくこの哲学会は「大志をもつてゐて、プラトンから始めて現代にいたる、めぼしい哲学書を、翻訳ながらに読むことになつてゐた」のである（私の履歴書）。月に一回くらいの割で、郡下の教員が高島学校の裁縫室に集まつてテキストの読み合わせをする。当番校が進行にあたり参加者は三〇〜四〇人。哲学者の講義もあつた。初等教育教員による自立的な研修会が地場でおこなわれるのは、まさしく「信州教育」の気風であろう。二一世紀も進んだ時代においてもこうした伝統は継承され、小さいながら信州では、現在も類似の活動が続いている。

さて、西田の手紙は、唐木が「諏訪哲学会」の講師について相談したことへの返信とみられる。昭和三年開催の第一回講座は結局、出隆^{いでたかし}を招いた。（出隆氏の講義を三日間位聞いたと思ふ）と唐木の回

想にもあり、西田の推薦により実現した模様だ(同)。教員たちは『クリトン』や『ソクラテスの弁明』、あるいは『饗宴』を事前に読み合わせたうえで、講師の話聞いた。この後、諏訪哲学会はとりわけ高坂正顕が多く招かれ、他に西谷啓治や天野貞祐あまのていゆう、務台理作が講師となった。西田門下ばかりであり、唐木の関わりも含め、西田の影響は諏訪の哲学会運動に大きく作用していた。

信州では、諏訪哲学会に先立ち長坂利郎を中心に信濃哲学会が発足している。長坂は小県郡東内(現・上田市)出身の小学教師で、自由主義の立場で行動した在野教育者らしい人物として知られる。(現・上田市)出身の小学教師で、自由主義の立場で行動した在野教育者らしい人物として知られる。長野県師範学校を出て東京高等師範学校(現・筑波大学)へ進み、そこで務台理作と学友になった。前述の東西南北会にも参加している。一方、務台のほうは三郷野沢(現・安曇野市)出身。東京高等師範学校から京大哲学へ進み西田に師事した。大正五年、西田幾多郎講演会が務台の仲立ちにより諏訪、上田、長野で開催されたが、信濃哲学会はこれを淵源としている。長坂―務台のラインが西田を指導者として迎える交渉をし、これが実って大正九年に会が立ちあがった(昭和二〇年、西田逝去により解散)。

こうした先行例をふまえて諏訪哲学会が発足するのだった。唐木順三も創立に関わり清水利一を中心に始動となった。清水は藤森省吾に勧められて信濃哲学会に入会参加しており、同会の活動を念頭にした哲学会を諏訪に構想したわけである。この経緯もあって、諏訪哲学会は西田門下の哲学者が講師として招かれた。戦後の昭和四四年まで続き、講義は西田哲学にとどまらず、ギリシア哲学からデカルト、カント、ヘーゲル、そしてマルクスや実存主義にまで及んでいる(中村一雄『信州教育とはな

にか』下巻)。幅広い哲学ジャンルを扱うという、まさに〈大志をもつて〉活動したのであった。

なお唐木順三は昭和二六年四月、『西田幾多郎全集』別巻三が刊行されたとき、『日本讀書新聞』で書評を書いている。講演筆記が収録された別巻三のなかで「信濃哲学会のための講演」他四篇は、それまで入手困難にあり同巻刊行でようやく一般の目に触れることになったが、唐木は次のように述べている。

これらの筆記をみて、いまさらに感じることは、先生が通俗の啓蒙家と類を絶してゐるといふことである。高い壇に立つて、既に考へてしまつたことを低い一般聴衆に教へるといふ気配は微塵もない。三木清の言葉をかりれば、考へる人をここでもまのあたりにみる。自分の底にあるわからぬもの、割りきれぬものを、なんとしても論理の世界へもち来さうとして苦闘してゐるさまが、どの筆記にもまざまざとにじみ出てゐる。それが講演といふものの性質上、即ち、その瞬間に頭に浮んだ考へを直接に語ることでゐる点で、著書よりも一層なまなましく感じられるのである。

〔『西田幾多郎全集』別巻三〕

信濃哲学会での西田の姿勢を貴重なものとして唐木は語っている。こうした師の姿勢は、〈一般聴衆〉に向かうとき、自然と弟子たち共通の姿勢にもなっていた。然すれば、高坂正顕を中心に西田門下生が講師となつた諏訪哲学会の雰囲気も察することができる。「信州教育」との親和性も思わされ

る講師西田の姿勢、そして西田に学んだ哲学者たちの姿勢は、取り澄ました学問指示ではなく、自ら〈苦闘してゐるさま〉を見せることで地場の教員たちに深い影響を与えたのだろう。唐木順三はこうした研修会活動の重要性を実践的に理解し、後年、評論家として一廉ひとかどの存在となり講義する側に立ったとき、かつての「哲学会」の伝統を継承する態度で現場教師たちに臨んだのだった。

なお、信州の「哲学会」には上述のほか次のものがあり、すべて西田門下を中心講師としている。主たる講師によって示すと、すなわち、木村素衛もとむらの上小哲学会、高坂・務台・金子武蔵の木曾哲学会、高山岩男の南安曇哲学会、同じく高山の上高井哲学会などであった。西田哲学と「信州教育」との深い関わりはこの点を捉えても明らかである。

3 物書きの初発

八百清顯

さて、唐木伝にとって上諏訪時代でさらに特筆すべき一つは、物書きとしての初発であった。唐木順三が若き頃より原稿用紙に向かっていた事情は、すでに高校時代を記した第二章で触れている。大学生のときも『信濃毎日新聞』に伽羅純なる変名で身辺記を寄稿した。また、卒業論文が『哲学研究』に掲載されたことは第三章で紹介している。とはいっても、卒論の活字化はさておき、他は模索期の筆試しの類といつてよかった。

その唐木に評論家として本格始動の機が訪れる。「芥川龍之介論」七〇枚の書き上げだった。その



上諏訪時代の順三（手前和服の人物）
（昭和4年）（唐木家蔵）

脱稿と発表は昭和四年（一九二九）の出来事であるが、同年は日本の評論界にとって忘れ難いトピックスが生じている。『改造』懸賞論文に宮本顕治「敗北の文学」と小林秀雄「様々なる意匠」が当選、発表されたのだ。唐木が宮本、小林と——とりわけ小林と——本格デビューが同年だったことは、のちの三者の立場と史的役割を考えると充分に目を惹く。三者はそれぞれの道を辿り巨人的存在へと至るが、当初は同時代の新人であり、同じ時代相に背中を押されて論壇に姿を現わした。前章で指摘し

たように、唐木の大学時代は左傾の一季であり、根源的な変革思想が青年層を捉えた政治の季節だった。その潮流は卒業後一層さかんになり、そのなかで唐木の「芥川龍之介論」もまた登場する。なおこの初作はのち唐木の第一評論集『現代日本文学序説』（昭和七年、春陽堂）で掉尾^{ちうび}を飾る位置に収録されており、本の性格を決定付けてもいる。

「芥川龍之介論」の登場にあって八百清顕の存在は欠かすことができない。すでに触れたように、唐木は松本中学校時代に八百と出会っている（四二頁）。唐木が四年生するとき、東京府立第二中学校から八百が二年生として転校してきた。二学年下だが年齢は三つ下である。それは八百が尋常小学校五年で受験して中学に入ったからで、彼はまさに秀才で



八百清顯たちと

(大正10年12月、順三は松本高校1年生)(唐木家蔵)
前列右に八百。八百の肩に手を掛けている後列右が順三。

あった。

唐木は下宿を共にしたことでの下級生と親交を深めた。八百の松本中学への転校は宮内省役人の父親が木曾営林署へ転勤したからで、ちょうど唐木の親戚が同じ営林署におり、そこからの紹介で同じ下宿に迎えたのである。運命的な出会いだったといえよう。とはいえ、このときの交

流は短い期間であった。八百の父親が亡くなり、彼は金沢一中に再転校していくのだった。唐木の回想をみてみよう。

上諏訪へきて二年目の冬、八百清顯が金沢から上京の途中、ここへ廻つて二、三泊していった。八百の生家は金沢で、四高から東大の独文科にすすみ、来年卒業といふときであった。八百とは文通はあったが中学以来会つてゐない。私はこの年少の友の来着をわくわくして待ちわびてゐたが、眼の前にはあらはれた八百は案外におとなであつた。大柄な格子の縞の入つたオーバーを着たスマー卜な青年であつた。

(「私の履歴書」)

中学時代の八百は色白の丸顔で、繊弱ささえあったが、再会した八百は「たくましく派手であった」（「東尋坊」）。「スマート」な（おとな）として、「不細工で憂鬱な顔をしてゐる私の前に立つた」のである（「私の履歴書」）。唐木はこのとき、八百に比べれば「いかにも不景気であつた」（「東尋坊」）。八百清顯の住まいはこのとき、本郷の菊富士だった。当時の高級下宿である。八百の郷里に育英資金を供する者がいて、高い下宿代に困ることはなかったのだ。菊富士には同時期、三木清や宇野浩二もいたというから、八百はジャーナリズムの賑やかな世界と接する機会があつたわけだ。派手で景気が良さそうな都会人の雰囲気はそこからも来ている。

都会で変わってゆく八百からすれば、上諏訪の唐木はかつての先輩として物足りなく見えたのであろう。のちに「君は田舎の洩はなたらし小僧を前にし、黒板を背にして立つことをやめて上京すべきだ」と手紙に書いて寄越したという（「私の履歴書」）。華美虚飾を遠ざけ田舎の質朴を重視する藤森省吾の教育実践と、都市の派手な雰囲気を投げかける八百とに挟撃され、唐木の魂は一瞬、引き裂かれたのか、どうか。やはり葛藤のようなものが生じたのは、唐木がこの八百との再会の経緯をくわしく筆にしていることから察せられる。

三木清と会う

八百と同宿の三木清は、「パスカルから急激にマルクスへ移つていき、マルクスをいはゆる「人間的」に解釈しはじめて」おり、新思想の発信者としてメディアの寵児になつていた（「私の履歴書」）。『中央公論』や『改造』に重要な筆者として絶えず登場し、雑誌の半頁大の広告には「黒地に白く三木清と染めぬかれてゐるのが目立つた」、そういう存在だったの

である。時代の危機が叫ばれ、変化が切実に求められてきたとき、へいままでの哲学にも左翼にもない清新な匂いを發した若き論者が登場すれば、ジャーナリズムは彼に飛びつく（同）。読者の心をすつかり捉える。三木清がそれであり、三木に清新を見出した読者の一人が八百清顯であった。

再会した八百はやがて大きな皮のトランクから三木の『唯物史観と現代の意識』を取りだし、そのなかの「マルクス主義の人間学的形態」を示して唐木に論を挑んできた。へ一泊したか、二泊したか。一泊なら一日一晩、二泊なら二日二晩、私にせまつたのである（「東尋坊」）。

私は八百にさんざんにやりこめられた。私の観念論の、につちもさつちもいかない不毛を突かれた。た。

（「私の履歴書」）

八百は唐木をなじるとともに、彼を励ました。八百との再会は昭和三年一月頃だったが、唐木は前年七月の芥川龍之介の服毒自殺に衝撃を受け、そこから立ち直れずにいたのである。当時の心境を「私の履歴書」は異様な筆致で描いている。

私の教員生活には不愉快なことはなにもなかった。むしろ快適に日々を過してゐた。しかしまた一方では、やはり憂愁の霧を除きえないでゐた。芥川の自殺がまたそれを引きだしてきた。人間存在の根源的な不安、私の底にすむ悪霊が私を冷笑してゐた。芥川の長い髪の毛の下のおもながな病

的な顔、皮肉な口もとが、私の悪霊と協力して冷笑してくる。

唐木は髪を長くして近くの山野をさまよった。芥川の書く河童の亡霊が出てきて、（人生は生くるに値しない）というのだった（『東尋坊』）。こうした心理状態のときに八百と出会ったことが、（皆さんにやりこめられた）理由の一つとなっている。八百は唐木の混乱に対し、厳しく接した。そしてこう告げたのである。（芥川を書くことによつて芥川をのりこえよ）と（私の履歴書）。まさしくこれは友への激励であった。唐木ははっとして目覚め、その励ましに従うことにしたのである。

唐木順三はなにより三木清に会おうとして上京した。菊富士に八百を訪ね、彼に伴われて止宿中の三木に面談を果たす。

三木は着物姿で大きな瀬戸火鉢に足をのばしていた。ゴールデンバットを次々にふかし、着物の裏にはタバコの焼け焦げさえあった。唐木は後年、三木を講演に招いたり、獄死した三木を追悼する念をこめて『三木清』を書いたり、彼と浅からぬ縁を持つのだが、この初期面談時の印象は芳しいものではない。「私の履歴書」は当時の三木について、（書いたものやその名前から想像してゐたのとはまるで違つて、ずんぐりと丸い顔はあさぐろかつた。無愛想で口もあまりきかなかつた。何を話したか覚えてゐない。モンスターといふ印象が私の中に残つた）と、いささかぶつさらばうに記すのみである。

「芥川龍之介論」

こうしたエピソードもあったが、ともあれ、八百の励ましを受けた唐木は岩波の芥川全集を買い、読み込んで、ついに「芥川龍之介論」を成した。作品前半に当たる「芥川龍之介に於ける人間の研究」の標題は、〈三木清氏の「パスカルに於ける人間の研究」に倣った。単に標題のみならず全体の考へ方に於ても同書に負ふところ多い〉と、唐木は『現代日本文學序説』収録版で書いている。

かくして書き手として唐木順三が中央に姿を現わす。すでに昭和二年一〇月、雑誌『思想』（岩波書店）の特別号「新進哲學論文集」に田辺元の推薦でエッセイ「救済に就て」を載せていたが、これは京大哲学科学徒の延長としての筆業だといえる。独自の評論家活動としては、昭和四年八月、三木清編集の『新興科学の旗のもとに』で「觀相的態度の克服」を發表したのを助走とし、「芥川龍之介論」を世に送ることで初発となる。

「芥川龍之介論」は同年九月、まず作品の後半部分が、「芥川龍之介の思想史上に於ける位置」と題して『思想』に發表される。三木清によつて『思想』編集者の谷川徹三に紹介されたことが機縁となつた。唐木は掲載誌を田辺元に送り、その田辺宛書簡で、〈少くとも私は、芥川論を書いたことによつて芥川からは超越出来ました〉と、八百の言に呼応するかの言葉を伝えている（昭和四年一〇月七日付）。

この作品は注目された。倉田百三ひゃくさうが関心を寄せ、同年一月、倉田編集の『生活者』に残りの前半部分が「芥川龍之介に於ける人間の研究」と題して發表された。これで全編公表となる。『思想』

には続けて一二月に「文芸評価の基準に就ての基礎的覚書」が発表され、唐木は新進の文芸評論家として存在を現出させた。

こうした人生の展開は唐木のなかに転身の希望を膨らませる。あるいは転身の願望が一種の緊張感を彼に招き、文業での成果をもたらしたともいえる。デカダンで孤独癖にひたり続けた己の心骨をたたく直し、人生を修業する意味で「信州教育」の現場に飛び込んだ唐木だったが、一通りの経験を積んだ自覚が出来、居心地は悪くなかったものの次なる道を探りはじめたのだ。昭和三年秋頃、すでに転身願望が兆していたのは、同年一月一日付田辺元宛書簡に、〈東京へ棒職先を探したいのでありますが、まことに厚顔の至りで御座いますが、若し先生に御心当りがありましたならば、御世話して戴きたいと思えます。私としましてはなるべく中等学校の教育学を担当したいと思えます〉と記されていることから判る。

教員志向は変わらない。それは信州で培ったものが背骨を成したからでもある。ただ信州とは違う世界も知りたくなってきた。唐木順三は未だ彷徨のなかに在った。彼はまだ若い。変化を求めたのだ。

第五章 「赤化」をめぐる——満洲、そして失業時代

1 二つの論文

唯物史観という

〈便利な包丁〉

昭和五年（一九三〇）春は唐木順三にとって決定的な転換の時季であった。前年秋に発表した「芥川龍之介論」がきっかけとなり、彼は〈年来の引込思案から一

歩ふみだした〉（「私の履歴書」）。芥川論は世評を買い彼には自信が芽生えた。もともと文芸評論家になろうとは〈考へたこともなかつた〉が、多少の偶然もあつてそのジャンルで道がひらけたのだ。以後、本格的な活動を文芸評論での筆業を中心に成していく。さらにまた芥川論は唐木に別の世界をひらいた。論の執筆が機になって、彼は〈それまで問題にもしなかつた「社会」といふものを考へるやうになつた〉（同）。唯物史観への接近である。

私は次第次第にマルクスの著作を読んでいった。マルクスは名文家である。ひとの心をかきたてるような筆勢をもつてゐる。私は翻訳ではあきたらず、気に入つたものは原文で読んだ。その上、唯物史観はきはめて便利な包丁である。これさへあればなんでも一応の料理ができる。わりきるといふことは若い時代には痛快なことである。なにもものでも始末でき、整理でき、その上批判ができた。社会の諸現象の診断ができるばかりではなく、処方箋も書けた。私の芥川論は同時に自己診断、自己批判でもあつたが、処方箋といふ付録までついてゐた。

(同)

芥川の書く河童の亡霊に呵さいなまれ、髪を長くして山野を彷徨うこともあつた唐木が、ドス黒い根源的悪に囚われる若さの過敏を〈自己批判〉しえたのは、〈わりきるといふこと〉からであつた。ニヒリズムなど不毛な観念の独り相撲にすぎない、「社会」を見よ、〈便利な包丁〉をもつて。

左傾の大潮流になかなか嵌らぬ「遅れてきた青年」だつた唐木順三に旋回の機が訪れた。彼は「進歩」の隊列に加わる。後刻、戦後社会が進むなか「日本」へと回帰し、『現代史への試み』から『無常』に至つた唐木の思想は、二〇歳代の半ばに訪れた疾風怒濤の季節——「遅れて」左傾し、相当なところまで「赤化」した一季——を経て成されたものと見なければ、陰翳までは掴めないはずだ。その前提に立てば、上諏訪時代の終わりから満洲時代、生家での失業時代を経て結婚上京に至る目まぐるしい変転期を把握しておくのは、唐木伝にとって不可欠であろう。本章の役割はそこにある。本来的に芸術家肌・破滅型ではなく教師肌・調和型であつた唐木、のちには「隠者」といわれるほど変化

なき生活を求め送った唐木にとって、例外的ともいえる彷徨時代を本章は以下、辿っていく。それは唐木「赤化」の問題について解説していく試みでもある。

先行作「観相的態度の克服」

八百清顯との再会、三木清への接近、それと歩調を揃える（便利な包丁）の獲得。これらが昭和三年にあり、翌四年には芥川批判文の書き上げと評論家の初発

がなされた。新世界に踏み出したときは、誰もがつい前のめりになりがちだ。唐木順三もその一人だった。昭和五年に入ると、新進評論家の唐木は二つの論文を矢継ぎ早に発表する。二月九日より三日まで『信濃毎日新聞』に「信州思想界を想ふ——中村孝三氏の所論を機とし」を連載、継いで三月、『信濃教育』に「危機に於ける若き教育者の使命」を掲載した。後者は標題からすでに「左傾」的であるが、この二論文は、戦後の唐木と重ねて想像できないほど「赤い」内容になっている。

すでに先行的作品「観相的態度の克服」（昭和四年八月、雑誌『新興科学の旗のもとに』収録）にて、思想転換を成した唐木の闘争宣言が読み取れる。引用してみよう。

而して「統一的なるものの分裂と、その矛盾に満ちたる構成分の認識とは弁証法の本質の一、基礎特徴の一」である。「精神及び社会を含めての自然」の中にかかる弁証法の正しさを証明することこそ科学の当面の問題である。唯物弁証法はレニンに於て、この意味の自然弁証法に発展したのである。我々はあらゆる分野より協同戦線を張つて、この生き生きした、力に充ちた、具体的な自然、に参与しなければならぬ。まことにマルキシズムは一つの世界観である。この巨大なる世界観を

樹立せんがためには、自然の各方面に於て実のなる花を開かねばならぬ。哲学の使命はこの各方面に咲く多彩な花を一つの弁証法的体系の下に統整することに存するのである。(傍点原文)

この論文は、続けて(現実の闘争と、矛盾葛藤の止揚)なくして完成に至る道はなく、(観相的態度)は克服せねばならぬと主張する。批判の組上に載るのは、(生の苦悩と不合理と無常から逃避するところに生れる独善的な)《骨董品》——具体的には、《徒然草》によつて代表せらるる玩具の世界、「さび」「しをり」「ほそみ」を至上とする幽寂な、センチメンタルな芭蕉の俳道、御能拝見の態度を最上とする高踏的な漱石の芸術観)——であつた。後年、芭蕉や漱石、そして(中世を中心にした)日本の古典が宿す(幽寂)の魅力と意味を追つた名作を著し、書き手として名が残つた唐木である。その彼の初発時の筆がこうした(骨董品)批判を發していたことに、(当時の思想状況の問題はあはにせよ)まずもつて驚かされる。

ここに居る唐木は、「明日」へ向かう輝きや雄々しさを求め、(骨董品)の繊弱な美意識を排した、項の硬い近代人である。そして何より、(全身を以て「生きんと決心する」恐るるものなき若者)であり、変革を希求する人間だつた(同論文)。芥川の亡霊を乗りこえるべく精神の格闘を経て、マルキシズムへの旗幟を鮮明に示した「赤き」青年が、敢然としてここに立っている。

唐木赤化せり

そして二つの論文である。これらは地元紙誌に發表されたこともあつて、批判の矛先は信州の教育界、その現状へと向かう。「信州教育」の実践に加わり、信州教師

の気骨と人格主義の優位を肯定的に受け入れた唐木にして、数年での急進的転遷だった。

「信州思想界を想ふ」のほうから見てみよう。これは、『信濃毎日新聞』紙上で中村孝三が一月二日から五回にわたり、「信州哲学界の一収穫」と題して唐木を紹介・批判したことを受けて書き、発表された。なお中村は未知の人だと唐木はいつている。

論文「信州思想界を想ふ」は比較的穏当な筆致で過去の〈反省〉と〈整理〉、そして〈止揚〉を訴える。かつて〈日本の思想界の最高水準と共に歩んだ信州思想界〉——小学校の教育者によって代表せられたとあるから、よりはつきり「信州教育界」としてもよい——は今日、〈取残され、萎靡した〉と見なし、何よりその理由を論じていく。理由一は先達への〈気力なき尊敬〉、すなわち偶像崇拜する態度、二はマンネリ化したカント的観念哲学の弊害、三は教育指導者の守成的ふるまい、となり、これらが新時代対応への意気地を教員たちから失わせた、と主張している。

この批判が実のところ何を意味するかは、唐木によって退嬰的^{たいえい}と指弾される者が、〈ただマルクスと言ふ文字に戦慄し、レニンといふ言葉に腰を抜かす輩〉だと示されることで知れよう(同論文)。唐木が批判したのは信州教育界のマルクス思想への無理解であり、筆はおおむね落ち着いたものとはいえ(マルクスを批判せよ。マルクスを現実的に、理解せよ)との文言もある)、昭和初期の時代思潮を考慮すれば、衣を被った「赤化」主張と受け取られる面は大いにありえた。論中には、マルクスを排し旧古を後生大事にする教育機関を〈廢墟〉とさえ書く、相当思い切った筆さばきもある。

そして第二論文ともいえる「危機に於ける若き教育者の使命」が翌月公表された。第一論文が普及

力ある新聞掲載ゆえ遠慮していたところを、専門誌発表のこちらはかなぐり捨てた印象で、そのぶん主張は明快になっている。いくつか引いてみよう。

今日の信州教育が、新興思想に対し、食はず嫌ひの悪思想よばり、矯激よばりを発することは、既に信州教育の凝固と死を意味しないであらうか。(傍点原文)

ここでいう〈悪思想〉は、共産主義を指すと言葉として論文前段ですでに明示されている。そして第二論文は次のように告げる。

マルキシズムは、ひとつの人間解放の理論である。物質化され、手段化された人間、市場が、愛、良心、徳、義務をも支配してゐる末期資本主義治下の人間を、真の人間——まさに自由な、人格者としての人間——マルクスの言葉を以て言へば、人間が人間の最高本体である人間——への解放を実現する武器としての理論である。

このくだりは、『信濃教育』誌上で諸家によってなされたマルキシズム批判に対し、〈ひとつとして肯綮に当たつてゐない〉と断ずる文脈において書かれている。マルクスの考えを人格無視、人間性無視の物質的平等主義だと難ずる人々に向けて主張された反批判なのだ。唐木はここで、批判者を〈滑

「稽」といい「悪しき教育者の典型」とまでいつている。そして論は進み、ついに次の言立へことだと至る。

我々は日本を反省し、沈思し、新時代の透視へ勇敢な一歩を進めなければならない。しかしらば人間解放の積極的可能性は何処にあるのか。我々が人格の一切を無視されることによつてのみその存在を公認されてゐる階級にそれを見出すことは当然のことである。

ここでいう「階級」がプロレタリアートを意味するのは誤読のしようがなく、ゆえに第二論文の主張がなにを求めているかも明確である。唐木順三が呼びかけるのは、「階級」と共に奮起し戦うことであり、克つことであつて、「人間解放」闘争の戦場に向かう「率先」なのだ。

ロシア革命は大正六年であり、米騒動は七年、過渡期のなかで青年たちの模索は早くに始まつていた。その只中で唐木はむしろ古典派・教養派の衣装を着たままであり、同時代の潮流から距離をとり続けていた。こういった抑制的なところは唐木の原質と深く関わる。唐木には三木のようなエネルギー奔出のまばゆさはなく、舞踏の野放図からずいぶん縁遠い。涙と熱意、憧憬と感激に囚われた行動は見つけにくい。彼は風雪を経る鈍牛だった。その彼が同じ西田門下の三木の影響を受け入れ、「引込思案から一步ふみだし」、「社会」といふものを考へるやうになり、左傾していった（「私の履歴書」）。唐木は河上肇の左派思想にはもた凭れなかつたが、アントロポロギイを唱える新進マルクスボーイ三木の「人間学的」左派思想には意を通じ出した。（とまどひながら感心した）のである（「東尋



三木清
〔三木清全集第11
巻〕より

坊〕。

実際この時期（昭和三年末～四年、唐木満二四～二五歳）、思想に留まらず人生の展開に関して、唐木には三木清の影響が強い。前述のごとく助走作「観相的態度の克服」は三木が発刊編集する雑誌『新興科学の旗のもとに』で発表されたものだし、芥川

論は三木の紹介で『思想』に載った。一方、三木は唐木の招きで、上諏訪の教員グループに講演したこともある。唐木は三木との関係を深め、三木もまた次第に、唐木を思想的同志のように見なしてきた様子だ。唐木が後年、『三木清』を三木獄死から日を措かずに上梓したのは、追悼の念、悪評から救出したい念とともに、評論家デビューと転身（後述）のとき世話になった三木への謝意もあったのだろう。『三木清』を書いた頃の唐木は、三木と思想的距離が広がっていたはずである。それでも本を上梓して三木の魂に応えようとしたのは唐木らしい律儀だといえるし、三木と唐木の交流に外面以上の深いものがあつたことの証左だと思う。

その三木が思想的導き手となり世に登場した「危機に於ける若き教育者の使命」は、さすがに信州教育界で問題となった。唐木赤化せりの評判が立ったのである。このため彼は後年、失業時代を余儀なくされるが、その経緯は追って述べていく。その前に本章は、転身の事情につき記さねばならない。

2 〈未完成〉で〈活潑〉

奉天へ

二論文を発表した同時期の昭和五年三月、唐木順三は高島学校を退職する。向かう先は満洲奉天であった。唐木が転身を目指していたことは、第四章で紹介した田辺元宛の書簡でも分かる。その田辺から、弘前の高校で哲学教授の席が空いたが行く気はあるか、との手紙が来た。ちょうどその頃、満洲教育専門学校教授の話も来たのである。仲介したのは三木清だった。三木の兵庫県龍野中学時代の恩師に寺田喜治郎がおり、渡満して満洲教育専門学校の教務主任となっていた。寺田は哲学教授の適任者を求めているのだ。

三木清の昭和四年一〇月二八日付唐木宛書簡に、〈満洲からはまだ返事が来ませんので、もう一度至急手紙を出します。それから、いづれにせよ、東京でも心当りを探してみておきます〉とあるから、唐木は三木にもまた転職の斡旋を頼んでいたようだ。

続く一月六日付の唐木宛三木書簡には、〈満洲教育専門学校の寺田先生から返事が来ました。唯今は人員一杯ださうですが、何とかして貴兄を採用したきとのこと、履歴書二通と身体検査證とを送ってくれとのことです〉とあり、昭和五年二月一日付書簡では、〈今日満洲の寺田先生より手紙来り、貴兄を奉天の満洲教育専門学校の教授に四月より採用の予定の旨通知がありました〉と記される。二月二〇日、唐木は上京してきた寺田に会う。正式な採用が決まり、それゆえ田辺からの弘前の話は



信州を去る順三の送別会

(昭和5年3月、諏訪・永明村にて)(唐木家蔵)
前列右が順三、中央は石川秀雄。前列左は永明
小学校の藤原、後列右は小松で、のち信州教員
赤化事件(二・四事件)で検挙された。

辞退することにした。

唐木が遠い満洲の地を選んだことにはいくつかの理由が推測されるが、やはり直近の「赤化」の経緯は重要な背景を成したと考えられる。唐木の奉天時代は満洲事変の前だったが、すでにそこには昭和維新派や社会主義者がおり、そしてさまざまな国からの亡命者もいた。まさに「ごった煮」状態である。また満洲には「大陸的」といわれるおおらかさがあり、日本で縮こまっていた者に心身解放をもたらす新天地といえた。

新しい世の中はしがらみなきアナキーな現場から生まれるのだとしたら、左派の描く世界を遠望しだしたまわれるのだとしたら、左派の描く世界を遠望しだした唐木順三の惹かれる場所になったのは想像に難くない。思想転回を起こした唐木にとって、満洲行きはむしろ自然な選択だといえた。

四月、唐木は満洲へ赴任していく。途上、京都に立ち寄り、西田幾多郎を自宅に初めて訪ねた。転機を迎えるにあたり、尊敬してやまない西田に会っておきたかったのだ。

これを経て唐木はさらに西行し、海を渡る。朝鮮京城に宿泊した際の様子として、日本人が無闇に威張り、ぜんたいはせせこましい印象だったと「私の履歴書」は書いている。それもあって、鴨緑江

を渡り広い大陸の光景が見えるとはっとした。奉天には二〇日に到着。満洲医科大学予科の教授をしていた旧友相原信作のアパートで三、四日厄介になったのち、ロシア人の家に下宿する。

到着まもない四月二五日付で、唐木は京都の田辺元宛に書簡を送り現地報告をしている。

想像した奉天とは大分相違してゐます。附属地はすっかり洋風の都会にて、支那人の馬車人力車、ロシア人が運転するバスなど疾駆してゐます。「中略」奉天はとても生活意欲の旺盛な、動いてゐる都です。朝鮮を通つて、単彩な自然と人、没落を甘受してゐるが如き群、をみて、憂鬱の気持をもたざるを得ませんでした。当地の人々はすべて潑刺として動いてゐて、みるからに元気です。

相原と歩いているとき、ロシア人の子供が哀願しながら物乞いに来て、唐木は驚かされた。内地なら不況下でもなかなか物乞いとは出会えない。まして子供である。また、山東省あたりから来た中国人苦力ケイリの堂々たる体力には（生理的な被圧迫感）すら感じた（同書簡）。見るものすべてが珍しい。人々の生き方は辛辣なほどに現実的で、戦慄すべき謎の活力に充ちていた。それが奉天の第一印象だったのである。

ヘーゲルの肖像

唐木を迎えた相原は京大哲学科時代の同期生である。作家網野菊と結婚し、繁華街の通りにあつたアパートの三階に二人で住んでいた。かつて京大生の唐木は田辺元タナベに叱られて、哲学科をやめようと思つたことがある（一〇七頁）。このとき、教室を出て真如堂の

下宿に帰る途中、吉田山の坂道で彼を慰めてくれたのが相原信作であった（私の履歴書）。相原の家は真如堂の横手にあり、帰り道が一緒だったのだろう。その相原と卒業三年後に異国の地で再び縁を持ったのだ。

唐木順三の下宿は、白系ロシア人パーヴェル・ペトロウイチ・ペテロフの家だった。前の止宿人は教育専門学校の同僚（西洋史担当）になる伊東六十次郎で、彼が去った部屋に唐木が入ったわけだ。このとき舎監になり寄宿舎へ移った伊東は、北一輝の思想を奉じる者で、学校内に組織らしきものをつくるとともに、関東軍の青年将校とも連絡を取っていた。弘前出身の眉目秀麗な青年教師だった唐木は回想している。昭和維新が叫ばれる時代であった。満洲事変も近い。奉天には左派とともに維新運動の信奉者もあり、まさしく思想の坩堝るつぼだったのだ。なお伊東は思想上また人脈上からも、満洲国が建国されるとそこで活躍する。敗戦を迎えソ連に抑留されたが、〈その思想をまげず、最後の最後の引揚者として帰ってきた〉という（同）。

ロシア人の家は教育専門学校のすぐ近くだった。相原信作は田辺元宛の手紙で、唐木の新居についてこう書いている。

唐木君が来られて奉天もにぎやかになりました。ほんとに思ひがけないことでした。このロシア人の下宿には今初めて寄つたのですが、窓の外は満鉄駅から附属地を通じて、まっすぐに城内にゆく大道路で、アスファルトの上を自動車や馬車がすべり、色んな国籍の色んな階級の人間が通るの

が見える所です。唐木君は此部屋でフェノメノロギー デス ガイステスを勉強するのださうです。が 壁の上方からヘーゲルの肖像がそれを見下します。

(昭和五年四月二五日付、唐木の田辺宛書簡に同封)

若き唐木順三は転身していった先、異国の地でヘーゲルの肖像を掲げ、『精神現象学』を学習しようとしていた。彼の精神はまだ彷徨のなかにあったのだ。然ればこそ、自学の意欲を生んでいたのである。唐木は田辺元にこう書き伝えている。

ヘーゲルのフェノメノロギイに手をつけました。巨大な手が、私の小さいからだ全体にのしかかつて来るのを感じます。彼が、歴史からくみとり、歴史に織りこんだ糸の目を少しづつほぐしてゆくことは、今の私にとつて愉快なことです。目次だけ見ても、そそりたつ大建築を感じます。ヘーゲルに呑みこまれるか、ヘーゲルを後にし得るか、とにかく、うんと力を入れてみます。私にとつては困難な、また哲学への新生が約束されてゐさうな相手です。(実は諏訪時代は、古典から殆ど遠ざかつてゐましたので、ヘーゲル哲学の考へ方は、それに歩調を合せるのに大分、骨が折れるのです。)

(田辺宛書簡、昭和五年五月四日付)

強い意気込みがある。田辺は渡満した唐木に、(古き伝統の真中に居て少しづつでも徐々に新しき

生命の發展を「ördern する（おしすすめる）」ことを期待していると伝えてきた。唐木はこれを拝し、田辺の温情に感激していささか昂奮しながら返信した様子がうかがえる。なお唐木は同じ田辺宛五月四日付書簡で、満洲の印象を次のように記した。

満洲はあらゆるものが粗野で、未完成で、非文明的です、それだけ私は「西洋の没落」との反対の意味に於て、満洲、支那民族の将来に期待をかける心になつてゐます。昼の十二時頃街を歩くと、苦力や車夫が、道路に坐りながら、黄色いパンのやうな固いものをガリ／＼と、食つてゐます。彼等は健康で、晴朗で、活潑です。日に十錢位の食費さへあれば優に労働力を養ひ得ると言はれてゐます。そんな情景をみても、彼等の、底に動いてゐる非文明的な未熟さに、恐ろしいもの、おし返さるるものを感じます。それに対し、在満日本人の、Teeのない生活、Philisterの悦楽、そんなものに、寒いものを感じざるを得ません。とにかく満洲は、面白い、ところですよ。ここに來て十余日を経たのみですが、日本と云ふものを冷靜に客觀的に見れるやうに思ひます。

満洲の唐木はある種の壮大な感情のなかにいる。彼は汽車の窓から大きな太陽を見、この陸続きにロシアがあり、欧州があるとの実感に打たれたという。それはこの書簡に流れる「大陸惚れ」を伴つた解放の心性と繋がる。左傾ののち日本を離れた唐木は挑戦的だった。暗鬱の霧を晴らした幸福のなかにあつた。それゆえに、唐木は田辺宛同書簡の末尾にこう書いたのである。

私はこの頃自分の健康を粗末にしないことをひとつの義務とも感じて来ました。

大陸の唐木は、いうならば生の躍動エランツイタールの一角を迎えていたのだ。

ベテロフ一家　下宿は二階建ての棟割長屋だった。唐木が落ち着いた部屋は二階で、縦に長い、

畳にしたら八畳位の広さで、洋服箆笥が一つ、それについてゐる鏡は僕の顔を極端にゆがませなければうつきさない程のものであった。木のベッドと、スプリングのない椅子、それに小机、そんなものであった。（奉天の外人たち）。

主人ベテロフは帝政ロシア時代のゲネラル（将軍）だったという。（ロシア的な憂鬱で深い顔をしてゐた）この亡命者は、表向き写真屋を営んでいたが、（それで生活の資をえてゐたとは思はれない）謎の人物である（私の履歴書）。無口で交際を好まず、いつも考えごとをしている風情だった。話が政治や社会の有りように関わりそうになると、ことさら口が重くなる。ロシア労農政府の打倒を夢見る団体の新聞が来ており、ベテロフは関係者と食卓を囲むこともあった。彼は貧乏だったらしく、唐木の部屋にやって来て財布の底をはたくなり、もう金がない、下宿代を先払いしてくれと迫ったこともあったという。

それでも、唐木と一緒に郊外の草原へ行つたとき（家の中に茅などをまくロシアの風習があり、それを取りに二人は出掛けたのだ）、ベテロフはしみじみとこうした感慨を洩らした。（人間は同じやうな顔をして、愚にもつかないことをしやべり合つたり、争つたりしてゐる。ただかういふ自然の中へ出たと

「き、自分は救はれる」と（異邦人）。ペテロフの半生が刻んだ失意と、それがもたらす深い孤独が伝わるエピソードであろう。陸軍大学出身のこの元少将は草原行で初めて多弁となり、草を踏みしめ大股で歩き廻りながら北方の自然の美しさを唐木に語ったという。フィンランド森林地帯やステツプのことを彼は話した。かつて遠征に行った場所なのかもしれない。

この日を境にペテロフの重い口は多少やわらぎ、唐木も親しみ出して話をする機会が増えた。あるとき二人はトルストイ『戦争と平和』について話を交わした。ペテロフは陸軍のアカデミーにいた頃、この小説をテキストに使ったのだと言い、アンドレイに同感するとか、オーテルリツツの戦いは実に正確無比に書かれているとか、そういった感想を語った。そしてまたペテロフは唐木に、フクダを知らないか、と再々尋ねてきた。第一次世界大戦のときペテロフ部隊に来た日本の武官だという。

ペテロフ夫人はカザンの大学を出たインテリで、やせて鼻眼鏡をしており、ドイツ語とフランス語を流暢に話した。幼稚園の園長を務め、また奉天のロシア婦人の世話役のようなことをしていた。テキパキしすぎてヒステリックな面もあり、機嫌が悪いときは声を掛けても返事すらない。とはいえ、同国人が病気となれば一緒に医大へ行き通訳の労をとる、食えない者がやって来ると食事をわけてやる、といった「ロシア的親切」あふれる面もあった。

夫婦には五歳を筆頭に三人の男の子がいた。食事が出来たと唐木に伝えるのは長男ヨーシヤの役目で、この子はドアをノックしてあげると気をつけの姿勢をとるのが常だった。軍隊式である。次男ニイカは甘えん坊でよく泣く。三男マイカはまだよちよち歩き。そして一家は食事につくとき、部屋の

片隅にあったマリヤの小像に十字を切っていた。

亡命者と流離人

入居半年後、ペテロフ一家は突然上海へと去って行く。入れ代わって来たのはチエレホフ一家だった。チエレホフは同じく写真屋で、ペテロフから一切を買い受けたのだ。下宿人唐木にしてみれば当主が替わっただけとなる。

シベリア・オムスク生まれのチエレホフは大頭の六十男だった。ペテロフと正反対の人物で、いたっておしゃべり。善良かつ開けっ放しの人となりで、客が来る、ウオツカをのみ、オグレッツを食べながら、炉辺話が始まる、こころした具合である（奉天の外人たち）。チエレホフには商才もあつて、如才なくふるまうので写真屋は俄然繁盛しだした。それから、チエレホフの細君は、こちらもペテロフ夫人とはまるで違い、肥ったお人好し。交際好きで話好きな夫婦と過ごすうちに、唐木のロシア語は自然と上達し、またウオツカの腕もめきめき上がった。

唐木が奉天で交流したロシア人のなかで、ポポフ夫人の存在も記さないといけない。下宿屋で自然に習得するロシア語もいいが、次第に唐木は正則でのロシア語習得を目指すことにした。教師になってくれたのがポポフ夫人である。丸顔のやさしく上品な女性で、医大前の外国人専用の住居に住み、故郷はリトアニアだった。旧ロシア領の貴族の家に生まれ、ペテルグラードの大学にいるとき革命が起き、ウラジオストクへ逃げてきた。夫のポポフはウクライナ人だが、酒に強いだけの男で、夫人とは不釣り合いである。しかもポポフ夫人は法律的にはナカニシ夫人だった。シベリア出兵に関係ある日本人と結婚しており、そのため日本籍なのだ。

複雑な半生を歩んできた女性で、ずいぶん辛い目にも遭ったのだろうが、それでも生来の上品さは失わず、またそのロシア語には音律的な美しさがあった。唐木は一週三回、一時間ずつこの女性についてロシア語を習った。テキストは初めトルストイの童話、継いで文法となり、最後にはドストエフスキの『白夜』を使った。ポポフ夫人はのち夫と別れてスエズ廻りの貨物船でリトアニアへ帰るが、日本籍のために思うように職につけず、日本に適当な職はないかと唐木に便りを寄越したこともあったという。

唐木が奉天で交流した外国人として、ほかにポーロオという腰の据わったフランス人の老叟ろうそうがいた。ポポフ夫人の住んでいた外国人専用住居に暮らし、住人にはユダヤ人が多かったなかでポーロオは異質の存在だった。元は製菓工場の経営者で生粋のパリジャンが自慢である。それもあって文学はフロベールまでがいいという。

ポーロオの洒脱な人柄を唐木は好み、へこのちいさんに二度ばかり、うんと御馳走してやったことがあると懐かしく回顧している（「奉天の外人たち」）。ひとり暮らしだったポーロオは故地パリと家族を懐かしんでいたが、唐木たちは、重大な政治犯でフランスに帰れないらしいと噂しあっていた。こうして見ていくと、当時の奉天は亡命者や流離人の集うところであり、唐木はクセ者だった彼らとも自然に付き合えてきた。彼らにはかつて將軍であり貴族であり裕福な工場経営者である。それが革命と戦争と混乱の時代にもまれ、東の果てまで流れて来たのだ。異郷にひとまず落ち着いた彼らはみな人生の翳りを抱いていた。その姿を若き唐木順三が眼深まなこく留めていたことだけは確かである。



満洲教育専門学校教授
時代
(昭和5年) (唐木家蔵)

3 満洲教育専門学校

風変わりな教師たち

唐木が教壇に立った満洲教育専門学校は、南満洲鉄道会社が設置し、満洲で日本人小中学校の教員を養成する学校だった。修業年限は三年である。給費制度があり日本全国から貧しい家の師弟を集めており、なかでも九州出身者が多かった。入学試験が難しかったので生徒はみな優秀である。唐木の本俸は一〇〇円。ここに手当がついて実際には二〇〇円以上の月収があった。

教育専門学校では哲学概論を担当した。初歩の学生相手なので講義は苦もなくおこなえたが、唐木はまもなく哲学だけではあきたらなくなり、有志学生のための特別講義として日本の近代文学を講ずるようになる。夏目漱石をはじめ、二葉亭四迷、北村透谷、石川啄木、島崎藤村などを採りあげていった。このときの講義記録が母胎となって、のち第一評論集『現代日本文学序説』の収録作「島崎藤村小論」「二葉亭・透谷・啄木」「夏目漱石論」が成される。それから、唐木は教専で教えるほか、満洲医科大学の専門部でも教壇に立った。生徒は中国人だけで、ここではドイツ語を講じたのである。

満洲教専の校長は前波^{まえは}仲尾^{なかお}という老人だった。正規の学歴



満洲教育専門学校校庭にて
(昭和5年4月) (唐木家蔵)

前列左から2人目が順三。

ようだ。このとき前波はまた、へ日本で雨を描いた画家は広重だ」とも言った。唐木はその評がずっと頭にこびりついていて、四〇年経っても忘れ難いとしている(「雨と廣重」、このエッセイは満洲時代の三八年後に書かれている)。

唐木が赴任した頃の満洲教育専門学校はほかにも個性的な教師が集まっていた。教頭はのちに「ハス博士」として有名になる大賀^{おおが}一郎であり、ほかにも遠藤隆^{りゅうじ}次、大森志郎、野田早苗、斎藤兼吉、そして前述した伊東六十次郎などがいた。遠藤は古生代化石の研究で知られ、満洲国で中央博物館の

をふまず独学で勉強した努力家で、偏屈であるのと同時に反骨精神も旺盛。博識があり常に一言言を持っていった。ただしとにかく風変わりで、たとえば、古事記のトルコ語による解釈をして唐木を驚かせている。日本語はスメール語の影響下にある、という前波独自の説からであった。またある日、前波校長と唐木が話していたとき、へ満洲には、はるさめも、しぐれもない」との話題になった。言葉には歴史と風土が込められていて、雨の降りようや、傘、人間の姿を含めて、ひとつの雰囲気がつくられて「はるさめ」になり、「しぐれ」になる。同じような雨の状態でも、満洲に降るものはそうは呼べない、といった遣り取りだった

設立に関わったのち、戦後は埼玉大学学長を務めた。大森は日本史学者で満洲建国大学教授を経て、戦後は東京女子大学教授など。野田は経済地理学者でのち福岡大学教授になる教師だが、満洲教専の当時俳句をたしなんでおり、唐木と一緒に歩いているときへにぎやかな産院の春掃除」という句をひねったという（私の履歴書）。一方の斎藤は体操の教師で、日本が初めて参加したアントワープオリンピック（一九二〇年）の日本代表選手。水泳自由型に出場して、片抜手をきり一〇〇メートルを泳いだ。ほかにも名物教師がごろごろいて、その意味でも異国の学校は面白いところだった。

なお唐木はこの学校に臼井吉見を招こうとして、軍隊を終えたばかりの彼に声を掛けたこともある。〈ものぐさの僕は、満洲まで出かける気にはなれなかった〉と臼井は自伝「蛙のうた」で書いている。

「打倒日本
帝国主義」

奉天には日本の連隊が駐屯していた。そこは満洲経営の前衛基地でもあったのだ。唐木渡満の頃、ちょうど会津若松の連隊がおり、松本中学時代の旧友須山宗吾が士官となって来ていた。須山はのちノモンハン事件に出動する。

軍も展開している奉天では日本人と満洲人の貧富の差が大きかった。唐木が街角で「ヤンチョ」と呼べばすぐに駆け寄ってくる人力車は、五銭、一〇銭の仕事。街角にはトウモロコシを焼き売っている貧しい老婆がいるし、乞食もあちこちにうろついていた。一方の唐木は月収二〇〇円以上の独身者である。この落差に唐木は居心地の悪い思いをした。

奉天郊外に北陵があり、さまざまな彫刻や壮麗な建物が立ち並ぶ名所だった。もともと清の皇帝を祀った場所である。そこへ行くには満鉄の線路を越えないといけなかったが、線路の地点は張作霖爆

殺事件のあった現場で、記憶を残すために車輛一輛がそのままの姿で置かれてあった。張学良が保存していたのだ。満洲は争乱の気配があちこちにあり、日本と張学良側の緊張関係も続いていた。唐木は日本の前衛基地ともいえる奉天に在って、国際政治の現実を目の当たりにすることも多かつたはずだ。

ときに、異地奉天で暮らしはじめた頃の唐木のもとへ、芳しからぬ報が伝えられてくる。送り主は八百清顯、内容は三木清の逮捕だった。昭和五年六月三日付の八百の手紙にはこう書かれてある。

三木清氏については先日來拘留されてあるといふ風評が専らです。實際運動には関係がないらしいのですが、どうも極左の運動に金を寄付したらしいのです。

〔東尋坊〕

共産党の外郭団体に資金提供をしていた疑いで、三木は官憲にふみこまれたのだ。五月末のことであつた。東中野の自宅にいたときで、私晝ひつぎょうの出来事である。三木清という存在がいかに重要であつたかは縷々述べてきたのでくり返さないが、上諏訪時代末期から満洲時代の唐木にとって人生の結節点に立つかのごときこの先達が、ついに官憲の捕縛に至つたという。三木の思想を考えれば、また、治安維持法下の取締強化の時勢を考えれば、ありうる事態というべきかもしれない。それでもいざ現実となればショックは大きい。すぐのちの六月一日、体だけは元気だと三木本人から手紙を貰う。多少は心も落ち着く唐木であつた。

ところで、満鉄経営の学校で教える者ゆえの好都合として、唐木は満鉄の乗車券を得ることができ、それを使って彼は中国北部をよく旅した。北は満洲里、南は北京まで無賃で行けたのだ。ロシア色の強いハルビンを訪ねたときは、馬車が石ただみの道を勢いよく走っており、図書館ではレーニンの肖像が大きく掲げられていた。その図書館はソ連の勢力下であった。一方、哈爾濱駅には聖母マリアの大きな絵があり、その前にローソクが立っている。こちらはロシア正教である。唐木は街を見たあとロシア女のバアに入り、ウォツカを呑んだ。高い店だったのだろう、持ち金をすっかり使い果たし、ホテルにこもって奉天からの送金を待つ羽目になった。

哈爾濱では東支鉄道クラブの図書室を見にも行った。

三列に並べられた大机の上には世界各国の一流の新聞雑誌が、ところせまきまで積まれて自由に閲覧者を待つてゐた。それがまた科学や哲学や社会科学のあらゆる方面のものが網羅されてゐるやうであつた。
(「近時斷想」、昭和六年七月、教育専門学校『教専たより』第八号収録)

充実ぶりに目を見張った唐木は、奉天の満鉄社員クラブのことを思い出す。

あそこには、たしかに『主婦の友』『サンデー毎日』『アサヒグラフ』はあつた。そして此頃『中央公論』と『改造』は戸棚の中へ入れられて、一寸読むにも係員の手をわづらはさなければならぬ



旅順に遊べる時

(昭和5年12月31日) (唐木家蔵)

右順三、左は中国人の馬車屋。

やうになつてゐる。

(同)

昭和一七年に始まる『中央公論』『改造』等への言論弾圧事件(横浜事件)はまだ一一年先だが、左派や自由主義の論者を重視した両誌が〈戸棚の中へ入れられて〉いたというのは、当時の満洲の実状を示唆して興味を惹かれる。満洲は「満洲国」以後、所謂革新官僚系の国家主義的人脈が活動する場所でもあるのだが、事変直前の頃(柳条湖事件勃発は「近時斷想」発表の翌々月)、当地の政治状況の片鱗が見えてくる。

ほうぼう、方々に足を伸ばしていた満洲の唐木順三は、北京へ出か

けてもいる。名所旧跡を型どおり訪ねたあと、〈中国の飯店で耳をかかせ、爪をさらせ、胡弓をきき、蘇州杭州出身と自称する細い腰の遊び女たちに会つた〉(私の履歴書)。とはいえ当時の北京もまた、日本人にとって暢気な旅人でいられる場所ではない。北京城の九門のうちの一つ、哈德門の楼上に大きな横文字で「打倒日本帝国主義」と掛かっているのを唐木は見たのである。

また、赴任した昭和五年の年末に旅順を旅したのは、水師営会見所を背景に中国人馬車屋と二人で写る一枚が唐木家に残っていることから判る(右掲)。同年二月三一日との撮影日記載が写真裏

にある。

なお前記した三木逮捕だが、三木が入獄を解かれたのは昭和五年一月であった。二〇日付の唐木宛書簡で、彼はこう書いている。

私は去る八日に元気で帰つて来ました。全くつまらないことにひつかかつたもので少々馬鹿々々しくなります。でもいづれにせよ好い教訓でした。これからは何事もしつかりした気持でやつてゆけることと思つてゐます。

学校存続問題

刺激に充ちた唐木の満洲時代は短かった。

赴任した翌年、昭和六年（一九三二）の年初のことである。満洲教育専門学校は次年度の生徒募集を停止すると、満鉄本社から申し渡されたのだ。前年一月八日には生徒募集の公告を出していたにもかかわらず、突然の取消命令であつた。新入生が来なければ三年後には生徒がいなくなる。その時点での廃校を意味する通達だつた。一月九日付満鉄社報に載つた命令本文は、（昭和五年一月社報七〇七三号ヨリ同七〇七五号迄掲載ノ昭和六年度満洲教育専門学校生徒募集ハ都合ニ依り取消ス）が全文である。

全学が存続運動に乗り出す。唐木順三は当時、学校の機関誌『世界之教育』の編集責任者の立場にあり、その第六卷第二号（昭和六年一月刊）を「満洲教育専門学校生徒募集取消問題批判號」とし、全

面特集を打って存続を訴えた。親会社の方針に現場教師が一致して反対し、学校の機関誌をも使って昂然と反対運動を起こすのだから、ある意味、校風には自由闊達なものがあつたのだろう。

編集責任者の唐木は、同号が緊急編集ゆえに談話筆記が多いことを断つたうえで、(本誌の文責及び一切の責任は唐木順三にある)と明示する。活字は普及力と訴求力を持つ一方、文字は確定的な意見表明なので批判の対象にもなりやすい。彼はそれを判つたうえで存続運動の渦中に断然入っていく。左傾時代を経て、思想的にも意志態度の点でも体制批判者として鍛えられた結果であろう。

さて、生徒募集取消問題(事実上の廃校問題)の背景は何なのか。唐木順三自身は上記「批判號」に、「我我は何故にこの問題を社会に訴へるか」という意見文を載せるが、そのなかで、次のように書いている。

株式会社が未曾有の収入減に直面し、不可避免的に経費節約をなさざるを得ないとき、生産と直接に関係なき消費方面、文化施設方面に舵を向けることは会社として当然の処置である。

されども、と続くわけだが、これにて営利企業の経費問題が教専改廃立案を招いたことが判る。意見文における唐木の筆は強いものだが、彼は基本「檄文調」にはせず、諄々と論理的に説いている。すなわち、親会社満鉄が営利企業とはいえ、教専問題の特殊性には考慮せよ、というのが主張の観点で、唐木はそれを整理して二点に絞る。一つは、(教専が、国民義務教育にたづさはる教育者養成機

関〕である以上、これを持つことは本来、〈満鉄の非営利社会的役割〕であつて、営利の観点、経費削減の観点からのみ改廃を求める考えは本末転倒である、という論点。二つは、教専の年額予算は約一五万円だが、この額をもつて教専が〈石炭を多量に食ひ〉、すなわち経費が掛かりすぎ、その割には〈速力の出ない機関車〉、すなわち実績の上がらない存在なのか、そうではないはずだ、という論点である。前者により教専改廃を立案したというなら、満鉄は〈課せられた使命の一面を閑却した〉と見なされる、すなわちブランドイメージが落ちる。後者により、「石炭と速力のバランスの悪さ」を云々するなら、一気に改廃に行くのではなく先ず内部改革を命ずべきではないか。唐木の意見文はそう論じ述べていく。

これらを勘案せず、ただ〈都合ニ依リ〉の名義ですべてを看過せんとする遣り方は、〈全く教育の特殊性を無視し、教育の権威を冒瀆した態度と言はれても弁解の余地を残さないであらう〉と唐木は述べる。そして意見文は、〈満鉄当局の無暴なる取消方法が、公約を無視する背徳であり、かつ、何千の受験生及びその家族、縁者にあたへた精神的打撃の責任を負はねばならぬこと〉を、〈一般社会〉および〈教育界〉に訴えるものだ、として結ばれる。

批判号の編集責任者役と意見文は唐木をして旗振りの役割を自然と担わせた。彼がこの問題に忙殺されだしたのは、前述したポポフ夫人のロシア語教室に関して、真面目に通っていたのは〈例の教専存続請願運動最中をのぞいて〉だった、と回想していることから察せられる（奉天の外人たち）。気に入ったポポフ夫人の教室にも行けなくなるほど、唐木は身辺騒事に包まれていたのだ。

『世界之教育』当該号は三木清も手にして読んだ。唐木が送付したのだと思われる。昭和六年一月二三日付唐木宛書簡で、三木は「満鉄もずるぶん無茶をやつたもの」だと書き、続けてこうアドバイスしている。

辞職云々のこと、出来るだけ職場にとどまつて戦ふといふのが最も必要なことで、いさぎよくやめてしまへといふのはプチ・ブル的な悪いイデオロギーではないか、と愚考します。これは自分の経験からも明かなことです。あまりいさぎよくやられないやうに希望します。〔改行〕学校側の必勝を期してゐます。

どうやら唐木は、先頭に立つて戦う一方で、三木には、「負けたら潔く身を処したい」との心境を洩らしていたようだ。三木は、そうした考えこそ「プチ・ブル的な悪いイデオロギー」だと、才能ある青年を^{たじな}窘めている。

さて、教専存続運動の盛り上がりについて、唐木は「私の履歴書」でこう記している。

私はこの運動に熱心に従事した。在留民大会がひらかれ、医科大学もこれに応援を送つてくれた。生徒の中から今でいふハリストをやる者もでてきた。満洲の各地に散つてゐた卒業生も、児童生徒の親たちもこの運動に加はつた。三学期の殆ど全期間を通じてそれをやつた。



奉天にて
(昭和5～6年、教育専門学
校時代) (唐木家蔵)

ここでいう〈三学期〉は昭和六年はじめのことだが、実はこの運動に邁進していた頃、唐木は別の問題も抱えるようになった。生家の行きづまりである。

信州に帰る

存続運動のさなか、信州から一通の手紙が届く。そこには生家倒産が告げられていた。生家の経済状況が唐木の大学時代から不安定であったことは既述している。いよいよ来るべきものが来たのだ。老いた両親はいたたまれなくなり、こっそり上諏訪へ逃げ出す。そこで狭い部屋を借りて隠れ住んだ。まさに蟄居^{ちつきよ}である。

一方、生家では残った兄が債権者に囲まれて苦しんでいた。弟としても助力しようと思つた。〈私ができるだけの金を郷里に送つたが、貯金といふことを一度もしたことのない私のできることは知れたものにはすぎなかつた〉のである。唐木順三は奉天の街路に立つ。大陸の冬の寒風が余計に身にしみた。このときなぜか笑いがこみあげてきた。〈内も外も嵐だ〉といふ島崎藤村の『嵐』の中の一句が心にかゝってきたからだ(「私の履歴書」)。

急に多事多難となった唐木にとって、まずは何より、自ら先頭者グループにいる教専存続運動の行方が重要だった。運動は学外に広がり、支持は大きくなった。歯車は動き出したのである。唐木は運動に全力投球をした。結果はどうなったのか。

存続運動の中で、私は教專存続の意味を最も強く主張した一人であつた。それを満鉄当局や在留民に訴へかけた。そして私たちの主張は入れられず廃校への道を辿ることになつたのである。(同)

不況下ゆえ合理化を求める満鉄の方針は動かさず、唐木たちの運動は敗れた。大企業・大資本に対して傘下組織の現場諸員が闘うのは、いつの時代、どこの組織でも困難を伴うが、唐木たちも同じであつた。彼らは螻蛄の斧となり、彼我の力の差をもとせす巨大な存在と対峙し、そして、完敗したのである。

廃校への流れが決まると、満鉄は、教育専門学校の教授たちに転職の斡旋をしてくる。唐木にとって、それに乗るのも一つの方向性であつたろう。生家の没落を考えれば金銭は間断なく入り用である。債権者に苛められている生家の両親や兄たちを助けまいといけない。だとすれば、無責任の誹りを受けようとも膝を屈し頭を垂れ、満鉄の斡旋を受け入れる選択もなくはない。報酬条件は悪くないので、「昨日の敵」だとはいえ、提案に飛びつき敵の懐に入り込むのもやむを得ぬ一手であつたに違いない。

ちようどこのとき、三木が次のように書き送つてきた。運動に従事して敗北したのを知り、深く関わつた唐木を心配して、アドバイスするためだつた。

学校の廃止後、上京なさるか、それとも何かの機会をとらへてなほ当分満洲におとどまりになる

かのこと、更によく考へてごらんになつて決心なさるのがよろしからうと思ひます。

(昭和六年七月二二日付)

早まつて離満することがないよう忠言している。しかし唐木は受け容れず、性急だった。旗振り役をやつて完敗したからには、満鉄を頼みにするのも癪に障る。第一、自分には責任がある。それを背負うとしたら、おめおめ斡旋に応じるのではなく、奉天から辞去するのが至当だ。もはや去り時ではないか――。

ただ実のところをいえば、そう決心したのは、運動の敗北だけが理由ではなかった。

満洲の在留民は頹廢してゐたし、植民地一般の矛盾と嫌らしさがあつた。張学良政権は日本を呪つてゐた。北京の中央政権は反日的、抗日的であつた。関東軍の内部には北一輝の思想による行動の動きがあつた。私はさういふ満洲にゐてただ高給をとつてゐることが嫌になつてきてゐた。

(「私の履歴書」)

現実に見^まえることで、唐木は「満洲」に醒めた。教專存統運動の経緯は背中を押したに過ぎない。満二七歳の彼には〈頹廢〉を難じる思考が確乎となつてきた。あとは行動するだけだ。昭和六年七月の暑中休暇目前、唐木順三は満洲教育専門学校の教授を辞職して帰国する。折からの希望退職に応じ、

三か月分の本俸に当たる退職金を手にして、彼は断然大陸を去りゆくのがだった。

唐突ながら、一年三か月の満洲時代がここに終わりを告げた。満洲事変の始まりはその二か月後である。関東軍が動き、満洲側（張学良軍）の武装解除を強行した。奉天は事変の中心地ゆえに騒然とする。へ一時であつたが教専の教授も生徒も動員されて銃をとつたといふ噂も伝へられてきた（同）。事実だつたら、己も銃を取ることになつたのか。唐木のなかに複雑な感慨が走つた。

4 失意の日々

海を渡り内地を踏みしめたとしても、唐木にとって向かう故郷は安らぎの場所ではありえない。辿り着いてみると、生家の現実は想像通りだつた。残つた家族は債権者や執達

吏に脅かされる生活をしている。借金でつぶれた生家が陰鬱でないはずはなかつた。それでも、失職した者がひとまず落ち着くとしたら、そこしか頼る先はない。順三の寝起きする場所は生家裏の物置小屋となる。

当時、三木清が唐木に送つた書簡には、こうした一条が見える。

貴兄にも今後色々苦しいことがあらうと思ひますが、どうか気を落さないでしつかりやつて下さい。お互に負けないやうにやります。考へてみれば癩に障ることばかりです。然し決していら

らしいので、うんと腹をすましてやらなければならぬと思ひます。

(昭和六年八月一六日付)

この手紙は（どうかお元気で）にて結ばれている。唐木は有り難くそれを読んで、元気を出せと自分に何度も言い聞かせていたはずだ。

まずは仕事と収入の確保である。彼は再び信州で教員になるつもりだった。〈小学校には大勢の知り合ひがあるから、なんとかなるだらうと思つてゐた〉（私の履歴書）。しかし、樂觀は打ち砕かれた。冬期だけ開く補習学校があつて臨時教員を求めており、知り合ひの校長が唐木を県に申請してくれた。これが却下されたのだ。〔赤い〕といふのが原因だった（同）。県の教育当局は、彼が渡満前に發表した「危機に於ける若き教育者の使命」を大いに問題ありと認識していた。

同時期、農村の疲弊は進み、欠食児童や教科書を買えない児童がますます増えていた。不安な世情が広がっていたのである。そうしたなか青年たちの間で、声をあげ、立ち上がろうとする気配が増した。現状打破を訴える左派が急速に伸張し、それに呼応するように取締が厳しくなった。時代の空気はこわばっていたのだ。信州でも同じである。マルキシズムへの傾斜を見せ、しかも「檄文」的な内容の「危機に於ける若き教育者の使命」が、県教育当局の忌憚に触れることは充分ありうる時代だった。信州教育界は不寛容になっている。当局は眼を光らせており、危険視される論文公表をおこなつた唐木順三を見逃すはずはない。

採用申請の却下はこうして起こつた。彼は政治的運動に直接関わつてはいない。影響を及ぼしたと

しても思想の範囲内であった。それでも「赤い」となると容赦されなかった。なおこの「忌避」判断の際は、唐木と三木清との関係、三木編集雑誌への寄稿とその内容もまた考慮されたのかもしれない。既述の通り、三木は前年に逮捕されていたのである。

唐木は自身をめぐる情勢の厳しさを悟った。まさに門がびしゃり閉ざされた感じであった。へたまに第一の門は開いても、いまひとつ奥の門内から、私をうさん臭しとみる眼がのぞいて結局駄目であった（「父の發病とその前後」）。これでは信州の公教育に職を見出すことはもはや出来ない。（私の教職への復帰は不可能になってしまった）のである（「私の履歴書」）。仕方なく唐木は信州を去り、職探しのため東京へ行くことを決心した。（教員になれない以上は他に衣食の道を講ずるより外になかった）からだ（同）。

そんなとき、失意の唐木に追い打ちをかけるように、衝撃的な事件が起きた。おそろしい出来事だった。かけがえのない友、八百清顯が自殺したのである。昭和六年の大晦日、八百は福井の東尋坊から身を投げた。その死は新聞に大きく出て、〈若き日大講師投身自殺〉とタイトルが打たれていた（「東尋坊」）。唐木は深刻な打撃を受ける。芥川の自殺について、「敗北」だと強く言ったのは八百自身ではなかったか。どうして自ら死を選ぶのだ。

八百清顯は東京帝大の独文科に進んだ。卒論のテーマはシラーである。卒業後は日本大学のドイツ語講師になっていた。事件当時彼は金沢に帰郷していたが、三十一日の早朝、家を出た。家の者はいつもの散歩だろうと思った。八百は東尋坊まで出かけたのである。そこは自殺の名所だった。

彼は茶屋へ入り、親子井をきれいに食べて、店から硯すずりを借りた。午後になつていた。店の翁おうは自殺する人間の様子がだいたい判る。しかし、八百にはその気配がなかった。だから見抜けなかったのだ。二五歳の青年は断崖に向かった。上衣を脱ぎ、きちんと畳んで岩に置いた。借りた硯すずりを使って名刺の裏に筆で「僧月海」と書き、上衣の上に置き押さえに小石を乗せた。そして高い岩頂に立ち、跳躍した。

唐木はこれまでの交流のなかで数多く送られてきた八百の手紙を読み返し、また八百の記憶を甦らせたが、自死の直接の動機は見つからなかった。比較的付き合いは深かったが、自殺できるような男にも思えない。一月にデイルタイを扱った論文「創作における技術の問題」を『思想』に発表したばかりでもある。

時代の暗雲と閉塞、左派弾圧の険悪な空気が背後にあつたのは確かだ。満洲事変が起き、非常時が叫ばれ、左派には転向問題も生じていた。しかし、それを前提としても、やはり「何故」は解けない。遺書いげんともいえる「僧月海」の意味も不明である。秀才の美青年を死に向かわせたものの正体が、皆目判らないのだ。唐木は後年、八百の四高時代の友人に最期の様子を尋ねた。詳しい返事を貰ったが、この友人も死の動機について伝えてはくれなかった。〈Yは結局、世の中の重さにおしつぶされたのである〉、唐木はそう思いながら心友八百の霊を悼むのである（父の發病とその後）。

市ヶ谷時代

信州での教職を諦め、別の職を求めて唐木が上京したのは昭和七年（一九三二）一月だった。落ち着いたのは市ヶ谷三番町の福四萬館で、網野菊の紹介である。古ぼけた

三階建てで、唐木は一階の四畳半に部屋を取った。紫一色の着物の女中が火鉢用の炭を運んできたが、一籠三〇銭でやけに高かったのを唐木は覚えていいる。

下宿から東京の街をめぐった。しかし、求職といつても当てがあるわけではない。世上は暗く、経済は悪く、ひどい就職難である。大学卒といつても、職にありつけず茫然とするばかりの者がごろごろいた。唐木が上諏訪から去った同時期に永明尋常高等小学校（現・茅野市）を辞めた友人石川秀雄は、その後東京に職を求めたが、京大経済学部卒の彼でさえ、市役所（当時は東京市であった）の臨時雇いの仕事を得るのが精一杯だった。石川は鬼子母神近くに住んでおり、唐木が訪ねると、そこは西日がひどく入る汚い下宿でしかも相部屋である。聞くと、ようやくありつけた臨時の仕事というのは、ガス管を引く距離を一軒一軒、軒先から巻尺で計るといった単純きわまりないので、それで日給一円二〇銭を貰い暮らしていたのだった。

求職状況の厳しさのなかで唐木順三が目指したのは文筆の道である。懐にあったのは満洲時代の退職金で、残額は乏しく、無職無収入では早晚行き詰まる。東京生活を続ける見通しは暗かった。その状態にあつて、不安定きわまりない文筆生活を選ぶのは、ほとんど破れかぶれというしかない。経験はなく自信もない。しかし彼は本気だった。実際、頼りなきその道しか、当面考えられるものはなかったのだ。それに、評論を書くのは身に合う作業と感じていた。満洲へ行く前に発表した「芥川龍之介論」の好評も念頭にあつたのだろう。ジャンルは日本の近代文学史と決めた。その頃はまだ、文学史といつてもわずかしか本がない。だったら自分の手でそれをやってみたいと考えたのである。

彼は九段下にあった大橋図書館に通い出した。そこで明治初期から自然主義にかけての文学者の作品を読み、ひたすらノートをとった。大橋図書館は高等文官試験受験者のたまり場で、昼に食堂へ行くと、連中は六法全書を手に法律用語で喋り合っていた。彼らに囲まれ、唐木は異色な存在だった。パンをかじりミルクを飲み、不景気な顔つきをすることで同類であったのかもしれないが。

図書館から福四萬館へ戻ると、窓に真っ黒いカーテンを吊した部屋で原稿の筆をとる。時折、出征兵士を送る万歳の声や、号外売の鈴の音が聞こえてきた。八百の自死が暗く精神にのしかかる。知合いの検拳があり、友人との絶交という事態も迎えていた。荒涼たる心境にあった唐木だが、小さい火鉢を抱え、集中して執筆を続けたのである。その甲斐あって、しばらくして比較的長い論考「自然主義の發生とその没落」を脱稿することが出来た。のち第一評論集『現代日本文学序説』に収録する作品である。

そして、この時点で彼は退職金を使い果たしてしまふ。やむをえず、へ漸く靖国神社の桜の梢がみづみづしくなるころ、唐木は上伊那の生家に戻ることにした（「亡友」）。三月のことである。ごく短期間の東京生活だったが、大橋図書館でとったノートが故郷へ持ち帰る成果になった。

なお市ヶ谷時代に関連して、唐木上京の翌月、同郷の幼馴染み（唐木生家の一軒おいて隣家の者）新井靖夫も上京し、同じ福四萬館の二階を下宿とした。就職のための用件を果たす目的だった。彼は司法官を目指しており、見通しがついたのか唐木と前後して帰村する。この新井がまもなく、三日ばかり病んだがり急死してしまった。扁桃腺がもとで心臓が侵され、死に神に招かれたのだ。唐木が病床

へ駆けつけると、新井は、「まことに残念だが万事やむを得ん」とはつきりと言った。元來骨太で端然とし、夭折とは一切無縁と思えた男だったのに、あつけない死である。〔臨終といふのは私には初めての経験だった〕と唐木は書いている（同）。

故郷に戻った唐木順三は、再び生家裏の小屋に暮らすようになった。そこは元來

〔悪気流〕やまず物置蔵で、畳を入れて電灯だけは引いたが、小さな窓ひとつの暗く粗末な一隅であることに変わりはない。唐木は自嘲的にそこを「もぐら窟」と呼んだ。ちょうどいい箱を見つけて机とし、古い雨戸を台にしてベッドをつくった。彼は「もぐら窟」に結局、都合二年以上も寝起きすることになる。

当時の身辺状況について、唐木はこう書いている。

その頃、不思議に親類や友人が死にました。三人の義兄がばたばたと死んでゆきました。子供のときからの友人が三日ばかり病んで死にました。死にさうにない男が死んでいきました。そのころは世の中に悪気流がただよつてゐて、自殺、倒産、病死、検挙といふやうなことが相次いで起つたわけです。

〔諏訪高島の思ひ出〕

世の中が悪くなると、人間は、家族はさまざまな負の因果に襲われバランスを崩す。平時なら何とか収めていた異常事態も、弱った一家や個人では背負いきれない重荷となる。平穩の根柢が崩されて

いるなか、くり返されてきた日常が危うい。ぐらぐらするところに人は生きねばならなくなる。そこに喪失が襲いかかる。暗い運命は陰惨な衣を被つてあちこちを歩き廻り出す。不幸はいつでも戸を叩く。《悪気流》が負の因果を招き寄せる。唐木順三は、そして彼の周囲は《悪気流》に翻弄されていたのだ。

上述引用で《死にさうにない男》とは前記新井であろう。《自殺》は八百、《倒産》は自家だった。《検挙》は友人教師が捕まった二・四事件を指し、のちに述べる。義兄三人の死は一年くらいの間に相次ぎ、ともに四〇歳代の壮年だった。下の義兄は東京の第一銀行に勤めていたが、病を得て帰郷し、長患いの末に亡くなる。苦勞したうえ夫まで喪つた姉は、子供二人をかかえて実家に戻り、居候が増えた。しかし、唐木家はもはや物資の足りた家ではない。破産で財産整理後の生家に順三を含め四人が加われれば、一家の困窮はいっそう増すばかりである。執達吏はそれでも執拗に來襲して、《あやふく食卓や、お勝手戸棚まで封印されさうになるといふ有様》が日常になっていた（「石川といふ男」）。借金取りが勝手に庭木を引き抜くこともあった。

それでもこの土地を離れてはやっていけない。一家は踏みとどまるしかなかった。困窮のなかで、《お釜の底を気にしないでは食事の出来ない日が続いた》のである（同）。《お菜はナス、キウリ、トマトばかりがつづいた。私の郷里ではキリギリスのことをつづめてギスといふ。まるでギスだね、と家族はいひあつて笑つた》（「私の履歴書」）。もはや笑うほかにはなかったのだ。

父辰太郎は何とか事態を挽回せんとして、倉庫を改造して鶏を飼い出した。鶏の餌である菜っ葉を、

父は早朝の土間で細かく刻む。その音が「もぐら窟」の唐木の寢床まで聞こえてきた。肩身が狭くなつたうえに早朝からの作業がこたえたのか、まもなく父は、冷え込みが原因で脱腸を起こした。かなり悪い症状で、ついに入院となり手術に至る。

手術台にのぼつた父の裸体は痩せていた。手術後に七七歳の父は（銀行がおつかけてくる、それここに）とおびえて口走り、これをくり返した（「石川といふ男」）。父ばかりではない。その頃伊那谷では、唐木家のように債権者に脅かされる家が、あちこちに見られた。個人商店ばかりでなく、製糸会社も絹綿会社も、また小さい銀行もつぶれた。まさに（悪気流）やまずであった。

思ひ切つて百姓になろうかと唐木順三が考えたのはその頃だった。当時、生家から三
婦農を志す

里ほどの場所に西天龍という開拓地が出来た。（諏訪湖の水を西の山の麓に引いて、原野をひらいて稲田にするといふ）大工事が完成して、移住者も始めていた（「私の履歴書」）。

百姓生活を目指して、唐木は現地を見に行く。東駒、仙丈を望む景色のいい高原である。（私の心はかなり動いた。）けれども、（第一に資金が皆無であった）（同）。百姓といつても開業資金は一定かかる。農具をさまざまに用意せねばならないし、肥料の準備も必要だ。稲田なら苗の入手は前提となる。そのため持ち合わせがまるでなかったのだ。唐木は資金を借りるため友人たちへ手紙を書いた。満洲から一時帰国した相原信作が訪ねて来たときは、一緒に西天龍を見て貰った。家はまだ一〇軒ほどしかなく、石油ランプの暮らしである（なお、このとき相原は、「道」と一字だけ書かれた西田幾多郎の軸を持ってきてくれた。唐木は大いに励まされた）。

資金をつくるために唐木はかなり努力した。しかし、どう粉骨しても必要額にはほど遠い。もとより、金があれば前進できるほど安易な話でもなかった。〈農家に嫁いでみた二人の姉たちは、俄か百姓ができるものではないといつて反対した〉(同)。自然を相手にする農耕には厳しいところがあり、ときに重労働でもある。ペンや筆、白墨は持つても鋤鎌を持たずにいた知識人ゆえ、相当な覚悟がないと帰農は難しい。実地を知る姉たちにしてみれば反対は当然であつたらう。

元来、唐木順三には土に生きたいという思いがある。〈百姓と教師が、職業としてはいちばん上等なものだと私は思っている〉というのは、彼にとつて揺るがぬ認識だつた(「百姓と教師」)。だからこそ彼は生涯、田舎を好み、都会に馴染まなかつたのだ。教職の門が閉ざされた失意の時代に百姓を強く望んだのも、こうした志向が背景を成したと考えられる。百姓というあり方は職業として上等だと彼は確信していた。ゆえに唐木の行動は思いつきの類ではない。信州人だから百姓の現実は判つてゐるつもりだ。そのうえで、かなり真剣な姿勢からであつた。

されども、帰農は自分にとつてやはり空想的だといふしかない。そう心底から悟るのに、たいした時間は掛からなかつた。具体的に眼を転じれば、あれこれが難事として迫つてくる。どれも圧倒的な難事といえた。もう諦めるほかなかつたのだ。

困窮の続くなか百姓生活も夢想となつた唐木には、結局、当面の処世として文筆での稼ぎという曖昧模糊の道が残るのみであつた。「もぐら窟」の唐木順三はひらすら評論を書いた。昭和七年(一九三二)四月に「山本有三論」を脱稿、五月には「志賀直哉論」を脱稿する。同年四月一八日付の谷川

徹三宛書簡が唐木家にあり、そのなかで順三はこう書いている。

唐突ながら、別便にて「山本有三論」を御送り申しました。御一覽の上、『思想』に御採用下さらば幸甚で御座います。若し不可の場合は、まことに恐縮なことながら、御返送下さいませ。(返送の切手同封しておきました)(改行)生活費を得なければならぬ必要もあり、これから、同時代の作家評をつづいて書いてみたいと思っております。何かと御鞭撻、御後援下さるやう御願ひ申します。

山本論は編集者谷川の眼に止まって採用となり、六月の『思想』に掲載された。三木清の口添えがあったことは、三木の唐木宛書簡(昭和七年五月九日付)で、(今日谷川に会いましたので貴稿のことにつき話し、なるべく早く載せて貰ふやう頼んでおきました)と出てくることから判る。続いて七月には志賀論が『日本國民』に掲載される。こちら当初は谷川に打診した。谷川は『思想』での掲載は難しいが、読んだうえでどこか他へ紹介してあげてもいい、と三木に話している(同書簡)。『日本國民』への掲載は谷川の骨折りが実つてのことだろう。

5 転身

処女出版
失意の時期は続いたが、その唐木に希望の光が射し込む出来事もあった。最初の著書が

日の目を見ることになったのだ。

昭和七年五月四日付の唐木宛三木書簡には、こうした箇所がある。

貴兄の著書出版の件、本屋に原稿を見せて交渉してみますが、何分不況の際とて話が簡単に纏りません。然し出来るだけ尽力いたすつもりでをりますから、もう少しお待ちを願ひます。

原稿は三木清から春陽堂顧問の仲小路彰なかしょうじょうに渡され、編集部の高藤武馬たかとうたけまへと託された。仲小路はマホメットの生涯を描いた長編でも知られる歴史哲学者である。父親は農商務大臣・貴族院議員等を経た仲小路廉れんだった。当時の一大老舗版元といえた春陽堂には、たいへんな碩学が顧問で籍を置いていたのだ。

唐木の原稿は七〇〇枚ほどだった。査読した高藤は著者の名を知らない。へ一字一字、正確な楷書で書き込んであるたんねんな原稿であったと、高藤は回想記「思い出すままに」で書いている。筆跡から判断して偽りなき書き手と思った彼は、へ普通の持込み原稿を見るのとは異った気持で立ち向

かった)のである。そして、読み進めていくうちに、(文学と社会との相関関係を追求してゆく真摯な姿勢に感動し)、この原稿の面倒をみさせてくれと返事したのだった(同)。

三木の骨折りはかくして実を結んだ。唐木宛の三木書簡にはこうある。

貴兄の書物春陽堂から出版して貰ふやう話をまとめました。なるべく早く印刷にかかりたいと云つてゐます。
(同年七月一四日付)

春陽堂は多少厚い本になつてもよいということで、託された原稿に加え、発表したばかりの山本有三論や志賀直哉論も一緒に収録したいといつてきた。唐木は早速そちらの原稿も送る。この過程を経て、初期の芥川論、満洲時代の講義録から成つた藤村論や漱石論等、市ヶ谷時代の「自然主義の發生とその没落」、「もぐら窟」で書いた山本論と志賀論、そして総論的論文「現代日本文學に於ける自然と道徳の問題についての史的考察」(昭和七年六月脱稿)までが集成され、唐木の単著デビュー作が編集・印刷製本されていく。

昭和七年(一九三二)一〇月一〇日、『現代日本文學序説』はついに上梓の運びとなる。唐木満二八歳のことだった。菊判四〇五頁、総クロスの箱入りで初版部数八〇〇、定価二円九〇銭。地味な存在ではある。それでも唐木は自著を出せたことを素直に喜んだ。届いた本の余白に、彼は自ら(一九三二・一〇・二二、はじめて入手。うれしい)と書いた(「私の履歴書」)。苦渋に満ちた生活の只中で

あったがゆえに、感激は余計に深い。処女作出版の感激が忘れえぬものであることは物書きに共通するが、唐木順三も後年、六五歳時の回想で、〈つしりと重い本を手にして私はうれしかつた〉と改めて記している（私の思ひ出の著書）。

この処女出版は『文藝春秋』が一頁を割いて書評をしてくれ、谷川徹三は〈歴史的センスが鋭い〉とほめてくれた（物置の土蔵の中で——私の処女出版）。印税は八分で唐木は一八〇円を得た。やがて三〇〇部増刷される。

本を受け取った父辰太郎は、〈筋ばつてはゐるがどこかきやしやな手で撫で廻してよろこんだ〉（私の履歴書）。田舎の人間には、〈本を出すといふことは、余程偉いことにみえた〉のである。苦勞して学校を出した甲斐があった、との感慨が、鶏飼をしていた父にはあったようだ（同）。

平野謙の書評

『現代日本文学序説』は学生や知識人を中心に、一部で注目された。刊行したばかりの本を買って読んだ一人に、貧しい大学生だった満二四歳の平野謙がいる。彼ののち山室静、本多秋五、埴谷雄高、荒正人、佐々木基一、小田切秀雄とともに『近代文学』を創刊し、戦後文学・戦後思想に大きな影響力を持つようになるが、まだ青二才の頃であった。平野は当時、マルキシズムとの関係をゆるやかながら持ちつつ、プロレタリア科学研究所内の芸術学研究会に所属しており、また神崎清らが主宰する明治文学談話会の一員だった。

第一評論集を刊行した時期の唐木は、若い世代からどう見られていたのか。平野謙の回想記「鮮烈な問題史的展開」に記された次のくだりが参考になる。

唐木順三は、全然無名の青年というわけではなかった。しかし、また名がとおっているわけでもなかったにちがいない。私の推定では、当時雑誌《思想》を中心として、三木清や谷川徹三の周囲に藤原定、六戸儀一、稻沼茂樹のような人々がいて、新しい文芸評論家として出発しようとしていたが、唐木順三もそういう人たちのひとりであって、そのなかでは兄貴分のようにみえぬでもなかった。

こうした「新人グループの兄貴分」的存在だった唐木の第一評論集は、〈近代日本文学史のおもしろさを私に訓えてくれたほとんど唯一の本〉といえる感銘を平野謙に与えた(同)。左翼の認識論に追い込まれて息がつかまるような思いがあった平野にとって、唐木の本は文学の〈おもしろさ〉を伝えてくれる点で新鮮だったのだ。『クオタリイ日本文学』(山室静編集)の創刊号に平野は『現代日本文学序説』の書評を載せ、これが対世間的には彼の初登場作となった。そこから職業評論家としての歩みが始まったのであり、この点でも、唐木の第一評論集は平野にとって因縁浅からぬ本となる。

その平野謙は後年、唐木全集の月報に寄稿するため、三五年ぶりに『現代日本文学序説』を読み返したときの印象を次のように書いている。

いちばん意外だったのは、この本が全体としてなかなか左翼的だという事実である。それは社会情勢の説明のしかたなどが左翼的だというだけではない、論の骨子そのものが左翼的なのである。

〔中略〕ほんとに左翼的と思えるのは、日本自然主義を位置づけるのに、『ドイツチェ・イデオロギイ』のなかのフォイエルバッハ批判を援用している点などにいちばん鮮かである。マルクスのフォイエルバッハ批判と石川啄木の自然主義批判とがほとんど等価であると力説するあたりに、当時の唐木順三の若々しい批評家姿勢を読みとることができる。

(同)

とはいえ、ここでいう〈左翼的〉は、当時のコミンテルンや日本共産党が分析する方向での徹底性をいうのではない。その点なら唐木の『現代日本文学序説』はむしろ逆で、不徹底であり、立ち止まる曖昧さがあり、ある種の中間性を発信していた。そして、この中間性こそ本の魅力だった。政治主義に走った左翼主流の過度なる断罪的発想に違和感を抱く者がいて、唐木本が揺曳する人文主義的なアプローチに新鮮なものを感じたと想像するのはさほど困難ではない。

それでも左翼らしい分析の鋭さは唐木本のあちこちに示されていた。〈論の骨子〉が左翼的だというのは、『現代日本文学序説』の全像を確かに言い当てている。表出されたものに一種の「手ぬるさ」があったとしても、思想の骨格には左派の魂が宿っていたことになる。二八歳の唐木は三木清の影響もあって、かなりのところ知の実質が左傾化しており、「赤い」評論家であった。

昭和三年後半以降の唐木の精神に「赤化」のドラマが起きた事情は本章の主題であり縷々述べてきたが、諸事相談に乗っていた旧師田辺元もまた、唐木順三の変化を認めている。西田幾多郎の岩波茂雄宛書簡(昭和四年一月二九日付)に、〈唐木と申すのは私よりも田辺君がよく知つてゐるのです 卒

業の時田辺君は論文がよいと云つてゐました。人間よからうと思ひます。唯田辺君は此頃少しマルクスカぶれしてゐると云つてゐましたが」とある（この西田―岩波の遣り取りは、昭和二年一〇月、『思想』に唐木の論文が載つたことと、おそらく三木清のルートから唐木の名が岩波にもたらされ、岩波自身、興味を抱いた事情が背後にあるのだろう）。また既述したように、昭和五年三月発表の「危機に於ける若き教育者の使命」に驚いた信州教育界は彼を危険視した。これらを念頭に置けば、昭和四年から七年までの評論をまとめた『現代日本文学序説』が、平野のいうように（なかなか左翼的だ）というのはむしろ当然なのである。

ただ唐木の場合、〈左翼的〉は（論の骨子）にとどまり、安易な状況論・政治的発言には踏み込まなかつた。そこに唐木の唐木らしさがあるといえよう。彼の第一評論集は一方で対象への無慈悲に充ちているが、他方、文学者の運命に関する寄り添いの姿勢がある。これこそ『現代日本文学序説』を書いた「赤い」唐木に、何らかの節度のようなもの（左翼主流から見れば「手ぬるさ」）を揺曳させた理由であつたらうし、戦後において、人文的な日本主義へと転じていく唐木を予感させる根拠でもあつた。

二・四事件

昭和初期の日本史を改めて復習^さうまでもなく、「赤化」は時代が呼び寄せた事態だといえる。大正末から閉塞状況が続き、世上は暗かつた。そのなかで、とりわけ青年層には変革への志を抱く者が続出した。抱かないわけにはいかなかつたのである。現状は行き詰まつており、体制打倒の運動が燎原の火のように広がつた。然^さすれば、体制側の監視や取締が強化されるの

は政治の力学である。治安維持法もすでにあり、それを初適用した京都学連事件は、既述の通り、唐木の京大在学中に起きていた。戦う左派も応戦する取締側も次第に先鋭化していくのは時代の趨勢だといえた。

この歴史的過程のさなか、唐木の地元信州でも青年層の左傾化が目立つようになり、対決的な情勢が生まれていた。唐木も書くごとく、〈小学校の最優秀の若い教師達も左傾的になって来た。共産党員がつきつきと検挙されたが検挙される数以上に、青年学生の左傾化の傾向が増していった〉、そういう地元状況だったのである（「石川といふ男」）。時代の激しさが若い教師たちをゆすぶった。そして二・四事件が起き、県民に衝撃が走る。

唐木が信州教育界に忌避され、〈悪気流〉が吹き荒れるなか自らも失業者の困窮を味わった事情はすでに記したが、教育界の左傾化をゆゆしき問題と見る側にとって、唐木忌避はプロローグにすぎなかった。唐木が信州の教壇に再び立つ道断たれたのは昭和六年の秋で、それから一年半経った昭和八年二月四日、長野県で「赤化」教員の大量検挙が始まる。

事件の流れを見ていこう。まず、当時の長野県における教員左翼運動である。唐木は当時の回想のなかで、〈前年まで石川と僕のゐた地方は、所謂信州教員赤化事件の中心であつたし、さういふ事件を起した種は石川や僕にあるといふわけで、事実また中心人物は僕達の友人でもあつた〉と書いている（同）。

高校―京大時代を共にした唐木の無二の親友・石川秀雄は、上諏訪高島学校の教員をしていた唐木

に勧められ、隣村にある諏訪郡永明尋常高等小学校の教員となった。近隣同士で親しき友人付き合いが再開され、石川―唐木という京大出コンビと永明学校の関係は深まった。そしてこの永明学校こそ、信州教員左翼運動の発生拠点となるのだ。中村一雄『信州教育とはなにか』下巻での記述を引くと事情はこうである。

同校では京都帝国大学経済学部卒業の石川秀雄を中心に数人が哲学研究会を設けていたが、昭和五年に石川のあと京都大学文学部哲学科卒業の河村卓たかしが来任し、経済学研究に移ってテキストもマルクスの『労賃価格及利潤』、レーニンの『帝国主義論』などへと進み、研究会の名称も時事問題研究会と改めた。同校首脳はこうした動きを察知して、六、七年度末の人事異動で研究会の主要メンバーを転任させたが、それはかえって運動を拡大させることになった。

時事問題研究会は全国的教育研究組織「新興教育同盟」（新教）との関係を深め、やがて昭和六年一〇月、同研究会を母体に新教諏訪支局が結成され、昭和七年二月八日の新教長野支部発足に繋がる。同じ日、一般使用人組合教育労働部長野支部も発足した。結成日が同じことから察せられるように両支部は密接な関係がある。後者は日本共産党の指導下にある日本労働組合全国協議会に加盟し、またたく間に県下五六校に分会を擁するまでに発展した。左翼教員組織としては全国的にも最大規模の支部となった。

この両支部の「赤色教員」に対して一斉検挙がおこなわれ、治安維持法違反容疑で取り調べられる。これが昭和八年の二・四事件である。県警の特高課長自身が予想外の規模に驚いたというくらいだから、たいへんな衝撃を地元を与えた。事件の起きた昭和八年は小林多喜二が殺害された年でもある。左翼への弾圧はもはや容赦がなくなっていたのだ。

二・四事件の報道は当初禁止される。九月一五日にようやく解禁になると、『信濃毎日新聞』は号外を出した。六段抜きの大見出しで〈戦慄！教育赤化の全貌〉と打たれ、〈起訴七十七名に達す〉〈教員のみで実に廿九名〉等の中見出しが躍った。被取調者総数は六〇八人に及び、教員で検挙された者は一三八人だった。ほとんどが小学校教員で、関係した小学校は五八校にもなる。検事局に送られた教員は八一人、そのうちで起訴された者は上記見出しの通り二九人。平均年齢は二七歳ではほとんどが二〇歳代であり、信州では若い教員の「赤化」が急速に進み教育界をゆさぶっていた事情が見えてくる。

事件をめぐる行政処分は厳しく、教員の免職三三人、休職三六人、校長の退職一五人となった。拠点となった永明小学校は年度末の人事異動を俟たずに、顔ぶれの即時全面刷新をおこなうことになる。新校長には高島裁縫専修学校校長の矢ヶ崎輝雄が就き、首席訓導（教頭）には当時泉野小学校にいた清水利一をあてた（『信州教育とはなにか』下巻）。なお清水は、唐木も関わった諏訪哲学会の設立発起人で、その事情は第四章にて既述している（一三七頁）。

児童や地域と日常的な繋がりのあつた教員が大量に検挙された。しかも捕まった教員たちはみな若

く優秀で、リーダーとしての素質がある者たちばかりだった。全県が震撼したというのも大袈裟ではない。そして、〈さういふ事件を起した種は石川や僕にある〉と自ら記したように、唐木には当時、責任の一端を感じざるを得ない重圧もあったのだらう。

唐木が信州から去り満洲の教員に転じたと同じ時期、石川も信州を去って東京に職を求めたことは既述している（一八四頁）。そこからしても石川―唐木は事件の直接的関係者とはいえないだろうが、事件の始点で二人が指導的な活動をしていたことは間違いない。実際、唐木の高島学校時代、隣村の石川は唐木のもとへ永明小学校の教員仲間を連れてやって来たが、そのときの藤原、小松、柴草という教師が教員赤化事件では中心人物となったのである（一五八頁。藤原と小松を含めた集合写真参照）。しかも唐木の場合は、「危機に於ける若き教育者の使命」の影響力も無視できない。

地元教育界が小学校教員の大量検挙事件に見舞われたことは、唐木の心胆をますます寒からしめた。失業者となり生家で逼塞する彼にとって、〈悪気流〉はやまない。それどころか、新手の〈悪気流〉が次々と襲いかかるがごとしであった。

小学校教員だけにとどまらない。唐木が卒業した松本高等学校では、二・四事件の余燼を受け第三次松高事件が起きた。同年（昭和八年）一二月四日から二六人の松高生が検挙される。起訴五人、起訴猶予五人で彼らは退学・停学の処分を受けた。墓地に隠していた学内左派組織を記す謄写版が見つかり一斉検挙となったのだ。『信濃毎日新聞』は〈松高『赤』事件〉〈共青松高班を再建 工場街へ喰込む〉との見出しで事件を報じた（『松高事件資料集』）。現役松高生なら唐木にとって年齢も時代感覚

も遠くない。弟分といってよく、こちらも気になったであろう。

結婚と再上京

〈悪気流〉に翻弄されていた唐木順三に、まもなく転機が訪れる。宙ぶらりんの男に結婚話が持ち上がったのだ。すでに数えて三〇歳に達しており、村の同級生独身二人組のうちの一人となっていた。彼にはスピノザやカントのように独身を通す意志はない。生活力なき「もぐら窟」暮らしであり、結婚どころではなかっただけだ。とはいえ年齢も年齢である。母親はじめ周囲が心配した。

かくして親戚筋の老人から話が来た。相手は長野市に住む産婦人科医の次女である。娘の母と唐木の母は従姉妹同士で、ゆえに老人はどちらの親戚にも当たる人物だった。娘の両親は伊那高遠の出身で、唐木家と郷里も近い。両家の付き合いは日頃薄かったが、娘の兄が松本高校の一級下の理科生で顔は知っていた。順三は仲介者に、結婚しても食えないし気も進まないと返事をしたが、一度会ってから決めれば良いと言われ、娘の家まで行ってみた。

娘の父・後藤^{じすけ}自助は千葉医専の教授をしたのち長野で開業しており、手術が上手いことで評判の医者だった。順三は将来義父になるこの人に〈男惚れに惚れ〉る思いがした(「私の履歴書」)。構えるところを知らない鷹揚さがあったからだ。肝心の娘は小柄な女性で、出しゃばるところがなく性に合いそうな印象である。県立長野高等女学校の卒業生でその点でも知識人の順三と合う。一方、娘の母親は、順三が従姉妹の子ゆえに打ち解けたのか、気がかりなことを直に尋ねてきた。あなたは〈赤いのではないか〉と。信州で赤化事件も起きていた時代である。娘を嫁がせる相手ゆえ、その点はやはり

心配していたのだ。ぶしつけな質問に対し、順三はこう答えた。〈赤くはないが桃色位だらう〉と（同）。

この答え方はくしくも唐木順三の自画像であった。既述のように、彼は左派に共感するものを抱きつつ、その唯物論的な人間と社会の見方には馴染めなるところを感じていた。唐木は超越的な存在を一切合切否定する思想に、ついて行けないものを覚えたのだ。それもあって、〈桃色〉発言に〈偽りはなかった〉と「私の履歴書」で書いている。もっとも、この感想は後年から眺めたものゆえ多少の誤差があつて、彼の原質に宿つた〈桃色〉が優勢になつてくるのは、より正確には結婚以後の東京田端―千葉成田―神奈川南林間時代である。

さて、娘の家を訪ねて納得した唐木順三は、昭和八年一〇月一七日、後藤フサエと結婚した。婚姻届の日付は一月一日である。結婚を期に、唐木は「もぐら窟」を出て再び上京する。いまだ失業中の身であり、夫婦での生活を維持していく自信はなかったが、東京でなら今より少しは活発に、文筆を頼りにできるかもしれない。どこかで仕事が見つかるかもしれない。当面、原稿料収入で足りないところは、フサエ夫人が持参した預金通帳で補うつもりだった。彼は〈いくところまでいかうと思つた〉（同）。新生活が始まるのである。

第六章 「友人共同体」の出発

1 文筆家から女学校教師に

田端時代

再上京した唐木順三はフサエの姉が住んでいた滝野川区田端に新婚の居を定め、新進評論家として健筆を揮い出す。第一評論集刊行がきっかけとなり、すでに前年昭和七年終わり頃から、いくつかの雑誌に寄稿を始めていた。一月、『理論』に「小倉時代の鷗外」を載せ、一二月には『鐵塔』に「思潮と傳統」を発表している。昭和八年は掲載数が増え、媒体も広がった。岩波書店の『思想』には鷗外論と葛西善感論などを発表、『新潮』に「自然・創作・批評」を、創刊された『文藝』ではアンケートに答えた。新聞への寄稿も多く、『信濃毎日新聞』『帝國大学新聞』『大阪朝日新聞』などにエッセイや批評文を掲載、また連載した。文芸時評の声もかかり、『文藝春秋』や『東京朝日新聞』で担当する。田端時代に入る頃、執筆活動は急拡大期を迎えていた。

とはいっても、唐木に職業文筆家の派手さはない。名のある評論家や出版人、新聞人と積極的に関わりを持ち、仕事に結びつけようとする姿勢からはほど遠かった。「私の履歴書」は当時のこととして、〈私は原稿を書いて持込むといふやうな術を知らなかつた。書けといはれて書くだけで、そこから入る稿料は時に多く時に少く、生活を維持するに足りなかつた〉と記している。

唐木は人生の態度としても定取を求めるところがあり、賑やかな割には不安定な文筆生活が似合わなかつた。継続的な仕事となりそうだった文芸時評は、やってみて性に合わないと悟りもした。これでは書いて稼ぐといつても長続きしないと不安がもたげる。ゆえにたえず定職を求めていた。田端で暮らしはじめた頃、唐木は富山房の編集者募集広告に応じて履歴書を出したこともある。遺憾ながら云々という返事が来た。不採用であつた。

田辺元から唐木に宛てた書簡に、当時の唐木順三の様子が垣間見える（昭和八年二月二日付）。

御近況を承り深く御同情申します。貴兄の行かるる途として文芸の哲学的評論が適せらるるかとお生はかねて考へ多少其方向へお口添もして見たのですが、貴兄御自身、目下此方向へお進みの御意志なしとすれば、何とかして教育方面へ再び御進出出来る事を希望せざるを得ませぬ。（中略）ただ教育界に対し小生全く縁故なく自らは何等の手懸をもたぬので直接お世話出来る見込がありません。遺憾ですが已むを得ぬ事と御諒察願ひます。

文筆生活への不適合感を唐木は旧師に訴え、一身に適した教職の斡旋を頼んだようだ。訴えはだいぶ深刻だったようである。とはいっても当時、田辺に手蔓はなく、その推薦で教職を見出すのは難事だった。就職難と官立学校からの忌避が、相変わらず唐木の教育界への復帰を阻んでいたのだ。

そうなるも厭でも当面は文筆の道しかない。すでに彼はそちらへ歩み出しており、評論家活動は表面的にはむしろさかんとなっていた。山室静の勧誘を受けて明治文学談話会の集まりに顔を出し、そこで自然主義文学や北村透谷などの話をした。この会を通じて唐木は、山室のほか柳田泉、木村毅、神崎清、土方定ひじかた一らと知り合いになる。

同会には前触れもなく木下尚江があらわれることもあった。木下は唐木の母校・松本中学の古い卒業生である。唐木は明治人の一つの典型を木下にみた。へどことなく大きく、自分の信念をもちつづけて世間に屈しない気概があつた」と、人物の印象を伝えている（『私の履歴書』）。

再上京翌年の昭和九年（一九三四）は前年から続いて、かなりの評論を各紙誌に発表した。『都新聞』での徳田秋聲論、『明治文學研究』（明治文学談話会の機関誌）には北村透谷論、改造社の『日本文學講座』第九巻に岩野泡鳴論、厚生閣の『日本現代文章講座』に「宇野浩一の文章」、といった筆業で、これでも一部である（これらはのち第二評論集『近代日本文學の展開』に収録される）。文芸時評をこなすことも相変わらず多く、舞台は『名古屋新聞』ほかとなった。ただし（書けといはれて書く）状態に変わりはなく、文壇・論壇関係者間に進んで人脈を広げて行くわけでもない。当時、（私のつきあひは例によつて石川くらゐのものであつた）と唐木は回想している（同）。

石川秀雄はこのとき、上野下谷にあった小さな方面事務所に住んでおり、田端から距離もそう遠くなかった。方面事務所とは（生活困窮者の援護機関）である（「石川といふ男」）。上野の庶民街にあった石川の事務所へ行くと、（生活苦、病人苦、失業苦にあへいでゐる人たちがそこへ相談にきてゐた）（私の履歴書）。不況のなかでどん底にいる人々を見て、唐木は悄然とする。世相は暗く、時代の空気は重たいままだ。満洲事変で国際関係が緊張し、日本は孤立するなか中国大陸へ軍隊を進めていた。国内では不安の哲学が流行した。キルケゴール、シエストフ、ハイデガーらの思想である。

なお唐木は同年夏、東京をひと時離れ、妙高山麓池ノ平で休養していたのが三木清からの葉書で判る。（紛々たる文壇の風情を雲煙過眼視して内に深く蓄へられんこと、切望に堪へません）と、三木は唐木に書き送っている（八月一六日付）。

こうして昭和九年も過ぎていこうとしていた。暮れも近づいた一二月九日、生家の父辰太郎が逝去する。二年前に脱腸で手術をしたことは前記したが、元の体調には到底戻らず、床に伏せることも多くなっていた。怒ることがほとんどない父だったが、晩年には寢言でよく怒鳴ったという。借金でいじめぬかれて悪夢を見たのである。父は次第に存在が細かいものになって、そのまま静かに生涯を閉じた。

順三は近親の一人として、棺を担いで寺までの三町ほどを運んだ。ひどく肩が痛んだが、棺の重さからだけではない。父親の浮沈と苦難の一生、寂しき晩年を思い、それが痛みとなって身体に響いてくるのだ。郷里では当時、土葬である。順三は土をかぶせながら涙が出て仕方なかった。悲しみは抑

えきれず声になる。〈苦しい中を学資を小言もいはずに出してくれた父〉を追想し、〈老いた父に何もしてやれない自分〉、その報恩の少なさを嘆いての慟哭だった（「私の履歴書」）。

成田高女

辰太郎の逝去で生家に帰っていた、ちょうどその時である。唐木順三のもとへ電報が届いた。就職先のこととは京都大学の文学部事務室へ頼んでおいたが、急報はそこからで、千葉県成田にある女学校に勤めないかという話だった。京大哲学科卒の前任者が退任するので、後釜にどうかというわけである。実は唐木夫妻の東京暮らしは生活費が底をつきだしており、父危篤の報を受け上伊那宮田へ帰る際の汽車賃に窮するところまで来ていた。文筆で生活するのはやはり見通しが甘かったのである。

唐木順三は迷うことなくこの話を引き受けた。葬儀が終わるとすぐ東京に戻り、成田へ行く準備をする。奉職は昭和一〇年一月からとなった。五年二か月にわたる成田時代がここに始まる。

成田高等女学校は成田山新勝寺が経営に関わっており、四年制で学生数は一学年五〇人、計二〇〇人のこじんまりした学校だった。教員も校長を含め一人しかおらず、うち男教師が五人（校長も数える）、女教師は六人。唐木は英語、西洋史、公民を担当した。かつて松本女子師範学校の臨時講師をつとめたので、女学校教師は経験済みである。私立（寺立）ゆえ公立校にありがちな教育界からの束縛は少ない。発表論文を問題視される気詰まりもなく、自由がきく教員生活を送れた。月給は八〇円と安かったが、生活の困窮が一転したことで、気分は明るくなった。彼が成田時代について〈まづもつて面白かった〉と回顧するのはそれらのせいである（「讀書のすすめ」）。

「成田高女の想ひ出」で、唐木はこう書いている。

西洋史は教科書などはそつちのけにして、勝手なことをしやべつた。クレオパトラとか、マリ・アントワネットとか、カテリナ女帝とか、とにかく女性の方を特に詳しく話した。

クレオパトラがどういう顔をしていたのか、彼女の鼻がもう少し低かったら世界史は変わったと言われるのはなぜか、という話を彼はした。また、アントワネットがギロチン台に立った時どういう心境だったか、という話も。歴史ヒストリーというより物語ストーリーを語ったわけで、あちこち道草を食いながら悠然と講義をしていた姿が浮かぶ。道草があまりに多すぎて、授業の終わりには駆け足で説明しなければならぬ日もあったが、そんな脱線授業が認められたのも私立ならではといえよう。

女学校のすぐ下には蕎麦屋があり、そこで唐木はよく一杯九銭の掛け蕎麦を注文した。こちらも懐かしい思い出である。

授業を担当するとともに、唐木順三は庭球（テニス）部の部長をやらされた。もとよりテニスに縁なき素人部長で、得手にもなれない。生徒のほうがずっと熱心で、三年生になる頃にはみんな唐木より上手くなった。学校近くの本屋の若主人がコーチ役を買って出してくれた。その指導により、成田高女は県大会で相当なところまで進む有力校となる。

成田高女は小さい学校だったが、隣に同じ成田山の経営する図書館があるのは有り難かった。一〇



成田高女教師時代、庭球部部長として
(昭和12年頃) (唐木家蔵)

万冊以上を所蔵し、当時、地方図書館としては一流の存在といえた。〈私はこの図書館の恩恵にあづかつて奈良仏教、殊に仏教美術を割合に多く読みまた見た〉と唐木は回想している(同)。蔵書のなかには探検家スウェン・ヘーデンの中央アジアレポートなどもあり、また、鈴木三重吉が集めた英文学書が揃っていて、量のみならず質の充実ぶりは唐木を喜ばせた。三重吉は明治四一年(二九〇八)一〇月から四四年四月まで、同じ成田山立の成田中学(現在の成田高校)で英語教師を務めていたこと

があり、本の揃いはその縁からである。なおこの中学では、のちの芥川賞作家中山義秀、英文学者の中野好夫も英語教師として教鞭をとっていた。中山は大正一五年(一九二六)から八年間在籍しており、唐木来任の少し前までいたことになる。

成田の唐木夫妻は眺めの良い傾斜地に住んだ。付近の林ではリスが走り、梟が鳴いた。藁を打つ音がよく聞こえたが、中学校教師の住人が藁から繊維を作り出す実験をしていたのである。

順三の義父は千葉医専の教授をしていたとは前述したが、当時の教え子が成田で医院を開業していた。唐木夫妻はその奥さんに地元の情報を聞き、暮らしに役立てた。〈世馴



高藤武馬（昭和15年）
（『筑摩書房の三十年』より）

れない私たち夫婦は着任早々から、なにからなまでに御世話にあづかった。住宅のこと、買物のこと、末広農場で造つてゐるレバー・ペーストが安くてうまくて栄養があること等々で、すっかり頼りになった（同）。ちなみに唐木はこの医院の娘を教室で教えている。

生活が落ち着いてくると、唐木順三は近隣へしばしば出かけるようになった。小起伏の多い成田近郊をよく歩

き、さらには我孫子、手賀沼、外房の九十九里浜、御宿、白浜など千葉県のあちこちに足を延ばす。茨城県側にも行っていたのは、三木清の唐木宛書簡中に（大洗からのおはがき拝見いたしました）とあることから判る（昭和二年六月一日付）。

また千葉県内の三里塚へは勤労奉仕に出かけた。そこには宮内庁の御料牧場があった。唐木は鎌を持って広大な馬糧用もちし畑に入り、草刈りをする。一日にひと畝の草取り作業をおこなうため、往復三時間余の道を彼はひたすら歩くのだった。

三里塚近くには自然主義作家・水野葉舟が食用野草の研究をしながら隠栖していた。唐木の第一評論集を担当した春陽堂の編集者高藤武馬は、柳田國男から紹介され、雑誌『方言』のことで葉舟を何度か訪ねていたが、ある日、葉舟の案内にて印旛沼で清遊することになった。一〇人ほどの一行で、高藤のやっていた同人雑誌『傳統』の仲間とともに、唐木順三も成田から参加した。印旛沼を舟で渡

り、土地の篤志家のところで魚を食べた（高藤「思い出すままに」）。

唐木の成田時代、日本は非常時から戦時へと移ってゆく。日中の戦闘が本格化し戦火が広がった。〈私は成田の一人の町民として、また女学校の教師として、戦争に出て行く人を、日の丸の旗をかざして送り、慰問袋をつくり、若干の物資の寄付をした〉と唐木は回想する（「私の履歴書」）。彼は〈庶民の中に音もなくくらす庶民〉としてふるまった。積極的に戦争を賛美したわけではないが、いかにも知識人らしく戦争批判をやるわけでもない。一国民として平均的な「銃後のつとめ」を果たしてきたのである。〈召集されて出てゆく生徒の父兄や町の人たちの武運長久を祈り、戦争の早く終ることを心の中で願った〉のだ（同）。かつての闘争的な「赤い」唐木は再転回し、端正な肖像に戻り、〈庶民〉に着地していた。

戦時のなか、成田高女で唐木の同僚だった画と習字の教師が伍長として召集され、出征してゆく。やがて脚に銃弾を受け内地へ送還されたこの教師は、病院で片足を切断する手術を受けるも、遠からず帰らぬ人となった。地元出身で明るく気のきく人間であった。唐木は思い出として彼の油絵（牡丹の絵）を貰ったという。

第二評論集

定収のある職業を得たことは、唐木の心身をすっかり温順なものとした。彼は本質的に流浪型ではなく定住型なのである。ぐらぐらするところに立ち続けるのは人生のフォームとして似合わなかった。然さすれば、満洲時代から失業、文筆生活に至る五年の混沌期は忍耐と摸索を重ね続ける逆境だったといつてよい。それがようやく転換された。彼は論壇の喧噪を離れ、本



成田高等女学校教師時代
(昭和11年前後) (唐木家蔵)

来の定住的・隠者的な生き方に回帰した。

生活が安定するとともに文筆の業は目立って減った。

年初に成田へ移った昭和一〇年は、作品発表が二度しかない。『早稲田大學文學講義』でのドストエフスキー論と、『文藝通信』での宮澤賢治に関するエッセイ、これだけである。後者は賢治全集に対する感想を綴ったもので、とりわけ第三巻童話集について唐木の筆は、へたと

へば、あの『ボラーノの広場』の書きだしのところ、山羊を探して、朝の野原を歩いてゐるところなどは、どうしても忘れられないものがある。この本は図書館から借りてなどしてあわてて読むべきものではない。ゆつくり自分の本で一度に一つづつ読むべきだとつくづく思つた」と述べてゆく(「宮澤さんの本」)。

続く昭和一一年は『東京朝日新聞』と『帝國大學新聞』に計五回、短文を載せるにとどまった。二年は評論が二作、一三年は評論が一作でごく短い。一四年はぜんぶで八作に増えたが半分はエッセイである。昭和九年には各種媒体に三八回も発表したことを考えると、あるいは撤収的といつてもよい。文筆は糊口を凌ぐためにやむなく取り組んでいた観が、こうした激減ぶりからも察することができよう。

発表されず仕舞だつたが、昭和一三年には「東北視察記」が執筆された。同年一月三〇日から二月

四日までの旅の記録である。千葉県中学教育研究会からの派遣で、唐木は東北四県の教育状況を見てきた。日記調の記述が続くなかで、自由学園藤尾村セツルメント、仙台の女子師範と第三高女、さらに水沢、平泉、山形、福島と強行軍の様相が綴られる。平泉では中尊寺を見て、他は現地の高等女学校を視察しつつ巡った。生徒の様子、教育現場の具体が続くなか、国防献金、兵士慰問という言葉が出て来て、戦時だということが否応なく判る。一方で同稿は人民戦線派の教授が検挙されたニュースを点描しており、引っぱられた学者のなかで宇野弘蔵の名がとくに記される。

成田時代は文筆活動こそ少なくなつたが、評論家唐木にとつて重要なトピックが一つある。第二評論集『近代日本文学の展開』の上梓で、昭和一四年六月のことであった。四六判の清楚な装幀で、定価は二円。昭和七年に『現代日本文学序説』を出版して以降、雑誌や新聞に書いたものから選んで一冊にした。出版社は黄河書院で高藤武馬の紹介による。黄河書院は春陽堂にいたこともある廣谷千代造が自宅で一人にてやりはじめた版元だった。店主の廣谷は前記印旛沼行にも参加した『傳統』の同人で、広島出身。高藤とは中学時代からの友人である。〈この本については特に誌すべきことはない〉と唐木は書くが、〈本をみたときはうれしかつた〉とも記している（『私の履歴書』）。

黄河書院は戦争末期、筑摩書房に版權一切を譲渡し、廣谷は故郷広島へ引き上げて行つた。〈結果はまるで、原爆で死に行つたようなものであつた〉と高藤は回想記で書いている（『思い出すままに』）。ちなみに、唐木第一評論集刊行のくだりで登場した仲小路彰は、戦後になつて山中湖畔に隠遁したまま、東京の土を踏まなかつたという。戦争と敗戦のなかで、出版人にさまざま運命があつた



成田高女教師時代の順三（右から2人目）
（唐木家蔵）

のだ。なお高藤武馬はのち法政大学教授になる。

成田時代の五年はこの第二著上梓が数少ないトピックだといえ、唐木にとつて、満洲―宮田（失業中）―田端の五年と比べて格段に波瀾のない風なまの期間であった。左傾化、対満鉄運動への参加、失業、文筆暮らしと続く擾乱の五年を経て、〈庶民の中に音もなくくらす庶民〉として静寂の五年が送られる。当時の唐木について〈成田時代すでに、いくらか隠者風をおびていた〉と臼井吉見は記しており、後年、特徴的とされる「隠者」の有りようがはじまっていた（「蛙のうた」）。

〈私の履歴書〉で書いている。東京まで電車を使えば二時間も掛からず、来訪を阻む距離が生じたとはいえない。彼らは賑やかで社交的な人間ではないが、親しき友人知人との行き来は欠かさない。それなのに五年間で〈極めて少ない〉というのは、隠者化した結果だとも見える。唐木は〈遮断された生活〉とさえ書いている（同）。擾乱の五年を経て心身の疲弊を癒す必要はあったろうし、美や燦爛から遠ざかり調和と穏当を求める原質が復活したともいえよう。彼が静かな生活を定位せんと意識したのは間違いない。

戦時となり時局が厳しさを増してきた。だからこそ余計に身辺は静穏を保っておきたかったのだろう。それでも五年ゆえに來訪者はいくらかあった。高藤武馬は『方言』の仕事で水野葉舟を訪ねる行き帰りに、しばしば唐木の寓居にも顔を出した。深田康算の娘が突然來た話は第三章で触れている（一〇五頁）。ほかには、まず母かまよが兄勝造に連れられてやって來た。母はしばらく滞在している。この成田訪問はかまよにとつて楽しい記憶として残り、滞在中の出來事を後年まで細かく語っていた。他に相原信作と網野菊が來たし、満洲時代の人間では教育専門学校の生徒山田茂勝もやって來た。山田はロシア女性と結婚していた。教員赤化事件（二・四事件）で教育界から追放された二人が、牧口常三郎の書物を持ち訪問して來たこともある。唐木は「折伏」されずに終わったが、それは元赤化教師たちの一つの生き方であった。妻フサエの両親をはじめ妻方親族も時折やって來る。そして最後のほうの訪問者に彼ら^{あき}がいた。古田晁と白井吉見である。

2 筑摩書房創業

運命相互体

白井吉見は明治三八年（二九〇五）六月一七日、長野県南安曇郡三田村（現在の安曇野市堀金）に生まれた。古田晁は明治三九年（一九〇六）一月一三日、同東筑摩郡筑摩地村（現在の塩尻市北小野）生まれ。ともに松本中学に進んで同級生となり、生涯にわたる友情を築く。唐木順三は二人についてこう書いている。



東京帝大時代の臼井吉見（左）と古田晁（昭和3年）
（塩尻市立古田晁記念館ガイドブックより）

のであつた。

その〈運命相互体〉の二人が、昭和一五年（二九四〇）正月、連れ立って唐木を訪ねてきたのである。二人の松本中学時代、唐木は一級上の先輩だった。臼井について唐木は、〈中学時代に特別親しくしたことはない。ただその存在は知つてゐた。〔中略〕旧制の松本高校でも同窓だが、この時も親しくしてはゐない〉と書いている（「臼井吉見のこと」）。ただ、共通の友人に金井融がいて、金井を通じて噂くらいは聞いていた。額が広く眼が出ていたその容貌も知っていた。一方の古田は学内で会つてはいただろうが、直接は知らないままである。中学を卒業した二人は松本高校へ進み（古田は郷里

臼井吉見はその弔辞の中で、「君と交はること五十五年六ヶ月」云々と言つた。松本中学一年の時から今日にいたる長い年月、時に場所は距たつてゐても、心の通ひのない日は無かつたであらう。二人の関係は友情などといふものではない。互に形となり影となつて相伴つてゐたといつてもなほ足りない。運命相互体とでもよびたい程のも

（古田晁に先立たれて）

の小学校で二年間代用教員をしており、入学は白井より一年遅れた、唐木とはここでも同窓となる。ただし四修よんしゅうでいわば飛び級して高校へ入った唐木とは白井でも二学年の差がついたこともあり、高校時代に親しくできたわけでもない。大学は白井、古田が東京帝国大学、唐木が京都帝国大学だから、ここで離ればなれになる。国文科の白井と倫理学科の古田は下宿も共にしてまさに相棒であった。

唐木は高校卒業後、面識あった後輩の白井とは淡いながら関係を続けており、年賀状の交換などはしていた。白井は大学卒業翌年に陸軍幹部候補生として高崎の連隊に入り、まもなく除隊となったが、このとき満洲教育専門学校の教授をしていた唐木から同校教員の誘いを受けた件は前述している（一六九頁）。白井吉見は除隊後、結局、福島県双葉中学の教師になった。失業中の唐木が双葉まで白井を訪ねて行くこととしたことがある。さしたる用事ではなく、鬱屈時代の気晴らしのようなものだった。しかし、学校は鉄道地図に載っておらず、現地を探しても辿り着けず、諦めて帰ったという（「白井吉見のこと」）。

すなわち白井とは小さな交流があった程度で、古田とはほぼ面識のない間柄であった。その二人が成田まで唐木を訪ねてきた。出版事業立ち上げに際して、唐木の応援を得ようとしたのである。唐木は事前に、古田から（白井のすすめで本屋を開くことになったといふ通知）を受け取っていた（「私の履歴書」）。筑摩書房草創期の逸話であるが、何故二人が唐木に着目したかについては、松本時代の先輩で人物見識を白井が知っていたこと、学年首席をとった秀才で頼りがいある兄貴格と見ていたこと、思想や哲学に強い人材を欲していたこと（白井や古田は文芸物のほうに興味と知見があった）、京大哲

学関係の著者人脈を導入したかったことなどが挙げられよう。すでに単著もあるひとかどの評論家で、それなのに筆勢を収めたかのごとく成田の地で隠棲していたこの先輩文人を、出版事業という中央舞台に引つ張り出そうとの意気ごみも、二人にはあったのではないか。これらが相俟って白井—古田と唐木順三の運命の出会いがなされた。〈運命相互体〉の二人が、唐木を巻き込んで「友人共同体」を作り、筑摩書房創業という一大事業に挑んでいくドラマがここに始まるのである。三人の繋がりについて白井吉見は、〈少しはましな本を出そうというので、同志的に結ばれた仲間だった〉と書いている〔蛙のうた〕。

その初発にあたる成田での出会いの日のことは、筑摩創業伝の類によく紹介されているが、ここでは原典にあたる白井の「蛙のうた」から引用していきたい。

彼を成田にたずねたとき、客よりは主人が、したたかに酔った記憶はあるが、なにを語ったかは思い出せない。しきりに引きとめてくれたが、辞して帰る暗い町通りを、彼の大声が響きわたったこと、汽車に乗りこんだ僕らにむかって、改札口で、なにやら、まだわめいていた姿だけは浮んでくる。彼は西田幾多郎を慕って、大学は京都の哲学科へ行つたため、ほとんど語り合う機会がなかった。酒についての実力のほども、このとき、はじめて知らされたのだった。天成の素質もあろうが、奉天あたりでの習練のたまものかと思つた。

すでに酒の話である。後述もしていくが筑摩書房伝には、酒にまつわるエピソードが多い。実際多かったのだろうし、酒がらみの逸話、事件を周囲が好んで筆写し後代に書き残したのだから、俄然酒物語の宝庫となっている。その始まりがこの成田の夜であった。後年、唐木順三は荒酒あれどけの古田晁あきに対して酒をやめるよう忠言したことがあり、手紙も残っている（詳しくは後述）。それでも最初の出会いの時は、唐木のほうが酒に浸りすぎてやや破調になったようだ。白井の観察中、「天成の素質」という表現は面白く、しかも正鵠を得ている。（なぜ私はあれほどまでに酔ふことを欲したのだらうか。高校で酒を覚えて以来、終始飲みつづけてきた」と唐木は自分でも記している（「私の履歴書」）。

三人は成田向台の唐木家で（田舎の安酒）を飲んだ。唐木にとって出会いは気持ち良いものだったのだろう。すっかり出来上がってしまい、二重廻しを着て駅まで二人を見送ったときは、思わず大声が出た。あるいはそれは、出版事業という二人の夢への共感であり、一緒に事業をおこなう希望が発した雄叫びだったのかもしれない。実際、白井―古田との出会いによって、唐木順三の生活は（また一変することになった）のである（同）。

銀座西六丁目

一方、古田のほうも、唐木の人柄にすっかり惚れた。それで帰ったのち、成田の唐木へさかんに手紙を書く。東京に出て来ないか、というものだった。それはラブレターのようなだったと唐木はいうから、まさに「ラブコール」であろう。ついに心を動かされた唐木は、銀座泰明小学校の前（銀座西六丁目）にあった筑摩書房を訪ねる。古田は大歓迎し、行きつけのバー「サロン春」に彼を連れて行った。そこでまた酒である。唐木が成田に戻ると、再び「東京に出て来

ないか」という手紙。これがくり返された。彼の心はさらに動いていくのだった。成田高女にも五年いて、悪い職場ではなかったものの、やはり倦怠の感おぼは澱おのように溜まってくる。

ただしもちろん、唐木は東京で文筆生活をしていた頃の辛苦を忘れていない。だからこそ、安定した収入を求めて成田に来たはずだ。前述もしているが、彼は狩猟型・放浪型ではない。定住型の精神性を本来的に持っている。しかも独り身ではない。転身に慎重となるのは当然だった。古田からの「来い」でおいそれと腰を上げられない。

こうして逡巡しているちよどその時、かつての担当編集者・高藤武馬から転職の話が持ち込まれる。神奈川県川崎の郊外に新設された法政大学附属第二中学校（現在の法政大学第二高等学校）で教壇に立たないか、との誘いであった。高藤はその教頭になっていた。これで唐木の腹は決まった。法政中の教師プラス筑摩書房の顧問格という、いわば「合わせ技」で新しい生活へ向かうことを決心したのだ。古田と高藤の呼び出しに応じて、唐木は昭和一五年三月に成田高女を退職、成田の地を去って再び都上がりする。満三六歳になっていた。

同年四月より法政二中の教師となり、担当は国語、のちに英語や西洋史も講じた。月給は八〇円、〈恐ろしく安かった〉と後年回顧している（「思ひ出と婆心」）。ただし、へ一週四日出勤といふのがミソであった（同）。これで時間の余裕が出来、筑摩書房の支援も可能になったのだ。加えて唐木は法政大学予科の講師にも任ぜられている。

住まいは妻フサエの母が移り住んでいた神奈川県の南林間に定めた。そのうえで週一回は銀座西六



白井吉見（昭和15年）
（塩尻市立古田晃記念館
ガイドブックより）

丁目の筑摩書房へ顔を出し、正式に古田を助けることになる。これで「友人共同体」のうち古田と唐木は集った。しかし肝心の白井吉見はまだ信州である。唐木は上京を促す手紙を白井に送る。古田が唐木におこなった合流の求めを、今度は唐木が白井におこなうのだった。

筑摩書房創業当時、白井は長野県伊那中学の国語教師である。昭和一〇年に福島県双葉中学から信州の教壇へ転任していたのだ。「友人共同体」からの応援要請が心に響く。しかし、白井は都会暮らしが好みでなく、地方の学校教員という立場は身に合うものと考えていた。それに、信州で教師をしながらでも、古田らの事業を応援できると思っていた。いわば遠隔支援で、書簡や電話での意見交換のほか、必要に応じて短期上京してくる、といったかたちである。それでも創業まもない新版元にとって白井吉見の存在は大きい。

白井はまず、傾倒していた中野重治の本を出版しようと考え、古田とともに豪徳寺の中野の住まいを訪ねた。随筆集の刊行を承諾して貰うためである。紹介状もなかったが、二人は初対面の中野に信用された。出版の素人が始めた事業でしがらみがなかったうえに、二人の話が生一本だったからだ。くどくど説得しようとはせず、〈用件だけをしゃべってしまったら、もう話はなかった〉という遣り取りだった（白井「蛙のうた」）。中野は左翼文士として軍や官の当局から睨まれ、発表場所が限られて逼塞していた事情も幸いした。相手は業界慣れしていない朴訥

者だが熱意だけはある。彼ら新版元の人間に任せてみようとの気になったのだ。

筑摩書房は次に宇野浩二と接触し、その宇野の紹介で新進の文芸評論家中村光夫に着目した。こうした初期の文芸系企画に関しては主として白井―古田ラインで方向性を決めてゆき、著者交渉をおこなった。かくして『中野重治随筆抄』、宇野の『文藝三昧』、中村の『フロオベルとモウパッサン』、この三冊が創業出版となる。

三冊分の原稿が集まることになったが、印刷製本をどうするかが大きな問題だった。ここで唐木順三が動く。当時、用紙確保が難化していた。そのなかで唐木の知人上田庄助が用紙付きで引き受けてくれることになった。工場は浜松町である。さらにのち筑摩書房は大同洋紙店の三井長三と縁ができた。三井は新出発版元の意気込みが判って、比較的安い値段で用紙を提供してくれた。闇値で莫迦^{ぼか}高い用紙もありえた時代である。この三井を見出したのも唐木だった。これで企画、原稿入手、印刷製本という一連の流れが出来、出版事業は具体化していく。

昭和一五年六月二九日、創業三冊の出版広告が『朝日新聞』朝刊一面に出され、新版元の誕生が告げられる。広告文は白井吉見が書いた。

翌昭和一六年二月頃に、創業出版の著者だった中村光夫が嘱託として筑摩書房に入る。これで顧問格として週一回の編集会議に参加するのは唐木に加え中村となった。続いて編集員として竹之内静雄が入社し、別に斎藤正直も嘱託で入った。すでに営業担当として春陽堂から和田英雄が、経理担当として古田遠縁の青木民江が加わっている。とはいえ遠地の白井吉見を含めても、まだ総勢八人の小所



中村光夫（昭和13年）
〔筑摩書房の三十年〕
より）

代にあって、彼らは反時代者としてふるまおうとした。すぐれた初心である。

軍部や国粹主義者に凭^{もた}れ、時勢に阿^{おも}る書き手の多かつた時代

帯である。当然ながら、唐木順三も著者廻りをして執筆依頼や原稿取りをおこなった。すべては手探りだったが、自分たちの納得する良い本を出そうという意気だけは高い。日中戦争は厳しくなり、男子には赤紙がいつ来るか判らない時代だった。まもなく太平洋戦争突入に至る緊迫した情勢のなかで、人々の表情に緊張が貼りついていった。教養主義的な出版活動は平和時の事業という面が強い。となれば、新版元を始動させる時期として、逆境中の逆境といえたのである。それでも創業者たちの熱意のほう勝っていた。この状況下、「友人共同体」は精神的にも頼りになる。唐木順三と古田晁は、上京を促す手紙を白井吉見に出し続けるのだった。後年、唐木は筑摩創業期のことを回想して、こう述べている。

いい本をださう、とはどこの本屋でも考へることだらう。筑摩もちろんさうであつたが、当時殆ど合言葉になつてゐたのは、「ほんもの」を出さう、ほんものの著者に書いて貰はうといふことであつた。にせもの、まがひもの、いんちきもの、きはものを嫌つた。

（「私の履歴書」）

ただ「私の履歴書」を書いたのは晩年の唐木であり、出版業界の渦に採まれた経験をふまえて、こう書き添えることも忘れていない。

一方ではこの「ほんもの」尊重が出版方針を窮屈なものにするといふきらひもあつた。古田の個人資産に頼つて、格別に儲けなくともいい、ただいいものを出しさへすればいいといふやうな傾きが強くすぎるという風があつた。

これは「ほんもの」志向人が持つ根本的な背反であり矛盾であろう。筑摩書房の歩んだ、必ずしも平坦ではなかつた長い道のりを知っている唐木は、初心の清らかさとそこに潜む自尊の弊について、痛みをもつて綴っている。

法政二中

さて、成田をあとにした唐木順三の勤務先となる法政二中は、当時、創立早々で二年生までしかいなかった。校長井本健作は兀山人こつさんじんと号する俳人で、〈醫の専門にしぐるる誰れ病むか〉〈守愚こ、に六十六の爐を開く〉等の句がある（「思ひ出と婆心と」）。ふだんは温容寡黙で孤高の観ある人物だったが、〈生徒の不正は断乎として叱正〉し仮借なき面もあつたという。一方、教頭の高藤武馬は酒好きで酒脱、よく校内のプールで泳いでいた。〈なかなか優秀な先生がゐた。おもしろい先生もゐた〉学校であつた（同）。なお、法政大学予科の同僚教師には、蓮田善明ぜんめい、清水文雄、栗山理一りいちと共に『文藝文化』を創刊した池田勉つとむがゐる。池田は昭和一五年四月、大阪府立今宮中学

校より転任してきた。

唐木の法政二中勤務期は、教育の世界に戦争の影が色濃く落ちる時代でもある。日本は総力戦の只中に突入し、生徒のうちから予科練に行く者も出ていた。(日の丸をタスキにして出かけていったが、その旗のなかの三つ四つには、たしか私の名も誌されてゐた筈である)と唐木の回想にみえる(同)。たいへんな時期を迎えており、教え子の運命も非常の急流に投げ込まれるがごとくとなつた。

さて、法政勤務と同時に、唐木が神奈川県南林間を住まいに定めたことは前述しているが、地所は神奈川県高座郡大和村南林間都市三千六百九十番地である。妻フサエの父後藤自助が亡くなったのを契機に、残された母親と家族は長野を引き上げ、この地にやってきていた。唐木は妻とともに義弟の住まいに同居し、屋敷内に小さな家を建てた。成田高女から貰つた退職金を建築資金に充てたのである。

移つてきた翌昭和一六年七月一日、悲しい出来事が起きた。同居の義弟後藤勉が脳膜炎にて逝去してしまつたのだ。義弟は若きより病気がちで骨髄炎を宿していた。入院をくり返し、ついに精根尽きて、消えるがごとく昇天した。

病床で看取る唐木順三の短歌が残されており、一部を引いておきたい(「愛弟永眠」より)。

玉ゆらのいのち絶えなんとするか弟の 首をみつめつ、風の音強し

手作りの初なりの瓜みせむとて もて来りしがせむすべもなき

今日今日とのびながらへて十日経ぬ 人の命のはげしくもあるか

切々と伝わってくるものがある。頭脳明晰で意相通じる弟だった。病身ながら、若かったこともあり、ひたすらに生きることを願った。その彼が亡弟というしかない存在になってしまう。行年二三。兄順三の愛惜の情は尽きようがない。

唐木順三は南林間の新居から川崎郊外の法政二中へ通い、また銀座西の筑摩和辻『ニイチエ研究』

書房に通った。筑摩へは鉄道を乗り換え一時間以上の道のりである。

唐木はそこで一人の編集者として働いた。さまざま本の出版に関わったが、たとえば和辻哲郎『ニイチエ研究』改訂版は、彼ならではの仕事である。筑摩に関係するようになった彼は和辻に接近し、自宅や研究室を再々訪ねた。唐木の京都帝大在学中、和辻は助教教授でいたが渡欧して不在の期間もあり深い縁を結べたとはいえない。和辻にすれば唐木は新顔というしかなかった。

唐木は粘り強く接触を続けた。第二章で既述もしたが（五七頁）、彼は高校時代、和辻の内田老鶴圃版『ニイチエ研究』に出会い異常な感激を覚えた。くり返し読み込んで座右の書にしていたのである。〈藍地のかたい表紙で、ずつしりと重い本であった。私はしばらくこの本をかかへこんでゐた〉と、「私の履歴書」で書いている。その記憶を胸に編集者唐木順三は、まずこの『ニイチエ研究』を筑摩で再刊しようと考えた。著者と縁をもち、自身の若き日の愛読書を出したいと望む彼の意気込みは強い。

心を決した唐木は古田とともに和辻を訪ね、言を尽くして説得する。しかし和辻はなかなか返事しない。窮した唐木はついに、内田老鶴圃版『ニイチエ研究』に専心した自身の過去を和辻に語り、〈本も三十年もすれば、ひとり歩きをさせてもよいではないか〉と訴えた（私の履歴書）。これで固かった門の蝶番が動いた。和辻はとうとう承諾してくれたのである。

再刊に際して、『ニイチエ研究』は全面的に筆が加えられた。直ちに一年半もかかったというから、新規書き下ろしに近いたいへんな作業となった。このときの事情について唐木は「和辻哲郎の人と思想」で、次のように記している。

一九四二（昭和十七）年に筑摩から出版された改訂版『ニイチエ研究』の序の中には、「この書ここに新しく版にするのは、一に古田晁、唐木順三両氏の強硬な勧誘にひきずられたのである」と書かれてゐる。私は旧版そのままでもよいから出版してほしいと願つたのであるが、和辻さんは相当に多くの訂正をされて改訂版ができた。私はそのとき校正刷に書きこまれた綿密な筆の跡をみて、あらためて和辻さんの真理探求への忠実さを感じた。

新版への定本確定作業がおこなわれるさなか、日本の対米宣戦布告という歴史的出来事が起きていく。そして改訂版『ニイチエ研究』が刊行された昭和一七年は、筑摩書房が株式会社として設立登記された年でもあった（二月二六日）。資本金は一九万八〇〇〇円。世界大戦の一方の主人公として苛

酷な運命を歩む国で、小版元が試運転から本格稼働の時期を迎えていた。『ニイチエ研究』は編集者としての大仕事で、唐木には一定の達成感があったはずだ。ただならぬ年の刊行物であり、その意味でもこの本の印象は後年まで唐木の記憶に刻まれた。

達成に至る過程は語られやすいが、一方で、そうもいかない場合は幾らでもある。刊行実現を湖上に望める形良き浮島だとすれば、湖上まで浮かずに終わつた浮島づくりの徒労はそれに倍していたはず。唐木は続けてこう書く。

『ニイチエ研究』の場合は、私の懇願が成功した例であるが、いくら頼んでみても肯はれない場合のはうがむしろ多かつた。和辻さんは私の依頼を黙つて聞いておられる。黙つておられるのでさらに言を加へる。それでも答へられない。けつして無愛想ではないのだが、同調はされない。そのうちに和辻さんは右手で右の脛や足のあたりを撫でたりこすつたりし始める。ここまでくると私は言に窮して、そのまま引きさがらざるをえなかつた。普通なら、なんらかのいらへ〔いらへ…返答〕があるべき時機にも言葉がなかつたのである。

「成功」の裡に入つた仕事の背後に沢山の「失敗」が堆積されていた。出版人の見慣れた光景といえようが、新人編集者唐木順三もまた、こうした体験を和辻以外の著者とも無数に重ねてきたと察せられる。それらを乗りこえながら「編集者の仕事」が成されていったのだ。



古田晁（昭和16年）
（『筑摩書房の三十年』より）

名訳『政治の彼方に』
創業まもない筑摩書房で唐木が手がけた仕事として翻訳書がいくつかある。クリストファ・ドウソン著、深瀬基寛ふかせもとひろ訳『政治の彼方に』はそのなかの重要な成果だといえよう。高坂正顕、西谷啓治、高山岩男とともに「京都学派四天王」（八五頁参照）の人とされた鈴木成高は、唐木と年齢も近く（唐木明治三十七年生まれ、鈴木四〇年生まれ）、相許す友人として認め合い交流を深めていたが、鈴木夫人の叔父が深瀬であった。名訳とされる書『政治の彼方に』は深瀬―鈴木―唐木のルートで筑摩にもたらされたのである。なお、唐木は西洋史学者の鈴木成高に『世界史』を書かせようとして、古田とともに京都まで通ったが、実現しなかった。唐木が手がけて上梓となった翻訳書はほかに、ベルトラム『ニーチエ』（浅井真男訳）、アウグスチヌス『ソリロキア』（高桑純夫訳）などがある。もちろん翻訳以外にも多方面で筑摩の出版活動に関わり、たとえば武者小路実篤『自画像』刊行の際、出版の約束を取りつけたのは唐木―古田のコンビだった。

「素人くさい」との悪口も聞こえてくるなかで、筑摩書房は小所帯のメンバーが獅子奮迅と動くことで独自の存在感を示しつつあった。編集会議などのあと、古田は唐木、竹之内らを引き連れていつも銀座通りを歩き、呑み廻る。新橋寄りの横町にあった「うづまき」を最良とし、根城はほかにもいくつかあった。勢い、酒の逸話に事欠かなくな

る。唐木の場合はどうかといえ、たとえば、ジャポンという銀座のバーで、一升瓶を持ったまま階段をがたがた落ちていったという「酒勇伝」がある。社長古田は呑みっぷりを確かめて人物を見極め採用を決めていたという裏話もあるくらいだから（和田芳恵『筑摩書房の三十年』）、まさに酒と議論の日々であつたろう。戦争が厳しくなつても彼らは古田の宰領で呑みに呑んだ。その輪のなかに唐木も三もいたのである。

当時、戦時風景はどこにでもあつた。出版への統制は厳として仁王立ちしており、硬軟取り混ぜた遣り方で版元活動に影響力行使する。用紙の事情も逼迫していた。それでも若き版元に集つた者たちは「ほんもの尊重」の旗を高く掲げ、無手勝に自在に、ある意味浮世離れした超然たる態度で、重苦しい時代を「闊歩」していたのである。戦時下日本において唐木は、一方でスクエアな教員生活を送りながら、他方で出版人特有の矜持と反逆の生き方に身を投じていたのだ。

3 〈節々熱心〉な編集者

鎌倉・西田のもとに

南林間に移つた唐木順三にとって、西田幾多郎の聲咳（けいがい）に接する機会が増えたことは大きな幸이었다。西田は当時、一年のうち主として夏と冬は鎌倉に暮らすようになっていた。昭和三年に京都大学退職ののち、しばしば鎌倉で過ごしており、当初、材木屋や円覚寺境内を仮寓としていたが、岩波茂雄などが世話をして昭和八年一〇月、極楽寺姥ヶ谷に家

を持つ。南林間の唐木にとって、姥ヶ谷は銀座西の筑摩書房より遙かに近く、川崎中原区の法政二中と比べても距離的には同程度である。〈ほんたうの教育者〉西田と住まいが近くなった。引越しの功であろう。

鎌倉訪問の事情について唐木の文章を見てみたい。「西田幾多郎先生——昭和二十年六月のノートから」を元に引く。なお、冒頭の〈此処〉とは南林間の新居のこと。

僕が鎌倉の先生を度々お訪ねするやうになつたのは、千葉県から此処へ移つてきてからであつた。従つてこのまる五年以来、比較的によく先生に接することができた仕合せ者である。鎌倉へ行くことはこの上ないたのしみであり、先生のお顔を見ることは、ただそれだけで大きなよろこびであつた。

唐木は大学生時代に、〈先生だけが魅力をもつてせまつてきた。先生の講義には欠かさずにでた。〔中略〕そして僕は先生の姿に本当のものを感じたのである。それで僕には十分であつた。安心ができた〉というほど人格的な影響を受けた。ただし学生の頃は親しく接したというのではない。〈先生ははるかに高く尊いところにゐた〉のである（同）。唐木にとって西田は仰ぎ見る存在であつた。卒業のち上諏訪での教員時代、文通をすることで初めて西田と個人的な付き合いが出来た経緯は前記しているし（第四章一三四頁）、満洲へ行く途上、京都に立ち寄り西田の家を初めて訪問した事情もす

に紹介してある（第五章一五八頁）。これらの時期の唐木は畏敬する師西田に対して、ごく遠慮がちな小さな関わりを持つだけであった。南林間時代になってようやく、西田幾多郎という存在が近いもの、親しいものになったのである。

「西田幾多郎先生」から続けて引いてみたい。

僕はお尋ねするのを、からりとよく晴れ上つた日の午後と決めてゐた。宿痾の神経痛とリュウマチが雨や湿気の多い日にはお痛みになられるからであつた。殊につゆどきがいけない御様子であつた。左の手に手袋をして、右の手で左指をもみもみしてゐられることもあつた。

唐木が氣を遣つて接していた様子がうかがえる。その西田は彼に、明治をやれと言つた。〈明治は二十年までが面白い〉と（同）。この導きは以前から唐木に対しておこなつていたようで、たとえば昭和一〇年一月一二日付唐木宛書簡——成田に就職口を見つけたという報への返信——に、〈明治の思想史といふ如きものをかいて見てはいかに〉の一文が添え書きされている。唐木は第一評論集『現代日本文学序説』を西田に贈呈しており、西田の提案はそれを読んだものだったと思われる。

この「明治をやれ」についてはのち本章で述べる。ここでは鎌倉の西田との交流について、さらに事情を追っていくことにしよう。

西田による唐木宛書簡のなかに、たとえば、〈本日折角お出下されましたのに折あしく不在にて誠

に残念に存じます〔中略〕実に美事な立派な林檎近来にない美味でした 厚く御礼申上げますとある（昭和一八年一〇月五日）。満七三歳の当時、外出をほとんどしなかった西田だが、この日はいつにない好天に誘われて円覚寺まで出かけていた。鈴木大拙を尋ねたのだ。それで来訪した唐木は会えず仕舞いだった。林檎は故郷信州産であろう。戦時日本では食料事情が悪化していた。そのなかで西田を食べ物で不自由にしては相済みぬと思ひ、唐木は野菜や果物を届けたのだ。戦争が厳しくなり物資が不足する時代に在って、唐木は昭和一七年頃から南林間の住まいを耕作地にし、半身を「百姓」として過ごすようになっていた。そこでの収穫野菜も西田のところへ届けられた（後述）。

学生時代、姿を見てよろこびと畏れを抱くのみだった西田幾多郎は、師弟ともに年齢を重ねた結果、親炙といふべき間柄へと変わっていく。唐木は西田から書を見せて貰ったし、本を借りることもあった。西田の唐木宛書簡には次の記述が見える。

例の「歴史の意味」をおあきでしたらその中お返し下さいませぬか 一寸参考に見たき故 御郵送で結構で御座います
(昭和一九年四月六日付)

先日は奥様わざわざ本を返しにお出下さいまして誠に恐縮いたしました (同四月二〇日付)

本の返却に際して唐木は妻に直接届けさせた模様だ。ここでも西田への気遣いが感じられる。

さて、唐木の訪問時、二人は表現者同士として真率な対話をおこなった。時代が時代であるゆえ、西田は人間や戦争について頻りしきと話をする（内容は後述）。また唐木は西田から明治時代観をさまざまに聞いており、そのなかに次の話があったことを記憶している。

先生によれば明治三十七、八年の日露戦争までが明治らしい明治で、ここが一転換の時期である。たとへばそれまでは最優秀のものは理学部、文学部へいった。それ以後は工学部や法学部へ行くものが多くなつた。純粹の学問から実用、応用の学問へと変つたといふのである。（「私の履歴書」）

社会の要請にに応じて、学生が直接役立つ学問技術へ向かうようになった。それは〈明治らしい明治〉から時代が転換した結果だという。逆にいえば、〈明治らしい明治〉には、〈純粹の学問〉を極めるといふ一見世間離れたかの態度がありえた。

唐木順三は明治維新前後に生まれた者と、明治一〇年以後に生まれた者とは世代の違いが明確にあると考えている。前者こそ〈純粹の学問〉に向かい、社会や国家への深甚な批判力を宿した〈明治らしい明治〉の人間である。彼らは時の社会や国家の在りようを難じつつも、〈わが国の将来を如何せばや〉といふ気概があつたのである。〈鷗外、漱石、露伴、内村鑑三、それに西田先生は先の世代の人である〉と唐木は書き、眼の前にいる明治三年生まれの師西田幾多郎こそ、紛う方なき〈明治らしい明治〉人であると捉えていた（同）。その意味でも師を畏敬し続けたのである。

そして唐木は、〈明治らしい明治〉を背負った者の精神性をどう評価するかが書き手としての己の重要課題だと、西田との対話から再確認したのだと思う。この契機は唐木にひと筋の視点をもたらし、戦後、大正期の教養主義を批判した『現代史への試み』へと結実していく。

岩波書店への転職？

師との交流を重ねていたのは、加えて、筑摩書房のために働く編集者として必要もあつた。この時期の西田書簡を見ると、西田の作品を筑摩で刊行したいとの希望を、唐木がくり返し伝えていた様子が察せられる。

まず唐木は、筑摩書房を知って貰うために、自著『鷗外の精神』をはじめ筑摩の刊行物を西田に献じていた。たとえば唐木宛西田書簡には、〈那珂氏の「成吉思汗」難有御座いました 毎々いろく頂戴しすみませぬ くだらぬ新書より古きよきものの出版却つて世の為になるかと存じます〉とある（昭和一八年一〇月二日付）。那珂通世『成吉思汗実録』は明治四〇年刊行（大日本図書）の名著だが、昭和一八年九月二〇日、筑摩書房はこれを再刊した。唐木は西田に読んで貰いたく、また船出した筑摩書房が折り目正しい版元であることを示したのがために、西田へ届けたのである。

これらの自社紹介を重ねたうえで、唐木は西田に、「筑摩で本を出させて貰えないでしょうか」と熱意を込めて依頼するのだった。西田の布川角左衛門（岩波書店編集者）宛書簡から、唐木の動きの一端が判る。長くなるが引いておきたい。

第六論文集出版御見込が確なら何卒御願ひ申上げます それにつき「デカルト哲学について」の

一文のことですが唐木順三と申すもの京大哲学を高山などと同時頃に出たものにて私がこちらに來てから毎度参り居るのです。此の者が筑摩書房の世話をいたし居り今度同書店にて戦時国民文庫マのといふパンフレット様のもを出すといふので是非私の「デカルト哲学について」をその中に入れてくれと云ふのです。大分前から頼マんで居るのです。和辻君の「日本の臣道」などをもらつた由あまり熱心に頼む故（私は私のはすべて岩波にてまとめるつもり故）私はこれ等のものも尽く岩波の私の「哲学論文集」の中に収めるつもりであるからいづれ岩波の方と相談して見てといふ様なことを云つて置いたのです。今度第六論文集をお出し下さる様なら無論右の論文もこの中に収めるつもりです（中略）御相談申上げたいと云ふのは唐木の方のことです。これは無論断つてもよいのですがあまり節々熱心に云ふもの故、一寸御都合伺ひ度

（昭和一九年九月五日付）

岩波に持つていくつもの論文を、筑摩の唐木が「どうしても」と熱心に言い続けている。どうすればいいか。自分としては岩波でやりたいのだが……。そういつたところか。西田も一度決めたら頑固であつたらうが、唐木の〈節々熱心〉に相対あいたして無下にはできぬという考えが生じた。それほど〈節々熱心〉は真剣だつたのである。筑摩のために粉骨碎身する唐木の姿が垣間見える。そしてまた彼の西田への急接近は、畏敬する旧師の警咳を受けたいとの姿勢も確かだろうが、筑摩の人間としての実務的な面もあつたことがうかがえよう。

続く同年九月二五日付の布川宛西田書簡で、〈筑摩書房が又岩波君に何か云ふかも知れませぬが私

は先日の御話により唐木君に断つて置きました」との一文が見える。版元間の「暗闘」といえそうだが、いつの時代でもありうる光景ながら興味ぶかい。唐木の執拗な攻勢が背後にあったことが判じられる。

なお、続く同年一月一日付西田書簡——今度は岩波茂雄宛だが——には、唐木をめぐって眼を惹く一文がある。岩波で編集者が一人辞めたようで、後任について岩波が相談してきた。西田書簡はその返信であった。書簡中に「昨日布川君と話した時一寸と唐木順三などいかにか々と云つたのです」とある。西田は唐木を推薦しようだ。人物を見込んでのことであつたらう。しかしこの話は結局、実現せずに終わった。

『鷗外の精神』

成田時代に論壇と距離を持つようになり評論発表を少なくしたことは前述したが、続く昭和一五年四月以後、敗戦までの五年余について唐木の寄稿状況を見ていくと、成田時代と同様きわめて少ない。総力戦下となり、用紙入手難も生じて出版界全体が逼塞するなか、書く機会がなくなった面もある。

具体的に見ていくと、大政翼賛会の発足と日独伊三国同盟の締結があつた昭和一五年は三本、雑感が二つと池田勉『言靈のまなび』の書評とともに短い。年末に太平洋戦争が始まった昭和一六年は二本、芸術家に関する断想と高藤武馬の新刊の書評『門の中』讀「でこちらも短いものだ。昭和一七年はなし、一八年は鷗外論を『近代日本文学研究明治文学作家論上巻』に発表したこと、これだけである。昭和一九年は再びなく、敗戦の年昭和二〇年は『新潮』発表の「長塚節と漱石」、『文学報國新



昭和16年の順三
（『筑摩書房の三十年』
より）

聞』発表の「文士と思考力」の二本、ともに一月である。

もちろん未発表の原稿や、下書き・ノートの類は少なくなかったようだが（後年発表された作品もある）、第一評論集上梓前後の評論家デビュー期と比べると、沈黙の一〇年（成田時代を併せる。昭和一〇～二〇年）といってもよい。成田時代に第二評論集の上梓がなされたことは本章で既述し

たが、これはさかんな寄稿期に発表した作を後刻集成したものだ。「沈黙の一〇年」は後半が筑摩創業期にあたるが、唐木は自作発表をできるだけ控え、むしろ裏方の編集者に徹していたかの観がある。ただ一つ、例外がある。「鷗外精神史」の脱稿と、それを柱とした第三作『鷗外の精神』の上梓だけに雑誌発表作と『近代日本文学の展開』からの再録を加え、全体の分量は小ぶりな本である。それゆえ唐木の著作史から見れば小さな存在にも見えるが、総力戦下に誌し日の眼を見た唯一の本格的著作「鷗外精神史」が収められ、これが唐木の思想転換を示唆する内容であることから、軽視できない鍵作品といわねばならない。

「鷗外精神史」には伝統の問題への視座がある。戦後『現代史への試み』を著し、やがて古き日本へと向かって『無用者の系譜』や晩期の名作『無常』に歩を進めていく唐木作品の豊饒な流れを考慮するとき、唐木の筆業に転回をもたらし戦後著作の行路を決定付けたものこそ、「鷗外精神史」であ

り、それを支柱とした『鷗外の精神』なのだといえよう。同書は昭和一八年九月一〇日、筑摩書房から刊行された。

戦争鼓舞のさなかに在って唐木が鷗外に着目した理由とはなにか。唐木自身が述べるところに従えば、〈世界をあげての戦争の重大な構成要素に否応なくなつてきてしまつた日本を、この重大な危機の中で、その精神の面から明らかにしたい〉という志が、先行して確乎としてくる（私の履歴書）。当時「日本精神」という言葉がよく喧伝されていた。いわく古事記、いわく萬葉、また葉隠。それも日本的なるもののあらわれであつたろう。しかし唐木の関心はそこに向かわない。それら前近代的なものを以て「日本精神」というのはあまりにも単純すぎると唐木は考えた。

それでは唐木の想定した「日本精神」とは何か。明治維新以来、自ら纏つてきたのとは異なる「欧州近代」を取り込み、異例なほどのスピードで身につけようとし、実際外面的には見事に身につけた結果、世界の強国にのし上がったのが日本である。またその結果として、戦争を起こし、世界を变革することを唱え、これによつて世界中を相手に戦うという事態に〈否応なく〉追い込まれていったのも日本である。容易に調和することのできない伝統と近代の「矛盾概念」こそ日本近代であつて、それが歩んだ果てに当代が在るのだとしたら、日本精神とはまさに「矛盾概念」のなかに息づくものではないか。

だとすれば、いま「矛盾概念」自体を明らかにする必要がある、〈明治らしい明治〉を体現した鷗外は格好の材料となる。かくして唐木は、鷗外を頼りに日本近代史の意味を改めて解釈しようとする

のだった。鷗外全集はすでに失業時代、「もぐら窟」のなかで読んでいた。鷗外については小論を書いてもいる。一度組上に載せた対象ゆえ論述の筋道はつけやすい。直観も含めて唐木は鷗外だと思いい全集をすべて読み直す決意をした。そして読みつつ考え、書くのをくり返した。これらを経て「鷗外精神史」は成ったのである。脱稿に至るのは昭和一八年五月だった。

この戦中の鷗外論は「読みつつ書く」方法に基づくものだということのも相俟って、構築的・体系的な著作というのではなく、思考の行程を書き留めた長い随想といつていいものだ。もつとも、堅牢な構築体とはいえないというのは、唐木のすべての著作に当てはまる。唐木と長い付き合いのあった速水敬二は、〈彼は一度も体系的に書かなかつた〉といつており、それは唐木が〈全体とか完璧とかを好まない〉人間だったからだとして記している（『唐木哲学』）。むしろ彼は、型破りと見なされようと直観を頼りに独創的に綴る方法をとつた。そうした唐木著作の特徴はこの鷗外論によくあらわれている。

篠田一士は『鷗外の精神』について、次のように内容をまとめていく（『鷗外精神』——感謝をこめて）。

この作品「興津弥五右衛門の遺書」が乃木大将殉死事件に触発されたという通説をひとまず承認したうえで、唐木氏は「阿部一族」「護持院ヶ原の敵討」とつづいて「大塩平八郎」「堺事件」にいたる三年の歴史小説の進展を着実に跡づけながら、同時に鷗外年譜の時間をほぼ同じだけ逆行させ、「平タ・セクスアリス」「青年」「カズイスチカ」「妄想」など、歴史小説に先行する、いわゆる現代

小説成立の奥底にひめられた作者の精神史の実態をあきらかにし、「興津弥五右衛門の遺書」にはじまる歴史小説群がたんなる一事件の衝撃から生れたものでないゆえんを、文字通り嚙んでふくめるように説きあかしてゆくのである。

この篠田のまとめは、『鷗外の精神』収録作のうち戦時のなか一氣に脱稿された「鷗外精神史」のまとめであり、とりわけその第一章にあたる「鷗外探求」について整理したものと見られる。

続く第二章にあたる「歴史を超えるもの」は、「安井夫人」に対する比較的長い本文分析を経て「寒山拾得」に対するコメントに結ぶ。官位を離れることで〈歴史の埒外へ出た〉鷗外が日々充足の境地に入る様相を唐木は述べていく（同章）。

第三章（終章）にあたる「邂逅と追蹤」は、「山椒大夫」の分析から入り、晩年の三史伝——澁江抽齋、伊澤蘭軒、北條霞亭——に至る精神史の道筋を追っていく。〈邂逅に重点のあつた抽齋伝をテエゼとし、追蹤に主力を注いだ蘭軒伝を仮にアンチ・テエゼとすれば、次に来るべき作は邂逅と追蹤のジントエゼとして、まさに堂々たる芸術が生れるべき〉だったのに、霞亭伝がそうならず、語れば語るほど意に副わない作となつていったのは、鷗外の気性が導いた出来事であり、それは〈悲劇といふ言葉を使つても決して大袈裟ではない悲劇〉だと唐木は断ずる（同章）。

三つの「章」のなかでは、やはり篠田が目した「鷗外探求」が緊張感に溢れ、秀逸である。〈日本を、この重大な危機の中で、その精神の面から明らかにしたい〉という唐木の志は、「鷗外探求」

で最も躍動的にあらわれている。なおその最終部に書かれた次の条は、日本古来の徳目が単に武士階級の者に限られたものではないと断つたうえで示されており、戦中に誌された「鷗外精神史」の浪漫的傾向を告げている。

僕は先に、日露戦争従軍以来の鷗外が最も問題としたところのものは、日本を支へてゐるものは何か、といふ事であつたと書いた。そしてそれを、命を惜まない、といふことの中に見出したのである。然もこの命を惜まないといふのは、外国人が解する如く、決して野蛮なためではない。寧ろその心情が美しく洗練されてゐるが故にこそ命を惜まないのである。

さて付記としていえば、「鷗外精神史」を支柱とする『鷗外の精神』は、師西田の導きである「明治をやり」に応えたものとはいえない。実際、「鷗外精神史」の主たる関心は大正時代の鷗外であり、前近代日本を舞台にした歴史小説と史伝である。西田がこだわった「明治二〇年以前の明治」という時代区分で考えれば、その時期の日本および日本人のあり方を正面に据えて論じたものとはいひ難い。唐木自身も『鷗外の精神』上梓後の昭和二〇年六月のノートで、「先生に最初に明治をやりと言はれから、もうかれこれ十年になる。無精者の僕は未だにそれを実行しないである」と記しているから、『鷗外の精神』は対象外との自覚がある（西田幾多郎先生）。

ただし、大正時代の鷗外は〈明治らしい明治〉の喪失に立ち会う者であり、唐木はこうした時期の

鷗外を描くことで、喪失に相対する悲劇の内実を解説せんと試みている。伝統と近代の葛藤がまれに見る精神のドラマを生んだ（明治らしい明治）を、喪失の時代から逆照しようとしている。そう捉えてもよいのだとすれば、『鷗外の精神』は、西田の期待に応えようとする意識・無意識の心の動きがあつて成された、と把握するのはむしろ自然であり、至当であろう。

4 戦争と出版

白井吉見の上京

ここで唐木が「友人共同体」の一員として深く関わった筑摩書房の運命について述べていくことにしたい。太平洋戦争開戦から敗戦に至る歴史の激動下、出版という文化的事業がいかに「風にそよぐ葦」のごとく翻弄され、苦境に追い込まれて行ったのか、唐木順三の姿を中心にして見ていこう。

古田や唐木からの呼びかけに応じて、白井吉見がついに信州に下ろした腰をあげ上京を決心したのは、昭和一八年三月であった。白井の回想記「蛙のうた」は事情を次のように記している。

ついに太平洋戦争がはじまった。僕は附属国民学校の主事、いまの附属小学校長を兼任していたので、子供たちに向つて、宣戦の詔勅を読み、真珠湾の勝利について話した。それから一年あまり、僕は東京へ出た。だれも彼も疎開してくるといふのに、その逆であった。戦争の見通しはつかず、

用紙の統制はきびしくなるばかり。これという企画の出ないかぎり、出版は存立できないうところまで追いつめられた。世間とは逆であろうと出京するほかはなかった。

当時、白井は伊那中学から転任し松本女子師範学校に勤務しており、(附属)とはこの女子師範の附属校のこと。生徒がいるし責任ある立場ゆえ退職したくともそう簡単ではない。また赤紙召集が身近となり、上京したとして新生活は長くない可能性が高い。実際、伊那中学の同僚教員のうち二人が召集され、戦死していた。明日は我が身である。

動きにくい事情を越えて白井が松本を離れたのは、筑摩書房をめぐる情勢が緊迫の度を増していたからである。何より出版事業の柱である企画面で、馬力ある白井の参加が切実に求められたのだ。

用紙割当ての大削減が次々に強化された。こうなると、ともかく一応は理屈のつく企画で紙を獲得するしかない。それには、「戦力」の根源たる日本精神の親戚筋と見られている国文学関係の企画を考えるほかに手はなさそうだ。

(同)

こうしたジャーナリストイックなセンスは白井ならではのものです、フットワークもよく物怖じしない彼は、苦境の筑摩書房にとって不可欠の人材となった。上京した白井はまさに獅子奮迅となる。ただちに京都から九州にかけての旅に出た。京都では頼原退蔵(近世文学)、遠藤嘉基(国語学)のほか

新進の中村幸彦（近世文学）に、大阪で西鶴研究の野間光辰こうしんに、岡山では西下経一にししたきよいち（平安文学）、広島で土井忠生ただお（国語学）と中島光風こうふう（万葉集研究）、そして九州福岡で新古今集研究の小島吉雄ほかに会って、それぞれ国文学の専門著作を依頼した。強行軍である。なおこのなかで戦争中に出版を実現したのは、結局、広島高校教師・中島光風の『上世歌学の研究』だけであった（この中島の教え子に阿川弘之がいる）。

さて、上京のち、白井吉見は週のうち半分を東京女子大学で教え、残り半分で筑摩書房へ出社するようにした（東京女子大の教え子に右記阿川と結婚した増田みよなどがいる）。少し遅れて東京高校にも出講するようになる。

唐木と古田にしてみれば、心強い援軍登場である。これで「友人共同体」が正式に揃い、逆風に立ち向かう態勢も整った。三人は他の筑摩の人間と一緒に、よく働き、よく呑んだ。出版人としての意気だけは彼らに高い。難局なにするものぞ、である。しかしこの好事も束の間にすぎなかった。昭和一八年一〇月、白井に赤紙が来る。陸軍少尉として応召となったのだ。予想されたことであつたが、筑摩書房にとって落胆は大きい。白井合流はわずか半年余でしかなかったのだから。

白井が去つた筑摩書房に、さらなる時代の波浪が押し寄せる。用紙割当のために出版社の統合が求められたのは昭和一八年一二月九日で、統合申告は翌一九年一月末日が締切とされた。筑摩書房は他社の合併・買収を短期日のうちに実現しないといけなくなつた。古田晁は資金調達に走り、買収交渉に乗り出した。買収は土俵際で成立し、同年三月一日、筑摩書房は新事業体として承認を受ける。古

田は筑摩の人間と買取した会社の人間の親睦を図るために、浅間温泉に一同で出かける。唐木や中村光夫もそこに加わった。松本連隊にいた臼井少尉が宴会用の物資を供してくれた。

なんとか事業継続をしたが、統制は一層やかましくなっており、個々の出版の際は、事前に計画書を提出し日本出版会で許可を得ないといけなくなつた。唐木順三も再々出版会へと足を運ぶ。そこから分らず屋相手に苛立つ場面もあつたのは、唐木の訴えに応じたと見られる西田幾多郎の言葉、(此頃出版会の無理解には実に驚く外ありません)(昭和一九年四月二四日付、唐木宛書簡)からも、察することができよう。

「田舎者」に還る

戦時下で食料をはじめあらゆるものが欠乏してきた。南林間の唐木は自ら耕作して食料不足を補おうとした。当時、日本人の多くがそうやり出していたのである。彼は屋敷内を開墾して「百姓」をはじめめる。かつて生家での失業時代、本物の百姓になろうとして開拓地を見分に行つたこともある(一八八頁)。農作業とともにある田舎暮らしは、もともと身に合う生き方だと思つていた。ゆえそれに還るだけともいえた。

フイリピンに派遣された三木清が現地から唐木に宛てて送つた書簡中に、(百姓に精を出してをられる由、今の時世にはそれが結局いちばん好い生活の仕方のように思はれ、羨しいことです)と出てくる(昭和一七年七月二三日付)。続く同年八月五日付書簡でも、(百姓がたいへん上手になられた様子羨しい限りです。私も帰つたら弟子入りをしたいと思ひます。(中略)もう少し落着いた、田舎者らしい生活に還りたいと考へてゐます。さうでない、ほんとの仕事が出来ません)とある。唐木はフ



順三と家族

(昭和18年4月23日、南林間の自宅にて) (唐木家蔵)
左から順三、夫人フサエ、フサエの母、妹。

イリピンの三木に「比島通信」を書くことを勧め、また戦時のなか自身の百姓化をいささか楽しげに伝えたようだ。(田舎者らしい生活)に還らないと(ほんとの仕事)ができないという三木の感慨は、唐木の考えでもあったように察せられる。

さらに、三木からの書簡で、前後の時期と考えるもう一通(日付不明)には、(畑の作物も上出来の由、羨しく思ひます。こちらにゐて時々考へるのは、新鮮な野菜をもりもり食つてみたいといふことです)と記されている。作物収穫の経緯が唐木から実に美味そうに伝えられ、つい三木の感慨を誘つた様子がかがえる。

唐木は手作りの野菜を鎌倉姥ヶ谷の西田幾多郎のもとへ届けることもあった。南林間の森野で採れた野生のウド、蕨ふきなども併せて妻が持つて行つたとき、西田は自ら玄関口まで出て来て、元氣な姿を見せている(西田幾多郎先生)。最晩年の西田であった。

なお、南林間には中村光夫が買い出しに来て少しばかりのサツマイモを持つて帰つたとか、中野重治がリュックサックを背負い来て松笠を詰めて帰つたという話を、唐木は回想記「私の履歴書」のなかで伝えてい

る。松笠は松脂まつたごを含み燃料に使ったのだろう。

空襲が始まると焼け出された親戚が南林間の家に集まり、夫の出征から仮寓を求め親族も来て、俄に大所帯となった。唐木は住まいにあてるため急ごしらえの掘立小屋を自力で作った（後年、白井吉見が朴雨亭ぼくうていと命名）。

唐木順三自身は、出征こそしなかったが在郷軍人であった。そのため早朝動員に応じて、手製の竹槍を担いで小学校の庭へ行き、銃剣術の真似事をした。地下壕掘りに動員されたこともある。成田時代の唐木が平均的な「銃後のつとめ」を果たしてきた件は前述したが（二一頁）、南林間の唐木も戦時下の国民の一人として、まさに〈庶民の中に音もなくくらす庶民〉に徹したのである。知識人的なふるまいを避け、在郷軍人の任に就けば淡々と役割をこなし続けた。それは戦時における唐木らしい行動、振る舞いとしてむしろ印象深く、また関心を引く。

西田幾多郎の死

昭和二〇年（一九四五）、戦争は末期に差し掛かり日本の敗色は濃い。それでも日本人は菌を食いしばって総力戦をたたかっていた。そうした時、唐木順三はかけがえのない人間を喪うのである。西田幾多郎は同年四月、（完成された最後の論文「場所的論理と宗教的世界観」を脱稿し、五月三〇日には「私の論理について」を起稿する。六月一日、午前はこの稿を書き継いでいたが、昼食後に痙攣して昏睡状態となる。ひとときの回復を挟んで六月七日午前四時、入寂。享年七五、死因は尿毒症、鎌倉の自宅で生の道を尽きさせた。

翌六月八日、唐木順三はラジオ放送で西田の急逝を知る。そのとき唐木は奇妙な空虚に襲われ、

蹲うずくまった姿勢でぼんやりするしかなかった。鎌倉へ駆けつけねばと心を悩ますものの、病後の身で動けない（事情は後述する）。唐木は西田の書「黙々與天語、黙々與天行」を壁に掲げ、旧約聖書のエレミヤ記（西田が最後に読んでいたもの）を床の中で読み出すのだった。

西田を最後に訪ねたのは五月の初めで、中村光夫が同道した。そのときはいつもと変わりなく、死が近いとはとても考えられなかった。また五月二〇日頃、鎌倉在住の中村光夫を訪ねるため稲村ヶ崎へ行ったとき、唐木は停留所で偶然、西田夫人に会う。夫人は西田について「相変わらずで、反つて此頃は具合がよい」と言うので、安心したばかりでもある（「西田幾多郎先生」）。ゆえにかえって喪失の念は大きく、唐木の悲しみは深い。

逝去もない六月のノートのなかに、唐木順三は、直接聞いた西田の言葉をいくつか書きとめてい。記憶が新しい時期のメモなので貴重であり、二、三を次に引く（同）。

独乙が無条件降伏をした。あれは世界といふことを考へないものの最後の姿だと思ふ。ヒットラアは嫌ひであった。初めはただのデマゴグだと思つてゐた。然しその遣口をみてゐるとなかなかの政治家であることが解つてきた。だが民族とか国家といふことのみを考へるナチズムが敗北したのは当然である。

文が武に圧倒されるといふことがあつてはならない。良い鉄は釘にならないといふ程の覚悟と実

踐が文に携はる者に必要である。

自分はいま生命の問題を書いてゐる。岩波の印刷所が焼けたりして思ふやうに出ぬ。然しなんとかして世に残したい。仕方なければ謄写版でもよい。

これらの話を聞く一方で、唐木は晩年の西田の心を占めていた一つを、「西田幾多郎先生」のなかで記している。

先生のところを辞する時、廊下で僕だけを呼びとめて、高倉テルのことをお話になり、三木清の消息を知らないかと心配さうに言はれた。僕が知らないことを申し上げると、ウン、それならそれで、と言葉を濁された。

これは中村光夫を同道しての訪問時（五月初め）での出来事である。三木が左翼活動家高倉テルの脱走に関係したという噂について尋ねてきたのだ。唐木は『三木清』（昭和三二年）でこのときの西田について、〈さうか、と言はれたまま、何ともいはれぬ憂愁な顔をされ、踵をかへして静かに部屋へ入られた。そのときの先生の猫背と白足袋の足つきが、世界中がシーンとなるやうな印象を与へたのである〉と、多少詳しく綴っている。警視庁から脱走した高倉をかくま匿った容疑で、三木は検挙され、



西田幾多郎と三木清（右）

（昭和10年10月、鎌倉の西田の家にて）

のち豊多摩刑務所に送られた。

廻る昭和一七年九月七日付、西田の唐木宛書簡中に、〈三木は私の処へも時々手紙をよこします。かれも早く帰つてくればよいが〉と見える。フィリピン派遣時に師弟間で書簡の遣り取りがあり、それは心を通い合わせたものであったことがこの短文から察せられる。また、三木清の唐木宛書簡（昭和一八年八月二六日付）には、〈先日はお越し下さいましたのに、あいにく不在で残念でした。この頃はたいてい在宅いたしてをりますのに、あの日は鎌倉に久し振りで西田先生を訪ねて出掛けてゐましたので、失礼しました〉とあり、帰国後、三木は西田に会つていたことが了解される。二人は近況を語りあうとともに、思想的な話を中心に真率なる対話をおこなつたのだろう。

唐木は『三木清』のなかで、西田―三木の関係について、〈二人の結びつきは生涯を通じての最も美しい師弟の交情を生んだ。これはまさに邂逅といふべきであり、三木さんの言葉でいへば、魂と魂との「出会」であつた〉と述べている。この言葉は、最後の西田が示した三木への気遣いの記憶も前提となつていのは間違いない。もちろん、三木が死の瞬間まで考えていたことは西田哲学批判だつたという事実も含めて、〈最も美しい師弟

の交情〕がありうるのであって、二人をよく知る唐木にはその内実が判っていたのだ。

よく知られているように、三木清は不衛生な刑務所で皮膚病を得、それが昂じることで急性腎臓炎となつて命を奪われた。戦争が終つてまもない昭和二〇年九月二六日のことである。唐木はあつけにとられ、憤った。著作に専念していた一人の思想家を、(静かな疎開先から拘引し、疥癬を背負はせ、床板の上でたつたひとりで死なせたといふことに、返つて我々の痛憤が湧くのである)と『三木清』の冒頭部で書いている。なお未定の遺稿「親鸞」の整理と発表を遺族から任された唐木は、それを『展望』創刊号(昭和二〇年一二月)に掲載する労を執った。

さて西田逝去ののち、六月一三日、告別式があつた(葬儀委員長鈴木大拙)。唐木は当時病臥中の身ゆえ逝去時には駆けつけられなかつたが、ほかならぬ師の告別式である。病身を押してなんとしても参会したのだった。その日の光景を唐木は次のように書いている。逝去後まもなく執筆したノートに拠つており描写の確度は高い。長くなるが見ていきたい。

藤沢を廻つて鎌倉へ出て、更に北鎌倉の東慶寺へ向ふ。東京の赤錆びた焼野原に較べて、この木立は静かで深い緑だ。眼がまぶしい程である。門内で向うからこられる奥さんにお会ひする。御挨拶すると、急なことでどなたにもお知らせできなくて、といはれた。寸心居士となられた先生のお写真の前に深く頭を垂れる。「中略」先生の告別式としたら淋しい限りである。庭で下村寅太郎さんと話す。信州伊那の飯島の国民学校長をしてゐる酒井宇宙治さんが地下足袋姿で来てゐる。下

村さんは文理大の哲学科の飯島疎開に付添つてそちらに行つてゐた由。そして先生が飯島へ行かれる予定のあつたことを聞く。京都からは高坂、木村、片岡さんなどがきてゐる。和辻、務台、林、谷川、三宅、呉氏等の顔が見える。殆ど顔見知りの者ばかりで、一般のお焼香の人は殆どない。切符の不自由とか、いろいろのことがあらうが、とにかく淋しいものである。にぎやかなことの好きな先生ではないにしても、あまりに淋しすぎる。僕は病後で足がふらふらしてゐるし、声にも力がかもらない始末で、三十分程めてそこを辞した。

〔西田幾多郎先生〕

世界中を相手にした大戦が日本の負け戦で終わるのも間近であつた。敗戦は明治国家の終焉でもある。日本にとって戦後は別の世だともいえた。それを迎える切迫の時期、唐木は〈真の先生〉〈ほんたうの教育者〉を喪つたのだ。

〔爆風一回、強制疎開
一回、火災二回〕

一方、東京の筑摩書房も大変なことになつていた。戦禍である。事情はまず唐木の回想から引く。

泰明小学校にはじめての東京空襲のとき爆弾が落され、筑摩も壁がおち、窓がこはれ、使用にたへない程の被害を受けた。

〔私の履歴書〕

昭和二〇年一月二七日、午後のことである。社屋が空襲にやられてしまう。当時の様子を白井吉見

「蛙のうた」は、（筑摩書房に居合せた古田晁と中村光夫は、街路わきの防空壕にとびこみ、土砂はかぶったが、いのちは助かった。彼らが這い出ると、目の前に、大雅堂書店などが早くも燃えあがっていた）と書いている。

筑摩書房の建物は直撃こそされなかったものの、爆風を受けてかなり歪ひずんだ。硝子はこなごなに飛び散って、冬の寒風を防ぐものはない。唐木順三はがらんとした社屋内で、（崩れ落ちた天井板や横倒れになった戸棚などを燃やして暖を取って、寒い日を過ごした）。社屋にあった武者小路実篤の野菜の絵——「各々特色ありて面白き哉」という添え書きのある、人參・クワイ・芋の絵——は（みるみる煤けて来た）（「つゆどき——昭和二十年六月のノートから」）。

罹災を機に筑摩書房は伝つて手を頼って社屋移転をおこなう。場所は本郷元町国民学校前。（病院風の木造二階建）と臼井「蛙のうた」は記すが、そのはずで元は読売の診療所だった。二月の初めから筑摩書房はこの移転先で事業を再開し、唐木もそこへ通うことになる。（落着いた古風な感じのするいい家であつた）と唐木は回顧している（「つゆどき」）。

移転祝いはこの仮社屋でおこない、古田が生家から持って来た鶏を鍋にした。酒はそれぞれが持ち寄った。（金子武蔵、中野重治、中野好夫といふやうなお客さんも見えて、久しぶりに楽しい宴であつた）と唐木は記す（同）。なお隣地の元町国民学校には材木などを置く地下スペースがあり、（古田晁と唐木順三は、変な形の防空頭巾をかぶり、空襲になると、「この」地下避難所へ逃げた）という（和田『筑摩書房の三十年』）。

三月九日、陸軍少尉白井吉見が無断上京して、本郷元町の社屋へやって来る。迎えた唐木と古田は、車座になって酒を呑み交わした。戦局はもはや絶望的で、白井は己の死が近いことを悟って、何としても「友人共同体」の仲間に会い痛飲したくなったのだ。もちろん軍規違反である。折しも東京大空襲の日であった。夜になってB29が多数飛来し、東京を灰燼にせんとするばかりの大空襲をおこなった。

このとき本郷元町の社屋は被災こそ免れたが、元町国民学校を類焼から守るために、まもなく強制疎開の扱いを受ける。付近数十件の建物が取り壊しになり、筑摩の入った建物もその一つだった。筑摩は再び社屋を失ったのである。

次の仮社屋は水道橋で、宝生能楽堂の近くにあった割箸卸屋の二階となる。引っ越しは残った者でおこなった。(古田君の前棒、僕や佐々木さんの後押で、幾台かのリヤカーで坂を上下した。大きなソファアは二階の窓へ綱でつるしあげた)と唐木は書いている。新居は六畳と二畳しかなく、(兎に角やれやれとは思ったが、おちぶれた姿ではあつた)(「つゆどき」)。しかしこもひと月ほどで失うことになる。四月一三日の空襲で焼失の憂き目に遭ったのだ。

今度は七丈書院をやっていた渡辺新の自宅へと再移転させる。七丈書院は三島由紀夫の処女作品集『花ざかりの森』を刊行したことで知られる小版元で、ノート用紙を多量に持っているというので筑摩が買収した会社である。その主の家に間借りし仮事務所とすることになった。大塚窪町である。しかしこの仮移転先も五月二五日の空襲で焼失してしまう。六月半ばに原稿を持って大塚窪町の筑摩を

尋ねた作家の上林 晧かばやしあかつきは、一帯が廢墟になったようであ家が一軒もなかったことに驚く。家主渡辺新の行方は知れず、古田の居所も判らない。焼け跡の向こうの大塚国民学校にあった町会仮窓口を訪ねると、そこにいた町会長も連絡先は不明といい、筑摩苑の郵便物が廻送できなくて困っていると話した（和田『筑摩書房の三十年』）。当時、古田は郷里におり、渡辺新も信州へ疎開していた。二人とも無事ではあった。

昭和二〇年の数か月の間で、筑摩書房は度重なる罹災を受けたのである。この時期について唐木は、
へいはば爆風一回、強制疎開一回、火災二回といふ念の入つたものであつた。紙は全部焼失。紙型も二三を残して焼失。本屋としてこれ以上の打撃はないわけである」と、大塚窪町の事務所が罹災した翌月に書いている（「つゆどき」）。

この五月、唐木は初旬に、前述した西田への最後の訪問をおこなつた。また二九日には勝部真長に伴われて永井荷風をその避難先（東中野の文化アパート。荷風は偏奇館が罹災してここに身を寄せていた）へ訪ねようと予定したが、こちらは大空襲に遭つたせいで果たせなかつた。前日、唐木は鎌倉へ行き中村光夫を訪問、そのまま一泊する。翌朝が横浜大空襲の日で、（鎌倉の裏山から見ると、十数機づつのB29の編隊が後から後からやつて来る。横浜は忽ち黒煙に掩はれ、その黒煙の中へ編隊が入つてゆく。後に解つたのだが、この日が今迄中の最大規模のもので五百機であつた）と唐木は伝えてゐる（同）。これでは電車も動かさず、荷風訪問は諦めるしかなかつた。実は荷風自身、空襲による再度の罹災（二五日）で埼玉の志木へと避難しており、横浜大空襲がなくて東中野へ訪問出来たとして

も、唐木は会えなかったことになる。

五月三〇日、唐木は上京してお茶の水の日本出版会へ行き、筑摩書房の間借りの件を取り決める。部屋ではない、出版会の五階に二机を得ただけである。間切りなしの寄り合い所帯の一角に過ぎない。それでも贅沢は言っていられず、小さいながらこれで事務をする場所は確保できた。

続く六月四日にも唐木は上京して、筑摩書房の再建のため動き回る。帰りの小田急は足の置き場もないほど混んでいた。教職のほか筑摩の急場があり休日なき忙中が続いた唐木は、ついに過労に襲われる。帰宅すると高熱があり、ふるえが止まらない。彼は倒れるように床につく。西田幾多郎急逝の際、ただちに西田宅訪問ができない身体状況にあったのは、このときの病臥が続いていたからだ。

熱は遠からず取れたが、足がふらふらする。老人のように腰を曲げ、そろりそろり動くしかなかった。栄養不足のなか各地へと動き回ったので、体は芯まで疲れ切っていたのである。それでも病後の保全に努めたことで、唐木の身体は次第に回復してきた。六月一七日、利根川べりの滑川町にいた臼井吉見を古田とともに陣中見舞いした。臼井の率いる第六中隊第二小隊はアメリカ軍の本土上陸に備えて、四月より九十九里へ出動していた。臼井隊はそこで、陣地作りのため近隣の森や林を伐り出す「伐木隊」となっていた。この地に唐木、古田という「友人共同体」の面々が来てくれたのだ。戦況は急迫していたが、三人は一軒のつり宿で、農家に作らせた濁酒どぶ酒を飲んで快談した。

七月四日、唐木は出版会の筑摩書房へ行く。途上、成城へ寄って柳田國男に会い、『先祖の話』の原稿をすべて貰う。出版会の筑摩は、実は一昨日から四階に一部屋を確保できるようになった。五階

の二机だけのスペースと比べて（大分の出世である）と唐木は当時のノートに書いている。部屋に入って一息つき、大豆七分米三分の弁当を食べていると空襲警報が鳴った。いつものことだが、唐木は（原稿だけは持出の用意をして）飯を続けるのだった（昭和二十年七月四日）。

筑摩書房の仕事とともに続けていた教職は、昭和一九年四月より日本大学予科で
教職を全て失う

国文学講師を掛け持ちするようになっていた。先立つ昭和一六年二月七日付、三
木清からの書簡中に、（さてこの四月から日本大学工科予科でドイツ語の教師を求めています。時間
は十八時間ぐらゐ、給料は少くとも百五十円は出すといつてゐます。同校は今度小田急の六会附近に
移るといふことで、お宅から近くて御都合がよくはないかと思ひますが、やつてみる意志はありませ
んか）との一文が見える。どうやらこのときは断つたようだが、話が再びあつて唐木は応じたのであ
ろう。（ドイツ語の初歩と萬葉集を教へたといふ覚えはある）と彼は記している（私の履歴書）。

とはいえ戦争も末期となり、物資の欠乏が深刻で空襲も激しくなると、学校の運営もままならない。
とはいえ戦争も末期となり、物資の欠乏が深刻で空襲も激しくなると、学校の運営もままならない。
（世間は学校教育どころではなくなつてきてゐた）のだ（同）。筑摩のことがあつて唐木の身边は多事
多難なうえ、体も頻繁に変調し休むことが増えた。それらが重なり、昭和一九年、唐木順三は法政の
第二中学校および予科を退き（正式には翌年三月退職）、昭和二〇年に入ると日本大学予科のほうも自
然退職のような形になった。成田高女の教師となつて一〇年余、彼は再び教職を全て失つたのである。
その頃、日本の運命は完全に暗転していた。サイパンが敵の手に落ち、戦局は決定的に険悪である。
本土決戦部隊に編入された白井吉見隊に覚悟は出来ていた。白井のかつての部下たちはサイパンで全

滅の運命を辿った。〈遅かれ早かれ、僕らもまた、亡びを迎えなければならぬ。部隊命令を受け、僕は進んで、わが部隊の亡びの歌を作ろうと考えた。不逞ナルモノ汝イザ、大軍拳ゲテ来レカシ。〉白井が作ったこの部隊歌は以降、〈討チテシヤママ醜敵ノ／野望ヲ何ゾルスベキ／決戦部隊今ゾ成ル〉と続き、戸山学校軍楽隊が作曲している。相会したとき唐木順三はこの歌に対して露骨に厭な顔をしたという（「蛙のうた」）。

戦争末期、古田晁は原稿（しづかみき「洪川驍」「柴笛」）を伊那の熊谷印刷所に届けるため、新宿発松本行きの中線の列車に乗っていた。八王子を過ぎて、最初のトンネルに差し掛かったところで、列車はいきなり敵機の機銃掃射を受ける。車内は阿鼻叫喚である。古田自身は一瞬、身を伏せたので敵弾には当たらず済んだものの、隣の客が頭に弾を受けて即死し、古田が膝の上に広げていた「柴笛」の原稿は犠牲者の血に染まった。その生々しい原稿は、今でも塩尻市北小野の古田記念館で見ることができる。原稿は朱に染まったが、古田はほんのわずかな差で一命を取り留めたのだ。八月五日のことである。ポツダム宣言受諾による敗戦は一〇日後に迫っていた。

敗戦の日のことを、唐木順三は「私の履歴書」で短くこう記している。

八月十五日の、敗戦、降伏を告げる天皇の放送は自宅で聞いた。ラジオの声はかすれてとぎれとぎれであつた。聞いてゐるうちに涙がでてきた。

戦いは終わった。次にどのような時代が、自分や家族を、筑摩書房を待ち受けているのか。瞭然とは遙かに遠しの心境である。占領とはどういう世なのか、日本人として不安が尽きない。それでも唐木はごく平静に戦後を迎えようとする。敗戦と喪失に過剰な情動を込める振る舞いは彼になく、新しい社会を解放と判ずる氣勢とも無縁だった。

遠からずマッカーサーの編隊が自宅から三キロ先の厚木飛行場へと飛来する。その日、唐木は自作中の小屋（朴雨亭）の屋根からこの編隊を眺めていた。そして、金槌をふるい仕上げの釘を打ち付けるのだった。

第七章 飛躍する論壇人

1 四つの顔

『展望』創刊

昭和二〇年（一九四五）九月の半ば、満四一歳の唐木順三は信州小野の古田晁生家に隣に疎開してきた者もいる。唐木はこの古田生家を手入れして筑摩書房の被災に備えようとした。すでに刊行物の一部を伊那の印刷所で刷るようになっている。そして自身も戦争末期、古田家を東に登った開墾地に疎開するのを考えたことがある。（大きな用水池があり、景色のよいところだったが、住んで仕事するには不便で、自然に立消になった）という（『私の履歴書』）。結局、唐木は南林間にとどまった。すでに教職は失われ、在郷軍人の務めを果たしつつ、屋敷内を農地にした晴耕雨読の日々である。時折お茶の水の筑摩書房仮事務所へ顔を出し、信州の古田との間で一種の連絡役を任じると

いう過ごし方であった。

敗戦は再出発だった。古田生家で唐木と古田が待っていたのは、白井吉見である。白井は千葉県八日市場の法華寺付近で玉音放送を聞いた。部下を率いて信州へ戻ると、部隊を解散、復員した。しばらく郷里で暮らしていたその白井に、唐木―古田が「復員祝いをしよう」と声を掛けたのである。

白井がやってくる。戦争によって多くを失ったが、「友人共同体」は残った。再会した三人は、酒を酌み交わしながら、早速、筑摩をこれからどうするか話し合う。すぐに一つの結論が出た。「雑誌をやろう」である。雑誌刊行のアイデアは以前から三人で抱いていた。心機一転出直すこの時期に実現しようとなったのだ。雑誌は版元の看板である。原稿を集め、新人の才能と旧人の新才能を発見し、新しい潮流を示していくために、やはり雑誌を持つことは必須だと三人は考えた。とはいえ戦時中は用紙の確保問題があり、定期刊行物に踏み切ることには無理があった。そこから時代は変わったのである。

方針が決まれば行動は早い。唐木順三は白井吉見を伴ってただちに上京する。白井は軍服、軍靴で復員時そのままの姿だった。唐木はひとまず南林間の家に彼を住まわせ、そこから二人は出版会四階の仮事務所（お茶の水）へ通い筑摩書房の再建に取り掛かった。筑摩は独立した部屋こそあったが四畳半程度で、別に二〇畳の大部屋の一角を借りて太虚堂書房と同居しながら仕事を再開する。なおこのとき、白井の唐木家同居は二か月ほどに及んだ。（食糧事情は依然として悪く、豆の入った雑炊ばかりで白井には気の毒であった）と当時のことを唐木は回顧している（『私の履歴書』）。一方の古田晁

は大宮の親戚宇治家に寄宿し、そこからお茶の水へ通った。

なにより雑誌の名称である。一〇月二〇日頃に箱根塔ノ沢で編集会議がもたれ、まずは誌名をどうするかが話し合われた。参加者は「友人共同体」と中村光夫、竹之内静雄、百瀬勝登ももせかつとの六人。決定の経緯は白井の回想記「蛙のうた」からみていこう。

「『ほんもの』はどうだ。」

だれかが、そんな口をはさんだ。

「僕らがやるんだから、ほんものにきまってる。いうだけ野暮だよ。」

「じゃ、あっさり『文化』と行くか。」

中村光夫だった。

「『テンボー』はどうだ。見晴しや。」

これは唐木順三。

「展望？ それがいい、それにきめようじゃないか。」

たちまち、付和雷同したのは僕だった。

唐木が提案し白井が賛同して流れが出来た、というわけである。白井が編集長にあたるというのはいずれに「友人共同体」で決めており、編集長決裁のようなものだった。

創刊号は昭和二十一年一月号とし、発売は二〇年十二月一日でいこう、というのも話し合われた。一〇月半ばだから議論しつつも走り出さないといけない。作業はすぐに始まる。すでに唐木と臼井は一〇月二日、柳田國男を訪問して応援を頼んでいた。柳田は快諾し、早速、創刊号に「喜談日録」を寄稿する。筑摩は創業まもない頃から、唐木―臼井―古田の「友人共同体」が一致して柳田への接触に努力しており、一定の信頼関係は出来上がっていたのである。

創刊号で唐木が世に送り出したのは、既述もした通り、三木清の「親鸞」であった。務台理作「日本今後の哲学」、西谷啓治「民族の自覚と歴史的意識」に続いて、創刊号の三作目に配置される。同号の顔ぶれは他に吉川幸次郎、豊島与志雄、中野重治、中村光夫、中野好夫（E・M・フォースター「わが信条」の訳）、永井荷風が掲載順である。戦後社会を迎え、同時期に『新生』『世界』が創刊され、また『中央公論』『改造』が復刊、総合雑誌の花が一斉に開いていた。『展望』は好調な走り出で、五万部が売り切れとなる。

書き手の再登場

編集者唐木順三が動き出す一方で、執筆者唐木順三が再び論壇に登場する。敗戦前のエッセイ「文士と思考力」である。ここで唐木は、〈文士から思考力と想像力を奪ふ世間的要素は完備してゐる〉と状況を皮肉り、戦争末期の統制時代にあつて項うなむの硬いところを見せている。そこから空白期が続き（のちに活字化となる随想等を書いてきた）、戦後の始まり、出版界の再起に歩を合わせて筆業を再開したのだ。雑誌の創刊・復刊ラッシュを迎え、書き手が求められていた事情もあった。

昭和二十二年二月、ホームグラウンドである『展望』に「三木清といふ人」、『文藝』に「言葉の回復」、『文化新聞』に「三木清とハイデッゲル」を発表して、これらの論文が活動開始宣言のごとくとなった。二篇が三木清に関するものであり、獄死という事態にショックを受け、追悼の意が筆を走らせた事情は明らかだ。「親鸞」を『展望』に整理発表する過程で、三木という思想家について思いを巡らす機会があったことも執筆動機として大きい。

残る「言葉の回復」は、のち『増補 現代史への試み』に収められるものだが、戦後初期の唐木の視座と心象がうかがえ興味深い。いくつか印象的な記述を拾ってみよう。

戦時中は軍部とそのとりまきが最も多く語った。それはしかし、自分の都合といふ寸法に合せて、勝手に客観的な現実を裁断するといふやり方であった。そのおのづからの結果、語れば語るほど、聴き手がすくなくなつていった。これを見て語り手は一層激烈に語るといふやうになつた。〔中略〕言葉はただ浮動するものとなつた。従つて言葉の権威は地に墜ち、言葉を信じなくなることによつてまた人間を信じなくなり、自分自身に対する信頼さへ薄らいだ。ここではもはや危機も非常時も自覚的でありえず、言葉のインフレによつて、ひとはいよいよ無感動になつた。

ここでの論述は、歴史の敗者となつた軍部のやり方を批判するためだけではない。言葉をへただ浮動するものへと墮^おとし、〈言葉を信じなくなることを〉を招いて、〈自分自身に対する信頼〉さえ失わ

せる現象は、昭和軍国政治の風景ではあったが、左派的政治にも、あるいは民主派にもありうるものとして唐木は幅広く捉えているようにも読める。

また唐木は「言葉の回復」で、戦後になって〈知性に媒介せられない勇氣〉が非難されたことを念頭にして、〈然し知性そのものが何時不拔に堅固であつたか〉と問いかける。また、〈人間主義、人間第一義の意味に於てヒューマニズムの立場〉に疑問を呈する。戦後の言論風潮に唐木はむしろ冷やかな視線を送っている。軍国日本も問題だが、戦後民主主義をオプティミスティックに受け入れる姿勢は唐木にはまったくない。そして、〈人間を自己形成的なもの、作るものとみる立場〉を主調とする戦後思潮への違和が表明されるのは、次のような人間観を示すことで伝わってくる。

然し人間は他面作られたものであり、やがて死すべきものである。人間は自己完結的な実在ではなく、他から作られたものの一面をもつ。作られたものは、何か他より高次な秩序にあるものから作られるのである。

唐木の論述は遠慮と配慮があるせいで控えめとなり、やや迂遠となって判りにくいところもあるが、昭和二年二月段階で、放恣ともいえる戦後の人間主義に対して原理的な批判を試みているのは間違いない。自己完結的ではない一面を閑却し、超越者を忘れた人間観を唐木は難じている。そして〈超越的なるものからの顕示と主体的な行為との一致〉を指す人間像を示唆する。唐木の人間理解の背

後には西田幾多郎の哲学があるわけだが、「言葉の回復」が戦後早い段階で発表された論文であることを考えると、時代風潮に流されない唐木の認識の骨法はかえって眼を惹く。

ただし戦後社会に立った唐木順三は、民主主義への期待のなかに問題の解決を図ろうとしていることも確かである。

我々は近代の人間の勇氣、知性がいかにはかなきものであるかをみてきた。デモクラシイはこの崩れやすきものを数によつて支へ、反対党をもつことによつて支へ、個人的身体でない社会的身体によつて支へようとする近代人の究極の智慧ではなからうか。

このように受容と期待と、そして反撥ないし批判を含んで「言葉の回復」は書き進められる。唐木の独自の視座はこの短い論文に多く見出されるのである。

関連して記しておけば、唐木順三が諸手を挙げて戦後を迎えたわけではないことは、たとえば、敗戦もない時期の人間風景を苦々しく見つめた「私の履歴書」の次の記述からも、垣間見ることができる。

世間は急に騒しくなった。緊張と拘束が一挙にくづれたとき、饑餓すれすれのところにあつた市民たちは軍部の倉庫からの放出にとびついた。放出はやがて略取にかはり、やがてわれがちの略奪

にかはり、あさましい風体を暴露した。

戦後社会は人間を（あさましい風体）に向かつて解放した。個人抑圧と人間性無視の軍国政治が国じゅうを蔽^{おほ}つていた反動で、今度は、個人主義と物質主義が放埒にのし歩くことに唐木は頹廢の予感を感じた。（作られたもの）であり、（やがて死すべきものである）人間の、それは不遜の姿ではないか。唐木はそう見ていたのだ。

書き手として再び頭をもたげた唐木順三は、たちまちにして活動量を多くする。昭和二十一年は二三篇を数え、うち七篇が三木清論、他は書評、回想エッセイ、文芸評論（荷風論）で、発表場所も各種の雑誌（朝日評論等）、新聞（東京新聞等）へと一気に広がった。翌年以降も健筆は継続し、二〇篇以上発表した年も少なくない。ジャンルは文芸評論が比較上は多く、哲学的的小論文、人間観察記、教育論、書評、時評、回想記、雑感と多岐にわたる。そして公表された文章は後刻、適宜単著にまとめる作業を唐木はくり返してゆく。

教育者として立つ

戦後の唐木は四つの顔を持つようになった。出版人としての顔は、いうまでもなく筑摩書房の顧問格として雑誌『展望』や書籍の編集に携わってきたことを指す。そして上記、評論家としての顔がある。続く第三、第四の顔について述べてみたい。

失業・文筆生活時代（昭和六年夏―昭和九年末）を除けば、大学を卒業してからの唐木の主業は教職であった。小学校附設実業補習学校の教師を振り出しに、満洲教育専門学校教授、成田高女の教師、

法政二中教師＋法政大学予科講師、日本大学予科講師と続いて、戦争末期に全ての教職を失うまでの経緯は既述している。戦後まもなくは筑摩書房の再建事業に深く関わったが、敗戦前からの立場を引き継ぎ、あくまで顧問格としてであった。

その唐木順三は昭和二十一年六月、再び教職を得ることになる。明治大学文芸科の講師となったのだ。当時、文芸科長は豊島与志雄である。豊島は中村光夫の東大仏文の先輩にあたり、『展望』創刊号の執筆者の一人だった。その女婿にのち明治大学学長となる仏文学者の斎藤正直がおり、敗戦前から筑摩書房に出入りしていて、古田晁宰領の呑み会にもよく顔を出していた。創業期からの筑摩人脈の一人で、唐木とは昵懇じっこんの仲だといってよい。

明大の話は豊島から斎藤を通じて唐木に來た。最初は、哲学方面の教師に適当な人はないかとの相談であり、唐木は一人二人名を挙げたようだが、いつそ唐木自身に出講してくれないかという話に転じたのである。唐木は承知した。教えることは身に慣れた仕事である。彼は出講を続け、実績をふまえて、昭和二四年四月には明治大学文学部教授となる。その後、昭和四二年三月の退職まで、講師時代を含めれば都合二一年間、明治大学で教える多くの卒業生を世に送り出した。へ大学で教鞭をとるとはあっても、大学教師の専業とはならず、たえず編集者の仕事を併せて行っており、出版人として始終した」と粕谷一希かずき（『中央公論』編集長などを歴任）もいうように、大学教師は唐木の多面の一つであった（『反時代』であり続けたひと）。そうした非專業性がむしろ大学人唐木を特徴づけていた。これが第三の顔である。



明治大学の卒業生とともに（昭和29年3月）（唐木家蔵）
前列右端が順三。

第四の顔は信州の地場教員に対する講演・教育活動に取り組んだ姿である。既述のように、〈百姓と教師が、職業としてはいちばん上等なものだと私は思つてゐる〉という考えは唐木のなかに確乎としてあつた（「百姓と教師」）。ここでいう「教師」とは小中学校の教員を指しており、しかも念頭にあるのは地に広がる田舎の教育者だつた。大学卒業後の若き教員時代、信州教育の洗礼を受け、魅力的な地場教師たちから実践の肝所かんどうろを叩き込まれた経験は、唐木順三にとつてやはり決定的であつた。彼ら「田舎の教師」たちと共にあらん、それこそが自分の起点であり根なのだという意識が彼を貫いていた。そして唐木の精神には、己もまた田舎者であるとの矜持が明るく灯つていたので。

明治大学と筑摩書房を仕事の拠点とした活動は、都会人の生き様と多く重なる。誇り高き田舎者の生ではない。そう自覚していたからこそ唐木は、自分の原点を忘れてはならじといわんばかりに、信州の地場教員との対話を重視したのでらう。もちろんそこには、哲学会等を組織して大正期より京学派の面々を講師と呼び、自学自習に努めた信州教育人の実践活動への敬意がある。その伝統を

引き継がんとする意識は唐木のなかに高く、生涯にわたって保たれていた。

信州への講演行は、戦後の昭和二一年からおこなわれている。秋に下伊那郡伍加小学校で、また同年一二月には上伊那郡赤穂小学校で、教職員を前に「現代の課題」という題にて唐木は講演をした。翌昭和二二年には二月に、小県郡田中小学校、泉田小学校、浦里小学校でやはり「現代の課題」にて話をしている。三月には「上伊那文化大学」で漱石・鷗外について話をしたが、このときは白井吉見、中野好夫ら筑摩書房の関係者も一緒であった。続いて九月は上伊那郡宮田小学校にて「型と個性」という題で、一月には松本市教育会総集会にて「民主主義教育について」という題で講演している。こうした信州教育界での講演活動は例年おこなわれ、着実に実績が積み重ねられ、やがて不期山房での学習会活動へと発展してゆく（事情は後述）。なおこの「第四の顔」の活動内容については、巻末の年譜にて列記しておいたので参照いただければと思う。

関連していえば、「第三の顔」にしても、唐木の場合は仲間内で理論や談義に耽るタイプではない。大学人唐木に象牙の塔へ籠もる姿勢は見つからない。彼は広く人に会い、人と対話し、出会いを求めて移動を重ねた。そのなかで地場の教員と触れあう「第四の顔」の活動もまた継続させた。唐木は灰色の知識人ではない。たえず外部の教場実践へと関心が向かう行動家だった。信州行はその重要な一環である。またいうまでもなく、彼が一方で専心した出版業は実践中の実践の場である。弛まぬ実践家、それが唐木順三なのだといえよう。

さらにいえば、自ら書くものについて唐木は、抽象的な論議を展開するときでも常に具体的問題を

念頭においていた。幹も大事だが、それと同じくらい、葉を茂らせ花を咲かせる枝が大事だと考えていた。書くものに実務的・実践的契機を込め、ジャーナリストイックかつ動的な視座を忘れなかった。もちろんこうした執筆態度には、〈彼は一度も体系的に書かなかつた〉といった批判も生じうる。唐木の書く物を縷々読み込んできた本書筆者（横手）としても、雑然とした、むしろ非構造的な印象が迫るばかりである。しかし、次第にこれは彼の方法なのであり、構築や規格を遠ざける実践的姿勢が導いた文章なのだと判つてくる。右の批判を発した哲学者の速水敬二にしても、〈全体認識を聯関認識で果たさうとするのが彼の考へ方である〉と見ており、〈型破り〉からくる、専門家とはやや異なるその〈独創力〉の価値を充分なまでに是認している（「唐木哲学」）。

さて、戦後における唐木順三の四つの顔は、敗戦翌昭和二二年末までには出揃った。筑摩書房の主要スタッフとして企画・編集、著者廻りと原稿取りをおこなうと共に、書き手として論壇に新たな地歩を進める。明治大学で教え、信州の小中学校教職員に向けて講演活動をはじめた。四つの顔は互いに関わりつつ、活動の質をそれぞれ高めていく。四つが組み合わさった存在こそ「唐木順三」なのである。かくして戦後の唐木は、独自の知識人像を論壇の海面に雄々しく浮上させる。

活動躍然のちようどその頃、唐木は悲しみの時を迎えることにもなった。昭和二二年二月一三日、生家を継いだ兄勝造が、続いて同九月二八日、母かまよが逝去する。昭和の初め、家の破産で共に難儀を重ねた兄と母を、相前後して彼は喪つたのだ。満四三歳にして順三は唐木実家の長老格となる。順三夫妻に子供はいない。自然と甥や姪への庇護者として振る舞うようになっていくのである。

2 戦後文化のなかで

田辺論文検閲事件

創刊した『展望』はたちまち筑摩書房に活気をもたらすが、創刊第三号で唐木が関わって一つの事件が起きる。白井吉見「蛙のうた」はそれを次のように記している。

昭和二十一年の二月下旬であった。ピストルをぶらさげたアメリカ兵が、筑摩書房にジープで乗りつけて、聞きたいことがあるから、編集者にすぐくるようにとのことであった。NHKのビルに陣取っていたGHQ（連合国総司令部）のCIE（民間情報教育局）へ出向くと、アメリカの若い将校から、いきなり、雑誌の削除について命令に服従しなかった理由は何かと聞かれた。

編集長の白井は雑誌を代表して対応したのである。『展望』第三号の巻頭論文は田辺元の「政治哲学の急務」であり、事前のゲラ検閲で五箇所削除がCIEから命ぜられていた。当時はありふれた光景である。印刷所へ連絡して削除を進めたが、一箇所が削り残されていた。確認を怠ったせいである。

この原稿を田辺に書かせたのは唐木順三であった。田辺は昭和一九年に京都帝大を定年退職すると、

群馬県吾嬭郡北軽井沢町に居を移し隠棲する。かなり寒冷となる冬の北軽井沢に唐木は幾度となく足を運び、ようやく原稿を手に入れた。昭和二年一月一九日付、唐木の田辺宛書簡は、(八十六枚の御原稿を背負つて無事に帰りました)と書き出されている。生原稿を預かった編集者の気苦労は続く一節にある。

こんどほど自分の荷物が気になつたことはありません。と申しますのは、こんどの旅で二つの盗難を目撃したことによります、一つは眼の前で汽車の窓から飛降りた男が他のひとの荷物を道連れにしようとして取返されたりしました。

人心が乱れた時代である。盗難騒ぎはあちこちにあり、唐木は気を張りつつ移動した。原稿は無事に筑摩書房まで届けることが出来、唐木は報告のために田辺へ書簡をしたためたわけだが、読後感想としてまず、(先生の御原稿を読んだ晩は一時から眼がさめて眠れませんでした。そしていろいろのことを考へました。第一に、陛下に、直接に読んで戴きたいと思ひました)と書いている(同書簡)。さらに、原稿内容で次のように指摘する。

マッカーサーの方の意向を二、三の消息筋にきいてみました。いまのところ、確定的なことは御知らせできません、なほ二、三の人に当つてみるつもりであります。だんだんやかましくなつて来た

ことは事実のやうです。或は御原稿十三、四あたりの、米ソ関係のところと、七十五付近の戦争犯罪と裁判のところと、を多少削つた方が安全かと思はれます。これはもう少し調査した上で、御報告申し上げます。ゲラ刷でマ司令部へ出すことになつてゐますので、考へる余裕があるわけです。

この一文には唐木の配慮がある。書中で指摘した箇所は、GHQからの削除命令が出ると何らかの把握がなされていたところと思われ、唐木は急に切り出すのを避け、曖昧な表現をしながら要点を伝えている。「マツカーサーの方からの命令があるゆゑ削つてほしい」などと、田辺元ほどの学者にいきなり言えるはずがない。課題は腹に含んでおき、あくまで婉曲に迫るのが編集者の要諦であろう。唐木の気働きの跡がここにある。

この後田辺は、唐木の説得を受け削除に応じたようだ。しかし出版社側のミスで反映されない一箇所が生じ、雑誌刊行後に問題化した、というのが事件の流れである。

削除を済ませた記述は、米ソ対立を思わせる三箇所と東京裁判への疑問を述べた一箇所。そして、削除されないで発表してしまつた一箇所とは、白井「蛙のうた」に従えば、次の文章である。

国民が一切を犠牲にし生命財産を国に捧げて悔ゆるところが無かつたのは、一に陛下に対する忠誠の致す所であつて、軍部は此国民の感情を彼等の為に利用したまでである。

何故この表現に対し削除が命ぜられたのかについて、白井は、占領政策をめぐるGHQ内の意見対立が背景にあったからだと推測している。当時、ホイットニー准将率いる民政局と、ウイロビー少将率いる参謀第二部とが対峙的であったことはよく知られている。旧軍関係者の戦犯追放を進めて日本民主化を確乎たるものとすべしと前者で、冷戦状況への対応を優先させて追放は緩和的とせられたしが後者である。田辺論文の一節は後者の主張への格好な裏付けとなるので、前者によって削除するよう指示されたというのだ。

さて、この削除問題だが、呼び出された白井は低姿勢で臨んだ。当方の手抜きである、弁解の余地はない、と。すると若い将校は次の質問を投げてきた。「雑誌はいまどういった状態にあるのか」「取次店にあるのか、書店か」「売れてしまったというなら、何割程度なのか」である。

白井は「ほとんどがもう読者の手に渡ってしまった」と答えた。

先方の結論はこうだった。君の雑誌についても観察した結果、故意の違反ではないと認める。本来ならば発売を禁ずるはずだが、大部分が読者の手に渡っている以上、今回は大目に見ることにする。

(同)

どうやら、幕切れはあつけないものだったようだ。

さて、田辺の「政治哲学の急務」は社会民主主義の哲学を試みるもの（白井吉見の評言）だったが、

唐木の前記書簡中にある、〈第一に、陛下に、直接に読んで戴きたいと思ひました〉は、のちに果たされた。同論文は昭和二年六月に書籍化されたが、田辺自身の希望もあって、ときの文部大臣安倍能成よししげを通じて、昭和天皇に献上されたのである。安倍夫人と田辺夫人は従姉妹同士であり、その縁も大きかった。使いに立ったのは唐木順三と竹之内静雄である。奉書に包んだ献上本を持って、安倍文相のところへ行つたのである。

この田辺論文は天皇について、いくつか重要な主張をしている。一つは象徴天皇制の論議である。

天皇の絶対不可侵性はこの無の超越性に由来するものに外ならない。斯かく解せられた天皇の象徴的存在こそ、民主主義を容れて、而もその含む対立を絶対否定的に統一する原理であるといふべきである。

象徴天皇制を記した日本国憲法の国会審議（衆議院）は昭和二年六月からで、成立は同年一〇月、公布は一月三日である。同年一月に執筆された田辺論文が示す先取りのな視点は注目される。田辺論文はまた、天皇の戦争責任問題を正面から扱っている。

国家を代表し、国民を統べらるる天皇が、外国に対し戦争の責任を負はれることは少くとも道徳上当然のことであるといへる。私は此点に関する天皇の御態度を、畏多いけれども遺憾とするもの

である。

こうした踏み込んだ見解を、京大で西田幾多郎とともに一時代を築いた哲学者が唱えたことの意味は大きい。そうなれば、これを書き発表することに深く関わった唐木順三の役割も大きいといわねばならない。

昭和天皇の反応はどうだったのか。白井の「蛙のうた」はその点につき、次のように記している。

しばらくして、天皇が全ページに目を通されたこと、そして、自分は読んだが、さっぱりわからない、ただ、天皇は責任上、退位すべきだという一句はわかった。しかし、いろいろ、むずかしい事情があつてそうもいかないと、もらされたとか、噂として伝えられた。

なお、『展望』掲載作でCIEに睨まれたものに、この田辺論文のほか、和辻哲郎の「世界的視圏の成立過程」（昭和二二年三月号から連載）がある。アングロサクソンの侵略の歴史を細かく書いた内容が彼らの癪に障ったようだ。ただそこが問題だとなると一部削除ではすまないことになり、広範な削除を命じるほどにはCIEは野蛮でなかったと白井は書いている。

これらのエピソードから、田辺、和辻という京大西田時代の学者たちに、当時、ある種の断固とした姿勢があつたことがうかがわれて興味ぶかい。

『現代史への試み』

戦後まもなく唐木順三は書き手として復活し、活発な原稿発表を新聞、雑誌等におこないだしたことは前述している。かくして唐木は論壇人として飛躍していくわけだが、執筆活動は連年さかんで、書く量は膨大となり分野も多岐にわたった。一方で彼は、自作群に対して随時、書籍への整理収録をおこなっており、いかにも編集者らしいやり方だといえる。この作業がくり返されているので、書籍での成果を横断的に見ていくことで、書き手としての「唐木順三の仕事」をより整頓的に眺め渡すことができる。その点を念頭に本書は以下、唐木の筆業について書籍を中心に述べていくことにする。ただし唐木の本は一度刊行した書籍の焼き直しや、新版・増補版にしての再刊が珍しくない。煩を避けるために本書では、言及の要ある場合を除き、基本的にオリジナル版を中心に述べる方針で臨む。

戦後の書籍第一号は、昭和二二年六月二〇日、筑摩書房から刊行された『三木清』である。同書についてはすでに幾度か触れているが（一五六頁等）、歪められていた三木像を改め実像を示そうと意図されており、戦争終結を迎えても釈放されず獄死に至った三木を追悼する意味もあつて戦後早くに刊行されたものだ。三木論は昭和二一年、集中的に雑誌発表されており、それらを集成するとともに書き下ろしを含めて一冊とした（書中、「哲学」の章の第一パート「存在の根拠」は全編書き下ろしである）。三木の生涯は時代の運命に同道し、達成も悲劇もそこにある。『三木清』はその事情を好意的な筆によって読者に伝えている。

英文学者深瀬基寛は唐木宛書簡（昭和二二年二月一日）でこの本の感想を、〈三木氏の運命がよく



深瀬基寛(昭和34年8月)
〔『深瀬基寛・唐木順三
往復書簡』より〕

も悪しくも近代日本の象徴になつてゐることが御高著によつて判つきり解りました。パスカルから出發してあのやうな最後に達せられたといふこと」と書き送つてゐる。

昭和二二年は続いて、戦前からの論文を再編集した『作家論』上下の刊行があり(三笠書房、上・七月、下・二月)、翌昭和二三年には、既刊『鷗外の精神』に三篇追補した改訂増補版を刊行した(一〇月)。このときの追補のうち二篇は、上述した「上伊那文化大学」における講義

(昭和二二年三月)の内容である。

これらを経て、唐木山脈の高峰の一つ『現代史への試み』が筑摩書房から刊行されるのは、昭和二四年三月二五日であつた。

『現代史への試み』は三つの章と二つの付論からなる。「近代精神——三人称世界の成立」「ドストイェフスキ——三人称世界から二人称世界へ」「型と個性と実存——現代史への試み」が本篇で、付論は河上肇プラス漱石論、太宰治論という構成となる。デカルトがバルザックに宛てた手紙から近代精神を論じたのが第一の章であり、それを受けた第二の章「ドストイェフスキ」は原稿用紙一〇枚くらいの中篇だが、唐木自身は後日のエッセイ「ドストイェフスキと私」(昭和三八年)で、次のようにその内容を紹介する。

デカルトに始まるヨーロッパの合理主義は、理性的自我以外のものをすべて対象化し、三人称化し、無記化してしまつた。我々はそれによつて、「汝」を、二人称世界を失つてしまつた。世界は巨大なメカニズムとなり、さまざまな法則でしばりつけられてしまつた。自然や社会を対象化し法則化したばかりでなく、人間やその心理まで分析するいはゆる精神分析まででできた。さういふ近代の中で、第二人称世界を守りつづけ、人間や心理をメカニズムや法則から除外したドストエフスキーを私はそこで特に問題にした。

この論旨を持つ「ドストイェフスキー」に続くのが「型と個性と実存」で、中心的な章だといつてよい。一〇項から成り、巻頭の「型の喪失」は『展望』昭和二三年三月号に掲載され、続く項は『展望』その他の雑誌に載つたものに書き下ろしを含めている。全体の流れは粕谷一希の整理を引いておいた。

大正六（一九一七）年のロシア革命と、その受け入れられ方から筆が起こされる。唐木は転じて鷗外を論じ、鷗外は「はつきりした型」を宿していたと書く。続く項によつて唐木は、「型」の時代である明治は、ロシア革命に刺激された日本社会の変動によつて、大正前期に「古い形式」とされるようになったと指摘する。やがて、明治の「修養」に変わつて、知識階級に「教養」という新しい概念があらわれ、「個性」の時代を迎えた。そして敗戦後の日本を唐木は、「実存」の時代とし

て捉える。第三章の副題に「型と個性と実存」とあるのは、明治の「型」、大正の「個性」、戦後の「実存」という対比からくるものだ。（『反時代』であり続けたひと」。なお「型と個性と実存」を副題と
しているのは、新版で正副の題名が入れ替わったことによる）

大正期に登場した教養主義を、明治期の「型」を喪失した有りようと捉え、唐木は批判する。それまでの知識階層には、修身斉家の伝統や儒教的生活体系といった、あるいはより具体的に武士道や禅といった、身体所作を伴う「型」があった（武士階級は日本の知識層でもある）。明治期まではそれが継承されて残っていた。漱石、鷗外、露伴や二葉亭、内村鑑三、そして西田幾多郎といった（明治維新前後に生れ、幼時に四書五経の素読をうけたジェネレーション）（『現代史への試み』第三章三項「教養派の歴史的社会的規定」）は、こうした「型」を身につけたうえで知識人としてふるまった。

しかし大正期になると「個性」が重視されるようになり、「型」がうち捨てられていく。そこで登場した世代である教養派には、〈幼時或は少年時にその柔軟な骨格を型に形成する規範がなくなつてゐた〉のである（同）。このとき（我々の思惟体系とともに生活体系をも規制する）形式が失われていった（同一項「型の喪失」）。鈴木成高は唐木との対談で、『現代史への試み』について、〈あのなかで唐木さんは型の喪失を問題にしているよね。これは僕の言葉になおせば伝統の喪失ということになると思うんですが、要するに無定形ということですね〉と発言している（『歴史の顔』、中公選書「唐木順三ライブラリー」第二巻収録）。この〈無定形〉が席捲しただすのは大正時代で、「型」（鈴木という「伝統」

の代わりに登場したのが「個性」であった。「個性」は自己を規制するものを否定する。やがて（無定形）のなかで、頭脳で得た教養だけからさまざま知が流れ出す。これは問題ではないか。そこを唐木は問うのである。

唐木の主張を端的にあらわした箇所を引くところなる。

我々は自己の形を失つた。型と性格とを失つた。型無しになつた。歴史をして真に歴史たらしめるのは現在の緊張した力である。主体の行為である。歴史は単に事実として過去に転がつてゐるものではない。我々に呼びかけ、我々がこれに応ずるとき歴史の糸がピンと張る。この緊張なきところに歴史はない。ところでこの緊張を可能ならしむものは形、型ではないか。或は形と型を形成しようとする意志ではないか。こちらが形をもち、或はそれへの意志と行為をもつとき、先方が初めて形、型となつて現前する。（現代史への試み』第三章二項「個性に立つ教養派の擡頭」

なお、第三章の巻頭にあり、論が述べられる起点文「型の喪失」は、元文（『展望』掲載形）の副題に「鷗外をめぐるつて」と付したように森鷗外論であつて、敗戦前発表の唐木の著書第三作『鷗外の精神』を継いだ論考とみてよい。そのなかで唐木は大正期の鷗外について、次のように書いている。

鷗外は当代を下降の方向をたどつてゐる一時期と見た。彼のレジグナティオンは根源的にはそこ

に由来する。同時に彼の保守主義もそこに由来する。鷗外は生来規範を好む人であつた。当代はこの規範がくづれ、無形式に、無拘束に、無型になつた時代である。曾て鷗外は『假名遣に關する意見』(明治四十一年)に於て、新しい国語を、「田とも云はず畠とも云はず道のないところを縦横に歩く」ところの「乱雑極まる無茶なもの」、無茶な人民が勝手につくりだすものといつた。

現実に規範と生活形式を樹立しえないことを知つた鷗外は、退いて歴史のうちに、否、日本に於ける唯一の型らしい型を形成した儒教と武士道のうちに權威と形式を求めたのである。若し發生的な考へ方を以てすれば、鷗外の『興津彌五右衛門の遺書』以下の歴史小説もまた、權威と形式の樹立といふ実用的折衷的な必要から生れたものである。然しそれは鷗外の血の中に入りこんでゐる遺傳と、軍人といふ職掌と、そこから来る *Sitte* と、それを好ましいものとして受取る生理と、心理にかなつたものであつた。またそれだからこそ彼の歴史小説が不朽のものたりえたのである。

太平洋戦争から敗戦を挟んだ時期に鷗外と対面し続けたことは、唐木をして伝統の問題、東洋と西洋の対決の問題に深く関わらせる結果になつたと、白井吉見も唐木逝去時の追悼文「唐木順三を哭す」で指摘している。『現代史への試み』は戦後初期に教養主義批判を展開したものとして注目され、問題提起の書として後年まで名高い存在となつた。もちろん違和感を覚えた知識人も多々おり、たとえば歴史学者林健太郎は、筑摩の担当者がこの本の書評を依頼してきたとき、「これは歴史の本では

ありません」と言つて断つたという。「現代史」と名がついていても「歴史の本」の条件を満たしてはいないということである。粕谷一希は、そうした事情をふまえてなお、唐木が提示した教養主義批判は、その後もくり返してさまざまな著者が論じてきた。しかし、『現代史への試み』で展開された批判がひとつの定型となつており、唐木の次元以上のもは出ていないと考えられる」と評している（『反時代』であり続けたひと）。その『現代史への試み』の中心章の冒頭が鷗外論であつたことは重要であり、鷗外は唐木にとつて決定的な転機をもたらした文学者だと改めて告げておかねばならない。

なお『現代史への試み』は昭和三八年一〇月二五日、収録論文に改変がなされて筑摩叢書の一冊として再刊された。唐木順三全集の第三巻でさらなる増補と取捨を加え『増補現代史への試み』となり、定本になっている（昭和四二年八月二五日刊）。これらの作業が付されたのは、この本の提起したことが長く影響を与えている証拠だといえよう。

太宰治の面影

さて、唐木順三が創設と戦後の復興に関わつた筑摩書房だが、『展望』を創刊して活気づいたのも束の間、昭和二十三年頃から、二十八年の八月、『現代日本文学全集』の第一回配本の『島崎藤村集』が発売されるまでの五、六年間、殊に終りの一、二年は全く一日が勝負といふ綱渡りであつた。竹之内静雄と松田壽の両幹部が、各々の財布を合せてゴールデン・バット一箱を買つて半分づつわけたことなどが語り草になつてゐる」と唐木自身が記すような状況に陥るのだった（「古田晁に先立たれて」。昭和二五年にはすでに印税、原稿料、社員の給料の遅配が始まつて、さながらダッチロールしながらの飛行となつてきた。戦後再出發して数年のうちに苦境

が始まったのだ。

その経緯を以下、唐木の動きを多く織り交ぜつつ追っていくことにしたい。まずは時間を遡り、戦後まもなくの社屋移転事情である。お茶の水の出版会（のち出版協会）に間借りしていた筑摩書房は、昭和二十一年、小石川高田豊川町への短期移転を経て、本郷台町（文京区）に住まいを定めた。台町の社屋は『展望』の売上げ小為替を大束にして、現金を足して購入したという。

ここから昭和二十三年くらいまでが順調期だった。この間のトピックスの一つに太宰治作品の刊行がある。すでに敗戦前に『千代女』（昭和一六年八月）、昭和二〇年一〇月に『お伽草紙』の刊行があつて、これらを受けて昭和二十二年八月には『ヴィヨンの妻』、昭和二十三年七月に『人間失格』が続く。その太宰が自殺したのは昭和二十三年六月一三日のことである。「人間失格」は『展望』に連載中だったが、最終回の掲載前に死なれてしまったのだ。太宰は古田が深く付き合ひ、よく吞ましていた。その唐突な死はメディアで大きく採り上げられ、売れなくて倉庫に山積みだった『ヴィヨンの妻』が売り切れ、『人間失格』は筑摩初のベストセラー（二〇万部）となった。

唐木順三は太宰の記憶を、『現代史への試み』昭和二四年初版付載の「假説の神」で、次のように記している。

太宰が大宮で『人間失格』を書き終へての帰り、本郷の筑摩書房へ寄つたとき、居合せた僕は一緒に酒を飲んだ。彼は多く語り、自由にふるまつた。花札で悪い手が来たとき、さつさとおりるこ

とを知つてゐるものがある、釣に逃げたり、旅に逃げたりするものがある、だが、俺は決しておりたり逃げたりはしない、といふやうなことを身振たくみに語つた。そこで僕は、決して人生をおりるな、と、まあそんな風に言つたら、なんだい、そりや、といふやうな返事で、うやむやで、また酒をのみ、二日酔の用心だといつて、そんなものの不用な僕に白い錠剤を、十粒ほど掌にあげてくれて自分でも飲んだ。「中略」丁度居合せた書房の者達に、おい、若い者、質問、質問、等と言つて、はしやいでゐたのが、急に火鉢にもたれ、唇が白くなつたと思ふと、うしろの椅子によりかかり、静かに動かなくなつてしまひ、大力の友人に軽々とかかへられて、隣りの床に入つて、それから、サツちゃんの注射といふことになつてしまつた。

翌日に別れたのが最後となつた。(あの果しもなく弱い表情が眼に残つてかなはなかつた)と唐木は追記している(同)。

『展望』 休刊

短い筑摩「順調期」の終わり頃、編集者唐木順三は大きな仕事をおこなつた。田辺元もち、二人は北軽井沢の田辺元を訪ねることにした。企画について口説くのはもっぱら唐木の役割で、〈竹之内は、借りてこられた猫のように唐木の蔭にかくれて坐つていた〉とは、『筑摩書房の三十年』における和田芳恵の描写である。

田辺が編集者としての唐木を信頼していた様子は、書簡からもうかがえる。山深いところで隠棲し

ている田辺の求めに応じて、唐木は書物や雑誌を入手して届け、文房具や原稿用紙を送り、ときに積雪のなか田辺の好物・自然薯なども持参して訪問しており、田辺から感謝の意がしばしば伝えられている。書物には筑摩のものばかりでなく、鈴木信太郎『マラルメ研究』（三光社）、武谷三男『弁証法の諸問題』（理學社）、リルケ著・大山定一訳『神について』（養徳社）などもあった。唐木はまた、田辺一家の三浦半島葉山移転について斡旋の労をとったようで、実現はしなかったが他にも私生活のことまで相談に乗っていた様子である。こうした日常的付き合いと細やかな配慮の積み重ねで、著者と編集者の信頼関係が築かれていくわけだが、その点、唐木は実に優秀な担当者だったといえよう。

書簡を見ると、田辺は渡した原稿について、細かいところを唐木に任せている遣り取りもある。たとえば、「プラトニズムの自己超越と福音信仰」（『展望』昭和二年四月六月号掲載）に関して、〈分載せられるとして、全部一続きにするがよいか、〔中略〕それとも三部を別の表題にて分かつ方よきか、御考へ下さい。小生は何れでも構ひませぬ〉と唐木に書き送っている（同年二月一四日付）。とびきり厳格な人間だった田辺ゆえに、ここでの「一任」は信頼の深さなくしてはありえない。

こうした関係構築が前提となり、『哲学入門』について、唐木は田辺の口説き落としに成功する。ただし書くのではなく、講義のかたちをとり、その速記に手を入れてまとめることになった。唐木の声掛けで信州哲学会から一七名が聴講生として選抜された。ほとんどは小学校の教員である。第一回は昭和二三年一〇月で、題は「哲学の根本問題」。四日間にわたって講義がおこなわれた。唐木自身も参加している。この講義は四年間、計四回実施された。

白井吉見は昭和二四年四月開催の第二回を聴講している。題は「補説第一、歴史哲学・政治哲学」であった。〈入門と題されてはいても、初歩的な解説などとは、まったくちがったもので、それまでの博士の思想のすべてを簡明な形で集成統一したものであった〉と白井は当時を回想する（蛙のうた）。また、講義する田辺について、〈われわれの前に立った和服の博士はがっしりした体軀で、声も太く、ややあごを出され、遠くに目を放ちつつ、説き来り、説き去る几帳面な姿には、信と力があふれているかに見えた〉と伝えている（同）。

『哲学入門』は昭和二四年三月一〇日に、第一回講義の整理されたものが刊行となり、その年のうちに二〇万部に達しベストセラーとなる。続く講義も順次、刊行の運びとなった。実はこのとき、筑摩は徐々に経営が苦しくなってきたが、『哲学入門』の成功は急場をしのぐことになった。なお、この本の刊行も重要な契機となつて、田辺は岩波書店から筑摩書房へ主たる版元を移し、最後には全集も筑摩で刊行している。

さて、傾き出した筑摩を押し戻した企画こそ、唐木の関わった『哲学入門』だといえたが、構造的な問題を前にすれば、これも一時のカンフル剤にすぎない。効果はすぐに薄れ、給料の遅配、原稿料の未払いなど出版社の末期症状へと至つてゆく。

筑摩書房の経営が苦しくなった理由に関して、『筑摩書房の三十年』は、雑誌『展望』の位置をめぐりこう記している。

加藤秀俊の「中間文化論」によれば、戦後文化の第一段階は高級文化中心で、第二段階は大衆文化中心になり、第三段階は中間文化中心であるということになる。「中略」『展望』の齒車は、第一段階の齒車とあまりにも緊密に噛み合い、第二段階とは無関係に自転し続けた。最初からもっとも完成した形で、時流にぴったりと適合していたことが『展望』の、最後はいのち取りになったということにもなるうか。

また当時の状況について、臼井吉見は「蛙のうた」でこう書いている。

「文藝春秋」が、たとえば、「天皇大いに笑う」や、戦記もので、われわれの同列から、ぐんと乗り出したと思ったら、みるみる駿足をのばして、はるか遠く駆け去ってしまった。僕らの「展望」は、あつというまに、おいてけぼりを食ったかたちだった。

時事性、大衆性が求められる時代が来たというのに、『展望』はそれを打ち出せなかった。単行本の成績もあがらないのは、雑誌と同じ理由だった。〈高級文化〉志向が、それゆえに良質なものを生み出し筑摩の名を高めたが、それゆえに経営を健全なものにしえなくなったのである。本物志向は自尊の弊に陥る場合もありうる、というのは唐木の指摘だが（二三四頁）、〈おいてけぼりを食った〉筑摩書房はたちまち危機に面前することになる。

返品率が三割の線を上下しだした。危険信号である。だったら部数を減らせばいいかといえば、減らしてもやはり返品率は三割より下がらない。よく見られる現象だが、維持すれば赤字、減らしても赤字となるわけだ。『中野重治選集』や『井伏鱒二選集』などの大型企画が赤字を増やす結果をもたらしてもいた。これでは『展望』の損失を書籍で償うという考え方も成り立たない。出版社活動の柱である雑誌が駄目なら書籍もふるわなくなるのはむしろ至当といえた。(編集部内で、雑誌をつづける気力がなく、僕に対する不信が高まった。もはや、刀折れ、矢尽きた感じだった)と編集長臼井は述懐している(同)。

昭和二六年九月、〈刀折れ、矢尽き〉、ついに第一次『展望』は休刊に追い込まれた。六九号にて歴史を閉じたことになる。第二次『展望』が始まるのは、遠く昭和三九年まで待たねばならない。

なお、『展望』には社会時評・文化批評を扱った「展望」欄があり、臼井吉見、中村光夫とともに唐木順三も交替で執筆した。唐木の筆によるものは昭和二四年が一月号、四月号、七月号、一〇月号の四回、二五年が一月号、四月号、一〇月号の三回、二六年が八月号の一回で、計八回である。渡辺一夫、深瀬基寛、清水幾太郎など同時代論者の近作を組上に載せて紹介・批評したり、マス・デモクラシーを論じたり、あるいはまたアメリカTVA(テネシー河域公社)に時代の行方を感じしたりと続き、唐木らしく哲学的色彩の加わった筆が見られる。そのなかで昭和二四年四月号の掲載作は、『現代史への試み』と繋がる論点を示しており注目できる。

明治の知識人には、彼等がいかに自由勝手にふるまはうと、シンがあつた。そのシンをつくりあげたのは武士道や儒教であらう。彼等の年少の折、課せられた素読といふ方法が、案外にシンをつくりあげてゐたのではないか。小藩の藩校にすら、そこらあたりの大学教授などとは似てもつかぬ出来た人物がゐたのではないか。

ざっくりばらんな調子はこの欄自体の特徴なのかもしれないが、思いにまかせて、自在に、いくぶん談話風に筆を走らせている唐木の様子が伝わってくる。

3 『詩とデカダンス』の時代

ドストエフスキー

古田、臼井らと苦境期の筑摩書房を背負つた時期、唐木順三の文業はどうなつ

と宮澤賢治

ていたか。

『現代史への試み』上梓の翌月（昭和二四年四月）、彼は世界評論社から『森鷗外』を刊行する。既刊『鷗外の精神』は歴史小説以後の後記鷗外作品を多く扱つた本格評論だが、これに対して『森鷗外』は主として前期中期に目を向け主要作を解説し、併せて評伝を載せて手際よくまとめた小著である。昭和三二年五月に東京ライフ社で復刊され、さらに昭和三三年三月、現代教養文庫（社会思想社）の一冊として再刊された。



京都、西谷啓治の家にて（昭和32年）（唐木家蔵）
左が順三、右は西谷。

続く昭和二五年夏、唐木はドストエフスキーに関する四日間の共同討議に参加した。座談会参加者は他に和辻哲郎、高坂正顕、西谷啓治、森有正で、司会者は鈴木成高である。討議結果は編集のうえ同年十一月、弘文堂から『ドストエフスキーの哲学——神・人間・革命』の題で刊行された。唐木は同書のなかで第一章の問題提起部分を担当しており、これは討議中の唐木発言を元になっている。のちに「ドストエフスキーの生涯とその思想」という題で独立論文となった。

なお唐木は同年七月、同じ弘文堂から『自殺について』を刊行する。同社「アテネ文庫」シリーズの一冊で、末尾二篇を除いて書き下ろしで構成された。続いて昭和二六年六月にもアテネ文庫で、既出論考に書き下ろしを含めた『近代日本文学』を刊行する。どちらも一般向けの教養書にして小著（本文が前者七一頁、後者六七頁）であった。

弘文堂は昭和初期から京都帝大の哲学科、史学科と縁の深い版元で、共同討議参加者の顔ぶれを見てもそれが判る。のち社内対立から倒産状態となり、それをきっかけに社員が独立して二つの版元が出来る。西谷能雄の未來社と久保井理津男の創文社だった。創文社は京都学派人脈を中心著者に据え、顧問には鈴木成高が任じられた。この版元はのちに唐木も著者として縁を持つことになる。

一方、筑摩書房においては、『宮澤賢治選』の編集と解説者を務めたのが、同じ期間の比較的重要な仕事となる。この本は「中学生全集」の一冊であり、昭和二六年五月の刊行。筑摩書房は苦境を乗り切るためにベストセラーを必要としたが、単発では寸時のカンフル剤に過ぎず、もはや焼け石に水であった。状況はのっぴきならないところに来ており、〈鉄砲では間に合わず、機関銃で撃ちまくるほかはなかった〉のである（白井「蛙のうた」）。この急場で白井吉見が「中学生全集」全百巻を企画し、その四一巻を唐木が担当したわけだ。

白井は連日の徹夜で次々と本を編集製作していく。第一回配本は昭和二五年七月。毎月三〜四巻ずつの配本ペースで、まさに〈機関銃で撃ちまくる〉体^{てい}だった。倒産寸前の筑摩を救うのは白井の並外れた精神力と、獅子奮迅の馬力以外になかったのだ。結果は吉と出た。「中学生全集」は全国の中学校で備えられる存在となり、筑摩書房はその成功によって、束の間ながら再び危機を切り抜けることが出来た。

さてそのうちの『宮澤賢治選』である。唐木は賢治文学の魅力を早くから認めており、それもあって編集と解説を任されたようだ。昭和一〇年一月、『文藝通信』に唐木はエッセイ「宮澤さんの本」を寄稿している。そのなかで唐木は、谷川徹三が評価している文章を見て賢治に興味を持ち、図書館にあった『宮澤賢治全集』第三巻を手にとったと書いている（文圃堂版、昭和九年一〇月二九日刊である）。成田高等女学校の教師になって初めの頃である。頁をめくり、唐木はまず賢治の写真に惹きつけられた。花巻農学校の教壇で粗末な机の前に立っている有名なものだ。

宮澤さんの顔がまたよい。しまつてはゐるが、いかめしいところはない、山や川の美しさに似た美しさをもつたすんだ顔である。かういふ先生の前に坐つてゐる生徒はどんなに仕合せだらうと思つた。私はこの写真をみて、宮澤さんといふ人がもうすきになつてゐた。

(宮澤さんの本)

こうした惚れ込み方は、同じ地方教師として共振するものがあつたからで、教師賢治と教師唐木の魂の触れ合いのドラマとして注目される。賢治は昭和八年九月、ほぼ無名のまま逝去しており、逝去後急速に評価されてきたとはいへ、幅広く知られた存在にはなっていない。比較的マイナーだった時期に出会い、引き込まれたのだから、唐木の側に本来的な受容力があつたというべきであろう。

第三巻は童話を集めたのだが、その童話をひとつひとつ読んでいつた。殆どこの三四年來、忘れてゐたと言つてもよい本を読むたのしさが、わくわく胸にこたへて來た。それは早く先へ進みたいといふ氣持と、早く進めてしまつてはをしいといふ氣持とのこんがらがつた、妙にわくわくする落着かないやうなたのしさである。

(同。傍点原文)

賢治の書いたものはたちどころに親愛の対象となつた。唐木は誰かに良さを伝えたくて仕方なくなり、妹にぜひ読めと手紙を書いたくらいである。

さらに、教師唐木の真骨頂といえる箇所が「宮澤さんの本」に出てくる。

この本のよさを知るにはまづ読んでみるにかぎる。声を立ててよむにかぎる。その言葉がどんなに美しいか、その心がどんなにやさしく澄んでゐるか。ああ、批評といふものはつまらないものだと、ときどきに、傑出したものを読んだ後に感ずることを、この童話では一層強く思ふのみである。

唐木は若き教師時代から、いい文章は声を出して読むことを生徒に勧め、自分でも読んであげていた（二二頁参照）。あわてて読んではいけない、ゆっくり味わって読むのがいい——賢治作品の受け取り方の骨を唐木は直観的に把握していた。当初から唐木は、賢治文学の優れた理解者だったのだ。彼は賢治の童話に接して、さっそくところどころ自ら音読した。家に帰ると、今度は妻に声を立てて読んで貰った。

その唐木が最初の出会いから一六年経って、編纂と解説をおこなう機会に恵まれたのが『宮澤賢治選』であった。『宮澤賢治選』は編集者唐木によって、こだわりのうえで、独自性のある構成に仕上がっている。なにより「銀河鉄道の夜」と「風の又三郎」をはぶいている。すでにいろいろな版に収められているのが理由だ。そして、替わりに「雪渡り」「セロ弾きのゴーシュ」「いてふの実」「グスコブドリ」などを採用していく。

さらに比較的マイナーな作品「北守将軍と三人兄弟の医者」を冒頭に配しているのは、『宮澤賢治選』の特徴だといえる。へこれを読んで宮澤賢治といふひとをまづ好きになつてもらひたいと思つたからです。あまり高い声でもなく、またあまり低い声でもなく、中ぐらゐの声で、コンマとピリオド

を正しく区切つて読んでごらん下さい。自然に一種の調子がついてくるでせう」と解説の中で書いている。そのほか、詩では「生徒諸君に寄せる」を入れている。近年、宮崎アニメ『コクリコ坂から』（二〇一一年）の挿入歌「紺色のうねりが」に使われるなど、再評価された詩だが、唐木は昭和二六年（一九五二）段階で注目していたのである。

上記、『宮澤賢治選』を採り上げることで編集者唐木の仕事について一端を覗いたわけだが、一方で、唐木の解説中には、賢治文学の「形式」について、文芸評論家としての興味深い指摘がある。最後にそれを紹介しておきたい。

賢治は、自分自身の欲にとらはれたり、自分一人よければと思つたりするひとたちにはなんの興味をもたず、ただ「しやくにさはつてたまらない」ばかりです。さういふ連中が早くなることを願つてゐました。ところで近代の文学は一般に、さういふ人間に興味を感じ、さういふ人間を描いたものが多い。したがつて賢治が自分の文学形式として、近代文学とはちがふ形式をとらざるをえなかつたのは当然といはなければなりません。

中学生向けシリーズの解説に、やさしい書き方をしながら、賢治文学の理想主義と孤立性について鋭く論じているのは、さすがに唐木順三だといえよう。

「日本」を見出す

書き手として活動をさかんとし、書籍の上梓も相次ぐなかで、ついに唐木順三は決定的な一作を世に送り出す。昭和二十七年一月三〇日刊行の『詩とデカダンス』である。版元は前述した創文社で、同社のフォルミカ選書シリーズに収められた。粕谷一希はこれを〈記念碑的作品〉といい、〈唐木順三が、初めて自分の人生と文学のスタイルを発見し、造形した書物〉として高く位置づける（『反時代的思索者』）。

唐木順三の著作のうち、『詩とデカダンス』は『無用者の系譜』（昭和三五年）『無常』（昭和三九年）と並ぶ三大名作だといってよからう。これに『現代史への試み』が問題提起作として一つの高峰であり、『詩とデカダンス』から『無用者の系譜』へと移る過渡的要素として『中世の文学』（昭和三〇年）を入れて五大作と考えられる。これは粕谷一希の選出であるが、筆者（横手）もこれに同意する。粕谷は筆者と面談した際、五大作に加え、「中世の唐木」にして古代を採りあげた『古代史試論』（昭和四四年）を異色作にして要素だと話した。これに晩年の『日本人の心の歴史』（昭和四五年）『あづまみちのく』（昭和四九年）が味わい深い佳品といえる。

こうした唐木著作史を眺めてみても、三大名作の劈頭となる『詩とデカダンス』こそ、〈唐木順三の執筆の方向性を決めた大事な本になった〉のである（粕谷一希「西田哲学の系譜と唐木順三」）。というのは、近代批判の視点を確乎としていた唐木は、この本を書くことによって〈同時代から反転して、中世を中心とした古き日本へと向かい、以後、右記列記した書物はすべて日本発見・日本回帰の所産といえるからだ（同）〉。

ただし、『詩とデカダンス』の論壇への登場は、いくぶんかの唐突感があったようだ。若き粕谷は題名に惹かれてこの本を手にとったが、当初、なぜ唐木が日本近世・中世へと歩を進めたのかさっぱり判らなかつたという（筆者への談話）。この「判らなさ」は発表当時、誰しもが抱いたようで、ゆえにこの本には正当な評価が与えられなかつた。（運のよくない本）（不憫な子）と唐木自身もいうように、論壇でほとんど黙殺されたうえに、（初版で葬られてしまひ、ときに古本屋の棚に、案外な高値をつけられて並べられてゐる）存在となつた（新版のための序）。

西欧哲学と日本近代文学を対象に唐木は先端的に論を立ててきた。戦後の論壇はそこに立脚するのが主流だつた。主流でモノを書いていけば論壇人として絶えず光が当たる。ところが唐木はいつしか光の当たる大道から、まぶしい光を避けるように去っていく。そして一種の隱者化して、ひとり古き日本へと回帰していったのだ。これは書き手として細くけわしい^{そまな}柚道を選んだことになるが、そこを選び断然進んだことがかえつて唐木順三を成熟させた。その意味で、『詩とデカダンス』という「反転の作」を世に送り出したことこそ、書き手として後代に名を残す決定的な契機となつたのである。

『詩とデカダンス』はボードレル、ヴェルレーヌ、ランボー、リルケ、ヴァレリーといった文学者、モンテスキュー、ニーチェ、キルケゴール、ハイデガーといった哲学者等、西欧の作者を探りあげた箇所から始まり、芭蕉、蕪村、さらには近世戯作者と古き日本の文人を扱う箇所へと転じていく（第一部「事実と虚構」）。続いて一休に関する比較的長い論考を経て大田南畝に至る第二部「狂の諸相」となる。その後再び西欧に戻るが（第三部）、こちらは二篇のみの付論部分で短い。すなわち第一部の

中段以降第二部までがこの本の主眼だといえる。収録各部分の成立史を見ていくと、西欧を扱ったところは多く既発表作を収録し、日本の伝統を扱った箇所はすべて未発表の書き下ろしである。唐木は昭和二十七年の夏、日本回帰の部分を中心に執筆し脱稿した。そこは「反転」の要所であつて、新たな思索展開のためにも、新稿を当てないといけなかったのだ。

『詩とデカダンス』は〈不憫な子〉としてあらわれたのち、再評価を受けて新版として復刊(昭和四一年一〇月)された。その「序」において著者自らこの本を語る箇所があり、端的に執筆目的が示されている。

この本の主題は近代批判であり、近代の帰結としてのニヒリズムにどう対処すべきかといふことである。西洋の近代が世界の近代を支配し、日本での近代化の問題は即ち西欧化の問題であつた。当然にそこから伝統と近代といふ問題が起る。

ニヒリズムを近代の帰結として深刻なものと捉え、そこから脱する道を描いていく必要がある、というのが、唐木の強烈な問題意識であつた。いうまでもなく、これは現代の課題である。そのように認識した唐木が答への在処ありかを求めて行つた先こそ、日本の古き時代——とりわけ中世——の宗教や文学の世界であつた。彼は過去を経巡めぐる。そのなかで見出したものこそ、「ニヒリズム脱却の道は、結局はニヒリズムを徹底することから啓ひらける」という観点であつた。徹底するには、何よりニヒリズム

を深く認識することからはじめないといけない。第一部の終結部分にある一文、(ニヒリズムに属しながらそれとは知らず、デカダンスに属しながら健康と思つてゐるところでは、こはばりの度はいいよつものるばかりである。)——こういつた批判こそ、風流、洒落、狂といった日本文人の特徴的な価値観を追いながら、唐木順三が『詩とデカダンス』で繰り返し奏でた言説なのであった。

深瀬基寛はこの本の書評を『日本讀書新聞』昭和二八年二月二日号に載せた。そのなかで深瀬は、風流、風狂といった「風」を使う概念がデカダンスの類概念であるとの説明に着目し、『詩とデカダンス』の立論について次のように述べる。

ボードレールからニイチエへ、デカダンスからニヒリズムへの転落を西洋の近代が負はされた歴史、(Gestalt)として実存的に把握し、しかる後に後半の諸章において、むかしからわが国の文学や文学論のなかにおびただしい数を以て遍在してゐる「風」の一字に着目して、そこに新しい意味をもつて世界の表にたつべき詩の生命原理を発見しようとする試みである。(傍点原文)

そして深瀬の書評は、本の特徴を端的に示していく。

つまりこの本は単なる哲学書でもなく、哲学の文学的応用でもなく、西洋と日本と、哲学と文学と、文学と人間の運命とのあひだに張り渡された実存的な緊張関係を見つめてゐるところにこの本

が各種専門の読者にとつて新しい出発点を暗示するゆゑんが存する。

深瀬も捉えているように、『詩とデカダンス』はまだ日本回帰を全面的におこなつた書物ではない。現代思想の追求と伝統探求の中間にあり、混淆である。田辺元が唐木宛書簡（昭和二十七年二月九日付）のなかで、〈小生自身もやつと、リルケ、ハイデッガーの実存主義的詩哲学の解釈批評にとりかからうとして居ります際とて、御高説よりの啓発刺戟、比すべきものなきありがたさです〉と感想を伝えているのも、この本が西欧への軸足も残し、すぐれて中間的かつ動的であるがゆゑである。だからこそ唐木の『詩とデカダンス』は〈記念碑的作品〉（粕谷）といえるのだし、〈出発点〉の暗示（深瀬）に充ちているといえるのだ。

「信州教育」の中心をなす教育者の一人であり、〈なんのためらひも、こだはりもなく、先生といへる、真の先生〉として、西田幾多郎とともに唐木が名を挙げた矢島麟太郎（二二八頁参照）も『詩とデカダンス』のすぐれた読み手であつた。矢島は唐木宛書簡で、〈死を前に控へたる老境の心奥に切実なる課題〉を抱えている自身ゆゑに、〈「死」の背水の陣に於て〉、『詩とデカダンス』をもつぱら繕き、接していると書き送っている（『矢島麟太郎遺稿集』）。この本を通じて、師弟は深い魂の交感をおこなっているかのようだ。

〈右切言〉

火の車状態に陥つた状態から、「中学生全集」でやや息を吹き返した筑摩書房は、続けて、昭和二十六年一月刊のマーク・ゲイン『ニッポン日記』、昭和二十七年二月刊の川端

康成『千羽鶴』という二つのベストセラーを世に送った。そして昭和二八年八月には『一葉全集』という筑摩らしい企画を実現させる。それでも台所事情は安定にほど遠かったのは、経営危機のときの高利貸頼みがいけなかった。古田晁は心労が重なって酒にひたりだす。次第に行状が乱行的にもなって、周囲をはらはらさせた。血の気の多い白井吉見は怒り、「見損なつた」と怒鳴りつける。二人は一時、絶交状態となり、社長の古田が入院しても、副社長格の白井は見舞いにも行かないことがあった。そうしたなか、「友人共同体」の唐木は温容な兄貴分として振る舞つたようだ。和田芳恵の『筑摩書房の三十年』には次の描写がある。

借金が重荷になつてからの古田の酒は、大荒れに荒れた。なにか、酒の上で失敗しそうな不安もあつて、古田は気ごころの知れ合つた唐木順三などを誘つた。隠士風な唐木と呑んでいると、ふしぎに古田の心はなごんだ。

ちなみに『筑摩書房の三十年』は、〈筑摩関係の著者、業界関係者、社員等、凡そ百人を越える人々がグループ別に出席して、八ヶ月にわたつて開かれた二十回に及ぶ座談会の膨大な記録をもとにして、和田芳恵さんが編纂したもの〉と唐木自身が書いており、うぶな版元の変転史を雰囲気とともに伝え、情報の精度は高い（「古田晁に先立たれて」）。

さて、土俵際を何度も迎えていた筑摩を根本的に立て直したのは、昭和二八年八月スタートの『現

代日本文学全集』の大成功であった。臼井吉見の起案である。発行総部数が一三〇〇万部を突破したというから、たいへんな実績をつくった。遅配が続いた社員の給与支払いは回復し、賞与まで出せるようになる。著者への原稿料も滞らなくなった。筑摩書房は本郷台町から神田小川町二丁目へと社屋を移転させ、やがて借入金を完済させる。

借金苦と倒産の恐怖が去っても、どうも古田の酒は穩当にはならなかったらしい。付き合う唐木にしても、古田の酒はいくらなんでも限度を超えていると思える場面があったようだ。それは唐木から古田へ、次の書簡が残されていることから判る。

実は昨日一句を呈しようと存じて参上いたしたのですが、折がわるく、呈しえませんでしたので、手紙を以て一筆

しばらく酒をやめられたし

右切言

(昭和三年一月一七日付)

切言とは「心をこめて言う」である。信州小野にある古田記念館に書簡の現物が展示されている。巻紙墨書ゆえか、迫力がある。くさくさしい説明は加えず、ただ一言「しばらく酒をやめられたし」と断じ、〈右切言〉のあと、日付と署名に続けて〈古田大兄〉と大書しているとところが、「友人共同体」同士の遣り取りとしてかえって切実である。この言葉は〈酒の中をのたうちまはつてゐた〉「古

田晁に先立たれて」古田像を念頭に発せられたのであった。

4 模索の果ての充実

豊潤な人文書

新出発を果たした筑摩書房で、唐木は自著『中世の文学』を刊行する（昭和三〇年一〇月二五日）。収録作品中、「中世文学の展開」「鴨長明」「兼好」「世阿弥」は既発表作から収録し、「一休」は『詩とデカダンス』から転用、そこに「道元」「芭蕉への道」の二篇を書き下ろして集成了した。

『中世の文学』を成した動機について、唐木は「あとがき」で、〈私は三年前に書いた『詩とデカダンス』（創文社発行）の中で、芭蕉及び芭蕉以後を扱った。それ以来、芭蕉へいたる道を探らうと思ひ立ち、翻つて中世へ向つた〉と書き、一つの理由としている。たしかに『詩とデカダンス』は芭蕉に関する論考が手厚い。とはいえ、芭蕉が〈中世への復帰〉をおこなった内実を探るためには、芭蕉自身を扱うだけでは済まされない。より古き日本の文人の在りようを追うなかで芭蕉の問題も見えてくるのだとすれば、この本に長明や道元等を含めるのは至当だといえよう。

もう一つ、『中世の文学』を書いた動機は、『現代史への試み』から続く近代批判の課題に答えようとするところだった。「あとがき」において唐木は、近代の進んだ同時代を、〈生活や思考や趣味の様式を喪つた時代、既存の型が崩壊して、いまだ新しい型が形成されない間の時代である〉（傍点原文）と

示す。そして『中世の文学』が扱うのは、〈王朝の諸形式、宮廷文学の様式が、政治権力の交替とともに動揺崩壊し始め、既存の権威は既になく、新しい様式は未だないといふ二重の空無の時代を経て、やがて空無そのものを積極的に選びとり、空に定位する芸術や文化を築きあげていつた時代〉だと捉える。すなわち唐木は、様式喪失の時代Ⅱ現代の課題に対して、様式成立の時代Ⅱ中世に解を求めようとしたのだ。文芸評論を基点に哲学的論考を書き続けてきた唐木は、ついにこの本で、「中世」の扉を本格的に開いたことになる。

豊潤な人文書として世に送られた『中世の文学』はいくつかの特徴を持つが、なかでも、古い日本の文人が辿った様式「すさび」「さび」に着目した箇所は、この本の山場だといえよう。再び「あとがき」から唐木の言葉を引いてみる。

人生の無意味、歴史の無意味、また人間の営為の無意味をいつた「すさび」の倦怠に堪へぬいて、すさびごとにも逃げず、また直接的な有や英雄をもちだすこともせず、不立文字とか、言詮を絶するところとか、さういふ「すさび」そのものに徹したところに「さび」の様式が生れてきた。「すさび」を昇りつめ、「すさび」といふ人間臭をもつた境地から脱落したところに、物来りて我を照すといふ自然人間一体の境がひらけてきたわけである。

かくして中世の能、茶、書画、あるいは芭蕉が大成した俳諧には「さび」の様式がひとしく兆すこ

とになった。この本はその様相を縦横に描き示すのだ。

『中世の文学』は好意をもって読書界に受け入れられた。その点、〈不憫な子〉だった『詩とデカダンス』とは大違いである。『中世の文学』は書評もよく出て、〈意外に多くの人々から批評や紹介をうけました〉と面食らったように唐木は書いている（私の『中世の文学』について）。また田辺元は唐木宛書簡のなかで、この本の上梓を〈御偉業〉と書き、〈中世の日本文学を代表せる詩人の独特なる個性に参して深き同情により、彼等を現代過渡の時代に悩む我々自らの先達指針にまで主体化せられました思索解釈は、大兄を描きて何人が企及することができません〉と讃辞を呈している（昭和三〇年一月一五日付）。

これら好評が幸いしたようで、『中世の文学』は昭和三十一年一月、第七回の読売文学賞・評論賞を受賞した。唐木の名がより多くの読者に知られるきっかけとなり、その点でも劃期かくきの作品だといつてよい。

唐木三大作品のうち第一作『詩とデカダンス』（昭和二十七年）から第二作『無用者「わび」について』の系譜けいぷ（昭和三五年）に至る中間期、『中世の文学』とともに、唐木順三は注目

すべき著書を世に送っている。昭和三十一年七月二五日、修道社より『夏目漱石』が刊行された。この本は敗戦前からの二五年にわたる唐木の漱石関係文章を集成したものである。冒頭の「漱石概観」では、『現代日本文学序説』（昭和七年）と『近代日本文学の展開』（昭和一四年）に収めた作を再録。続く『明暗論』は、昭和二七年、季刊誌『明治大正文学研究』に寄稿した論考を集めたものだ。そ



自宅にて（昭和35年3月）
（唐木家蔵）

の後、「長塚節と漱石」など既刊書に収めた短篇を再録して配される。さらに付載として漱石の主要作品解説集がある。自身は筑摩『現代日本文学全集』と角川文庫での既発表解説文を集めたものだ。

外来的なものと在来的なもの、近代と伝統の分裂に苦しんだのが漱石であり、その文学は常に現代批判であった。『夏目漱石』はこの点に着目する。いうまでもなく、漱石の苦しみは鷗外が抱いたものと相通じる。ただし、始終官途にあった鷗外は葛藤を巧みに処置してきた。対して漱石は最後まで正直に葛藤し続けた。唐木順三は漱石の魅力と価値をそこに見出している。

中間期の作品としてほかに、『詩と哲学の間』（昭和三年五月二〇日、創文社刊）と『千利休』（昭和三年五月三〇日、筑摩書房刊）がある。前者は近代批判の評論を集めたもので、西欧の思想と文学を主たる関心としている点では、古き日本を扱った『中世の文学』と異なる。収録された多くは（講座や雑誌のそのときどきの課題によつて書いたもの）であるが、六年前に執筆したままのヴァレリイ論「方法と方法化しえないもの」、および『展望』のために書いたものだが同誌休刊により掲載されなかった「制作について」の二篇は、初お目見えの作となっている。（今度校正刷でよんで、私のこの数年来の関心がニヒリズムからの脱出にあつたことを、あらためて思ひ知つた次第である）と、唐木は「あながき」で書いている。

後者の『千利休』は明治大学から六か月間（昭和三年一〇月―三年三月）の休暇と研究費を貰っておこなった研究が基礎をなす。与えられた期間において唐木は、集中的に文献調査をするとともに、京都で利休関係のものを見、また利休の縁地・大阪堺の辺を散策した。その成果である『千利休』は、ぜんたいの三分の一が雑誌『心』へ先行発表されたもので、残りは書き下ろしから成る。

『千利休』は、表題通り利休に焦点を合わせて書かれたもので、その芸術精神について考察し、文化史上に占める位置を規定せんと試みたものだ。日本中世の芸術を特色付ける概念として「すき」「すざび」「さび」は『中世の文学』において検討されたが、もう一つ、「わび」について接近したのがこの本だともいえる。世阿弥―利休―芭蕉の連関において、さび―わび―さびで対応させた観点が興味ぶかい。また、学問的でありながら、人物や出来事、エピソードが次々と登場して語り口が巧みなのも特徴といえる。唐木自身は執筆中、〈利休といふ人物が、のつてきません。どうも呼吸が合ひません〉と田辺元宛の書簡で訴えているが（昭和三年三月一日付）、合われないながら練熟期の筆が余裕をもって流れており、『詩とデカダンス』と比すれば相当に、『中世の文学』と比しても幾分重さが取れて、自在な描写がひとつの作品世界を形づくっている。

劇的な場面もしばしば見つかる。一例を示せば、蜜月だった利休と秀吉の關係に亀裂が生じていく心理劇を説いた次の箇所であろうか。

然し如何に利休といへども、秀吉に三千石の茶頭として仕へ、時に黄金の茶室で田舎大名相手に

茶を点じ、時に外交の枢機に参加する自分と、侘数寄専一を願ふ自分とを統一することはできない。これは統一するには余りに違ふ二つの要素である。また派手八分侘び二分、或ひは九分一分の秀吉と、ねずみ色とごまめ汁の利休とを統一することはできない。紅の小袖、紫の袴、赤地金襴の足袋といった室内着、出掛けるときは作りひげ、かね黒といふいでたちの秀吉に、利休はどういふ顔をして対したであらうか。

こうして利休の内面を注視していく唐木の筆は、ついに、〈所詮この二人は衝突せざるをえない運命にあつた〉との結言を提示するのである。

唐木自身の自信のなさは裏腹に、『千利休』は読書界に好意的に迎えられた。その様子は、田辺元の唐木宛書簡にある、〈御高著『千利休』に対する世評噴々の模様、陰ながら御慶び申上げずに居られませぬ〉からもうかがえよう（昭和三三年六月一八日付）。

『千利休』刊行の翌昭和三四年、唐木順三に悲報が届く。矢鳥麟太郎の死であった。
〈先生〉の死

〈ほんたうの教育者〉として深い人格的影響を受けてきた矢鳥を、満五五歳の唐木は喪つたのだ。五月七日午後五時半、大相撲夏場所をテレビ観戦しているなか矢鳥は脳溢血にて卒倒する。そのまま意識不明の状態が続き、九日午後四時三四分、昇天していった。

すでに記したように、唐木にとって矢鳥は〈心の底から先生と呼ぶことのできる人〉であった（矢鳥麟太郎先生）。〈先生の前に出ると、かくしても始まらないと思ふばかりでなく、見られること

によつて、こちらがいささか輝いてくることを感じた。それはつくられたものではない。へおのづから出てくる雰囲気なのである（同）。

唐木は自著上梓の際、忘れることなく矢島へ届けた。矢島もそのたびに、（唐木さん。御高書幾重にも有り難く再読三読唯うれしく有り難く拝読いたしてをります）等、飾らぬ謝意を伝え、素直な感想を伝えている（唐木宛書簡、昭和二年八月二五日付）。

唐木はまた時々的心境を書き送り、矢島もこれに真率の対応をする。二人の遣り取りには人間交流の誠があり、感動的ですからある。一例として、昭和三〇年、明治大学教授唐木順三は文学科長に任ぜられたが、それを伝えた唐木の矢島宛書簡を見てみよう（同年四月一〇日付）。

私はこの一月から明大の文学科の科長という役目に祭り上げられ、閉口してゐます。生涯、長といふ名のつくものは、戦時中の隣組長以外はしたことがなく、またしないことをたてまへにして来たのですが、いや応なしに長をつけられ、それがまた入学試験といふ厄介な季節に当たつたので、実に、閉口した次第です。おかげで、二月三月は何もまとまつて読めず、書けず、ただ会議だの何だのですごしてしまひました。今日はこれから入学式へ出かけますが、それでひとかたついて、やうやく自分の勉強ができることになりました。

愚痴めいたものにも読めるが、どことなくユーモラスである。どんなことでも率直に相談するとい

う唐木の様子が垣間見えて、〈真の先生〉矢島を前に、まるで悩みを打ち明ける少年生徒の雰囲気すらあるのが、かえって感慨を呼び込む。

その矢島を喪つて唐木の悲しみは大きい。葬儀の日のことを、彼はこのように綴っている。

私は十七日の葬儀に参じ、そのあと酒肴のふるまひをうけた。酒が廻つてきたとき、話せといはれて急に話したくなつた。そのなかでこんなことをいつた。たとへば先生がこの蕎麦はうまい、といふと、その蕎麦がほんたうにうまさうにみえてくる。あゝ、けふの仙丈はいいな、といふと、峨々たる仙丈がかがやいてくる。先生はことばにおいて物を活かす達人であり、詩人であつたと、さういふことを、涙と洩でくしやくしやになりながら話した。

〔矢島麟太郎先生〕

〈ことば〉を大切にしてきた矢島だからこそ、いつも〈ことば〉に生命を宿らせることができたのである。かけがえのない人を喪つた。しかし、達人にして詩人・矢島の実感もつた〈ことば〉の数々は、唐木の記憶のなかで、いつまでも輝きを喪うことはなかつたのだ。

『無用者の系譜』

文業を重ねながら、自在の筆に達しつた書き手の唐木から、次なる決定的作品が生まれる。昭和三五年（一九六〇）二月二〇日、筑摩書房から『無用者の系譜』が上梓された。『詩とデカダンス』から七年余り、『中世の文学』から四年半弱を経ている。現代から反転して古き日本を探る道程を歩んできた唐木順三の模索が、一定の充実をもたらし、ここに



『無用者の系譜』刊行の頃
(昭和35年3月) (『唐木順三
全集第5巻』口絵より)

第二の代表作を世に送ったのである。

『無用者の系譜』は前年三四年に発表された三篇(一篇は論集『日本文化研究』、二篇は雑誌『心』)に書き下ろし三篇を併せて一冊としている。長期間にわたる発表作を集成することも多かつた唐木作品のなかで、ほぼ一年程度の筆で成されたもの(しかもテーマが同じもの)が集まり、統一度は高い。

粕谷一希はこの本を評して次のように述べている。

私は唐木順三の作品のなかで、『無用者の系譜』で開花した発想と文章が、一番伸びやかで自由だったように思っている。(中略)天皇の末裔であった在原業平も、遊行僧の一遍も、「自分は役立たずだ」と悟ってからむしろ、自然な自分を見出している。そうした一遍の流れには道元、法然、親鸞といった多様な仏教者もまた連なり、顔をそろえている。

(『西田哲学の系譜と唐木順三』)

『無用者の系譜』は業平、一遍から始まり、連歌師宗祇、西山宗因らを経て芭蕉とその弟子に至る系譜を説き、さらには永井荷風、成島柳北、大沼枕山といった近代の文学者をも包含して表現者群像を描き出す。そのうえで文人氣質を論究していく。日本文化史を彩る文人たちが次々と登場するさまは、まさに一大絵巻

だといえよう。さらに付論として、西鶴から説き起こされ風狂人や隠士の系列を辿り鷗外に至る「雲がくれ」を置いて、全編を閉じる構成となっている。

粕谷一希はこの本に、〈美意識のひとつとしての、かろみが出ていゝ〉とする（『反時代的思索者』）。それは自在な筆の愉快さが自然と導き出したものであろう。

『無用者の系譜』はひとつくちにいえば日本文論だといえる。文化を担い、表現の洗練を目指し、思想の深みを辿る「文雅世界」の住人たちを説いたものだ。人間の内なる〈無辺際に遊ぼうとする本性〉を流露させた生き方、そして、〈虚や空を反つて現実の根柢とする〉日本の古き伝統の在りよう、これらにしたがう実践の価値を「再発見」した作品なのである。無用者の生と風狂にこそ現代の課題を突き抜ける理念が見つかるのではないか、それを解説しようではないか——こうした動機が唐木の筆に見出せる。かくして唐木は、世の無用者によつて滔々とうとうと形づくられてきた文人氣質を絵巻的に描ききっていく。

深瀬基寛は『週刊読書人』（昭和三五年三月二一日付）にこの本の書評を載せている。一部を引いておきたい。

この本の表看板はこのやうな無用者群の系譜を試作してみようといふ歴史的な試みのやうに見えるが、この試みが博士論文などによく見受けられる、萬葉から石原慎太郎までをひとからげにして文学を歴史の流の溺死者にしてしまふやうな行き方とは全く異り、さうかといつてまた、隠者好み

の茶人的偏好をもつて血よりも赤い歴史の流を堰とめようとするのでもなく、歴史から文学を、有用から無用を、有情から非情を打ち出さうとする著者のノミの打ち込み方には少しの迷ひもない。著者の方向は歴史の素材から文学の理念を指してゐるのだが、理念といつてもそれは予定された中世的宗教的理念ではなくて、それよりもさらにその底にあるやうな未知の日本的詩的理念といつたやうな恐ろしく掘り出し甲斐のあるサムシングなのである。

また、田辺元はこの本をほとんど激賞している。今度は田辺の唐木宛書簡（昭和三五年三月一日付）からいくつか引いてみよう。

巻首の「在原業平」、「一遍上人」、共に一度拝見したものでありますが、大兄御自身の靈感鮮かに伝はり、宛も始めて拝読致す如く覚え、新なる感激を鼓吹せられました。御解釈の深さ、御展開の美事さ、全く感嘆申上げる外ございませぬ。今まで日本思想史家、文学史家によつて十分に闡明せられませぬでした、この特異なる二人の存在の劃期的な意味が明になりましたことは、大なる御貢献と信じます。

荷風、柳北、枕山の文人氣質、曾て拝読した所ですが、此度は一気に源流に遡り御直叙の御骨折、貴重此上なく拝見致しました。「中略」文献の御涉獵だけでも大した骨折と驚嘆致す外ありませぬ。

蕪村捨棄を知らず、中世精神に与るを得なかつたといふ御宣言、彼と大雅堂との御比較、竹田の限界御指摘、全く御同感申上げる外ありません。〔中略〕享保以後の文雅類唐から戯作戯文狂詩狂歌に及び、更に幕末維新を経て鷗外漱石に至る御叙述、真に適切正確なるものと拝見致しました。今日虚実相離れ、詩境と人境の対立最も激しきに際し、却て空や無、百非風狂が、人間社会の現実を超出して真に無用の用を發揮すべく要求せらるること、深く考へるべき問題と存じます。

最後の「雲がくれ」に於ける、寒山拾得に因んでの鷗外に対する御諷刺は、鋭利無比、復び痛快の感を味ひました。鷗外が稀代の有用人である以上は、小生も有用を謳歌致すわけには参りませぬ。無用人を賞嘆する外なきしだいです。

この本が世に送られた年は安保騒動があつた。論壇では戦後の価値観がひとえに称揚されていた。敗戦前の「遅れた」日本を批判克服していかねばならないと、世上大合唱が繰り広げられた時代だったのである。敗戦から続く、まさに左派・リベラル派の全盛時代であつて、「革命」も一部で声高に叫ばれていた。一度築いた書き手としての地位を振り捨てるように同時代への関心から反転させ、ひとり古き日本へと向かつていた唐木は、「革命」の騒擾ともいえるなかで、遠回りともいえる道行きを経て、深みの自在を宿した近代批判の視座を引つ提げ論壇に戻つて来た。そして高壇へと歩を確かに進めたのである。

昭和三五年は『無用者の系譜』に続いて、五月三〇日、唐木は最初の随想集『朴の木』を筑摩書房から上梓している。思い出や日々の感想を綴った小品（各紙誌に発表したもの）を五七篇集め、唐木順三という書き手の人間性を伝えるものとなっている。

唐木は充実の季節を迎えていた。文筆、編集、教育、講演活動——彼の四つの顔は、どれもが活発に目や眉を動かし、口も耳もさかんに働かせている。表現者唐木は目を見張る独峰として評価が高まり、次第に巨人的存在となつてゆくのだつた。

その彼に大病が襲いかかるのは翌昭和三六年である。

第八章 デンカー 思索者の円熟

1 大患

発病と衰弱
昭和三十六年（一九六二）一〇月一七日、満五七歳の唐木順三は勤務先の明治大学で、

講義が終わったあと気分が悪くなり洗面所で吐いた。吐血だったが、最初は血とはわからず、緊急処置はおこなわなかった。しばらく研究室で休んでから、電車で帰宅の途についていたのが、途中でまた三度も吐く。家について洗面器にまた吐いたとき、ようやく吐いたものが血であることに気づいた。氣息奄々えんえんとなった。一兩日を自宅ですごしていると、危急を知った古田晁が突然あらわれ、東京大学附属病院小石川分院に個室を取った、蒲団その他は市ヶ谷の古田家から運んだ、まもなく車が来るからすぐ入院しろと告げる。「友人共同体」の厚情が早い行動を促したのだ。実際の入院は一〇月三〇日で、病名は胃潰瘍であった。

吐血多量による衰弱のためすぐには手術とならない。(分院には古田の甥の林さんがゐた。その林さんが私のからだを診て、こんなにひからびてゐたのでは、当分の間、手術はできないと言つた)のである。(古田晁に先立たれて)。それから二週間点滴を続け、多少状態が改まったところで、一四日になりようやく手術を受けた。(若しあの時、古田がゐなかつたとしたら、私は多分駄目だつたらう。四十日足らずの入院の間、古田一家から受けた心づくしのほどは、なんとも誌しつくせない)と彼は回想している(同)。

退院は一二月六日だつた。回復にはほど遠く、しばらく湯河原温泉で静養の身となつた。その頃の様子は同年一二月一八日付の田辺元宛の書簡で判る。(十二月六日に退院して表記のところまゐつて居りますが明後廿日に自宅へ帰ります。経過はまづ／＼順調ですが、ペンをとらないことにします)ので、代筆で失礼いたします)とある。筆達者の唐木が代筆を頼むのはなんとも痛々しい。

同書簡で唐木はこう書き伝えてもいる。

今まで入院などしたことがなかつたので今度の突然の病気で多少感ずるところがありました。それが今後の私の生活にどんな形ででてくるか、たのしみでもありません。

これを送つた先は北軽井沢の田辺家ではない。(群大病院中尾内科)である。田辺は入院中だつたのだ。唐木発病の昭和三六年、年初一月に田辺元も発病した。脳軟化症である。このとき唐木順三は

田辺を群馬大学附属病院へ入院させるため、雪の中、寝台自動車で北軽井沢宅へ迎えに行っている。

田辺は京都帝大を退官したのちの七月（敗戦直前）、北軽井沢に移り住み終の棲家と定めた。一八年間で乗物にて出かけたことも二度ほどしかなかったし、妻を亡くしてからはそこを死に場所だと思っていた、と唐木は書いている（『田邊元先生』）。北軽隠棲の理由について、高山岩男は田辺からの直話として、「下界に下りてアメリカ兵を見るのが耐えられぬ」「敗戦後の日本人の頹廢に直接触れるに堪えられぬ」「帝国大学の教授として、日本を今日の悲運に導いた応分の責任を感じざるを得ない」というのを伝えている（花澤秀文「田邊元の高山岩男批判——『場所的論理と呼応の原理』に関する『田邊書簡』をめぐって」、『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』）。

発病した田辺は、右記理由からして北軽を動くまいと実は思っていた。入院の要はあったが、応じてくれないだろうと唐木も考えた。しかし、結局は群馬大学附属病院への入院を承諾したのである。

〈意外でもあったが、安心でもあった〉と唐木は回想している（『田邊元先生』）。右半身が不随で言葉も慣れないとなれば、応じるほかなかつたのであろう。病室での田辺は〈手も足も出ない達磨の啞おかしかな〉とユーモアたっぷりの句をつくつたと唐木は回想記に書いている（同）。

その後、群大病院への見舞いをおこなってきた唐木だが、今度は自身が看病される身になったのである。

まもなく湯河原から自宅へ帰れるまで持ち直したものの、本復ではなく予後は長引いた。唐木は長療養専一で過ごさねばならなかった。執筆は控えられた。年譜を見れば、毎月のように文章を發表

していた唐木が、昭和三七年は一月に『毎日新聞』で短文を掲載したのち、五月まで発表はない。既述もした通り（三頁）、臼井吉見は同年九月一日付古田宛書簡で、〈どうも酒はのまないし、からだは瘦せて小さくなってしまった〉と唐木の姿を伝えており、発病一年近く経っても酒を断たねばならない状態が続いた様子である（『古田晁記念館資料集』）。

（あとでスूपに 唐木の大患はそもそも何によって引き起こされたのか。

浮べて見るよ）

原因の一つはやはり長年の疲労の蓄積だろう。本書で綴ってきたこれまでの唐木の生涯を改めて顧みれば、彼の人生には穏やかな風ときは減多に訪れなかったことが判る。敗戦前は信州教育界での修業期から赤化と満洲の時代、失業期と波瀾続きであった。五年間の成田時代は風といえど風になる。しかし、その後の筑摩創業時代が再び、多忙多難の日々だったことは第六章で述べた通りだ。

戦後になると「四つの顔」を持つことになるが、それは達成感も苦勞も四倍となるのを意味する。しかも「顔」の一つ筑摩の状況は、倒産間際まで追いつめられる事態にも陥った。編集者は一面旅芸人のような存在だ。著者廻りは地方人（田辺元もその一人）を含めれば頻繁な東奔西走が常である。当時は直接面談で打ち合わせをし、原稿の遣り取りも手渡しが多かった。ファックスやメールの時代ではないのだ。接待もくり返されれば、昼夜逆転や長時間仕事は珍しくない。そしてまた、「顔」のうち信州の小中学校教職員への講演活動は、長距離の移動が前提となり、旅そのものを含むのが通例であった。唐木は健康な身体に恵まれたが、これだけの活動量を長年にわたって続けければ、ガタがくる

のは当然であろう。

もう一つの理由は酒だといえる。高校時代から呑むのを覚え、以後、意識的に禁酒したことはなかった。満洲では度数の強いウヅカで酒修業をした。筑摩時代は酒にまつわるエピソードに事欠かない。作家海音寺潮五郎は唐木の出版記念会に出席した際、散会後に唐木と呑むつもりだったが、止めにしたという。その理由を海音寺は次のように書いている。

人々のテーブル・スピーチを聞いているうちに、唐木さんの酒癖の話が出た。唐木さんは大酔すると、相手をかえした^{ママ}がらず、無理に帰るとはだして追っかけて来るといのである。ほくは深夜の街路を、はだしの唐木さんに追っかけまわされる自分をまざまざと想像して、「これはたまらん」と思った。だから、そのまま別れて帰った。

〔唐木さんとの因縁〕

これもまた一箇の大酔伝説であろう。唐木にはその種の逸話が多く残っている。唐木が通った酒場の一つ、神田「弓月」の女将・秋野千枝子は、こう回想している。

先生はお酒をよくのまれる。親しい方たちとうれしさに酔ふと大きなこゑで話されるがそれがすぎるとどうもいけない。駄々をこねたりして皆んなを手こずらせる。そんなにしながらもおかへりにはきつとシャツポをとつてあいさつされる。

〔唐木先生のこと〕

唐木自身も、〈高校で酒を覚えて以来、始終飲みつづけてきた〉なかで、〈ここに書くのものはばかる失敗、愚行、失礼は、数かぎりない〉と自省的に記す〔私の履歴書〕。唐木の酒には信州人らしい野人性がある。彼は自ら、〈私にはもともと浅酌低唱といふやうな通人の趣味も術もない〉とし（もつとも放歌高吟の癖もないとする）、〈ただ飲み、ただ駄弁を弄し、酔つた〉酒人生だと自認している。なぜ酔うのを願つたのかと自問し続ければ、心奥から〈ベシミズムといふ低い声が聞こえる〉のだとか。たしかに酒は〈悪霊を退散させる妙薬〉になるのだ（同）。周囲も酒好きが多かつた。それらが唐木を間断なき酒人生へと向かわせたのである。

むろん、体質的に酒に強かつたというのはある。それでも量と期間の乗積というのは、やがて途轍もないものになる。唐木は若い頃、胃痙攣に悩んだときがあつたが、彼の胃はその後も時折危険信号を發していたのだろう。しかし酒に^{ほが}寿うことは唐木の人生そのものとなつており、呑み方を変えるわけにはいかなかつたのだ。やがて負荷に耐えきれず、体が悲鳴をあげるときが来る。それこそ五七歳の大患であつた。

上述の秋野千枝子が入院先に見舞いに行くと、唐木は、〈すつかり萎れてベッドに横たはつてをられた〉〔唐木先生のこと〕。胃の病気なので食べ物を持つていけないと思ひ、このとき秋野は田舎の菊を持参した。唐木は〈きれいだからあとでスープに浮べて見るよ〉と言つた。そのときの表情と言葉は秋野の記憶のなかに、〈めうにさびしく残つてゐる〉という（同）。

田辺元之死

病氣そのものもシヨックだったろうが、思いもよらず入院静養という時期を迎えなければならなかったことが、唐木順三には随分応えた。(今まで入院などしたことがなかった)と田辺宛書簡に書いてはいるが(上述)、第四章で記したように、上諏訪での教員時代、盲腸の手術を受けてはいる。ただそれも遠い過去の体験であり、吐血による衰弱から手術に及ぶ成り行きは、唐木にとって慮外呆然といえる事態だった。

著者―担当編集者という深い関係を唐木と結んだ田辺元は、己の病身のなか唐木を気遣い(唐木も療養中、田辺を気遣って好物のワインを贈ったりしていた)、(今度の御病氣は全く新しい御体験であつたと存じます)それが今後の大兄にどういふ影響をもたらすか深く期待申上げざるを得ません」と書き送っている(昭和三七年三月二十九日付)。実際唐木の大病は、のち晩期の名作『無常』を生み出すことに繋がるが、この本については後述する。

療養専一に努めていた唐木―田辺宛書簡には(世間の好意に甘えて、実にのんきに過してしました)と書いている(同三月二十七日付)―は同年二月、長野市山王小学校職員を相手に「鷗外における近代と伝統」という題で講演をおこない、小さく活動を再開していた。その彼に悲しみのときが訪れる。ほかならぬ田辺元の死であった。

昭和三七年(一九六二)四月二十六日、田辺の病状が急変したとの電話を受けた。唐木は下村寅太郎とともに群馬大学附属病院へ駆けつける。

先生はやうやくにして私たちの来着をうなづかれたのみであつた。群大病院中尾内科はその全力をあげて先生に尽してゐた。先生の心臓は強靱で、意識は不明のままであつたが、二十七、二十八、二十九ともちこたへ、遂にその日の夕方の七時に亡くなられた。二十人ほどの親戚、友人、弟子たちが臨終に待つてゐた。

（田邊元先生）

二九日の逝去を受けた野辺送りは、田辺夫人のときおこなつたやり方に倣うことにした。それは、へいかなる宗派宗教にもよらない方式で、供物香料は一切堅く辞し、参列者は、折から野辺にさいてゐた一茎の花を各々霊前に手向ける」というかたちである（同）。続く告別の集いは五月六日、北軽井沢でおこなわれる。葬儀委員の一人だつた唐木は、既述の通り、田辺の「メモント・モリ」の一節を朗読する。

田辺の送りを経て夏になると、第一章でも述べたように、唐木は清里にある明治大学の寮に暮らして「私の履歴書」を書く。一時死に近づいた大病経験と、さまざまな経緯があつた田辺の逝去という喪失体験をふまえて、彼は過去に向き合うのである。ただしかし、「私の履歴書」はやや雑然とした徒然語りで、叙述のバランスも悪く筆も冴えず、である。しかも唐木は、この回顧録の執筆を戦後が始まる時点で唐突に閉じてしまった。体調が本復でないからか、根気も続かず途中で筆を投げ出した印象だ。ゆえにこの四百字×二六三枚の原稿は、生前未発表のままとなつた（全集の一九巻に収録）。

不期山房

秋になって唐木は、一つの決心を実行に移す。本格的な田舎生活をするのであった。彼は長野県富士見町高森区（信濃境）に見出した好地に、昭和三七年一〇月、山荘を設ける。

信州伊那に生まれ、松本をゆかりの地とし、長じて信州各地を講演して廻った唐木順三にとって、首都圏との往復等で中央線を利用することは多々であった。子供の頃から何十回、何百回とこの線の汽車に乗った彼にとって、〈富士見から信濃境、小淵沢へかけての丘陵地帯は久恋の地であつた〉（「不期山房由来」）。理由は雄大な山の風景である。

新宿からの汽車が長坂、小淵沢にかかつたころの右側の八ヶ岳、左側の甲斐駒を主軸にする景観はまさに日本一だと思ふ。この大景観は信濃境で頂点に達し、富士見を過ぎると次第に凡庸化してゆく。（同）

まさに「山恋い」であろう。都会での生活に俗塵を感じて厭になつたとき、恋心の相手は信濃境・小淵沢辺の山々の姿であつた。唐木は恋する山の懐で過ごしたいと願つたのである。

昭和三五年の八月下旬、彼は思い立って信濃境へ向かつた。かつて二〇歳代半ば、上諏訪の高島学校に勤めていたときの同僚湯澤が、信濃境の中学校校長になつていた。湯澤とはその後も多少の縁があり、唐木はこの昔の同僚を頼つたのだ。二人で村のあちこちを歩いていたとき、ある場所で二人の



不期山房にて（昭和42年8月）
（筑摩書房提供）

足は止まった。

ここはすばらしい。西に甲斐駒と鳳凰の三山、甲斐駒の前山が急斜面で降つて落ちたところに釜無川が流れてゐる。鳳凰の裾はゆるく大きい。南に富士山。この不二の山は遠く、はるかであるだけに落着いて静かで、心の騒ぎなく見られる。東に八ヶ岳

の連峰、この裾は途方もなく大きい。その裾のひとつひだがのびつくしたところにある丘陵が、私たち二人に足をとどめさせた地点であつた。
(同)

まさしく宿願の地だと感じた唐木は、格好の土地を求めて湯澤校長に動いて貰う。しかし、取得はなかなか実現に至らない。そこで今度は、やはり上諏訪時代の同僚で、教職を退いていた五味清人に話を持ち込む。五味は信濃境の隣村の出身だった。そうこうしているうちに唐木は大患の身になったのである。

昭和三十六年の一二月、湯河原で静養中の唐木のもとに五味がやってくる。土地の約束ができたという報を伝えるにであった。そして昭和三十七年八月、山荘づくりが着工となる。工事は順調に進み、一〇

月には住めるように出来上がった。「懈怠比丘不期明日」から採って唐木は山荘を「不期山房」と名付ける。以後、唐木はしばしばここで過ごし、やがて「不期山房の会」も始めるのだが、そのくぐり後述としたい。

2 一代の傑作

『無常』
ここで書き手としての唐木に戻り、『無用者の系譜』以後の著書を見ていくことにしよう。

まずは『中世から近世へ』である。これは大患当月にあたる昭和三十六年（一九六二）一月一日、筑摩書房から刊行された。『詩とデカダンス』収録の昭和二十七年筆「洒落、戯れ」、二十九年五月発表の「司馬江漢」から、三六年六月の「桂、修学院両離宮構想の背景」「外国人のみた日本」まで、唐木の中世・近世ものを拾い集めた本であった。筑摩書房の『近代日本思想史講座』第八巻収録の「外国人のみた日本」が分量的には多い。『中世の文学』『無用者の系譜』で評価を得た唐木が、単行本未収録の関連諸篇を中心に一書にしたものだといつてよい。充実期の落ち着いた筆のびのびと展開されている好篇が目立ち、『中世の文学』『無用者の系譜』の副読本のような位置にあると見ることもできる。ただ、この本は大患前の著書であり、当然ながら病気を経た心境の変化は反映されていない。

大病の経験を唐木の筆はどう受け止めたのかについては、次なる作品を待たねばならず、前述のご

とく、〈今後の大兄にどういう影響をもたらすか深く期待申上げざるを得ません〉と田辺元も書き送ったわけだが、まもなく、これに応え人間観や生命観の変遷深化を示した著書が世にあらわれる。

『無常』（筑摩書房）である。刊行は大患から二年半弱にあたる昭和三九年（一九六四）二月五日、唐木は満六〇歳を迎える時分だった。

この本はそれまでの唐木著作史のなかではきわめて珍しく、全編書き下ろしの長篇である。大患後、長びく療養生活のなかで、唐木は腰を据えて『無常』に取り組んだのだ。

粕谷一希はこの本について次のように書いている。

『無常』は病後の唐木順三が、衰えた体力から氣力をふりしぼって書き上げたものである。あるいは遺書になるかもしれない、と唐木は考えたかもしれない。それだけに文章も無駄がなく澄んでいて奥行きがあり、唐木順三の著作の中で傑作のひとつになっている。（『反時代的思索者』）

唐木自身はこの本を昭和三五年末頃に構想したという。翌三六年一〇月、大患に見舞われ計画は自然中断となるが、昭和三八年の夏を迎え、次第に氣力が戻ってくるのを知ると、思い切つて筆を執り出した。同年七月と八月、彼は「不期山房」とどこもって原稿書きに専念する。（読んで書き、書いては考へ、考へてはまた読むといふのが私の以前からのやり方だが、やはり疲れやすくて、思ふやうには進まなかつた）と「あとがき」で回顧している。原稿用紙に五枚くらい書くと、もう思量が

続かず、思考は途切れる。それでも気力を宥め宥め、長距離走者のように書き継いで行ったのは、確かに粕谷のいう通り、遺書だという意識が唐木にあつたからだろう。死の淵を見て生還した人間であり、老境に入りかけた者ゆえに、「これで最後かもしれない。伝えたいことを書ききつてしまいたい」との意志は唐木を駆つたのだと思われる。

とはいえ、彼の筆に切迫は少しもない。自在な語りは穏やかな調子を深め、『無常』はひとつの清浄世界へと向かつている。この本には晩年に到達した唐木順三の境地がごく素直にあらわれており、そこが傑作となつた理由でもあろう。

夏の終わりに三〇〇枚まで進み、(そしてさらに一ヶ月半かかつて、どうやら、書きたいと思つてゐたことを書き終へることができた)(同)。ぜんぶで四七一枚。細々とした短篇を繋げて一書を成すことも多かつた唐木にしてみれば、一貫した長篇であり大作である。

『無常』は王朝文芸(『源氏物語』など)に多く使われる「はかなし」への着目を導入部とする。そこから本の主題である「無常」へと移行していくのだが、その展開は著者唐木自身によって次のように説明されている。

私は「はかなし」から始めて、その意味内容の歴史的変遷を究め、それが「無常」に転入して、無常感覚から更に無常そのものへと進んで究極した、日本の心理、日本・世界的な思索の跡をここに辿らうとする。

(第一部「はかなし」の「一、序」より)

唐木は古典を語り歴史を語りつつ、情緒の上から離れて「無常」を体系的に論じていく。実際、唐木はこの本について、〈無常を、ありきたりの無常感や無常観から解き放して、即ち心理や情緒や詠嘆や認識から解き放して、まさに無常そのものの、もののリアリティにいたりつくした「無常の形而上学」を書きたかつた〉と動機を示している（「あとがき」）。そうであっても、この本には畏まって読まねばならない重きところはなく、綾のある、柔らかい筆使いで展開されている。病後の不調を抱えたなかとはいえ、長い筆業の蓄積をもとに、書き手は悠々と綴っている印象さえ見られる。近代批判の骨法をもって古き日本へと向かった思索者唐木の円熟がここにある、といっても過言ではなからう。

『無常』の中心となるのは最終部「無常の形而上学——道元」である。唐木自身も堂奥への旅

「あとがき」で次のように示している。

私がいちばん書きたいと思ひ、また力をいれ、苦勞したのは、道元を扱つた「無常の形而上学」である。無常を觀じ思つて、道心を発し菩提を求めるといふ、普通のところから出發した道元が、つひに無常そのものを究め尽し、「無常仏性」にまで至つたそのことを私は書き尽したかつた。

ここには『無常』の秘密を著者自らが解き明かすかの説明がある。王朝の「みやび」も、「あはれ」や「はかなし」も尽きて、はかなさの実態が露呈するとき、もはや心理も情緒も超えて、無常の、無常性が広がってゆく。そこから法然、親鸞、一遍といった浄土門の仏教者へと論は進み、死や孤独とい

つたいわば実存の問題をこの本は辿り出す。やがて吉田兼好や宗祇、芭蕉に至り、ついに道元論へと転じ遂げるのだ。

こうして縷々挙げてきた名前からも判るように、この本では、唐木がこれまで論じてきた、いわば「顔なじみ」が再論されてゆく。ゆえにこそ、〈無駄がなく澄んでいて奥行きがあり〉という粕谷の評通りの文章が、悠然と紡ぎ出されてくるのである。

最終部の道元論は『無常』の白眉である。ニヒリズムをどう扱うのかという問題意識から始まった唐木の古き日本への旅だが、ニヒリズムに徹することでニヒリズムを超える、無をも無化し、空すら空ずるといふ、いささかアクロバティックな思索の妙技が、この道元論に至って、思想の全的展開を伴って交響風に鳴りわたるさまは、『無常』が傑作だといふにふさわしい。

その最終部「無常の形而上学」を中心に、いくつか眼を惹くところを拾ってみよう。まずは同部直前の箇所にある芭蕉論のなから。

この一切放下の旅人芭蕉に、ゆくりなく飛花落葉が語りかけてくる。「造化にしたがひ、造化にかへ」つたところでは、「見るところ花にあらざるなく、思ふ処月にあらずといふ事なし」といふ風雅がおのづからにしてひらける。

たちまちに消えてゆく瞬間の光を、言葉によつて定着せよ。風雅のたねはここをおいてほかには

ない。「物に入れて、その微の蹟で、情感かんずるや、句となる所なり」。

そして道元を扱うに至り、唐木の筆は厳しくも透き通った明哲の言を述べていく。

無常は、「はかなし」といふ心理の上にあるのではなく、無常感といふ情緒の上にあるのもない、反つて無常は自他をふくめての事実、根本的事実である。また若し範疇といふ言葉もちだすならば、無常は事実であるとともに、唯一の範疇、根本的範疇である。

無常たちまち到り、死に直面したとき、頼りにならないものは、頼りにならないものとして、そのままに現前するだらう。生前に頼りにしたもの一切が、何の頼りにもならないことに気づくであらう。死に面した孤独実存として、即ち「無常を観ずる」者として生きるといふことは、頼りにならないものを、頼りにならないものとして先取して生きるといふことである。

花は衆法合成の仮の場だから、まさに無常である。はかなくうつろふものである。しかし、その無常をおいてほかに花はありえない。ひとつの花がひらくにも全世界、全宇宙の協力がある。

唐木は無常の相を経巡へめぐり、まさに道元と同じように、無常を究め尽くす。そしてはかりがたく深い

堂奥を訪ねていく。その道行きこそ『無常』の書くところであって、この本の特異な達成もその探訪の脚力にあるのだと思われる。思索者^{デンカ}唐木は、たぐいまれな思索の力とともに成熟の放埒さえ見せて、一代の作『無常』を成したといえるのだ。

小林秀雄と唐木順三

無常について書いた、といえは、唐木とほぼ同世代であり、戦争・敗戦という時代体験を同じくし、戦後社会への違和を表明、古き日本に向かったことなど共通項も多い小林秀雄について触れねばならない。

小林は明治三五年（一九〇二）四月生まれ。唐木は明治三七年二月生まれ。生年で二年、学年では一年しか違わない。ただし、大学卒業は唐木が一年早い（昭和二年京大卒。小林は東大仏文科を昭和三年卒）。文芸評論家を主たる像としたことで共通し、デビューも同じ年である。唐木が岩波書店の『思想』に芥川論を発表したのと、小林が『改造』の懸賞論文に「様々な意匠」を当選させたのは同じ昭和四年であった（一四一頁参照）。

二人は出版人として活躍しながら物書きをしていたし（小林は『文學界』編集責任者や創元社編集顧問など）、明治大学教授という点でも共通点がある。また、ともに同時代への関心から筆業をはじめ、そこから距離をとって内面的思索的となり、近代批判を通じて古き日本へと向かい「無常」を題する傑作を残した。唐木の『無常』は長篇だが、小林の『無常といふ事』（昭和二年）は短篇六作を集めた小著ではあるけれども。

さて、唐木の『無常』は既述してきたので、小林の『無常といふ事』についても述べておかねばな

らないが、やはりまず、収録中の一篇「無常といふ事」（昭和一七年）の末尾にある有名な一節を引いておくのが適切だろう。

この世は無常とは決して仏説といふ様なものではあるまい。それは幾時如何なる時代でも、人間の置かれる一種の動物的状态である。現代人には、鎌倉時代の何処かのなま女房ほどにも、無常といふ事がわかつてゐない。常なるものを見失つたからである。

小林のものの見方、人間観をあらわす言葉として、さまざまところで紹介される一文だが、現代人は（常なるものを見失つた）というのは、唐木の認識にも近い。

ただし稿成立時のことは念頭におかねばならないだろう。「無常といふ事」は戦中、日本回帰が論壇でさかんとなった時期に書き、発表された。一方の『無常』は戦後もかなり進んだ時点での書き下ろしである。前者は戦時にして浪漫主義的時代の言説であつて、後者は平和にあり豊かさの光と影を刻んだ時代の所産である。とはいへもちろん、そうした外面的違いを強調しすぎるのもどうかと思う。やはり両者の根のところへ探索の錘おもりをおろすほうがより重要であるはずだ。

それでは無常を説いた唐木―小林の差異とはなにか。それは結局、方法と文章の違いであり、それを生じさせる二人の原質の違いであると考えられる。逆説と居直りが綯ない交ぜになつた「不良」の文ぶん体（およびそれを生み出す原質）を持つ小林と、体系的かつ形而上学的に迫ろうとする「真面目人間」

の文体（同じく原質）を持つ唐木。その人間性の差が、「無常」を書くうちに、それぞれの個性によって描き出された世界を別物とした。

小林には緊迫があり、唐木には明晰がある。小林には断言があり、唐木には説明がある。小林は押っ取り刀で駆けつけていきなり一刀両断する。唐木は腰に大小をきちんと差して悠然登場しまずは構えから入る。小林は無手勝で唐木は型を重視する。どちらが好ましいかは、むろん優劣の問題ではない。結局は読み手の志向に帰着するように思われる。

さらに比較を続ければ、小林は詩人肌で鋭敏な都会人である。一方の唐木は教師肌で野の人である。どちらも近代批判の眼と念はきびしいが、小林には青ざめた街を歩く趣味人的繊細があり、唐木には緑の山脈を眺める田園者の質実がある。どちらに軍配を上げるかは、この場合もまた受け手の志向（ここでは「好み」か）にほぼ帰着する。

ときに、唐木順三は小林秀雄をどう見ていたのか。

唐木の第二評論集『近代日本文学の展開』に小林論（小林秀雄）が収められている。論の前半は昭和八年一月三〇日付『東京帝國大學新聞』に発表した「小林秀雄氏について」であり、後半は『近代日本文学の展開』（昭和一四年刊）収録の際、書き下ろしたものだ。ここには小林について鋭い評言が並んでおり、以下、列記してみよう。

まずは昭和八年発表の前半部分にあるものから。



南林間の自宅にて
(昭和42年6月6日)(筑摩書房提供)

氏は、ベーコンと共に諸々の偶像イデオロギーの正体をきはめるところから出発する。それは氏に於て、最も得意な、また精彩を放つてゐる分野である。言葉の魔術性、言葉の政治性を、また偶像を、「意匠」を粉碎しゆく根拠は、氏にあつては、自意識であり、意識と現実との関係の濃度の分析である。

あつては然しながら、決して方法の出発点ではない。氏はそれによつて如何なる理論体系をも編み出すことをしない。反つてそれは、生き方であり、特殊化された生活の意力であり、また現実への肉薄の特殊なる形態である。

これを書いたときの唐木は「赤化」から次第に離れつつあつた時期にいる。ゆえに「赤化」の語法に頼らなくなり、使っているのは唐木自身の語法である。それをもとにみせた、若き唐木の若き小林に対する分析の冴えは、デビュー当時の小林についての指摘であるにもかかわらず、後年の小林へ射程遠く重なっていることから判る。

唐木が評したように、小林は〈理論体系〉を編み出さず、〈生き方〉と〈意力〉にこだわる批評世

界を求め、つくりだしていた。一方の唐木は、小林同様（生き方）と（意力）を重視したものの、（理論体系）へと向かう志を放擲しない。より正確にいえば、放擲できなかった。論述の筋道を食い破りねじ伏せるレベルまで詩的なイマジネーションに賭けはせず——賭けることができず——、中道に留まった。この制御精神こそが唐木固有の作風をもたらしただのだ。

「小林秀雄」の前半部分からさらに引いてみる。

私は氏が、何故に独語モノロオクのみを書き、対話ダイアロオクを書かないかを怪しむ。批評から創作への橋は、そこにあるのではないか。

批評家としての氏の筆には作家魂が邪魔をしてゐる。作家としての氏の筆は批評家根性によつて伸びてゐない。この二つの心に氏の混沌の原因があると思はれる。

小林の筆の個性や魅力と、その限界を言い当てている。それは小林の本質に唐木の筆が届いているから生じる印象なのであるが、その意味で随分残酷な批評であり、腑分けであろう。あるときは奔放な（作家魂）が、またあるときは苦々しい（批評家根性）が邪魔立てするので、結局小林秀雄は、（独語モノロオク）を続けざるを得なくなる。とはいえそれが小林節ぶしといつてよい魅力的な節回しにはなるのだけれども。

それでは評者唐木順三のほうはどうか。哲学学徒の筆法をもって筋道を綴る彼に、〈作家魂〉と〈批評家根性〉に引き裂かれる様相はさほど見られない。が、そのぶん小林ほどの反射神経や詩人性を欠くので、比較上いささか地味に見える。ゆえに小林は早々ともて囃され、唐木は評価が遅れた。小林は最初から己のかたちを持つており、最初から熟成していた。一方、唐木は柚道をふみしめつつ熟成へと向かう。小林は変わらなかつた。唐木はいくらか險路を巡つた。どちらが幸いかということではない。この場合それぞれの道行きは、もはや両者の資性が招いた必然だといふしかないのである。

小林秀雄と　さて今度は、小林論の後半部分（昭和一四年）から引いてみよう。前半から六年余唐木順三、続　が経っている。

小林氏がその近著に『文學』といふ簡單明瞭な名前をつけたのは、氏の近来の心境を物語つてゐるかに見える。この数年来の何々文學の隆盛と文學の衰微が、氏をして「我邦未來の文學をいかにせばや」の感を抱かせて、文學の自立と獨立のためにこの一書を残したと言へるであらう。宣伝文學は宣伝家にまかせておけ、ルポルタージュ文學はジャーナリストに一任せよ、大衆文學は講談師に残せ、対象模写は映画にゆづれ、カイゼルものはカイゼルへと、この書物は叫んでゐるのだ。文學者は文學へ帰れ、想世界へ、思想へ帰れ、故里へ故里へと声をからしてゐるのである。（傍点原文）

このとき小林は確乎たる姿勢から文業をおこなっているが、唐木の反時代精神もかなりの臂力ひりよくである。戦時日本にあつて二つの文学者の魂が交錯する。ここには、なにやらエールの交換をしているかの印象さえ見出せよう。

そして後半部分の終わり、論全体しよめにあたるのは次の一文である。

小林氏は、模擬リアリズムと闘つて文学獲保の道を歩いてゐる。日支事変下のいま、何々文学の隆々たる中にあつて返つて文学は瀕死の状態にある。文学の肥大症的な危機に於て、いつも文学は文学の最も単純な本性に帰らうとする。そしてこの最も単純な本性として氏のかかげたものが思想であつた。文学の本性としての思想を掲げるといふことは、我々が無意識の中に陥つてゐる人間侮蔑から人間を解放して、その高貴性を再認識せよといふことをも同時に意味してゐる。(傍点原文)

唐木は随分大胆なことを述べている。もちろん時代に対してだが。そして小林に対してはむしろ同志的感情すら漂わせている。このとき、唐木と小林は、あるいは最も接近していたのかもしれない。なお敗戦前の言及のなかで、小林に関する唐木の興味深い指摘があり紹介しておきたい。昭和一五年八月、『新風土』へ寄稿した雑感文「ふるさと」の中の一節である。唐木は当時、成田から南林間へと転じ、法政二中で教えるとともに筑摩書房の創業に挺身していく時代の始まりにいた。

東京に出て、はじめて小林秀雄の書いたものが具体的に解つた。彼はこの転変と混乱と平氣の中
で、一生懸命に母をよんでゐるのだ。あるときは「神風」を、あるときは「愛国心」を。さういふ、
単刀直入な、うそのない、闇取引のないところに、母の心を求めてゐるのである。

実に唐木らしい指摘である。彼はひとの価値、真偽を判断するとき、へうそのない、闇取引のない
ところへに絶えず着眼する。西田幾多郎や矢島麟太郎をへほんたうの教育者とした理由も、まさしく、
先生としてへうそのない、闇取引のない存在だと捉えたからにほかならない。そして唐木は、
小林にも同じところを——同世代の小林の場合には、戦時の緊迫垂れこめるなか、へ一生懸命である
いはへ単刀直入を貫くところを——見つめようとする。発見したのはへ母の心であつた。この把握は
本質を突いて鋭い。一筆書きの小林分析であるが、唐木の人間認識の深さが発した一文だといつ
てよい。

結局、唐木と小林は、時代を見つめる眼に同類性があり、人間観や社会観に近似性がある
のだ。その一方で、根となる資性に明らかな違いがあつて、それが接近と違和をくり

返した理由となつてゐるように見とれる。

この点に興味を抱くとき、唐木順三が、己のなかにも濃く息づく信州人氣質について述べた文章が
思い起こされる。そこで彼は、多田道太郎が、信州人には文化現象を濾過して貯蔵し、時を待つて取
り出す性質があり、これは「遅延反応」だといったことを受けて、こう記す。

遅延反応とは耳なれない言葉だが、信州人の一人である私は、いはれてみればなるほど遅延反応型だと思ふ。現に私はこの原稿を正仮名、正字で書いてゐる。新聞に出るときは新仮名、略字にされてしまふが、私は旧仮名ではない、正仮名で書いてゐる。「中略」これなどまづもつて遅延反応の見本かなと、われながら思ふ。

信州の教員たちは、有志或ひは一校の全員で、『善の研究』や、鷗外の歴史小説や、また『正義眼蔵』その他の読み合せを、実にめんみつに、遅々としてやつてゐる。翻訳ながらカントを読んでゐるところもある。これも遅延反応の例だらう。

(ともに随想「遅延反応」)

唐木は遅延反応人だと見られることをむしろ面白がっている。自身も信州教育の系譜に立ち、(めんみつに、遅々として)の人間の一人である。実際、唐木の生涯を振り返ってみると、遅延人としての肖像ははつきりしている。時代の潮流に乗り無闇に背伸びしたがる軽薄は彼には見出せない。彼はおおむね(めんみつに、遅々として)であった。たとえば「赤化」については、京大生時代、京都学連事件が起きて左傾が広がっても唐木は距離を置いた。彼が「赤化」するのは大学を卒業して上諏訪で教員を務める頃であり、確かに反応が遅れている。新進文芸評論家として論壇に登場するも、華々しい筆さばきを見せるわけではない。むしろ論壇を騒壇とみて控えてすごす。成田の田舎教師となり隠者風の暮らしに退いてしまう。戦時厳しくなれば「庶民のなかの庶民」として暮らす。彼は軍国日

本への派手な讃仰者にも批判者にもならなかった。どちらも敏捷人がなす行動であろう。遅延人の唐木には出来なかったのである。

戦後になって唐木は論壇人として再浮上するも、前には出ず、地味な書き手に終始した。派手は新しい論争風場面は唐木の表現者人生にほとんど見つかからない。『現代史への試み』で旗手的論者にもなれそうだった矢先、彼はまぶしさと喧噪を避けるように「反転」し、ひとり古き日本へと向かう道を選んだ。「四つの顔」(二六八頁参照)を持ったのは、顔を一つにして結果として目立ってしまう在りようから退き、四つに分けて各顔の先鋭化を避けた身の処し方だったのかもしれない。そしてときに隠者唐木としてふるまったのは、時代に対する「遅延反応」だと見ることもできる。

遅々とするのは生まれ持った気質がもたらす態度であった。それを宿した唐木からすれば、都会人であり詩人肌を持つ小林秀雄は鋭敏な(あるいは鋭敏すぎる)人間であり、自らの気質とは対岸の「敏捷反応人」というしかない。すべてが無闇にスピードアップする現代社会では敏捷反応人が増殖中で、小林的書き手のほうに親和と引き合いが持たれる。対する遅延反応人は希少価値となりゆく。唐木が小林と比べ、いくぶん慎ましやかな存在となったのはそれも一因だろう。

ただもちろん唐木順三は断然、遅延人である。遅延反応こそ己のあるがままの姿だった。すなわち、都会的な敏捷人へ傾くには、彼はあまりに正統的な田舎者であった。質実の生を貫こうとすれば、むしろ遅延こそ、浮薄から離れ、コツコツ地を耕すように生きる誠の人生である。それを認めた唐木は根からの遅延人であり、根からの信州人であったのだ。

3 不期山房の会

出世間の心境

「遅延反応人」として、唐木は信州と信州教育の現場をたえず念頭においた。四つの顔のうち、信州の小中学校教職員に向けての講演のほうは、大患後も先んじて再開した活動である。執筆量を極度に少なくしていた昭和三七年（一九六二）はじめの静養期、予後重い身体を押して唐木は同年二月、長野市山王小学校で講演をしている（三二五頁）。同小学校には翌昭和三八年二月にも再訪して、中世の文学について講演した。昭和三九年には富士見南中学校や松本深志高等学校に講演行をしており、信州教育の現場へ行き、教職員、ときには生徒たちと触れあう活動は継続を心がけている。

そうした活動と重なるようにして、「不期山房の会」が動き出すのは昭和三八年一月であった。この事情を説く前に、山莊「不期山房」での唐木の姿を述べ、改めて隠者唐木の山暮らしの具体を紹介しておきたい。次の引用は昭和四一年九月稿の「ぎつくり腰——夏日記」からである。

例年のことながら、山房での起床は大抵は四時と五時の間である。起きだしてまづ自己流の柔軟体操を十分足らずやつて、十分か十五分の散歩にでかける。近所の農家もまだ起きてゐない。稲に露が宿つてゐたり、山羊が鳴いたりする道を勝手自在に歩くのである。戻つて湯をわかし、蜜湯一

杯を飲む。昨年までは珈琲だったが、今年から蜜湯にしたのは、それがからだにいいと聞いたからである。さういふ朝の行事に小一時間を費してから机に向ふ。

九時頃からまた机に向ふ。このごろ私は疲れやすく、倦きやすく、また眼が疲れて、仕事は一時間ぐらゐしか続かない。机を離れて二十分ぐらゐぶらぶらし、時には新聞を読み、庭の草などむしつたあとで、また机に向ふ。さういふことを繰返して午前中を過す。午後から夜は机とは縁がきれ。午睡をしたり、庭の手入れをしたり、夕食後はラジオでプロ野球を聞いたりして九時頃は床に入る。夕食のとき酒を一本か一本半飲む。但し小さい徳利である。

このとき満六二歳だから老いの仙境が似合うわけでもないだろうが、随分浮世離れた暮らしてある。山の別荘に来て身を休めている姿には、やはり大患の影響がうかがえる。とりわけ酒量が激減しているかの様子に、かつての酒豪も生活を変えねばならなくなった事情が見てとれる。なおプロ野球の話が出てくるが、唐木は大の巨人ファンだったとは、順三の兄勝造の次男唐木達雄氏からの直話（筆者聴き取り）である。

山房の唐木は閑居を旨とし、それを守った。出世間の心境であつたらう。彼はこの家の壁に「閑」というただ一文字の拓本を掛けた。隠者らしい隠者として暮らすべしとしたのだ。

山房行きは夏だけではない。とりわけ明治大学の職を退いたのちは、冬を含め季節の別なく訪れて

いる。昭和四五年一月の滞在では、一五日の日誌に、〈ここへ来て、なすことも読むこともなく、只日を送つてゐる〉と記される〔初冬閑日〕。〈一日一日がいとほしく、木々の姿や草葉の色をいとほしく、あはれに感じるやうになつた〉とも。

道元を読む

その唐木が山房で小さな活動を始めた。信州教育人への教授者として、彼はすでに、かけがえのない存在となつてゐる。信州各地の小中学校教職員への講演は例年のように継続しており、警咳を求める教育人も少なくない。その唐木順三が、首都圏から出て来るのではなく、まさに信州の地にいるのである。信州教育人は自然と不期山房の彼に期待し、その教えを求めた。昭和三八年（一九六三）一月、唐木が不期山房を設けた一年後である。上伊那の小中学校教師の有志による「不期山房の会」が生まれた。これは唐木とともに、主として『正法眼蔵』を読むことを目指した会である。いうまでもなく上伊那は唐木の出身地で、その地の現場教員は信州人のなかで特段に彼と関わりが深い。隠者唐木とはいえ、彼らの求めには応じてよしとしたのだ。また、『無常』の脱稿に至る時期で、道元への思いは唐木のなかに折り重なつていた。

「不期山房の会」は結成以後、八月に読み合わせの会を、主として不期山房でおこなうようになった。その活動について唐木は次のごとく記している（昭和四六年六月『たうげの旗』掲載「加藤明治君の追想」）。

毎年、夏の一日に信州諏訪の不期山房で「正法眼蔵を読む会」がひらかれる。伊那の先生たち二

十数人が集り、その年に習つた巻の総ざらひをする。一年がかりでしたしらべをして、その結果をプリントにしたものを持ちよつて自由討議をするといふやり方である。校長も若い教師もこもこもなんのへだたりもなく思ふところを述べる。

この会はすでに八年つづいて行はれてゐるが、一字一句ゆるがせにしない「読み」に私はまづ感心する。昨年の夏は「諸悪莫作」の巻をやつた。朝の八時半から夕方の四時半まで、中一時間休むだけの難行であるが、だれた時間はない。

五時から小宴に移る。そして各自の感想を酒間に述べる。加藤君（加藤明治。唐木の生まれた宮田村にある宮田中学校長などを務めた。童話を書き『水つき学校』という著書もある）は八年間皆勤し、率直な意見を率直に述べるのが習ひであつた。その意見の当否は問はない、ただ飾り気も気取りもなく、思ふところを述べる。そして皆の意見に耳を傾ける。小宴に移ると闊達に若い教師たちと談笑し、またその尻をたたいた。そこにはなんの嫌味もなかつた。

「不期山房の会」の雰囲気は察せられる文章だろう。へただ飾り気も気取りもなく」というのは唐木が善しとする人間性であつた。加藤は退職ののち野良仕事に精を出し、山羊の乳をしぼつた。〈百姓と教師が、職業としてはいちばん上等なものだと私は思つてゐる〉という唐木の考えは、加藤のよう



不期山房の近くで（昭和40年8月）（唐木家蔵）
水を貰いに行く順三。

な教育者を念頭に置いて発しているのだろう（「百姓と教師」）。もとより彼らは「遅延反応」のひとつである。ゆえに荒れ地を耕すがごとき質実な生を謙虚に送る。つまずいても転んでも目標への歩みやめめない。これは都会的な敏捷人には出来ない生き方である。強靱さと野人性こそ信州教育人の姿であり、唐木自身の姿でもあった。そしてそれは、藤森省吾や矢島麟太郎といった信州教育の現場教師たちが系譜的に示し伝え、理想の教師像として戦後も連綿と継承されて、実践の手本になっているのだ。

「不期山房の会」では、あるいは信州での唐木の講演会では、信州教育の伝統を引き継いだこうしたタイプの教師が集まってきたのである。

唐木順三は晩年（満七〇歳時）の随筆で信州教育の伝統に触れ、〈教育は師弟といふ直接の人間関係において成り立つ〉と述べている（「藤森榮一氏のことなど」）。信州の現場教師たちはそれを教場において実践するが、「不期山房の会」では、今度は唐木が「師」になって、教師たちとともに学ぶなかで実践する。教育は出会いであり、巡り会いだという信州教育人の考えを唐木は受け継ぐ。そして「不期山房の会」にて道元と一緒に読むことを通して、出会いの不思議さを唐木はいつも実感していたのだろう。

とはいえ、「不期山房の会」の唐木は決して甘い指導者ではない。若き教師時代に不期山房の会へ参加していた今福清二氏は、こうした記憶を筆者（横手）に語ってくれた（平成二七年「二〇一五」五月二四日聴き取り）。あるとき不期山房に、諏訪の学校で教頭を務めていた教師がやってきた。「不期山房の会」の会員ではない。上伊那でひらかれた唐木順三の講演に参加し、興味を抱いたということ、不期山房で勉強会があると聞いて、前日に突然、やってきた。そして「明日の会ではどこの巻を勉強するのですか」と唐木自身に尋ねた。このとき唐木は彼にいたく怒った。「会員はみんな一年かけて学習してきている。一日テキストを見ただけで参加して貰っては困る」と言ったという。「学問とはそういうものではない」と。これなどは「不期山房の会」に臨む唐木順三の厳たる姿勢が判る逸話であらう。

「不期山房の会」は長らく継続したが、昭和五三年（二九七八）八月一〇日、伊那市常圓寺で会員と『正法眼蔵』『現成公案』の巻を読み合わせ、会員に講話をしたのが、事実上最後の活動となった。これをもって終わりにする、という発言が指導者唐木自身からあったのだ。死を意識した唐木は同月六日、不期山房で甥の哲郎に遺言状を託しており、「不期山房の会」も収めることにした（以上は唐木哲郎「風光るふるさと」より）。

会の正式解散は唐木逝去（昭和五五年五月二七日）のち、同年一二月であった。翌昭和五六年四月、「不期山房の会」を受け継いだ「雪峰会」が発足している。小中学校の教師たちを中心に『正法眼蔵』を読む研修会として始動し、現在（平成二九年）も息長く活動は続く。筆者も何度か参加させていた

だいたいが、唐木順三から直接教わった元教師も参加しており、「不期山房の会」の方法そのままに、毎回、読み合わせと討論をおこなう。唐木の実践が長く息づいているのを知るのは感慨深い。

明治大学を退く

さて、唐木の「四つの顔」のうち、信州教育との関わりの話から転じて、今度は、書き手としての顔に戻るとともに、明治大学教授という顔についても述べていき

たい。

『無常』で確たる達成を果たした唐木順三の続く著書は、昭和四〇年（一九六五）一〇月一日に刊行された『日本の心』（筑摩書房）である。昭和三六年から四〇年までの新聞、雑誌への発表作やシリーズの解説文を集成したいつも唐木のやり方だが、そうでない一篇として、昭和二〇年六月筆の「西田幾多郎先生」が付加収録されている。唐木はこの本の「あとがき」で、西欧化され、科学技術化された同時代日本に不安と不満を表明している。そのうえで、次のように記す。

私は非現代、超現代を求める。人工でないもの、おのづからのものに惹かれる。美しいもの、美しい心、深い色、深い味に惹かれる。そしてさういふものが日本の中に多くある。日本の古典の中にも、日本人の心情の奥にもある。そしてそれを自分自身でたしかめると同時に、近代化の張本人の西欧人に対しても、その促進者のアメリカ人に対しても、また始終近代的な日本人に対しても、示してやりたいやうな心持になる。



明治大学文学部の送別会

(昭和42年7月、新橋の鰻屋にて) (唐木家蔵)
左は平野謙。

こうした意気が、芭蕉、一遍、道元から鈴木大拙、和辻哲郎、田辺元等を扱った文章に加え、「西田幾多郎先生」を収録するひとつの動機となっていたのだろう。

続く著書は異色のものである。『應仁四話』（昭和四十一年四月一〇日、筑摩書房刊）だが、これは評論集ではない。創作作品集であり、内容は後述する。

なお唐木順三は昭和四二年（一九六七）三月末、明治大学文学部教授の職を退いた。講師時代も含めて二一年に及ぶ明治大学での教師像は、おおむね風波なき淡々としたものとしてよい。

だが、そのなかに「もののあはれ」と題した一連のものがあり、全集第七巻に講義草案稿が収められている。昭和二九年三月から四月にかけての作で、同年の講義に使われたと思われる。本居宣長の見方を説くのが中心で、〈有りしままの心を有りしままに表現しながら、即ちアナアキイに任せながら、なほ收拾すべからざる殺伐にも淫乱にも陥らないといふことに宣長は「神の御国」の證をみた〉といった説き方が一例である。小林秀雄が『新潮』に宣長論を連載しはじめるのは昭和四〇年六月号からで（もちろんそれ以前よりの準備を経てとなるが）、唐木はその一〇年以上前に宣長に関心をもっていた

ことは興味を引く。

さてその明大教授職だが、勤務期間の後半に唐木は大学院文学研究科の委員長を務め、雑用多き大
学行政にも関わっている。これは〈大学院の方の文学部長〉に当たるポストで、唐木は就任当時一つ
のコースしかなかった大学院の拡充整備に努めた（岡山俊雄「同僚の一人として」。「長」がつく役割を
避けてきた唐木にしてみれば煩わしいばかりの役職者の仕事であったが、彼はこの委員長職を八年に
わたって務めあげた。〈事務の人達へのこまかい心使いには、日頃の豪放な言動とはうらはらに、こ
まやかな暖かい思いやりがこめられていたし、酒席でときどき爆発する暴言にもちかい毒舌には、相
手の核心をついて、有無をいわせぬものがあつた」と、斎藤正直（昭和四九―五五年、明治大学学長。二
六九頁参照）は「明大教授時代の唐木さん」で書いている。

さて先ほど、唐木順三の大学人人生について、「おおむね風波なき淡々としたもの」とまとめたが、
彼が辞めるときの事情には穏やかならざる面もあり、言及しておかねばなるまい。

当時、学園紛争の津波が明大にも押し寄せてきていた。授業料値上問題をきっかけに、昭和四一年
一月から大学は紛争状態になる。唐木はその四月より「日本人の季節感——その歴史の変遷」とい
うテーマで講義を始めていた（内容は後日、『日本人の心の歴史』として結実）。講述は二年間にわたって
続けるつもりだった。しかし秋からは授業どころではなくなる。紛争の影響で、翌四二年一月末まで
講義は中断となってしまうのだ。

二月、三月とかけあしの講義をして、とにかく蕪村までいった。紛争を解決し、年度内に卒業生をおくりだすことができたが、私は考へるところあつて、辞職した。

〔日本人の心の歴史〕「はしがき」

考へるところがあつて、としか唐木はいわない。しかし「時代の発熱」たる学園紛争とその経緯に對し、我慢できぬ思いが在ったことは間違ひなからう。辞職は周囲にも深刻なものを受け止められたようで、同僚だった岡山俊雄はこう回想している。

一緒に階段を登っていた唐木さんが突然私にいった。「おれ、辞めることに、したよ」と。私は壁に両肩をもたせかけて「ついに大事を思い立ったか」といい、力の抜けて行くのを感じた。

（岡山上掲文）

それから唐木順三は、「大学院のこと、頼むよ」と託すかのように彼に話した（同）。文学研究科の委員長も同時に辞めるわけで、八年間その職を務めた唐木には当然ながら責任感と愛着があつたのだ。それでも、辞めると言い出した唐木は、もう留められない。

かくして唐木は、明治大学の教授職を満六三歳であつさり退いた。「四つの顔」のうちの一つをいわば「卒業」させたのであるが、この頃は筑摩書房での編集者業も事実上、後代に道を譲っている。

書き手という顔と、「不期山房の会」を中心とした信州教育人への講演教育活動という顔、この二つが結局、残った。とりわけ大学を退いたことは組織人としての拘束から脱することができたわけ（筑摩書房は顧問格ということで拘束度が高いわけではない）、唐木をして晴れ晴れとした心持ちにさせたよ
うだ。

4 悟達と飄然

異色作

明治大学を退職した昭和四二年の一二月、彼は随想「私の生き方」を発表するが、その冒頭は次の文章で始まる。

私はこれまで批評家とか、評論家とか、また哲学者とか、教授とか、ときにはまた歴史家とか、世間からさまざまにいはれてきた。私は多少はそのいづれでもあるが、またいづれでもない。たゞこのごろ大学の方はやめたから、教授でないことだけはたしかである。私は昨年『應仁四話』といふ小説風のものを書いた。このとき一部から作家といはれ、このときはうれしかつた。作家とは通常は小説家を指すが、また創作家ともいはれる。つまり、いままでに無いものを創作、創造する人はじめて作る人を指す。いはばクリエイターである。これが面白くないはずはない。禅の方でも作家といふ言葉を使ひ、それを「さけ」と読む。オリジナリテイのある人をいふのである。これもま

面白い。

作家といわれて嬉しがつている無邪気な唐木がここにいる。自由人となり（創造する人）の面白さを堪能している幸福な書き手がここにいるのだ。

『應仁四話』は昭和四一年（一九六六）四月一〇日、筑摩書房刊。「しん女語りぐさ」「體源抄由来」「宗祇私語」「慈照院義政」から成る。「宗祇私語」は書き下ろし、他は『展望』に発表したもので、初めての小説集だった。小説といっても対話部分はあらわれず、ひとりごとが続く体裁である。一読、鷗外歴史小説の雰囲気がある。古文を読み込んできた唐木が、気になる人間像を独立した小品にまとめたこの短篇集は昭和四二年三月、芸術選奨を授与されたその特異な作品世界が評価された。

『應仁四話』刊行の昭和四一年、唐木は年末に『佛道修行の用心 正法眼藏隨聞記』を刊行している（二月五日、筑摩書房）。「日本の仏教」シリーズの一卷で、全篇書き下ろし。同年七月中旬から九月中旬にかけて執筆がなされた。道元の人と思想、および『隨聞記』の知識と要点を記した本で、読者対象には入門者も含めている。書中、語句を多く引用しているのは、道元の原文を直々にかみしめてほしいとの念からである。（道元の文章には情熱がこもつてある。はげしいいぶきも聞えてくる。清冽な流水のリズムも聞えてくる。颯々と林をわたる風声も聞えてくる。さういふ調べを聞き取つてほしいと思ふ）と「はじめに」で唐木は書いている。なおこの作品は、唐木全集に収録する際、『正法眼藏隨聞記私観』と表題が改められた。

昭和四二年は五月に随想集『飛花落葉』が刊行され、六月には『唐木順三全集』第一回配本が始まる。ともに筑摩書房から、である。これらに引き続き昭和四四年（一九六九）一月一〇日、「中世・近世の唐木」からすれば異色作といえるが、粕谷一希などが評価する『古代史試論』が筑摩書房から刊行された。仁徳期から聖徳太子などを経て天武・持統期までを扱った文化論的歴史論のパート（第一部）は昭和四三年秋から四四年三月までの筆、古事記を論じ、富士谷御杖ふじたにみつえの言霊の説に注目した文芸評論のパート（第二部）は昭和四四年五月から六月までの筆で、全篇書き下ろしである。

この『古代史試論』について唐木は、もとより不案内の時代を書いたと正直に告げ、このように記している。

石に蹴つまづき、泥水にはまりこんで足をとられ、足ばやになりすぎて倒れなどして、そこここと歩いた。多くの学者たちの道案内記を頼りにはしたが、自分の杖の先で、道をたたいて、自分の胸で考へ、或ひは迷つて途方にくれ、或ひは新しい思ひが湧いて歓喜した。古代はまだ実證的にはつきりできないところが多いので、想像をいれる余地が多分にあつておもしろい。

（『古代史試論』を語る）、『出版ニュース』昭和四四年二月下旬号掲載）

まさにこの通りの内容だが、第二部は〈従来から心がけてゐる言葉の問題の追究のひとつのあらはれ〉と自身が「あとがき」に書いているように、古代史論に留まらない唐木の論考として独自の存在

感がある。

『日本人の 続いて昭和四五年（一九七〇）、唐木は上下二巻の大作『日本人の心の歴史——季節美の心』の歴史』 感の變遷を中心に』（筑摩書房）を上梓する。上巻が二月二十五日、下巻が八月二十五日の

刊行で、『筑摩総合大学』シリーズの一一巻と一二巻にあたる。明治大学での講義（前述「日本人の季節感」）や、紀伊國屋ホールでの「総合大学公開講座」（筑摩書房主催）における講演などがもとなっている。

この本は上巻が古代から中世まで（正確にいうと芭蕉まで）、下巻が近世から現代までを扱っている。萬葉集から戦後の文章に至る滔々とした日本人の「こころ」——感情や情緒に深く関わり、ともに、意志や実行にも関わり、いわゆる精神に近いと唐木自身はいう——の歴史を、文芸評論と哲学的論考の手法を織り交ぜにしてこの本は描ききる。次から次へと作者と作品があらわれるポリフォニックな展開は、まさに唐木順三の世界といえるだろう。

『日本人の心の歴史』を書いた唐木には時代に対する危機感があった。「あとがき」にその内容が端的にあらわされている。

敗戦後二十五年を経た日本は急速な経済成長を示し、科学技術や生産設備は高度に発達して、国民総生産は世界の二位か三位になった。この経済優先の下で、人間はいよいよ疎外され、自然もまた疎外され、疎外することを以つて文明の進歩とするやうな一時を経て、最近にいたつて、漸く自

然や風土を公害から守り、文明風の「開發」から守らなければならぬといふ声が大きくなつてきた。然し科学技術の無限の進歩、商品生産の無秩序な拡大をそのままにしておいて、自然美や季節美を、さらに人間性を守れといつても、それは当座の糊塗にすぎない。

こういつた認識は絶筆「『科学者の社会的責任』」についての覚え書」に通じるが、この一篇については後述としたい。いふなれば、『日本人の心の歴史』は晩年の唐木の問題意識が生み出し、それは『鷗外の精神』に祖型があらわれ、『現代史への試み』から全面的に展開される近代批判が行き着いた地点であつた。唐木順三は細くてけわしい思想の杣道そまみちを歩き、延々と続く傾斜を登り続けてひとつの到達に立つ。そこで彼は時代批判による深い危機意識を背景に、日本人が抱いていた「良きもの」を求めて過去を描き直す決意をする。かくして誕生したものが『日本人の心の歴史』であつた。(日本人は由来美的感覚が鋭敏で、繊細な感情をもつた民族であつた。自然の中の一員として自然と共に生きることを楽しむといふ氣質を持つてゐた)という日本人観、日本文化観が、筆慣れた唐木節ぶせによつて悠然と語られるのがこの本の魅力であることは間違いない(同)。

上巻の表紙折り返し部分にある「著者のことば」から引いてみよう。

日本人のもつ鋭敏な感受性、それを最もよく示してゐるのが季節感であらう。日本人は、咲く花に時勢や人生の全盛の感情を託し、落葉に凋落を、秋の夕暮において寂寞を歌つた。即ち心のほど



第27回日本芸術院賞授賞式で
(昭和46年4月) (唐木家蔵)

を季節に託して表現してきた。そこでは、心が季節の景物において、景物が心において歌はれてゐる。だから季節の感じ方、景物の選び方の歴史を辿れば、心の歴史の一面を明らかにすることができるわけである。季節に対する嗜好は個人の性格の反映であると同時に、時代の反映である。個人により、時代によつて異なる季節感覚、嗜好を記述しながら、その感覚、嗜好の背後にある時代の性格を描きだし、それによつて日本人の心の歴史を誌したい。心を感じ、感情に接近してゐる場面であらへることによつて、抽象的になりやすい、いはゆる精神史を、具象的に描いてみたい。

この意図は、上巻では素直に一通している。とはいえ、下巻では、唐木自身が〈渋滞〉と「あとがき」で書くようにやや迂路がある。どうしてそうなったかといえば、鎖国体制批判や近代批判の論点「が交じり込んでいるからだ。唐木自身の言によれば、下巻はむしろ、〈何故渋滞せざるをえなかつたかを書いた〉のである(同)。それはたとえば、「東洋的なものと西洋的なものとの葛藤と融和」という題の章があることからも察せられるだろう。たしかに下巻は文化論から文明論へと筆が進む場面も少なくない。そこで生じる〈渋滞〉にこそ、むしろ唐木の伝えたかった点が込められていると見てもよい。

『日本人の心の歴史』刊行の翌昭和四六年（一九七二）五月三二日に唐木順三は、「長い評論家としての業績」により日本芸術院（高橋誠一郎院長）から第二七回芸術院賞（評論）を贈られた。「友人共同体」の古田晁は人一倍この受賞の報を喜んだ。それは当時海外勤務をしていた次男剛に宛てた書簡（昭和四六年四月一四日付）の一節からもうかがえる。

一昨日唐木君の家へお祝に行ってきました。今まで実力がありながら一般にはそれほど名前が売れていなかったようですが（勿論唐木君はそんなこと意にかいしていませんが）これからひっぱりだこになるのではないかしら。とにかく小生が何十年も前から、この人こそ当代一流の人物と見当をつけていただけに、世間的にもその業績、人間が評価されるということは嬉しいことです。こちららはちつとも進歩がなかったわけだが、小生の半生にとって唐木君の存在は大変なことであつたと、痛切に感じます。

まるで我が慶事であるかのように書き伝えている。時代の困難を支え合つて生き、出版の修羅場も共に乗りこえてきた古田の飾らない深情があらわれて、受賞とともに、よき友に恵まれた唐木の幸いを祝したくなる手紙文であろう。

古田晁の死

その二年半後、古田が唐突に逝つてしまう。「友人共同体」をつくり、もはや自らの半身のような存在となつた親友を唐木は喪つたのだ。

遡る昭和四一年（一九六六）一月、古田晁は還暦を機に筑摩書房の社長を辞し、会長となった。戦前から波瀾続きだった筑摩を率いてきた過労がその頃からはっきり身体にあらわれ、過度の飲酒もあって健康を脅かしていた。軽い胸苦しさを覚えるようになり、つい昭和四三年、東京大学附属病院へ通院の身となる。心臓動脈硬化が病名であった。四五年には糖尿病の症状も出て、入院と食事制限を経験する。

そして昭和四八年（一九七三）、古田は引退を決心する。同年五月時点で会長辞任の意を固めていたのは、二三日付息子剛への書簡に、〈この際、会長をやめさせてもらうつもりです〉（明後日は、唐木、白井、木庭さんと井上と五人で飯を食って、長いこと御厄介になったお礼を述べ、会長辞任の了解をとるつもりです）とあることから判る。後者の食事は同二五日、赤坂の辻留（虎屋地下）にてひらかれた。井上とは当時の社長・井上達三のことである。唐木は回想記のなかで、この会での古田について、次のように記している。

その席で古田は筑摩の会長から退きたいといふことを言った。願ふのは酔生夢死だと、それを二度も繰り返して言った。私は驚いた。

〔古田晁に先立たれて〕

古田は引退後、故郷の信州小野へ引っ込むため生家の母屋を建て替えることにした。一〇月一五日が建前だった。まもなく故里での穏やかな生が待っている。東大病院の診察でもこの頃、糖尿病はほ

とんど宜しいといわれた。

同年一〇月二四日付、唐木順三の古田宛書簡には、唐木と白井が話し合ったくんだりが登場する。

さて昨日白井君が訪ねてきて、筑摩のことについていろいろと相談しました。筑摩の現状について、私には初耳のことが多く、また心配の事も多く、どうしたものかと、話し合つたのですが、次の二点で白井君との意見が一致しました。そして、それを会長に報告する役を私が負いました。

それでこの手紙を出したというわけである。〈初耳のことが多く〉とあり、この頃になると唐木自身、筑摩の編集・経営の現場から離れていたことが察せられる。書簡後半には〈実状を詳しくは知らない私〉とも出てきて、唐木のほうが先立って筑摩を引退している状態になっていたと判る。

さて、〈報告〉の内容である。同書簡から続けて引く。

第一には、会長はその職に留るべきであること。これは多言を要しないと思ひますが、二人の強い希望であり、要請です。

第二には、この際会長は自分の判断を表示すべきであること。筑摩の現在また将来を考へ、いまいどうすればいちばんよいか、どう処置すればよいかについての会長の判断を示すが、最もよいといふことです。

引退ではなく、むしろ前に出てリーダーシップを再び發揮してくれ、というのが「友人共同体」の〈意見〉（というより〈要請〉）であった。古田晁の再登板によって筑摩の〈心配〉に対処すべきだといふことで、一緒に創業期の苦勞を分かち合った「友人共同体」ならではの真剣な提案であった。

古田に異変が起きたのは、この書簡が届いたと思われる日からまもない一〇月三〇日である。深夜午前〇時三〇分、彼の身は心筋梗塞の発作に見舞われた。出版界の風波にもまれ続け傷みきった古田の心臓にその一撃は激甚で、彼はそこで急逝する。行年六七であった。かけがえない友人の死に、唐木順三は打ちのめされた。当時の心境は次の文章から知ることができよう。

東北の旅から帰つて間もなく、古田晁が心臓発作で全く突然に死んだ。生涯の友古田に先立たれ、なんともつらく、かなしく、あの男がもはやあなくなつたのに、今日が去れば明日がくるのが、またなんの変はりもなく日日太陽が昇り、新聞が配達され、鳥が鳴くのが無情にも奇妙にも思はれた。

〔藤森榮一氏のことなど〕

唐木順三は、北上川流域の仏像を観るために、夫人同伴で七泊八日の日程で東北を旅していた。そこから帰つて一週間目のとき、悲報が届いたので。哀痛に包まれた唐木に、古田の口癖が甦つてくる。

「どうつていふことはねえ」とは時に臨んでの古田の常套句であつた。どうのかうのといふこと

はない、とやかくと思ひわづらふなといふ意味の小野言葉、古田言葉である。この言葉をいま口の先でころがしてみても、私にはさうはいかぬ。この小文を綴りだしてから既に七日になるが、心はみだれ、ペンは縮み、われながらもどかしい文しか綴れない。古田に先立たれるとは、よもや思はなかつた。

〔古田晁に先立たれて〕

古田は唐木に向かつて、苦痛なく死にたい、女房より先に死にたい、と前々から言っていた。そして唐木の最期のときには、立派な葬式を出してやるから安心しろ、とも言った。旧制中学からの先輩のほうに先に逝くと思っていたのだ。これらのうち、前の二つはかなえられた。しかし、もう一つはかなえて貰うことができなくなってしまった。唐木は「あの骨太な体、部厚い手はもう無い」と嘆くのみである（同）。三〇日の通夜に唐木は朝から駆けつけた。

昭和四八年一〇月三十一日、二宮の自宅で密葬があり、続いて十一月二日、青山葬儀所で社葬がおこなわれた。中野重治、岩波書店会長の小林勇、中村光夫の弔辞に続き、白井吉見が古田の遺影に語りかける。彼の弔辞に次の一節があつた（白井「霊前で」）。

思えば、君と相識つて五十五年と六か月、僕は君と一緒にここまで歩いてきた。長いことお世話なつた。ありがとう。

長いこと、ご苦労さま。大変だったね。どうか、いまはゆっくり休んでくれたまえ。一と休みしたら、こんどはからだを大切に、長の旅路に発ってくれ。追っつけ、僕も君のうしろかげを求めて、追っかけるだろう。しばらく、さようなら。

白井はあふれる涙のまま口もとをわずかに動かすだけで、弔辞の言葉はほとんど聞きとれないものだったと野原一夫は回想している（「含羞の人」）。そして「友人共同体」のもう一人、唐木順三は、万感のなかへたゞ黙ってお焼香だけ）だったという（順三夫人フサエより唐木さか江宛書簡、昭和四八年一月十五日）。

埋骨は一二月、生家近くの御名部にある墓所でなされた。そこは樹齢古い木々におおわれた森で、古田一族の墓が立ちならぶ。骨の一部は「土に返りたい」という古田の願いに添って、墓前の大地に直接埋められた（柏原成光「友白井吉見と古田晁と」）。

納骨の模様について、次は唐木順三の書くところを引く。

十二月十六日、遺骨を小野の墓地に埋めた。こな雪が舞つてゐた。筑摩書房を起こして三十数年、幾辛酸をなめながら、とにかく此処まで来たのは、松本中学での同級白井吉見の合力によること多いであるが、古田といふ男の、なんともいへない人間的魅力が中心であつた。

〔藤森榮一氏のことなど〕

「友人共同体」の繋がりには深く、靱じょうよい。それでも今生で三人が〈合力〉する機会は永遠に失われてしまった。唐木の心底に悲の傷口が広がり、哀しみの泉は発流はつりゅう尽きることにはなかつたのである。人世のはかなさを彼は痛みのように感じたに違いない。

Denker ㉞

下村寅太郎は西田幾多郎、田辺元に師事し、唐木とはまさに同門だが、その唐木についてこうしたエピソードを伝えている。

唐木君が何かの文学賞を貰つたお祝の会の時、最後に立つて挨拶して、新聞などに文章の載る際、編輯者が末尾に「文芸評論家」といふ紹介を付けるのに不満で、自分としてはDenkerといつて貰ひたい、云々。そしてDenkerのよい訳語の工夫を同座の西尾実氏に依頼した。たしかに日本語の「思想家」ではしつくりしない。唐木君の書くものには丹念な読書や学問的準備がなされてゐて、たしかに学者なのだが、学識や才気でものを書かない。当世の言葉でいへば実存的なDenkerである。

〔すこし勿体ぶつていふと——〕

唐木自らそう呼ばれることを望んだDenker。考える人、思索する人といった日本語だろうか。たしかに唐木順三は文芸批評家にしては哲学者的でありすぎ、哲学の徒にしてはアカデミックな厳密性と構築性を脱しまつたく自在である。たえず思索している者の言葉が綴られるとすれば、その文章の主は、まさに思索者でありデンカーであらう。

下村は同じ随想で、(その批評の独自の風格はやはり昔哲学の勉強をしたことに由来する)と述べており、そのうえで、(アカデミックな哲学を捨てたことが、その Denker をして醇乎たるものにした)と示してもいる(傍点原文)。

下村は続けてこう書く。

唐木君の哲学との出遭は西田幾多郎先生と後年の田辺元先生とのそれである。しかし彼はこれらの哲学者の思想の跡でなくその「人」を見た。或はその存在に接した。唐木君のこの哲学体験が信州の土性の人に土着した。これが唐木君をしてユニークな Denker たらしめた。彼は、この Denker の志を貫いた。門下の秀才たちよりも或はより多く Denker であつたかもしれぬ。

唐木順三は独自であつた。小林秀雄をその典型とする文芸評論家の列に加えるにはあまりに骨太であり、読み込んで考へ、考へつつ書くというのは研究者の相貌にしてはあまりに実践的である。唐木は唐木でしかなく、他のどんな紹介呼称よりも Denker が似合っている。彼は Denker として歩み続けた。思索者は風雪に耐えて、けわしい柚道を歩み続ける。小林秀雄の洗練は彼にはないが、小村にない鍛錬が彼にある。雑行を平然とこなしつつ、同時に、(全力働を傾注するに値ひする難行)(下村、同)にも入る不撓がある。その意味で唐木順三はまさしく Denker、思索者であつた。

さて、書き手としての唐木は晩年になって多産である。悟達と飄然を宿すに至つた思索者は、ある

意味、楽に、のびのびと筆を走らせている。それが多産の理由でもあるだろう。全集刊行は既述したが、芸術院賞受賞の昭和四六年（一九七二）、一月二五日に『良寛』を、翌四七年には『日本人の心の歴史補遺』（二月二五日）と『古きをたづねて』（二月一〇日）をそれぞれ筑摩書房より刊行している。『良寛』は『日本詩人選』シリーズの二〇巻で、全篇書き下ろし。唐木にとって良寛に対する興味は高校時代から続き、まさに「愛すべき詩人」であった。そして「良寛は最も日本人らしい日本人ではないか」と書いてもいる（同書「あとがき」）。その愛好の心持が素直にあふれているのがこの本の特徴であり、筆は温かく楽しく、数多あまたある良寛本のなかで独自の風格を持つ一冊に仕上げている。

この『良寛』において唐木は、自身の「好み」であると憶せず断つて良寛詩を引用する。またときに「しばらくペンを遊ばせることにする」として寄り道もやっている（たとえば芭蕉へ行く）。自在な文章はまるで良寛の詩心が伝わったかのようにリズムミカルでさえある。良寛の手にかかると、〈春夏秋冬のうつりかはりも、飛花も落葉も、生老病死も栄枯盛衰までも〉リズムを持ち、その交響のなかに良寛は立っている（同）。これぞまさに優游の世界だといえよう。良寛が、そして作者唐木の居る処が、である。

昭和四七年の二作のうち、前者の『日本人の心の歴史補遺』は表題通り、既刊大著の補卷である。過半が書き下ろしで、和泉式部や日蓮から永井荷風、梶井基次郎まで、唐木が気になった作者や作品で、大著にて触れずじまいだった対象を落ち穂拾いに採りあげている。達意の筆はここでも悠々と流れている。

後者の『古きをたづねて』もまた新稿主体の一冊で、付録を除き全て書き下ろし。東大寺二月堂の修しゆ二に会えに参籠した経緯を描く紀行文的な始まりから、徐々に道元に移り天平時代のことに移り、やがて空海に移る第一章があり、続く章では吉野、由良、熊野と場面を変えながら、やはり旅の記録と故事の探訪が綴られる。残りの二つの章と附録は後鳥羽院と徒然草についての随想風考察である。この時期の手練てだれの唐木による、よどみなく文章が流れる逸品となっている。

5 最後の日々

『あづまみちのく』 晩年多産期の著書として、随想・小篇集——昭和四九年刊の『光陰』と五四年刊の『古いこと新しいこと』、ともに筑摩書房——や再刊の類を除いて、言及

すべき最後の作は『あづまみちのく』（正篇は昭和四九年九月一〇日、続篇は五二年四月三〇日、ともに中央公論社刊）、および『歴史の言ひ残したこと』（昭和五三年三月三〇日、新潮社刊）の二著である。両作ともに筑摩書房刊でないのは、古田歿後、同社と多少の距離が出来たからかもしれない。

『あづまみちのく』は中央公論社の雑誌『歴史と人物』に掲載されたものを柱に書籍化された。当時『歴史と人物』の編集長は粕谷一希で、その編集部に唐木は電話を掛けた。たまたま粕谷は留守で、電話に対応したのは編集部の中林孝である。唐木はズバリ切り出した。〈君のところに向いた作品を書きたいのだが、載せてくれないか〉と。中林は唐木のファンで、編集長の粕谷も学生時代に唐木に

面談したことがある（講師を頼んだが、断られたという）。それで気になる存在だったが、唐木はライバル筑摩書房の執筆者ゆゑに遠慮していたのだ。

そうしたら本人から直接電話が入ったのである。驚いたのは応対した平林で、（ハイ、載せます）と即答してしまつた。平林はあとで唐木本人に（編集長に相談もしないで、載せます、とはないもんだ）と言われ、眼を細めて笑われたそうだ。粕谷は中公に話を持ってきた理由として、筑摩の左傾（全共闘かぶれ）を指摘している。雰囲気が合わなくなり、唐木は中公のほうがふさわしいと考えたのだから、と推測している。以上は粕谷の「西田哲学の系譜と唐木順三」（中公選書『唐木順三ライブラリー』第二巻解説）をもとにしている。「あづまみちのく」はまもなく『歴史と人物』で連載が開始され、連載後は正篇・続篇の二冊が中公で書籍化され、さらに中公文庫に収録された。なお粕谷、平林とも、のち『中央公論』の編集長を務めている。

『あづまみちのく』は表題が示すように、東国や東北地方へ眼を向けたもので、日本史における東と西の問題を扱おうとした本である。東の人たちは西方の「みやび」とは違う文化をつくりだしたのではないか、という問いについて、その答えをめぐって探索と論考を進めた作品だといえよう。正篇は鎌倉幕府の頼朝と実朝、熊谷直実、業平の東下り、出羽蝦夷の叛乱、将門記を採りあげ、さらに、萬葉集や古今集ほか京都文化側の古典が描く「あづま」と「みちのく」を辿る。続篇は奥州藤原氏、親鸞と東国人との関わり、心敬、宗祇、宗長、そして太田道灌から『おくのほそ道』までを組上に載せている。「みちのく」における芭蕉の風流論までに筆が及ぶのは、唐木ならではのといえよう。

最後に『歴史の言ひ残したこと』である。これは『あづまみちのく』の問題意識を引き継ぐ作品といえる。第一部は「都鄙問題」で、題名のごとく日本史における都と鄙の問題から始まり、西と東、朝廷と幕府の対立の問題を含みつつ論考は進む。最終第三部では幕末の攘夷開国運動を扱っており、日本史を一跨ぎして大きく展開するのは唐木らしい自在さであろう。なお文化論に比重を置く唐木順三が、第三部に至り政治的なもの（皇国観念）へと関心を向けている点はなかなか興味深い。

また『歴史の言ひ残したこと』で「まとめ——あとがきにかへて」の終結部にある次の文章は、この本を書いた時期、唐木の根柢にあった一つの関心を示唆している。

近代の開化の基礎をなす科学技術の無制約の進歩を制限し選択し、また国家間、人間相互間の勝手な自由競争を制限する観念、原理は近代とは異質の、即ち文明開化一辺倒を反つて野蛮とする形而上的な精神によつて初めて可能であらう。

古き日本を悠々と経巡^{へめぐ}っていた唐木順三が、最晩期になって、文明と野蛮の問題を捉えつつ同時代批判の論点に還ってきているのだ。そしてそれは、『科学者の社会的責任』についての覚え書「へと繋がっていく。

未完の遺稿

昭和五三年（一九七八）八月六日、子供のいない順三夫妻は、兄勝造の長男・唐木哲郎（高遠中学校校長など歴任）に遺言状を託した。予感があったのかもしれない。さら

に、同月一〇日、唐木は「不期山房の会」に出て、これが同会活動の最後だと告げた(三五〇頁参照)。こちらでも最期が近いとの予感と〈毫碌現象〉(当時の日記より)の自覚からであったのだろう。今福清二氏の談話(平成二七年五月二四日、横手聴く)によれば、(もう勉強はできない)という主旨の手紙を唐木から貰った「不期山房の会」は、会員五人が同年一〇月、これまでの御礼のため南林間の唐木家を訪ねた。応対した唐木順三は五人に向かってこう語ったという。

ちようどいま、アインシュタインのことを考えていたところだが、哲学事典を引くとアインシュタインは科学だ。そしてガンジーは平和主義となっている。この二人がどういうところで斬り結んでいるのか、考えていたんだ。

唐木の関心は核の問題、それを含む〈科学の自己制御の問題。セルフ・コントロールの問題〉にあった(唐木日記より。白井吉見「唐木順三を哭す」に基づく。以下、とくに断りない限りこの節では同)。それは同年二月に執筆した文章に「死の灰についてのひとりごと」があることから知られる。

昭和五四年になると、元旦の日記に唐木は、〈毫碌現象が昂じたことに違ひはないが、比較的に推理だけは、まだまださう衰弱してはゐない〉とし、『科学者の社会的責任』についての覚え書をまとめる抱負を記し、また歳旦句〈小用せうように二度起きて迎ふあけの朝〉を点記している。

同年六月五日、近くの村山医院で診察を受けた際、精密検査を勧められて、北里大学附属病院(相



高川新名人祝賀の会
(昭和43年10月、九段あやにて) (唐木家蔵)

模原市)を紹介される。なお医師村山は唐木の碁仲間。唐木は碁好きであり、それは上掲写真からもうかがえる。

同一五日から『科学者の社会的責任』についての覚え書』を書き始めた。七月三日に北里大学病院で一日人間ドック。前日の日記に「今日から精進料理、酒も飲めず、朝顔に手をやる。隣のネム花盛り」とある。

七月一八日、北里病院で検査結果を聞く。胸部レントゲン検査で肺に腫瘍の陰影が見つかり、再検査を受けることになった。再検査日は同二五日。病院へ行く前に『科学者の社会的責任』についての覚え書』を三枚書き足して、原稿は計九二枚となる。

北里病院では、肺にカメラを差し込んでの精密検査で、〈とにかく苦しかった〉と日記にある。肺膿瘍との診断だった。点滴(グラム陽性球菌治療)を受けた以後、熱は下がり痰も減った。症状は軽快し、唐木日記は九月一日、〈少し気分もよくなり〉と記す。かくしてひとまず退院となり、九月二日、南林間の自宅へ帰った。このときは入院五二日である。のち昭和五四年内の日記には、〈体調いまだ整わず〉〈気力の充実を欠く〉〈なかなか力が湧いて来ない〉と出てくる。唐木は『科学者の社会的責任』についての覚え書』を少しでも進めようとしており、関連する書籍の読み込みもおこな

っていた。朝永振一郎の『物理学とは何だろるか』には感銘したようで、〈実ははつきりした立場をとつてゐる。湯川の比にあらず〉と日記に書く。一月二九日には野上彌生子と電話で雑談している。話題は朝永振一郎であつた。文章に奥行きがあるということ二人は意見を一致させた。

翌昭和五年を迎えて、元旦の日記は〈体調は、さして良からず、さして悪からず、ただ根気つづかず、集中心とぼしく〉とある。そして一月三〇日、診断を受けるなかで、唐木は北里大学病院の主治医池田から肺手術の提案をされる。このときは一か月ほどの入院ですむからと、へしきりにすすめられる〉といった遣り取りだつた。

この年一月から二月初めにかけて、『科学者の社会的責任』についての覚え書「原稿の点検をしている。書き継ごうとしたが、体力が整わず出来なかつた。二月三日段階で点検作業は一六枚。〈少しでもいいから書いておきたい〉(三日の日記)との意志もむなしく、点検進捗は事実上、翌四日もつて終わった。原稿は未了となる。

『科学者の社会的責任』についての覚え書「は表題が伝える通り、核兵器問題を中心に科学者の責任を主張したものだ。最後の唐木順三がこうした論考を書いたことについては、さまざま論議と感慨を呼び起こすが、『現代史への試み』で近代批判をおこなつたのち、「反転」して古き日本へと向かい、『無用者の系譜』から『無常』に達して独自の作品世界を形づくつた彼が、再び同時代の関心へと戻つてきたのは間違いない。近代批判が確乎たる動機として在るが、同じ観点による『現代史への試み』が相当程度、哲学的、文芸評論的で高踏性をふまえていたのに対し、『科学者の社会的責任』

についての覚え書」は具体的課題に寄り添う意志のようなものがある。それだけに政治性が直截で、草庵の隠者が人通り多き街路へ出てきた印象がある。『無常』の唐木はどこへ行つたのだろうか。もちろん立論の背景には、唐木の人類生存への危機感の強さがあるだろうし、核兵器問題は当時の論壇でとりわけ切実なテーマであったことも前提としなければならない。

『「科学者の社会的責任」についての覚え書』について、粕谷一希は〈逸脱〉と評し懐疑的である。〈構えを捨てて、本音をいわざるを得なかつたのであろう〉と記す〔「反時代的思索者」〕。対して臼井吉見は〈しばらく中世と出会っていた君は、たまらなくなつて、正面の敵の現代をにらみ据えた〉と書き、この論考で生涯のピリオドを打つたのは、〈まさに象徴的ともいえる出来事であつた〉と肯定的に評価する〔唐木順三を哭す〕。〈構え〉にこそ唐木の独自と良質があつたとみる立場（ゆえに〈逸脱〉になるのだ）と、中世への傾斜などとして顔でいう〈解説者どもの手から、唐木順三を奪いかえず〉（臼井同）役目を担う立場と。ここでは両方を併記しておくしよう。

終焉のとき

さて、続けて最後の唐木を記していきたい。日記は引き続き臼井の「唐木順三を哭す」に基づく。

昭和五五年（一九八〇）二月二九日、突然、北里大学附属病院への再入院が決まつた。日記には〈病院の支持〔指示？…原注〕による外なき状態においてきまる〉とあり、しづる唐木を周囲が強引に入院させたようだ。それだけ病状は深刻だったのである。この月、遺言「親戚友人へのたのみごと」が記される。

三月五日に大きな検査があった。八日、唐木は最後の筆をとる。夜、「科学者の社会的責任」についての覚え書」に追補すべき「An Essay」を書いた。摺筆は九日午前一時一五分。築地のがんセンターへの転院が勧められ、一二日にがんセンターで受診したのち、一四日からそこへ入院となった。検査の結果、一刻を争う状態だと判ったのだ。肺癌である。唐木日記は、「全くびつくり、ぎやうてん、何のことかわからないので、いらいら聞いてゐるうち、」と記している。

唐木日記は三月二四日が最後の記載日となった。へ上田といふ看護婦（体も大きく、気も大きいらしい）の親切なはからひで、シャワーと入浴との中間のやうな上々かげんの入浴。殆ど一ヶ月、いや一ヶ月半以上（北里入院以来）の浴であった。せいせいする」とあり、「夜九時坐薬、三十分後、便通あり。気も晴れる」にて終わっている。

二日後の二六日に手術。三日後には車椅子で自室へ戻った。一時は一人で食事ができるようにもなる。

五月一五日、唐木美枝子氏（哲郎夫人）は病床へ見舞いに行った。このとき順三は新聞を読んでおり、元氣そうであった。のちに大野順一をはじめ明治大学の先生が三人ほどやって来て、順三は彼らと（勉強の話をした）という。白井吉見も顔を見せた（以上は筆者への談話より）。

五月二二日、二三日は甥の唐木哲郎が見舞いに来た。ちょうど全日本中学校長会の総会が東京であり、その足だった。へ顔色もよくこえているようにも思う」と当時の印象を哲郎は回想記「風光るふるさと」で書いている。このときの叔父甥の遣り取りは次の様子であった。

いつもながら、信州の事や学校、親類の動静をきかれる。できあがった「上伊那誌民俗篇」の話をする。方言地図によると、植物のほたるぶくろ(蜜袋)のことを、上伊那郡下に三十種類もちがったいいかたがあるという。三月に医師からガンということを知らされていた。叔父はあと幾枚も原稿を書きたいと言う。あたたかい目だった。

(同)

その後、唐木順三の状態は変化が進み、やがて最期の時を迎える。五月二七日午前二時一二分、長行路の果てに、一人の個性的な表現者が生の幕を閉じたのである。

葬儀は二九日正午より、自宅にて浄土宗の法式によっておこなわれた。導師は故郷宮田村の白心寺住職山田義弘、喪主は妻フサエ、葬儀委員長は西谷啓治である。弔辞を読んだのは日本文芸家協会会長の山本健吉、京都大学同門の下村寅太郎、友人代表白井吉見、明治大学の同僚柴生田稔しばうた、そして不期山房の会から酒井源次(上伊那教育会)の五名。戒名は雪峰院不期順心居士となった。葬儀終了に続き告別式があり、午後二時一五分出棺、大和市火葬場にて荼毘に付された(全集年譜に基づく)。

遺稿『科学者の社会的責任』についての覚え書」は同年七月二五日、筑摩書房から白井吉見の「あとがき」、永藤靖「本稿執筆のための文献」を付し刊行される。永藤は当時明治大学助教授で、南林間の唐木宅と隣り合わせて住んでいた。唐木とは親交深く、稿執筆のために唐木が踏破した書物のなかには、永藤が入手して届けたものもあった。リスト作製者として適任であろう。

九月一四日、宮田村駒ヶ原の墓地にて埋骨がおこなわれた。東に仙丈、赤石岳、西に駒ヶ岳、空木

岳を見渡す絶景の地で、ここを墓所と定めたのは唐木自身である。山河に囲まれた親しき故郷の、自ら望んだ地で、唐木順三は永遠の眠りについたのだ。

あめつちとともに

昭和五六年（一九八一）、宮田中学校に一つの碑が建てられた。除幕式は一〇月三〇日である。

山と語り流に思ひ

風に聞き雲と遊ぶ

うるはしき心のしらべ

あめつちとともに

昭和五十二年夏 順三

昭和五二年六月一日、上伊那教育会百周年記念総集会が伊那小学校でおこなわれた際、唐木順三は「私の念願」という題で講演をした。そのあと、不期山房に帰って書いたのがこの詩文である（唐木哲郎「風光るふるさと」）。

郷里宮田の中学生のために揮毫を、という依頼は幾たびかあったが、順三は応じないままであった。周囲が勧めても、石に刻まれて残るのは好まないと言うばかりだったという（甥唐木達雄氏の談話、横手聴く）。再々記してきたように唐木順三には「隠者志向」がみられ、もとより晴れがましいところ



宮田中学校〈あめつちとともに〉の碑（筆者写す）

を避ける姿勢があった。名誉を求めないのは己の執着心から解放されていた、との達意からでもある。そして彼の人間性に宿る含羞と謙虚は、人格の基底にもなっている。これらが揮毫の求めに肯首を避けた理由として考えられる。

しかし、宮田中学校関係者の懇願とともに、〈己が生きた証に、子どもたちのために、ひとつの詩を残せばいいではないか〉と説得され、ついに順三は筆をとる（同）。子どものいない順三夫妻にとって、「子どもたちのために、何かを残す」というのはやはり心が動く。もちろんそればかりではない。結局、順三がというより、唐木順三の教育者精神が、最後には応じるとしたのだと思う。

ただし〈あめつちとともに〉の場合、生前は書にするまでだった。順三歿後の昭和五五年一月二日、フサエ夫人から遺墨が唐木生家に届けられ、宮田中学校は遺族からその寄贈を受けた（唐木達雄「唐木順三」）。この経緯を踏まえ、ようやく詩碑建立がなされたのである。

唐木順三は〈日本人にとつて自然は身近なものであつた〉と述べている。〈自然もまた人間の生活の歴史の中にある〉とも（日本人と自然）。その見方をごく素直に記した詩心がここにはある。人はそれぞれ根が奈辺にあるのか、問い続けることが大事であると、彼はいつも思っていた。それぞれが

根を持って生きることが大切だと信じていた。だからこそ、ともすれば画一化へ向かいがちな近代社会、その行く果てに現前した同時代社会を批判したのであり、背後にあつた進歩の考えに懐疑を抱き続けたのである。まただからこそ、明治の「型」を求め、古い日本人の「こころ」を訪ねて、精神の彷徨を続けたのだった。

根を知れ、風土とともにあれ、そして歴史とともにあれという考えは、唐木の基本にあつた。そのためにもまず自らが、親しい風土との繋がりを考えねばならない。

そして唐木順三は、知の人としてふるまう一方で、情と情があたたかく通い合っていることが重要であると判つていた。子供たちに対しては、とりわけそうした人間らしさを失わないでほしいと念じた。山々に囲まれ水は清く流れる豊かな風土への思い——それは大自然と一体化した、日本人ならではの繊細な情緒を招き寄せる。

これらの考えを濾過して、故郷の子供たちのために、やさしい言葉にしたのが〈あめつちととも〉に〈だといえるのではないか。その意味でこの短い四行の詩は、教育者であり思索者デンカだつた唐木順三自身が、精神の旅を経て辿り着いた、平明な境地であつたと思えてならない。

〈あめつちととも〉の詩はのちに、当時同校音楽教諭だつた畑田一心はたなかによって曲が付けられた。おらかな曲想で唐木の詩にふさわしいものである。いまでも毎年、唐木の命日になると、墓前に雪峰会の会員が集まり、みんなでこの〈あめつちととも〉を歌う。

唐木の眠る駒ヶ原の墓所は宮田中学校から歩いて数分のところにある。学校に詩碑が建立された翌

昭和五七年、唐木三回忌（五月二七日）に先立つ二三日のこと、彼の墓所に墓碑と記念碑が建った。記念碑のほうには唐木順三の筆蹟が刻まれた。全文を示す。

雨バ 雨ナテ 風ハ 風ナテ

誰ガ ツケタンベナ イツパンハヤク 誰ツケタンダベナ

小學一年生ノ方言詩ヲ漢字マジリニシテ寫ス

昭和四十六年七月

順三

自然環境を愛する真情があふれ、こだまする。少年の詩はまさに唐木の心のしらべだった。そしてまた、尽きることなき哲理とさえいえるものであった。

唐木筆蹟に続けて碑に刻まれたのは、臼井吉見による墓誌（文と書）である。最後のところを引いて本唐木伝の終着としよう。

駒仙丈の残雪 天龍の瀬音 風光る緑の野面 郷土の山河は君を迎えてかくもうるわしく よそ
おい和らぎたり かくなごめる風光のなか 君よ安らかに眠り給えよかし とこしえに

参考文献

- ・刊行年は各資料の奥付表記に従っており、和暦と西暦が混在している。
- ・書籍名は唐木全集を除き、参照順に並べるのを基本としている。

第一章 信州伊那・宮田村

『唐木順三全集（増補版）』第七、九、一〇、一二、一九卷（筑摩書房、昭和五六～五七年）

『古田晁記念館資料集』（古田晁記念館資料集編集室・晒名昇編、二〇〇三年）

* 古田の書簡と古田宛書簡を中心に収録。

『宮田村誌』上下（非売品。昭和五七、五八年）

* 自然と歴史、民俗を網羅した大巻。

『池島信平対談集 文学よもやま話』上（文藝春秋出版部、昭和四九年）

『学校系統図 明治四一年』（文部科学省ホームページ）

伴野敬一『信州教育史再考——教育と文化をめぐる通史の試み』（龍鳳書房、二〇〇五年）

* 『長野県教育史』『長野県史』の編纂に携わった著者の論考集。

『長野県松本中学校・長野県松本深志高等学校九十年史』（長野県松本深志高等学校同窓会発行、昭和四四年）

* 明治前期からの学校の歩みを事項・制度と人物の両面から詳述。「松中自治」に関する記述が多い。

第二章 松本、青春のとき

『唐木順三全集（増補版）』第三、九、一〇、一二、一九卷（筑摩書房、昭和五六～五七年）

『長野県松本中学校・長野県松本深志高等学校九十年史』（長野県松本深志高等学校同窓会発行、昭和四四年）

『深志人物誌』Ⅰ、Ⅱ（松本深志高等学校同窓会発行、昭和六二年、平成八年）

* 教育、政治、経済、芸術など幅広い分野で活躍した出身者の伝記集。

中村一雄『信州近代の教師群像』（東京法令出版、平成四年）

* 「信州教育」を形づくった地場教師の実像を諸史料から示す。

伴野敬一『信州教育史再考』（龍鳳書房、二〇〇五年）

『アルペン風——松本高校史』（非売品。江藤武人・藤田剛志編集兼発行、発行所・財界評論新社、昭和四二年）

* 校史、寮史、校友会史のほか人物伝と証言を多数収録。寮歌選集も付す。

『われらの青春ここにありき』（松本高等学校同窓会発行、昭和五三年）

* 創設から閉鎖までの校史と卒業生の回想記を集成。

荻上悦子『春寂寥——旧制松本高等学校人物誌』（長野日報社、二〇〇八年）

* 本の表題「春寂寥」は松本高校寮歌。著者は『長野日報』記者である。

蛭川幸茂『落伍教師』正統（復刻版）。『落伍教師』刊行会発行、平成二二年）

* 著者は東京帝国大学数学科卒業ののち旧制松本高校に勤務、同校廃校まで在職した。

齋藤信策『哲人何處にありや』（姉崎正治・小山鼎浦編、博文館、大正二年）

* 若き唐木順三に決定的な影響を与えた夭折の在野哲学者「野の人」の遺稿集。

第三章 師・西田幾多郎

『唐木順三全集〔増補版〕』第八、九、一〇、一一、一二、一八、一九卷（筑摩書房、昭和五六～五七年）

『西田幾多郎全集』〔新版〕第一七～二四卷（日記篇、書簡篇、対談・座談・談話篇。岩波書店、二〇〇五～二〇〇九年）

『高坂正顕著作集』第八卷（理想社、昭和四〇年）

『西谷啓治著作集』第九卷（創文社、一九八七年）

『臼井吉見集』第二卷（筑摩書房、一九八五年）

『田辺元・唐木順三往復書簡』（筑摩書房、二〇〇四年）

* 京都帝国大学時代の師弟であり、筑摩書房時代は著者と編集者の関係だった両者の交流の実相が判る。

柘和典・吉田仙太郎・上野武彦編『伊東静雄日記 詩へのかとで』（思潮社、二〇一〇年）

* 全集刊行後に見つかった若き伊東の日記を公開。

上田閑照『西田幾多郎とは誰か』（岩波文庫、二〇〇二年）

竹田篤司『西田幾多郎』（中央公論社、昭和五四年）

竹田篤司『物語「京都学派」』（中央公論新社、二〇〇一年）

粕谷一希『反時代的思索者——唐木順三とその周辺』（藤原書店、二〇〇五年）

* 中央公論社編集者にして『歴史と人物』編集長だった著者による唐木論。

伴野敬一『信州教育史再考』（龍風書房、二〇〇五年）

『京都大学七十年史』（京都大学七十年史編集委員会編、京都大学発行、昭和四二年）

『京都大学百年史 総説編』（京都大学百年史編集委員会編、第一法規出版、平成一〇年）

第四章 信州教育との出会い

『唐木順三全集（増補版）』第一、九、一八、一九卷（筑摩書房、昭和五六～五七年）

『藤森省吾先生』（非売品。信濃教育会編、昭和二三年）

『藤森省吾先生の教育』（諏訪教育会編・発行、昭和三八年）

『藤森省吾先生と泉野教育』（非売品。藤森省吾先生を偲ぶ会実行委員会編、平成七年）

* 右記三冊は高名な「信州教育」現場教師の事績集。

『矢島麟太郎遺稿集』（非売品。東筑摩塩尻教育会編・発行、昭和五二年）

* 西田幾多郎と並んで唐木に決定的な影響を与えた現場教師の関係資料集。

久保田俊彦『山房漫語』（非売品。編者代表・藤森省吾、古今書院発行、大正一五年）

* 著者はアララギ派歌人島木赤彦で、「信州教育」実践家としても名高い。

井出孫六『保科五無齋——石の狩人』（リポート、一九八八年）

須藤實『にぎりぎん式教育論——五無齋保科百助、その思想と生涯』上下（銀河書房、一九八七年）

* 右記二冊は「信州教育」の名物教師にして多彩な活動をおこなった保科百助の伝記。

伴野敬一『信州教育史再考』（龍鳳書房、二〇〇五年）

中村一雄『信州近代の教師群像』正統（東京法令出版、平成四、七年）

中村一雄『信州教育とはなにか——信州近代の教育論潮』下巻（信州教育出版社、二〇一一年）

* 右記二冊の著者は長野県内の小中学校校長を経て、『長野県教育史』の編集主任を務めた。

『田辺元・唐木順三往復書簡』（筑摩書房、二〇〇四年）

第五章 「赤化」をめぐる

『唐木順三全集〔増補版〕』第一、八、九、一〇、一一、一二、一八、一九卷（筑摩書房、昭和五六～五七年）

『三木清全集』第一九、二〇卷（岩波書店、一九六八、一九八六年）

『西田幾多郎全集』〔新版〕第二〇卷（岩波書店、二〇〇六年）

『田辺元・唐木順三往復書簡』（筑摩書房、二〇〇四年）

『白井吉見集』第二卷（筑摩書房、一九八五年）

中村一雄『信州教育とはなにか』下巻（信州教育出版社、二〇一一年）

『松高事件資料集——ピラ、チラシが語る青春群像』（旧制松本高等学校記念館発行、一九八六年）

* 松本高校の学生赤化事件に関する一次史料集。

第六章 「友人共同体」の出發

『唐木順三全集〔増補版〕』第二、八、九、一〇、一一、一二、一七、一九卷（筑摩書房、昭和五六～五七年）

『田辺元・唐木順三往復書簡』（筑摩書房、二〇〇四年）

『白井吉見集』第二卷（筑摩書房、一九八五年）

和田芳恵『筑摩書房の三十年』（筑摩書房、二〇一一年）

* 樋口一葉研究者・作家による、単なる社史を越えた労作。

粕谷一希『反時代的思索者』（藤原書店、二〇〇五年）

『古田晁記念館資料集』（古田晁記念館資料集編集室・晒名昇編、二〇〇三年）

上田閑照『西田幾多郎とは誰か』（岩波文庫、二〇〇二年）

『西田幾多郎全集』〔新版〕第二〇、二一、二二、二三卷（岩波書店、二〇〇六、二〇〇七年）

『三木清全集』第一九卷（岩波書店、一九六八年）

大野順一編『唐木順三全集 総目次・題名索引 附月報』（非売品、二〇〇四年）

*編者は唐木の弟子であり、明治大学教授を務めた国文学者。

第七章 飛躍する論壇人

『唐木順三全集〔増補版〕』第二、三、四、五、六、八、九、一〇、一二、一七、一九卷（筑摩書房、昭和五六～

五七年）

粕谷一希『反時代的思索者』（藤原書店、二〇〇五年）

大野順一編『唐木順三全集 総目次・題名索引 附月報』（非売品、二〇〇四年）

『唐木順三ライブラリー』Ⅰ（粕谷一希解説。中公選書、二〇二三年）

『白井吉見集』第二卷（筑摩書房、一九八五年）

『田辺元・唐木順三 往復書簡』（筑摩書房、二〇〇四年）

和田芳恵『筑摩書房の三十年』（筑摩選書、二〇一二年）

『回想の古田晁』（非売品。筑摩書房発行、昭和四九年）

*関係者が古田の思い出を綴った文章集。

『深瀬基寛・唐木順三 往復書簡』（筑摩書房、昭和五八年）

*エリオットの訳者として名高い学者深瀬は編集者唐木と気が合い、二人は信実の交友関係を築いた。

『古田晁記念館資料集』（古田晁記念館資料集編集室・晒名昇編、二〇〇三年）

『矢島麟太郎遺稿集』（非売品。東筑摩塩尻教育会編集・発行、昭和五二年）

第八章 思索者の円熟

『唐木順三全集（増補版）』第一、六、七、九、一〇、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九卷（筑摩書房、昭和五六～五七年）

『田辺元・唐木順三往復書簡』（筑摩書房、二〇〇四年）

柏谷一希『反時代の思索者』（藤原書店、二〇〇五年）

『古田晁記念館資料集』（古田晁記念館資料集編集室・晒名昇編、二〇〇三年）

『白井吉見集』第二卷（筑摩書房、一九八五年）

柏原成光『友 白井吉見と古田晁と——出版に情熱を燃やした生涯』（紅書房、二〇一三年）

* 著者は筑摩書房社長を務めた。

『唐木順三ライブラリー』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（中公選書、二〇一三年）

* このシリーズの解説は全巻柏谷一希で、各巻収録文の表題はⅠ巻『反時代』であり続けたひと、Ⅱ巻「西田哲学の系譜と唐木順三」、Ⅲ巻「戦後を生き抜いた思想、その豊饒」である。

〔付記〕

・本書の写真使用に際しては唐木家および筑摩書房の協力を得ており、ご厚意に感謝の意を表します。なお収録写真のなかで撮影者不明のものがあり、必要な連絡は筆者（横手）宛にお願いたします。

・表記のなかには現代的観点からすれば不適切と考えられるものもありますが、本論文の特性を考慮し、一次資料の内容を精確に使用するほうを採りました。ご賢察を願いたく存じます。

おわりに

戦後社会の在りように疑念を投げかけ、進歩という考えに懐疑を抱いた論者には、たとえば小林秀雄がおり福田恆存つねありがいる。他にも多士濟々であろうけれど、伝統と人間の問題を捉えんとしたとき、唐木順三の存在を前提とせねば戦後日本の思想地図は充分なかたちを描けまい。というのも、唐木は他の論者にはない存在感を発している。小林や福田が都会的な論者である一方、唐木には土性と朴風がある。処世の巧者でなく隠者風があり、洒脱でなく骨太がある。そのぶん唐木順三は古き賢人の雰囲気を宿している。その唐木という表現者が在ってこそ、日本の戦後思想はふくよかなものになり、思想地図はよりバランスが取れたものになるはずだ。こうした考えを前提に、本書は彼の生と作品を追ってきた。

筆者が唐木順三に改めて向き合うきっかけとなったのは、平成二五年（二〇一三）、「唐木順三ライブラリー」の刊行である。このシリーズの編集に携わることで全集を読み直し、周辺の伝記的事実を探ることで、人物と思想を再確認したのは貴重な契機となった。それを経て、遠い山河から語りかけるものに応じるかのように、本書は起稿された。長篇は集中して一気に仕上げるのが、少なくとも筆

者には良い。その環境を整えてくれた身近な人たちに恵まれたことで、本書はひとつの辿り着きを得、筆を擱く段に達した。本にも運不運があるというのは唐木が『詩とデカダンス』で書いている。筆者の不運は認受しようが、唐木の姿を伝える役を担った本書自身は、幾分かの運と幸いに導かれてほしいと祈るばかりだ。唐木順三という希有の山岳が、具眼なる読者の眼前にさらに久しく照り映えるためにも。

本書は多くの方々との協力を得て成立した。松本出身の手塚和彰先生（千葉大学法経学部長、青山学院大学法学部教授、ケルン日本文化会館館長などを歴任）からは、さまざまなお教示を受けるとともに、信州各地への取材の際もお力添えをいただき、深く感謝を申し上げたい。長野県教育史、長野県史の編集に携わられた佐久市の伴野敬一先生からは、信州教育の歴史と実状につき貴重なお話を伺うことができ、感謝の意を表したく思う。

そして唐木順三の著作権継承者であり唐木本家にお住まいの唐木美枝子さん（順三の甥哲郎の妻）、宮田村の唐木達雄・佐登さんご夫妻、飯山市の唐木敏行・由見さんご夫妻、不期山房の会の会員であった今福清二さん、雪峰会のみなさん、装幀家の芦澤泰偉さん、元筑摩書房の湯原法史さん（早稲田大学広報室参事）、古田晁記念館（塩尻市）・白井吉見文学館（安曇野市）・旧制高校記念館（松本市）のみなさんに心より御礼いたします。

なお本書の文責がすべて筆者にあるのはいうまでもない。

また本書を世に送るに当たっては、ミネルヴァ書房編集部田引勝二さんよりご厚意を受けた。記して特段の謝意をお伝えするものです。

平成二十九年（二〇一七） 初夏

※本書を校了する直前、右記湯原氏を介して、かつて『展望』編集部におられた持田鋼一郎氏と間接的接触の機会を得た。そのさい持田氏より、昭和五三年（一九七八）七月の筑摩書房「倒産」（会社更生法申請）に至る一時期、唐木は自身の印税を半分にして筑摩の経営に協力したという話を伺った。追記しておきたい。

*本データは『唐木順三』（ミネルヴァ書房、二〇一七年六月一〇日刊）に対して、発表形態に合わせた修正と通常の重版訂正にあたる改訂、計二三箇所を加えたものである。著者名は、本名の横手拓治とした。

唐木順三年譜

*年齢は満年齢表記とする。

*信州の小中学校等での講演・講義は特記を除き、教職員に向かつてなされたものである。

和暦	西暦	年齢	関係事項	一般事項
明治三七	一九〇四	0	2・13長野県上伊那郡宮田村三五番地に生まれる。父辰太郎、母かまよ。二男三女の次男にして末子である。	2・10日露戦争始まる。
四三	一九一〇	6	4月上伊那郡宮田村宮田尋常高等小学校に入学。	5月大逆事件。8月韓国併合。
大正五	一九一六	12	3月同校を卒業。長野県松本中学校を受験したが不合格となり、4月より宮田尋常高等小学校高等科に進学する。	
六	一九一七	13	3月同校第一学年修了。4月長野県松本中学校に入学。生家を離れ松本市内に下宿する。中学時代、一級下に臼井吉見と古田晃がいた。	3月ロシア革命。
七	一九一八	14		8・3米騒動発生。

一〇	一九二一	17	3月同校第四学年を修了し卒業。4月松本高等学校文科甲類に入学する。高校二年生時に酒を覚えた。	11月ワシントン会議開催。
一一	一九二三	19	3月同校を卒業。4月京都帝国大学文学部哲学科に入学する。	9・1関東大震災。
一二	一九二四	20	大学二年度の時、松本女子師範学校の英語臨時講師を務める。	4月治安維持法公布。5月普通選挙法公布。
一四	一九二五	21	3月京都帝国大学文学部哲学科を三番で卒業。卒業論文の主査は西田幾多郎、副査は深田康算、田辺元。	3月金融恐慌。7月芥川龍之介自殺。
昭和二	一九二七	23	4月長野県諏訪郡上諏訪高島実業補習学校の教師となる。首席訓導(教頭)に藤森省吾がいた。この高島学校教員時代、「信州教育」の教師たちと交流して、その実践から深い影響を受ける。また、伊那富小学校での講演をきっかけに矢島麟太郎との親交が始まる。	2月第一回普通選挙。6月張作霖爆殺事件、改正治安維持法公布(死刑、無期刑追加)。 10月世界恐慌始まる。
三	一九二八	24		
四	一九二九	25	親友八百清顯の励ましを受け、「芥川龍之介論」を脱稿。三木清によって『思想』編集者谷川徹三を紹	

五	一九三〇	26	<p>介され、9月同誌に芥川論の後半部分が掲載される。11月倉田百三編集の『生活者』に前半部分も発表され、書き手として本格的なデビューとなる。</p> <p>3月高島学校を退職。5月三木清の斡旋で満洲教育専門学校に教授として赴任。渡満途上、京都に寄り初めて西田幾多郎を自宅に訪ねる。満洲では奉天に暮らし、白系ロシア人ペテロフ一家ほかと交流。またハルピンや北京、旅順などを旅する。</p>	この年、昭和恐慌起る。
六	一九三一	27	<p>前年秋、親会社の方針で満洲教育専門学校が自然廃校されることになったのを受け、存続運動に主導者の一人として乗り出す。しかし運動は成功せず、夏同校を退職して帰国。信州で再び教壇に立つことを望んだが、「赤い」という理由で県の教育当局に忌避され就職の道が断たれた。一方、引き揚げ後に頼った生家は不況のあおりを受け破産しており、債権者や執達吏に脅かされる日々が続いた。</p>	<p>3月三月事件（クーデター未遂）。9・18柳条湖事件（満州事変の勃発）。10月十月事件（再度のクーデター未遂）。この年、農業恐慌が深刻化する。</p>
七	一九三二	28	<p>1月就職のあてを求めて上京、市ヶ谷の福四萬館に下宿する。不況下で就職口はなく、九段の大橋図書館に通い「自然主義の發生とその没落」を書き上げる。3月手持ち資金を使い果たして生家に戻った。</p>	<p>2月血盟団員、前蔵相を射殺。 3・1「満州国」建国宣言。5月五・一五事件。この年、世界はブロック経済化が進む。</p>

八	一九三三	29	<p>生家裏の物置小屋を改造し、「もぐら窟」と称してそこに寝起きする。この頃、百姓になることを考え開墾地を見にも行った。10月三木清の紹介で第一著書『現代日本文学序説』（春陽堂）を刊行。編集者は高藤武馬である。</p> <p>2月長野県の教員赤化事件が起こり検挙始まる（二・四事件）。10月長野市の開業医で元千葉医学専門学校教授・後藤自助の娘フサエと結婚し、上京。滝野川区田端三一八番地に新居をもち、文芸評論を中心に文筆で生計を立てる。山室静の勧誘で明治文学談話会の集まりに参加。</p> <p>12月父辰太郎を喪う。</p>
九	一九三四	30	<p>1月東京での文筆生活に窮し、成田高等女学校に奉職。成田町成田に住むのを経て、4月より成田町向台に住所を定めた。評論活動は以後目立って減り、「田舎教師」として静かな暮らしを送る。</p>
一一二	一九三七	33	<p>1月独、ナチス政権樹立。2月小林多喜二検挙され殺害。3月国際連盟脱退。5月米国、ニューデール政策開始。6月共産党幹部佐野・鍋山、獄中で転向声明。</p> <p>12月ワシントン海軍軍縮条約の破棄を米国に通告。</p> <p>2月天皇機関説が問題化。8月政府の国体明徴声明。</p> <p>7・7盧溝橋事件（日中戦争勃発）。11月日独伊三国防共協定の成立。</p>

一四	一九三九	35	6・17第二著書『近代日本文学の展開』（黄河書院）を刊行。第一著書出版後の発表論文を集成したものを刊行。	5・11日ソが軍事衝突（ノモンハン事件の始まり）。9月第二次世界大戦始まる。
一五	一九四〇	36	正月臼井吉見と古田晁が来訪、筑摩書房創業にあたり応援を求められた。3月成田高等女学校を退職。4月より法政第二中学校（教頭は高藤武馬）の教師となり、法政大学予科の講師を兼ねる。妻フサエの母が移り住んでいた神奈川県高座郡大和村南林間に住所を定め、京橋区銀座西にあった筑摩書房の顧問格となる。6月筑摩書房は『中野重治随筆抄』等を刊行して活動開始。なお南林間居住を機に唐木は、鎌倉へ西田幾多郎を訪ねるようになり交流を深める。	6月新体制運動。9・27日独伊三国同盟調印。10月大政翼賛会発足。
一六	一九四一	37	9月筑摩書房より第三著書『鷗外の精神』を刊行。4月日本大学予科での国文学講師職を掛け持ちするようになる。またこの月、柳田國男を初めて訪問。筑摩書房の苦境に対応するため多忙の生活が続き、5〜6月頃戦時の食糧難からの栄養不足も重なって健康をそこない病臥。	12・8真珠湾攻撃、対米英宣戦布告。
一八	一九四三	39		12・1学徒出陣。
一九	一九四四	40		7月サイパン島日本守備隊全滅。10月神風特別攻撃隊、比島沖で米艦船を攻撃。11・24東京初空襲。

二〇	一九四五	41	「爆風一回、強制疎開一回、火災二回」という筑摩書房の罹災に遭い、対応をもっぱらとする。戦争状況厳しくなるなか、3月法政二中および大学予科を退職し、日本大学も自然退職のような形となり、すべての教職を失う。5月初中村光夫と連れ立ち西田幾多郎を訪ねたのが存命中最後の訪問となった。6月初唐木発熱病臥。6・7西田歿。戦争が終わると、9月臼井吉見を上京させ自宅に二か月間住まわせる。三木清が豊多摩刑務所で獄死。12月雑誌『展望』創刊号発売。	3・10東京大空襲。4・1米軍が沖繩本島上陸。8・6広島に原爆投下。8・15天皇、終戦の詔書放送。9・2降伏文書調印。10月GHQ、人権指令、五大改革指令。
二二	一九四六	42	6月明治大学文芸科の講師となる。秋長野県下伊那郡伍加小学校で講演をおこない、信州の小中学校教職員への講義教育活動をはじめ。12月上伊那郡赤穂小学校にて「現代の課題」と題して講演。	4・10新選挙法による第二二回総選挙。5月極東国際軍事裁判(東京裁判)開廷。
三二	一九四七	43	2月兄勝造を喪う。同月長野県小県郡田中小学校、泉田小学校、浦里小学校にて「現代の課題」と題し講演をする。3月信州上伊那文化大学で講師を務める。6月『三木清』(筑摩書房)を刊行。9月母かまよを喪う。同月上伊那郡宮田小学校にて「型と個性」という題で、11月には松本市教育会総集会にて	3月教育基本法、学校教育法公布。5・3日本国憲法施行。

二三	一九四八	44	<p>「民主主義教育について」という題にて講演。</p> <p>7月長野県上伊那郡中箕輪四校の教員修養会にて「教養と個性」と題し、小県農業高等学校における上小教育会戊組支会総会にて「現代の歴史的位置」と題して講演。また小県郡滋野小学校で職員に話をした。秋田辺元の「哲学入門」講義を書籍化する企画が筑摩書房であり、推進役を果たす。</p>	<p>11月極東国際軍事裁判判決。冷戦が始まり、アメリカの対日占領政策はこの年から転換される。</p>
二四	一九四九	45	<p>2月上伊那郡中箕輪小学校にて「現代の問題」と題し講演。3月『現代史への試み』（筑摩書房）を刊行。4月明治大学文学部の教授となる。同月『森鷗外』（世界評論社）を刊行する。</p>	<p>3月ドッジライン発表。10月中華人民共和国成立。11月湯川秀樹にノーベル物理学賞。</p>
二五	一九五〇	46	<p>1月上伊那郡中箕輪中学校にて「現代の考察」と題し講演。夏和辻哲郎、高坂正顕、西谷啓治、森有正、鈴木成高とドストエフスキーについて四日間の共同討議をする。7月『自殺について』（弘文堂）を刊行。11月伊那中学校の教員修養会にて、「近代と文学」と題し講演をした。</p>	<p>6・25朝鮮戦争勃発。</p>
二六	一九五一	47	<p>1月上伊那郡宮田小学校にて「天才・狂気・実存」と題し講演。6月『近代日本文学』（弘文堂）を刊行。この年九月号をもって『展望』が休刊。</p>	<p>9・8サンフランシスコ平和条約調印、日米安全保障条約調印。</p>

二七	一九五二	48	1月松本市田川小学校で「国文学について」、松本市で「芭蕉」、上伊那郡中沢中学校で「漱石における俳諧性と倫理性」と、それぞれ題し講演をする。 11月『詩とデカダンス』（創文社）を刊行。	8月国際通貨基金（IMF）・世界銀行に加盟。
二八	一九五三	49	2月伊那市伊那小学校で講演。7月辰野町公民館にて開催された上伊那郡北部教員会総会で「近代日本の思想の性格」と題して講演。	2月NHK、テレビの本放送を開始。3月スターリン歿。
二九	一九五四	50	2月伊那小学校で「芸術の運命について」、宮田小学校で「森鷗外」、小県郡丸子小学校で「近代日本思想史——福澤諭吉」と、それぞれ題して講演。9月上田市立第二中学校にて「近代日本文学の問題」と題し講演をする。	7月陸海空自衛隊発足。
三〇	一九五五	51	2月丸子小学校で「近代日本思想史——夏目漱石」、上田第二中学校で「日本近代文学」と題して講演。10月『中世の文学』（筑摩書房）を刊行する。11月駒ヶ根市赤穂小学校にて講演。	8月広島で第一回原水爆禁止世界大会。10月日本社会党統一、11月保守合同で自由民主党結成により、五五年体制始まる。
三一	一九五六	52	1月第七回読売文学賞（評論）を『中世の文学』により受賞。2月上田第二中学校でウエドレー『芸術の運命』を講義し、丸子小学校で「三木清——人生論ノート」と題して講演。上伊那郡辰野西小学校に	1月原子力委員会の初会合（湯川秀樹は五人の委員の一人として参加するが、正力委員長との意見の違いから翌年三月に辞任

三三	一九五七	53	<p>て講演し、宮田小学校ではドストエフスキー『罪と罰』を題材に講義と演習。7月『夏目漱石』（修道社）を刊行する。11月上伊那郡飯島小学校で漱石『明暗』について演習、宮田中学校にて『夏目漱石』と題し講演をする。</p> <p>2月上田市中央小学校で「カラマゾフの兄弟」をめぐる諸問題」と題して講演、上田第二中学校で自著『中世の文学』の講義をする。5月『詩と哲学の間』（創文社）を刊行。</p> <p>2月前年に引き続き、上田第二中学校にて自著『中世の文学』の講義。5月『千利休』（筑摩書房）を刊行する。秋京都大学文学部哲学科で「日本思想史」の集中講義をおこなった（一〇日間）。</p> <p>5月矢島麟太郎が逝去する。唐木は同月一七日、その葬儀に出席。6月伊那小学校で開催された長野県中部教育会総会にて「現代における文学の状況」と題して講演をした。</p> <p>2月伊那小学校にて講演、さらに、長野市山王小学校で「漱石について」と題して講演する。『無用者の系譜』（筑摩書房）を刊行。5月「矢島麟太郎先</p>
三三	一九五八	54	<p>10月安保条約改定交渉開始。</p>
三四	一九五九	55	<p>8月在日米地上軍撤退開始発表（翌年二月完了）。</p>
三五	一九六〇	56	<p>5月安保反対闘争の激化。12月池田内閣、所得倍増計画決定。</p>

<p>三七 一九六二</p>	<p>58</p> <p>前年の大患以後、静養専一にとめしばらく執筆を控える。2月山王小学校において、「鷗外における近代と伝統」と題し講演をする。4月田辺元逝去。</p>	<p>10月キューバ危機。</p>
<p>三六 一九六一</p>	<p>57</p> <p>1月田辺元が脳軟化症を発病し、唐木は田辺を群馬大学病院に入院させるため、寝台自動車で北軽井沢の田辺宅へ迎えに行く。2月山王小学校で『森鷗外読本』を使って講義をし、辰野西小学校にて「日本文化の一性格」と題して講演。6月松本市教育会総集会にて「言葉について」と題して講演。10月『中世から近世へ』（筑摩書房）を刊行。10・17吐血、10・30東京大学附属病院小石川分院に入院となる。胃潰瘍であり、多量吐血で全身衰弱に至った大患。11・14手術を受け、12・6退院する。のち湯河原温泉にて静養。</p>	<p>8月ベルリンの壁が構築される。</p>
<p>生追悼講演会」において「みることきくこと」はなすこと」の題にて話す。最初の随想集『朴の木』（筑摩書房）を刊行。10月福井県立福井図書館十周年記念の行事に招かれ講演をした。11月諏訪教育会館で開催された諏訪季節大学で「中世の文化の意義」と題して講演。</p>		

三八	一九六三	59	<p>告別式（五月六日）で唐木は葬儀委員の一人となった。夏清里高原の明治大学寮です。10月長野県富士見町に山荘「不期山房」を設ける。</p> <p>2月山王小学校にて「中世の文学の特色」と題して講演。7〜8月不期山房で『無常』の原稿を集中執筆する（脱稿は一二月）。11月唐木と『正法眼蔵』を読む「不期山房の会」が発会。12月伊那市西箕輪中学校での修養会で、教員たちと道元の「弁道話」<small>べんどうわ</small>「典座教訓」<small>てんざきょうくん</small>を読み合わせる。</p>	<p>8月部分的核実験停止条約に署名。10月東海村で原子力発電開始。</p>
三九	一九六四	60	<p>2月『無常』（筑摩書房）を刊行する。8月不期山房で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵随聞記』を読み合わせる。長野県富士見町南中学校にて「中世から近世へ」と題して講演。秋松本深志高校で全日制、定時制の生徒たちに「考へるといふこと」と題して講演をした。</p>	<p>4月経済協力開発機構（OECD）に加盟。10・1東海道新幹線開業。10・10〜24東京オリンピック。</p>
四〇	一九六五	61	<p>1月西箕輪中学校の教員修養会にて、『正法眼蔵』『溪声山色』の巻について講話。6月京都に西谷啓治を訪ね、一緒に深瀬基寛を病床に見舞う。8月不期山房で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』『法華転法華』の巻を読み合わせる。10月森鷗外記</p>	<p>2月米国、ベトナム北爆開始。 6月日韓基本条約調印。10月朝永振一郎にノーベル物理学賞。</p>

四一	一九六六	62	<p>念会にて「鷗外の蹤跡」、大谷大学にて「言葉について」と題して講演する。『日本の心』（筑摩書房）を刊行。12月西箕輪中学校での修養会で、教員たちと『正法眼蔵』『一顆明珠』の巻を読み合わせる。</p> <p>4月創作作品集『應仁四話』（筑摩書房）を刊行する。8月不期山房で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』『行持』の巻を読み合わせる。11月九州の国語教育研究会主催で修猷館高等学校にて講演をおこない、のち一週間かけて夫人と北九州を旅行した。12月『佛道修行の用心 正法眼蔵隨聞記』（筑摩書房）を刊行。</p>
四二	一九六七	63	<p>3月芸術選奨を『應仁四話』により授与される。3月末明治大学文学部教授の職を退く。5月「文芸土曜大学」（日本近代文学館主催）にて舟橋聖一とともに講演、演題は「明治の文学」であった。随想集『飛花落葉』（筑摩書房）を刊行。6月伊那中学校で開催された長野県中学校長会総会にて、「考へるといふこと」と題して講演をする。『唐木順三全集』（筑摩書房）刊行開始。8月札幌大学で中村光夫、</p>
			<p>8月中国で文化大革命始まる。この年、日本は好景気（いざなぎ景気）を迎える。</p>
			<p>8月公害対策基本法公布。</p>

四四	一九六九	65	<p>4月京都にて「禅の歴史と現代」という題で西谷啓治と対談。8月不期山房で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』「恁麼」の巻を読み合わせる。11月</p>	<p>1月東大安田講堂事件。5月初の「公害白書」発表。7月アポロ11号月面着陸。</p>
四三	一九六八	64	<p>4月「田辺元先生七周忌記念講演会」（群馬大学）にて「明治大正の思想的性格」と題して講演をする。6月NHK「教養特集」に出演、鈴木成高、スベインのコーラル教授と鼎談。8月不期山房で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』「仏性」の巻を読み合わせる。10月諏訪教育会館にて開催された諏訪哲学会四十周年記念集会で、高坂正顕、西谷啓治と「大学問題を中心として」と題して座談会をおこなう。11月紀伊國屋ホールでの筑摩総合大学講座にて「日本のこころ——季節感の歴史の変遷」と題して講演。</p>	<p>6月小笠原諸島日本復帰。7月核兵器拡散防止条約の署名開放。</p>

四七	一九七〇	66	<p>『古代史試論』（筑摩書房）を刊行する。伊那小学校で「情操教育について」と題し講演をした。</p> <p>2月『日本人の心の歴史』上巻（筑摩書房）を刊行。</p> <p>6月富山市第一生命ビルにて、富山県教育委員会主催で「日本の近代と現代」と題し講演をおこない、のち夫人とともに五箇山へ行き、大阪をまわって万国博覧会を見て、さらに四国・倉敷まで足を延ばす。</p> <p>8月不期山房で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』『諸悪莫作』の巻を読み合わせる。『日本人の心の歴史』下巻（筑摩書房）を刊行。</p>	<p>2月核兵器拡散防止条約署名。</p> <p>3・14・9・13日本万国博覧会（大阪万博）。6月日米新安保条約、自動延長入り。11月三島由紀夫事件。</p>
四六	一九七一	67	<p>1月『良寛』（筑摩書房）を刊行。5月日本芸術院から第二七回芸術院賞（評論）を贈られる。8月不期山房で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』『弁道話』の巻を読み合わせる。</p> <p>2月『日本人の心の歴史補遺』（筑摩書房）を刊行。</p> <p>3月東大寺二月堂の修二会に参列。のち奈良から吉野、宮滝へと行き、さらに紀州の由良、田辺、新宮などを観てまわる。8月不期山房で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』『有時』の巻を読み合わせる。11月『古きをたづねて』（筑摩書房）を刊行。</p>	<p>6月沖縄返還協定調印。10月中華人民共和国、国連加盟。</p>
四七	一九七二	68	<p>2月『日本人の心の歴史補遺』（筑摩書房）を刊行。</p> <p>3月東大寺二月堂の修二会に参列。のち奈良から吉野、宮滝へと行き、さらに紀州の由良、田辺、新宮などを観てまわる。8月不期山房で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』『有時』の巻を読み合わせる。11月『古きをたづねて』（筑摩書房）を刊行。</p>	<p>2・3・13札幌冬季オリンピック。2月あさま山荘事件。9・29日中共共同声明。</p>

四八	一九七三	69	<p>4月『唐木順三文庫』（筑摩書房）刊行開始。8月上伊那郡南箕輪村大芝荘で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』『諸法実相』の巻を読み合わせる。10月中旬七泊八日の日程で夫人と東北旅行。10・30古田晃が急逝。通夜、告別式のほか、古田郷里での埋骨（二月一六日）にも参加した。</p>	10月第一次オイルショック。
四九	一九七四	70	<p>4月下旬東北旅行。江刺の豊田館址、平泉などをまわる。6月新宿中村屋で開催された白井吉見『安曇野』完結記念祝賀会に出席して挨拶を述べる。8月伊那市法音寺で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』『海印三昧』の巻を読み合わせる。9月『あづまみちのく』（中央公論社）と随想集『光陰』（筑摩書房）を刊行。</p>	11月田中首相の金脈問題が衆議院で追及される。この年、高度経済成長時代が終わる。
五〇	一九七五	71	<p>3月伊那小学校に「眞事 眞言 誠 順三」の碑が建てられる。8月伊那市法音寺で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』『一顆明珠』の巻を読み合わせる。</p>	4・30ベトナム戦争が終結。
五一	一九七六	72	<p>4月『続あづまみちのく』（中央公論社）を刊行。8月伊那市法音寺で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』『梅花』の巻を読み合わせる。</p>	2月ロッキード事件。

五二	一九七七	73	6月伊那小学校で開催された上伊那教育会百周年記念総集会にて「私の念願」と題して講演。8月伊那市常圓寺で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』「発菩提心」の巻を読み合わせる。	2月日本初の静止衛星打ち上げ。
五三	一九七八	74	3月「歴史の言ひ残したこと」(新潮社)を刊行。8月甥唐木哲郎に自身と夫人の遺言状を託した。伊那市常圓寺で「不期山房の会」の会員と『正法眼蔵』「現成公案」の巻を読み合わせ、これが「不期山房の会」活動の最後となった。	5月新東京国際空港(成田空港)開港。8・12日中平和友好条約締結。
五四	一九七九	75	4月随想集「古いこと新しいこと」(筑摩書房)を刊行。6月近くの村山医院で診察を受け、北里大学附属病院(相模原市)を紹介される。「『科学者の社会的責任』についての覚え書」を起稿。7月肺の症状で北里大学病院に入院。9月退院。その後、通院をおこなう。	1月米中の国交正常化。6月東京サミット開催。
五五	一九八〇	76	2月北里大学附属病院に再度入院する。遺言「親戚友人へのたのみごと」を執筆。3・14築地の国立がんセンターに転院。診断は肺癌である。3・24この日をもって日記の執筆が断たれ、3・26手術。その後症状が進み、5・27午前二時一二分、永眠した。	6月初の衆参ダブル選挙。9月イラン・イラク戦争勃発。

*「関係事項」欄は『唐木順三全集（増補版）』一九巻収録の年譜（竹盛天雄作製）に基づき、事項選択のうえ加筆改訂をおこなった。

六二	一九八七	<p>7月白井吉見歿。</p>
五七	一九八二	<p>5月三回忌に合わせ駒ヶ原の墓所に、順三筆跡「雨 バ雨ナテ 風ハ風ナテ」と白井吉見による墓誌を 刻した碑が建てられる。12月『唐木順三全集（増補 版）』が完結。</p>
五六	一九八一	<p>4月『唐木順三全集（増補版）』（筑摩書房）の配本 開始。「不期山房の会」を引き継いだ「雪峰会」が 発足。10・30宮田中学校に「あめつちとともに」の 碑が建立除幕された。</p>
		<p>6月生物兵器・特定通常兵器・ 環境変更技術禁止条約公布。</p>
		<p>3月臨時行政調査会（第二次） 初会合。</p>
		<p>5・29自宅で浄土宗の法式にて葬儀がおこなわれ、 大和市火葬場で荼毘に付される。7月遺稿『科学 者の社会的責任』についての覚え書』が、白井吉見 による「あとがき」等を付して筑摩書房から刊行。 9月神田駿河台の山の上ホテル新館で偲ぶ会が催さ れた。9・14故郷の生家で法要が営まれ、宮田村駒 ヶ原の墓地に埋骨。12月「不期山房の会」が正式解 散する。</p>
		<p>バブル経済の時代始まる。</p>

人名索引

あ 行

相原信作 84, 159, 160, 188, 215
アインシュタイン, A. 373
アウグスティヌス 103
青木民江 222
青柳優 40
赤羽王郎 130
赤羽善治 40
阿川弘之 245
秋野千枝子 323, 324
芥川龍之介 60, 92, 144-146, 149-151
姉崎正治 49, 50
安部磯雄 30
安倍能成 277
天野貞祐 84, 86, 138
網野菊 159, 183, 215
新井靖夫 185, 187
荒木寅三郎 67
荒正人 193
有島武郎 60, 130
アリストテレス 107
有本芳水 20
在原業平 313, 315
アルツイバーシェフ, M. 60
アンドレーエフ, L. 60
池島信平 17
池田勉 224, 237
伊澤蘭軒 241
石川啄木 167
石川秀雄 48, 69, 89, 97, 136, 184, 197,
198, 200, 206
石田英一郎 101

和泉式部 369
一遍 313, 315, 332
出隆 137
伊東静雄 82
伊東六十次郎 160, 168
井上井月 14
井上達三 362
伊能忠敬 11
井原西鶴 314
今福清二 350, 373
井本健作 224
入江七平 61
岩田義道 100
岩波茂雄 13, 100, 195, 230, 237
岩本義恭 91
上田閑照 77
上田庄助 222
上田久 81
白井二尚 41
白井吉見 3, 41, 48, 62, 92, 126, 169, 214-
219, 221-223, 243-246, 248, 253-255,
257, 258, 262-264, 271, 273, 275, 276,
284, 289-291, 294, 303, 304, 322, 363,
365, 366, 376-378, 382
内村鑑三 234, 282
宇野浩二 143, 222
宇野弘蔵 213
江戸川乱歩 28
瀬原退蔵 82, 244
遠藤嘉基 244
遠藤隆次 168
大賀一郎 168
大下宇陀兒(木下龍夫) 28

大沼枕山 313, 315
大野順一 377
大野有翼 48
大森志郎 168, 169
岡田甫 40
岡田良平 101
岡山俊雄 354
小田切秀雄 193
小山鼎浦 49

か 行

海音寺潮五郎 323
梶井基次郎 369
粕谷一希 269, 281, 285, 298, 299, 313,
314, 330, 357, 370, 371, 376
片山潜 30
勝部真長 256
加藤秀俊 290
加藤正治 28
加藤明治 348
金井融 48, 216
金子武蔵 140, 254
金田良吉 (山本良吉) 78
狩野直喜 89
上條憲太郎 41
唐木勝造 6, 215, 272, 346, 372
唐木かまよ 16, 18, 21, 215, 272
唐木五郎右衛門 (六代) 14, 15
唐木達雄 346, 379, 380, 392
唐木辰太郎 15, 16, 18, 23, 89, 187, 188,
193, 206, 207
唐木哲郎 350, 372, 377, 379
唐木とよ 63
唐木 (後藤) フサエ 202, 203, 215, 225,
366, 378, 380
唐木美枝子 377, 392
唐沢俊樹 29
河上肇 84, 101, 102, 155

川島芳子 94
川端康成 302
河村卓 198
神崎清 193, 205
ガンジー 373
カント, I. 104, 138, 153
樺俊雄 84
上林暁 256
韓非子 58
北一輝 160
北村透谷 167, 205
木下尚江 28-30, 205
木村毅 205
木村素衛 84, 86, 140
キルケゴール, S. 206, 299
空海 370
工藤祐経 10
国木田独歩 28
久保井理津男 293
窪田空穂 (通治) 28
久保田俊彦 (島木赤彦) 115, 116, 125
熊谷岱蔵 29
倉田百三 146
栗山理一 224
ゲイン, M. 302
小岩井浄 34, 35
高坂正顕 77, 82, 84, 85, 87, 138-140, 229,
293
幸田露伴 234, 282
幸徳秋水 30
高山岩男 84, 85, 140, 229, 321
小島威彦 84
小島吉雄 245
五島慶太 29
後藤自助 201, 225
後藤勉 225
後鳥羽院 370
小林勇 13, 365

小林有也 29, 31-35, 37, 127
 小林秀雄 91, 141, 335-342, 352, 368
 五味清人 328
 今日出海 76

さ 行

斎藤兼吉 168, 169
 斎藤信策 49, 50, 52
 斎藤正直 222, 269, 353
 酒井源次 378
 酒井宇宙治 252
 佐々木基一 193
 シェストフ, L. 206
 塩沢幸一 29
 志賀重昂 30
 篠田一士 240
 澁江抽齋 241
 渋川驍 259
 柴生田稔 378
 島崎藤村 167, 177
 清水幾太郎 291
 清水利一 137, 138, 199
 清水文雄 224
 下村寅太郎 66, 84, 252, 325, 367, 368,
 378
 シュティルナー, M. 58
 聖徳太子 357
 昭和天皇 39, 277, 278
 ショーペンハウエル, A. 53, 58
 親鸞 332, 371
 杉田玄白 121
 鈴木成高 85, 229, 282, 293
 鈴木大拙 (貞太郎) 74, 78, 233, 252, 352
 鈴木三重吉 209
 鈴澤壽 47, 48
 スピノザ, B. de 95, 103
 須山宗吾 40, 41, 169
 世阿弥 309

千利休 309, 310
 宗祇 313, 333, 371
 相馬愛蔵 28, 29

た 行

平貞盛 7
 高倉テル 250
 高田三郎 84
 高田保馬 70
 高藤武馬 191, 210, 213-215, 220, 224,
 237
 高橋玄一郎 41
 高橋清一 34
 高橋誠一郎 361
 高山樗牛 49
 竹田篤司 77
 竹之内静雄 222, 229, 263, 277, 285, 287
 太宰治 286
 多田道太郎 342
 田中一造 117, 120, 130
 田中美知太郎 84
 田辺元 3, 4, 84, 100, 104, 106-108, 120,
 122, 135, 146, 147, 157, 159, 161, 162,
 195, 204, 205, 273-278, 287-289, 302,
 307, 310, 315, 320, 321, 325, 326, 330,
 352, 367
 谷川徹三 86, 146, 189, 190, 193, 294
 淡徳三郎 101
 淡野安太郎 84
 チェレホフ 165
 張学良 170, 180
 土田杏村 86
 ツルゲーネフ, I. 60
 手塚縫蔵 130-132
 寺田喜治郎 157
 土井忠生 245
 土井虎賀壽 84
 道元 333, 334, 370

東郷平八郎 6
ドウソン, C. 229
徳富蘆花 28
戸坂潤 84
ドストエフスキー, F. 59, 95, 166, 281,
293
朝永三十郎 88
朝永振一郎 375
豊島与志雄 264, 269
トルストイ, R.-L. 60, 164, 166

な 行

永井荷風 256, 264, 313, 315, 369
長坂利郎 138
中澤臨川 (重雄) 27
中島健蔵 48
中島光風 245
仲小路彰 191, 213
仲小路廉 191
中野重治 221, 247, 254, 261, 264, 365
中野好夫 209, 254, 264, 271
中橋徳五郎 44
永藤靖 378
那珂通世 235
中村孝三 153
中村光夫 222, 246, 247, 249, 250, 254,
256, 263, 264, 269, 291, 365
中村幸彦 245
中山義秀 209
長与善郎 130
夏目漱石 2, 98, 167, 234, 282, 308, 316
成島柳北 313, 315
ニーチェ, F. 53, 57, 58, 299, 301
西下経一 245
西田幾多郎 59, 66, 67, 71-90, 95, 100,
104-107, 128, 134-140, 155, 158, 188,
195, 230-237, 242, 243, 246-249, 251,
252, 256, 257, 267, 278, 282, 342, 367

西田外彦 66
西谷啓治 4, 73-75, 77, 81, 83-86, 138,
229, 264, 293, 378
西谷能雄 293
西田實 28, 42
西山宗因 313
日蓮 369
新田次郎 17
日戸博 27
布川角左衛門 235
野上彌生子 375
乃木希典 6, 9, 19
野口源三郎 39
野田早苗 168, 169
野原一夫 366
野間光辰 245

は 行

ハイデガー, M. 135, 206, 299, 302
パスカル 280
蓮田善明 224
畑田一心 381
波多野精一 89
服部英次郎 84
埴谷雄高 193
濱口勉太 48
林健太郎 284
林重憲 40
速水敬二 84, 240, 272
久松眞一 86
土方定一 205
日高第四郎 86
平澤長造 21
平野謙 100, 193, 194
平林孝 370, 371
蛭川幸茂 46
廣谷千代造 213
フィヒテ, J. G. 107

フォン・ケーベル, R. 104
 深瀬基寛 229, 279, 280, 291, 301, 314
 深田康算 89, 104, 105, 215
 福田美亮 48
 福林正之 48
 藤岡作太郎 78
 富士谷御杖 357
 藤森省吾 114-128, 130, 143, 349
 藤森速水 40
 藤森良蔵 114
 二葉亭四迷 167, 282
 古田晁 2, 3, 41, 48, 215-223, 227, 229,
 230, 243, 245, 254-257, 259, 261, 262,
 264, 269, 286, 303, 304, 319, 320, 322,
 361, 362, 364-366
 古田剛 361, 362
 フンボルト, W. von 67
 ヘーゲル, G. W. F. 4, 138, 161
 ヘディン, S. 209
 ペテロフ, P. P. 160, 163-165
 ベルグソン, H. 103
 逸見重雄 100
 北條霞亭 241
 北條時敬 67, 78
 法然 332
 ボードレル, C. 301
 ポーロオ 166
 保科百助 114, 115, 131
 ポポフ 165, 175
 本莊太一郎 34
 本多秋五 193

ま 行

前波仲尾 167, 168
 牧口常三郎 215
 増田みよ 245
 松尾芭蕉 120, 299, 305, 309, 313, 333,
 369, 371

マッカーサー, D. 274, 275
 松澤平一 110
 松田壽 285
 松原重美 40
 松本克平 41
 松山思水 20
 マルクス, K. 138, 143, 153, 154
 三木清 75, 76, 84, 86, 94, 135, 143-146,
 151, 155-157, 170, 173, 176, 178, 180,
 182, 190, 192, 195, 206, 210, 246, 247,
 250-252, 264, 265, 279
 三島由紀夫 255
 水野葉舟 210, 215
 三井長三 222
 三村寿八郎 32, 33
 三村令二郎 40, 48
 三宅剛一 86
 宮澤賢治 212, 294-297
 宮本顕治 141
 武者小路実篤 28, 130, 229, 254
 務台理作 66, 86, 138, 140, 264
 明治天皇 19, 33
 本居宣長 352
 百瀬勝登 263
 百瀬結 41
 森有正 293
 森鷗外 234, 238-242, 281-285, 308, 314,
 316
 モンテスキュー, C.-L. de 299

や 行

矢ヶ崎輝雄 199
 矢島麟太郎 88, 119, 128-133, 302, 310-
 312, 342, 349
 矢内原忠雄 132
 柳田泉 205
 柳田國男 210, 257, 264
 柳宗悦 130

八百清顯 41, 141-146, 151, 170, 182, 183,
185, 187
山内得立 86
山田茂勝 215
山田義弘 378
山室静 193, 205
山本健吉 378
横田秀雄 28
吉川幸次郎 264
吉田兼好 333

ら・わ行

良寛 57, 369

ワーズワース, W. 122

若槻礼次郎 101

若山牧水 61

和合恒男 41

渡辺新 255, 256

渡辺一夫 291

和田英雄 222

和田芳恵 287, 303

和辻哲郎 57, 84, 135, 226-228, 278, 293,
352

事項索引

あ 行

- 「愛弟永眠」 225
「芥川龍之介論」 140, 141, 146, 149, 184
『あづまみちのく』 298, 370-372
アナキズム 60
〈あめつちとともに〉 379-381
「雨と廣重」 168
『アルペン風——松本高校史』 48
「石川といふ男」 102, 187, 188, 197, 206
「伊那谷隨筆」 13
「異邦人」 164
岩波書店 235-237, 335, 365
「白井吉見のこと」 216, 217
『延喜式』 11
『鵬外の精神』 235, 238-243, 280, 359
『應仁四話』 352, 355, 356
『奥の細道』 121
「思い出すままに」 213
「思ひ出と婆心と」 220, 224

か 行

- 懷疑青年 70
『改造』 141, 143, 171, 172, 335
「『科学者の社会的責任』についての覚え書」 359, 372-378
「假説の神」 286
「型と個性と実存——現代史への試み」
280
「型の喪失」 281-283
「唐木さんとの因縁」 323
「唐木先生のこと」 323
「観相的態度の克服」 146, 151, 156

- 関東大震災 62, 63
「記憶の中の先生」 28, 35, 58
「危機に於ける若き教育者の使命」 151,
153-156, 181, 196, 200
菊富士 143
北里大学 373, 374
「ぎつくり腰——夏日記」 345
『九十年史』 → 『長野県松本中学校・長野県松本深志高等学校九十年史』
旧制松本高等学校 43-52, 216
旧制松本中学校 24, 26-42, 129, 215
共産党 35, 197, 198
「教師が教師になること」 113
京都学派 85, 270
京都学連事件 100-103, 197, 343
『京都大学七十年史』 100, 106
『京都大学百年史総説編』 100
京都帝国大学 65-88, 95-108, 135, 159,
184, 197, 207, 217, 230, 273, 278, 293,
335, 343
「京の思ひ出」 68, 96
教養主義 282
「教養派の歴史的社会的規定」 282
「近時斷想」 171
「近代精神——三人称世界の成立」 280
『近代日本文学』 293
『近代日本文学の展開』 213, 238, 307,
337
「久保田先生の思ひ出」 116
芸術院賞 361, 369
『現代史への試み』 19, 23, 35, 56, 150,
235, 238, 265, 280, 282-285, 292, 298,
305, 344, 359, 375

『現代日本文学序説』 100, 141, 146, 167,
185, 192-196, 232, 307
『現代日本文学全集』 303
『現代日本文学に於ける自然と道徳の問
題についての史的考察』 192
『光陰』 370
黄河書院 213
弘文堂 293
『小倉時代の鷗外』 203
『個性に立つ教養派の擡頭』 283
『古代史試論』 298, 357
『言葉の回復』 265-267
『小林秀雄』 337, 339
『小林秀雄氏について』 337
『今昔物語』 7

さ 行

『作家論』 280
三・一五事件 101
GHQ 273, 275, 276
『志賀直哉論』 189
『自殺について』 293
『自然・創作・批評』 203
『思想』 146, 190
七文書院 255
『思潮と傳統』 203
疾風怒濤 60, 61, 150
『詩とデカダンス』 132, 298-302, 305,
307, 309, 312, 329
『詩と哲学の間』 308
信濃哲学会 138, 139
『死の灰についてのひとりごと』 373
修道社 307
象徴天皇制 277
『正法眼蔵』 40, 347, 350
『昭和二十年七月四日』 258
『初冬閑日』 347
信州教育 110-112, 114, 115, 119, 121,

124, 126-128, 131, 137, 139, 140, 147,
152, 302, 345, 349, 351
『信州思想界を想ふ——中村孝三氏の所
論を機とし』 151, 153
信州白樺派 130, 131
『諏訪高島の思ひ出』 186
諏訪哲学会 137-139
『政治の彼方に』 229
生の躍動 (エラン・ヴェイタル) 163
世界評論社 292
『善の研究』 72
『千利休』 308-310
創元社 335
『創作における技術の問題』 183
創文社 293, 298

た 行

第一高等学校 28
第三次松高事件 200
高島学校 (高島実業補習学校) 109, 110,
114, 119-124, 129, 135, 137, 157, 197,
268, 327
滝川事件 102
竹屋文書 11
『田邊元先生』 4, 321, 326
筑摩書房 92, 105, 126, 217-222, 224, 226,
227, 229-231, 235, 236, 239, 243-246,
253-258, 260-264, 268-270, 272-274,
279, 280, 285-292, 294, 302-305, 317,
323, 329, 341, 355-357, 362-364, 369,
370, 378
——創業 223, 322
『筑摩書房の三十年』 287, 289, 303
『父の發病とその前後』 182, 183
『中央公論』 143, 171, 172, 371
『中世から近世へ』 329
『中世の文学』 298, 305-307, 309, 312,
329

「つゆどき——昭和二十年六月のノートから」 254-256
 『哲人何處にありや』 49-51, 57
 天皇の戦争責任問題 277
 『展望』 41, 54, 263-265, 268, 269, 273, 278, 281, 283, 285, 286, 289-291, 308, 356
 東京専門学校 30
 東京大学附属病院 319, 362
 東京帝国大学 27, 61, 106, 217, 335
 東京物理学講習所 31
 東西南北会 131, 138
 「東尋坊」 143-145, 155, 170, 182
 「東北視察記」 212
 「讀書のすすめ」 207
 「ドストエフスキエ——三人称世界から二人称世界へ」 280
 「ドストエフスキエと私」 280

な 行

「長塚節と漱石」 237
 『長野県松本中学校・長野県松本深志高等学校九十年史』 28, 29, 32-34
 『夏目漱石』 307, 308
 「成田高女の想ひ出」 208
 成田高等女学校 207-215, 220, 258, 268, 294
 『ニイチェ研究』 57, 226-228
 『西田幾多郎』 73, 77
 「西田幾多郎先生——昭和二十年六月のノートから」 134, 231, 232, 242, 247, 249, 250, 253, 351, 352
 『西田幾多郎先生の生涯と思想』 77
 『西田幾多郎——その人と思想』 77
 「西田幾多郎——大丈夫の哲学」 80
 『西田幾多郎とは誰か』 77, 79
 「西田門下の人々」 84
 日露戦争 5-9

二・四事件 187, 197, 199, 200, 215
 ニヒリズム 300, 301
 日本出版会 246, 257, 262, 286
 『日本人の心の歴史——季節美観の變遷を中心に』 298, 353, 354, 358, 359, 361
 『日本人の心の歴史補遺』 369
 日本大学予科 258, 269
 『日本の心』 351
 『日本風景論』 30

は 行

「白面酔語」 99
 煩悶青年 56, 60, 70
 『飛花落葉』 357
 『美徳』 53, 56, 57
 「百姓と教師」 189, 270
 『深志』 53, 54
 「『深志』校正後に」 55, 56
 『深志人物誌』 28, 29
 不期山房 271, 327, 329, 330, 347, 350
 不期山房の会 111, 345, 347-351, 355, 373
 「不期山房由来」 327
 福四萬館 183, 185
 「藤森榮一氏のことなど」 349, 364
 『佛道修行の用心 正法眼藏隨聞記』 356
 『古いこと新しいこと』 370
 『古きをたづねて』 369, 370
 「古田晁に先立たれて」 216, 285, 303, 304, 320
 『文學界』 335
 『文藝春秋』 193, 290
 『文藝文化』 12
 「文士と思考力」 238, 264
 「ベルグソンに於ける時間と永遠」 103-

105

法政大学附属第二中学校 220, 224, 225,
258, 268

法政大学予科 269

奉天 157, 158, 160, 169-171, 179, 180

「奉天の外人たち」 163, 165, 166, 175

「亡友」 185

『朴の木』 317

朴雨亭 248, 260

朴人庵 96, 97

朴人庵日記 96, 98

「ほんたうの教育者はと問はれて」 88,
128

ま 行

松中自治 33, 34

松本女子師範学校 91-95, 244

マルキシズム 99, 152, 154, 181

満洲教育専門学校 157, 160, 167-180,
217, 268

萬葉集 358, 371

『三木清』 75, 145, 156, 250-252, 279

「三木清といふ人」 265

「三木清とハイデッゲル」 265

『宮澤賢治選』 294-297

「宮澤さんの本」 212, 294, 295

宮田尋常高等小学校 18, 24

『宮田村誌』 7, 10, 11, 15, 20, 22

未來社 293

『無常』 7, 150, 238, 298, 325, 330-336,
347, 375

『無常といふ事』 335, 336

『無用者の系譜』 238, 298, 307, 312-314,
317, 329, 375

明治大学 112, 269, 270, 272, 309, 319,
326, 346, 351-355, 358, 378

——文学科 311

——文学部 352

「メント・モリ」 4, 326

もぐら窟 186, 188, 189, 192

「物置の土蔵の中で——私の処女出版」

193

『物語「京都学派」』 67

『森鷗外』 292

「『門の中』讀」 237

や・ら行

「矢島麟太郎先生」 133, 310, 312

「山と川」 12

「山本有三論」 189, 190

『唯物史観と現代の意識』 144

『良寛』 369

『歴史と人物』 370, 371

『歴史の言ひ残したこと』 370, 372

ロシア革命 60, 155, 281

わ 行

「わが心の風土」 18, 19

「わが師西田幾多郎先生を語る」 75

「私にとつて大學とは」 65, 67, 68, 72

「私の生き方」 355

「私の思ひ出の著書」 193

「私の教師時代」 90, 109, 111, 114, 120-
122

「私の『中世の文学』について」 307

「私の読書遍歴」 49, 51, 52, 57

「私の履歴書」 5, 6, 10, 14, 15, 18, 19, 21-
25, 28, 30, 39, 42, 45, 47, 49, 51, 53, 57,
59, 62, 63, 66, 70, 86, 88, 90, 91, 93,
95, 96, 103, 105, 107-110, 116, 119-
121, 124, 136, 137, 142-145, 149, 155,
158, 160, 163, 169, 172, 176, 177, 181,
182, 187, 188, 192, 193, 201, 202, 204-
207, 211, 213, 214, 217, 219, 223, 224,
226, 227, 234, 239, 247, 253, 258, 259,
261, 262, 267, 324, 326

「私をみてゐる目」 37

「和辻哲郎の人と思想」 227

『和名類聚抄』 11

「をさなき日」 12